群馬県前橋市

堀越並木D地点遺跡
堀越丙諏訪遺跡

「県営農免・ふるさと農道整備事業勢多中央地区」に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書　　第4集

2006.3

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

群馬県前橋市

堀越並木D地点遺跡
堀越丙諏訪遺跡

「県営農免・ふるさと農道整備事業勢多中央地区」に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書　　第4集

はじめに

前橋市の北にそびえる赤城山は、往古から人々とかかわりが深く、親しまれ愛される逍遙の山であります。とりわけ、赤城山南麓は、その悠々と裾野を広げる台地を中心として、岩宿遺跡に代表されるように遠い旧石器時代から現在まで人々のさまざまな生活が繰り広げられました。

前橋市・大胡町・宮城村・粕川村の１市１町２村は平成16年12月５日に合併を行い、赤城山南麓の広範囲を占めることとなりました。

かつて、この地の養蚕を支えた風物詩といえる桑畑は消えゆく運命を辿っております。近年、赤城山南麓一帯は産業構造の変化と相まって大規模な圃場整備事業や工業団地、住宅団地造成、道路建設が広範囲に実施されたため数多くの発掘調査が展開されました。

旧大胡町に所在する堀越並木Ｄ地点遺跡・堀越丙諏訪遺跡も赤城山南麓に立地するものであり、調査によって縄文時代早期の陥し穴や中期の集落を検出することができました。残念ながら、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、この調査事業を円滑に進められたのは、中部農業総合事務所、前橋土木事務所の物心両面でのご協力と関係機関や各方面のご配慮の結果といえます。また、寒風の中、直接調査に携わってくださった作業員のみなさんに厚くお礼申しあげます。

本報告書が斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

平成18年３月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団
団長　根岸　雅

例　言

1　本書は「平成16年度県営農免・ふるさと農道整備事業勢多中央地区埋蔵文化財発掘調査事業勢多中央地区」に伴う堀越並木D地点遺跡・堀越丙諏訪遺跡発掘調査報告書である。

2　遺跡の名称は、合併前の大字名小字名を併記し大胡町大字堀越字並木地内所在の遺跡を堀越並木D地点遺跡、同字丙諏訪地内所在の遺跡を堀越丙諏訪遺跡と呼称した。

なお、平成16年12月5日に大胡町は前橋市との市町村合併に伴う町名変更により、現在両遺跡とも前橋市堀越町地内所在の遺跡となる。

堀越並木D地点遺跡…前橋市堀越町2100－4番地

堀越丙諏訪遺跡…前橋市堀越町2271－13番地ほか

3　現地調査は、群馬県中部農業総合事務所の委託により、大胡町教育委員会が実施した。整理作業は市町村合併のため前橋市教育委員会（前橋市埋蔵文化財発掘調査団）で実施する事となった。

4　調査の実施期間は以下のとおりである。

発掘調査　平成16年6月28日～平成16年12月4日　大胡町教育委員会で実施（合併前）

整理作業　平成17年7月11日～平成18年3月24日　前橋市教育委員会で実施（合併後）

5　発掘調査体制は以下の通りである。

事務局　松本浩一　大胡町教育委員会教育長

井上建児　大胡町教育委員会事務局長

山下歳信　大胡町教育委員会係長（現前橋市教育委員会生涯学習課）

調査担当　藤坂和延　大胡町教育委員会主査（現前橋市教育委員会青少年課）

6　整理作業体制は以下のとおりである。

事務局　根岸　雅、駒倉秀一、松村親樹、前原　豊、須藤健夫、小嶋　尚、後藤俊継

編　集　三浦京子（㈲前橋文化財研究所）

本文執筆　藤坂和延、鈴木雅浩、須藤健夫、外山政子、三浦京子

遺構写真　藤坂和延、技研測量設計㈱

遺物写真　折舘伸二（㈲前橋文化財研究所）

遺物観察　外山政子（㈲前橋文化財研究所）

遺物実測・挿図作成　三浦京子、木村里美、谷八千代、近野由紀子、上野尚美、若見文恵、舛田光代、山田まゆみ、高木奈保美、阿部朋子

委託関係　技研測量設計㈱（遺構測量及びトレース）

7　発掘調査及び本書の作成にあたり、下記の諸機関、諸氏にご教示、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。（順不同、敬称略）

群馬県教育委員会文化課　中部農業総合事務所　前橋土木事務所

（財）群馬県埋蔵文化調査事業団　群馬県埋蔵文化調査センター

㈱アルカ

沼津工業高等専門学校　望月研究室

8　出土遺物は一括して前橋市埋蔵文化財発掘調査団より前橋市教育委員会に保管を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護課で保管されている。

9　以下の方々には、発掘及び整理作業に従事していただいた。記して感謝いたします。

（順不同、敬称略）

（発掘調査）

石井よね、小沢チヅエ、斉藤頼江、杉渕富雄、勅使川原幸枝、登坂うた子、友永茂、中村富子、萩原秀子

（遺物洗浄・注記業務）

石井よね、小沢チヅエ、斉藤頼江、杉渕富雄、勅使川原幸枝、登坂うた子、友永茂、中村富子、萩原秀子、高澤京子、星野和子、北爪栄子、鈴木幸子、松井寿江、武井洋子、前原栄子、青木久子吉澤乃里子、吉澤てい子

凡　例

1　挿図中に使用した北は座標北である。

2　挿図に国土地理院 1/20 万地形図（宇都宮）、1/25000 地形図（「鼻毛石」、「大胡」）と前橋市 1/2500 現形図を使用した。

3　調査に使用したグリッドは５ｍまたは 10 ｍ四方で南西交点をその呼称としている。

4　遺構・遺物実測図の縮尺は次のとおりである。

遺構　全体図…1/200(堀越並木Ｄ地点遺跡)　1/400(堀越丙諏訪遺跡)

住居跡…1/60　炉跡…1/30　埋甕…1/10　竪穴状遺構・土坑・井戸…1/40

遺物　土器・石器…1/3　一部の石器…1/2　石皿・多孔石…1/6

5　遺物の計測値については、(　)…復元値である。

6　本文中に記載されているテフラに略称を使用した。正式名称と給源、現段階での降下年代は以下のとおりである。

Hr-FP…榛名二ツ岳伊香保テフラ、榛名山、６世紀中葉

As-C…浅間Ｃテフラ、浅間山、４世紀初頭

7　遺構平面図の推定線…破線である。

8　遺物実測図中の使用痕跡のある石器・石類についてはスクリーントーンを貼って示した。

目　次

はじめに
例言
凡例
第１章　調査に至る経緯と調査の経過…… 1
第２章　遺跡の位置と周辺の遺跡 …… 3
　第１節　遺跡の位置…… 3
　第２節　周辺の遺跡…… 3
第３章　堀越並木Ｄ地点遺跡の遺構・遺物 ……13
　第１節　竪穴住居跡……13
　第２節　炉跡……42
　第３節　埋甕……54
　第４節　集石……57
　第５節　土坑・ピット……64
　第６節　遺構外出土遺物…… 109
第４章　堀越丙諏訪遺跡の遺構・遺物…… 125
　第１節　土坑…… 125
　第２節　竪穴状遺構…… 135
　第３節　井戸跡…… 136
　第４節　遺構外出土遺物…… 137
第５章　まとめ …… 138

写真図版
報告書抄録

写真図版目次

堀越並木Ｄ地点遺跡

ＰＬ．1
　遺跡遠景（西から）
　遺跡全景
ＰＬ．2
　Ｊ１号住居跡全景（北から）
　Ｊ１号住居跡遺物出土状態（北から）
　Ｊ２号住居跡遺物出土状態（南東から）
　Ｊ２号住居跡全景（南から）
　Ｊ３号住居跡全景（南から）
　Ｊ４号住居跡遺物出土状態（西から）
　Ｊ４号住居跡全景（北東から）
　Ｊ５号住居跡遺物出土状態（南から）
ＰＬ．3
　Ｊ５号住居跡炉（西から）
　Ｊ５号住居跡遺物出土状態 No.1（東から）
　Ｊ６号住居跡全景（南から）
　Ｊ６号住居跡炉（南東から）
　Ｊ６号住居跡遺物出土状態（西から）
　Ｊ６号住居跡遺物出土状態 No.4（北東から）
　Ｊ７号住居跡全景（南から）
　Ｊ７号住居跡炉（西から）
　Ｊ８号住居跡全景（西から）
ＰＬ．4
　1号炉跡（北東から）
　2号炉跡（北から）
　3号炉跡（北から）
　4号炉跡（南から）
　5号炉跡（南から）
　5号炉跡下部（南から）
　5号炉跡最下部（東から）
　7号炉跡（南から）
ＰＬ．5
　8号炉跡（南から）
　9号炉跡（南西から）
　10号炉跡（西から）
　11号炉跡（南から）
　12号炉跡（北東から）
　13号炉跡（南西から）
　14号炉跡（南西から）
　15号炉跡（東から）
ＰＬ．6
　1号埋甕（南から）
　2号埋甕（東から）
　3号埋甕（真上から）
　3号埋甕土層断面（北から）
　1号集石（東から）
　2号集石（東から）
　3号集石（東から）
　4号集石（南から）
ＰＬ．7
　Ｊ１号土坑全景（北から）

Ｊ２号土坑全景（東から）
Ｊ４号土坑全景（西から）
Ｊ５号土坑全景（南から）
Ｊ６号土坑全景（南から）
Ｊ７号土坑全景（南から）
Ｊ８号土坑全景（東から）
Ｊ11号土坑全景（南から）
ＰＬ．８
Ｊ12(左)・13(右)・14(13の上)号土坑全景（東から）
Ｊ16号土坑全景（南から）
Ｊ17(奥)・83(手前)号土坑全景（南東から）
Ｊ18号土坑全景（北東から）
Ｊ19(右)・23(中央)・24（左）号土坑全景（南東から）
Ｊ19号土坑土層断面（東から）
Ｊ20(手前右)・27(手前右奥)・25(手前左)・26(手前左奥)号土坑全景（東から）
Ｊ21号土坑全景（北から）
ＰＬ．９
Ｊ22号土坑全景（東から）
Ｊ28号土坑全景（北から）
Ｊ29号土坑全景（北東から）
Ｊ30号土坑全景（西から）
Ｊ31(手前)・32(奥)号土坑全景（東から）
Ｊ33号土坑全景（西から）
Ｊ34(手前)号土坑全景（東から）
Ｊ35号土坑全景（東から）
ＰＬ.10
Ｊ36号土坑全景（東から）
Ｊ37号土坑全景（北西から）
Ｊ38号土坑全景（東から）
Ｊ39号土坑全景（南から）
Ｊ40号土坑全景（東から）
Ｊ41号土坑全景（東から）
Ｊ42号土坑全景（南から）
Ｊ43号土坑全景（西から）
ＰＬ.11
Ｊ45(左)・46(右)号土坑全景（北東から）
Ｊ47号土坑全景（南東から）
Ｊ48号土坑全景（北から）
Ｊ49号土坑全景（西から）
Ｊ57号土坑全景（北東から）
Ｊ58号土坑全景（北東から）
Ｊ60号土坑全景（北東から）
Ｊ61号土坑全景（西から）
ＰＬ.12
Ｊ62号土坑全景（東から）
Ｊ68(左)・69(右)号土坑全景（東から）
Ｊ69号土坑全景（南東から）
Ｊ70号土坑遺物出土状態（東から）
Ｊ70号土坑全景（南東から）
Ｊ71号土坑全景（東から）
Ｊ74号土坑全景（西から）
Ｊ75号土坑全景（東から）
ＰＬ.13
Ｊ76号土坑全景（北から）
Ｊ77号土坑全景（東から）
Ｊ78号土坑全景（北東から）
Ｊ80号土坑全景（東から）
Ｊ81(奥)・82(手前)号土坑全景（北東から）
Ｊ84号土坑全景（西から）
Ｊ85号土坑全景（南東から）
Ｊ85号土坑土層断面（北から）
ＰＬ.14
Ｊ１号住居跡出土遺物
ＰＬ.15
Ｊ２号住居跡出土遺物
ＰＬ.16
Ｊ３・４号住居跡出土遺物
ＰＬ.17
Ｊ４号住居跡出土遺物
ＰＬ.18
Ｊ４号住居跡出土遺物
ＰＬ.19
Ｊ５号住居跡出土遺物
ＰＬ.20
Ｊ５号住居跡出土遺物
ＰＬ.21
Ｊ５・６号住居跡出土遺物
ＰＬ.22
Ｊ６号住居跡出土遺物
ＰＬ.23
Ｊ６号住居跡出土遺物
ＰＬ.24
Ｊ６・７号住居跡出土遺物
ＰＬ.25
Ｊ７号住居跡出土遺物
ＰＬ.26
１・２・３・４号炉出土遺物
ＰＬ.27
５・７・８号炉出土遺物
ＰＬ.28
９・10・11・12号炉出土遺物
ＰＬ.29
12・13・14・15号炉出土遺物
１・２号埋甕出土遺物
ＰＬ.30
３号埋甕出土遺物
１号集石出土遺物
ＰＬ.31
２・３号集石出土遺物
ＰＬ.32
３号集石出土遺物
Ｊ２・３号土坑出土遺物
ＰＬ.33
Ｊ３・５・６・８・９号土坑出土遺物
ＰＬ.34
Ｊ10・19・20・21・22・23・26・27・28・29・30号土坑出土遺物
ＰＬ.35
Ｊ30・31・33・35・36号土坑出土遺物
ＰＬ.36
Ｊ37・39・58・60・61・66・67号土坑出土遺物
ＰＬ.37
Ｊ68・69・70号土坑出土遺物
ＰＬ.38
Ｊ70号土坑出土遺物
ＰＬ.39
Ｊ70・71・72・74・76・77・80・82号土坑出土遺物
ＰＬ.40
Ｊ82号土坑出土遺物
１～９号ピット出土遺物
ＰＬ.41
10～16号ピット出土遺物
遺構外出土遺物１～９・11・12
ＰＬ.42
遺構外出土遺物10・13～22
ＰＬ.43
遺構外出土遺物23～50
ＰＬ.44
遺構外出土遺物51～84
ＰＬ.45
遺構外出土遺物85～97

堀越丙諏訪遺跡

ＰＬ.46
遺跡遠景（東から）
遺跡全景
ＰＬ.47
Ｊ１号土坑全景（南から）
Ｊ１号土坑土層断面（南から）
Ｊ２号土坑全景・土層断面（北から）
Ｊ３号土坑全景（南東から）
Ｊ３号土坑土層断面（南東から）
Ｊ４号土坑全景（南から）
Ｊ４号土坑土層断面（南から）
Ｊ５号土坑全景（南から）
Ｊ５号土坑土層断面（南から）
ＰＬ48
Ｊ６号土坑全景（北東から）
Ｊ６号土坑土層断面（北東から）
Ｊ７号土坑全景（南から）
Ｊ８号土坑全景（南東から）
Ｊ９号土坑全景（南東から）
Ｊ10号土坑全景（南東から）
Ｊ８号土坑土層断面（南東から）
Ｊ９号土坑土層断面（南東から）
Ｊ10号土坑土層断面（南東から）
ＰＬ49
Ｊ11号土坑全景（南から）
Ｊ12号土坑全景（南から）
Ｊ13号土坑全景（南東から）
Ｊ12号土坑土層断面（南から）
Ｊ13号土坑土層断面（南東から）
１号竪穴遺構全景・土層断面（南から）
１号井戸全景（南から）
ＰＬ.50
Ｊ６・10・12号土坑出土遺物
遺構外出土遺物１～５

第１章　調査に至る経緯及び調査の経緯

調査は、「県営農免・ふるさと農道整備事業勢多中央地区」の実施に伴う事前の発掘調査として実施された。

なお、「県営農免・ふるさと農道整備事業勢多中央地区」は事業地域によりＩ区からⅢ区の３区に分けて実施された事業であるが、報告書刊行にあたっては、区ごとの表示は行わなかった。

遺跡ごとの事業区分けは、「第１集　横沢芳山遺跡・横沢大塚遺跡」がＩ区、「第３集　堀越並木Ａ・Ｃ地点遺跡」がⅡ区、「第２集　堀越乙諏訪遺跡」及び本書「第４集　堀越並木Ｄ地点遺跡・堀越丙諏訪遺跡」がⅢ区の実施に伴う発掘調査である。

発掘調査に至る経緯については、平成１６年５月１９日、中部農業総合事務所　所長　竹内　佳晴より「県営農免・ふるさと農道整備事業勢多中央Ⅲ期地区」に伴う埋蔵文化財発掘調査の依頼が大胡町教育委員会に提出されたことから始まる。平成１６年６月２１日に調査依頼者である中部農業総合事務所長　竹内　佳晴と大胡町長　伊藤　静雄との間で埋蔵文化財発掘調査業務委託契約が締結され、６月２８日から堀越丙諏訪遺跡への土木重機の搬入により発掘調査が開始された。

調査は土木重機により堀越丙諏訪遺跡の表土の除去を実施するとともに、作業員により精査も平行して実施した。堀越丙諏訪遺跡では、調査区を南北に横断し淡色黒ボク土を埋設する地割れが数条確認されたほか長楕円形を呈する陥し穴、円形の土坑等を確認した。出土遺物では縄文時代早期・沈線文系の土器片が出土している。堀越丙諏訪遺跡の遺構の精査の実施、平・断面図の作成・写真撮影等の記録をとり空中写真撮影を実施し終了した。

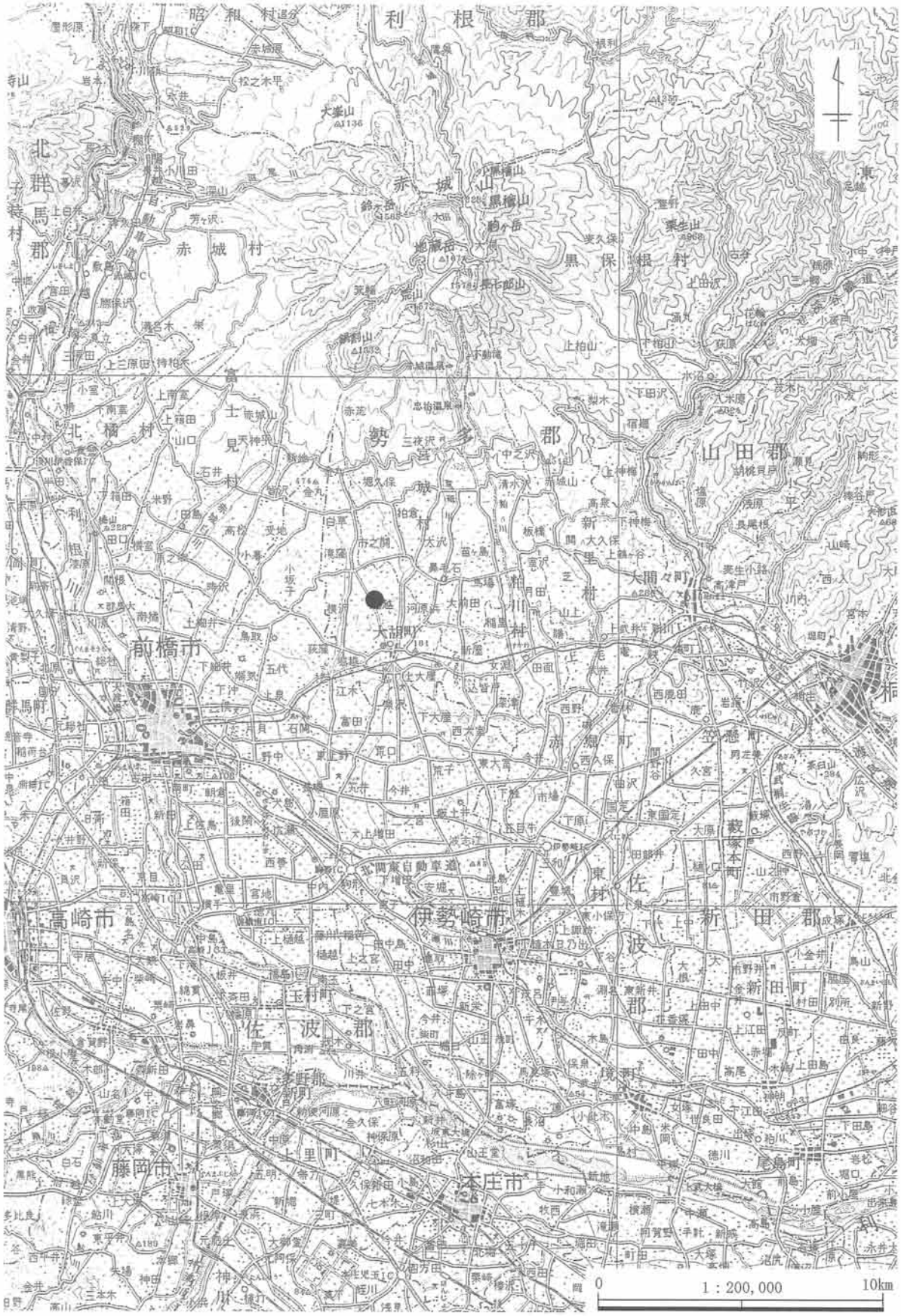
堀越並木Ｄ地点遺跡では、調査区の表土除去を実施するとともに、除去した廃土による堀越丙諏訪遺跡の埋め戻しを平行して行った。精査は表土除去に平行して調査区東端から実施した。土木重機による表土の除去は耕作土のみを実施、耕作土下の淡色黒ボク土の掘り下げは遺物包含層となっているため作業員による手作業で実施した。縄文時代の竪穴住居跡・集石遺構・土坑等の確認・精査を実施し、写真・図面等による記録保存を図り、空中写真の撮影、炉跡・集石遺構の掘り方調査を実施し終了する。

堀越丙諏訪遺跡では国家座標Ⅸ系Ｘ=４７，８００、Ｙ=－６０，６８０を基準とする10×10ｍのグリッドを設定した。グリッド名は東西方向に西からＡ～Ｋの11区、南北方向に南から１～３の３区を設定し、南西コーナーの杭をもって呼称した。堀越並木Ｄ地点遺跡では、表土除去と平行しての作業員による精査実施であるところから、任意に５×５ｍのグリッドを設定し、包含層の掘り下げ・遺構確認精査を実施した。結果的にはＸ＝４７，８１０．３４３、Ｙ=－６０，９０９．９１７を基準とし、座標北から東へ１°振れる南北軸とそれに直行する東西軸による５×５ｍのグリッド、東西方向に西からＡ～Ｍの１３区、南北方向に南から１～４の４区が設定されることとなった、。なお、グリッド名は南西コーナーの杭をもって呼称した。

その後の資料整理は、市町村合併後は前橋市教育委員会文化財保護課が事業を継承し、遺物洗浄・注記作業を平成１６年度の委託契約期間内に実施した。

平成１７年６月２日、前橋土木事務所　所長　福田　重雄より埋蔵文化財遺物整理業務についての依頼が前橋市教育委員会に提出された。前橋市教育委員会ではこれを受け、内部組織である前橋市埋蔵文化財発掘調査団　団長　根岸　雅（以下「調査団」という。）に対し、整理業務の実施を通知した。しかし、既に市内数カ所において調査団直営による発掘及び整理調査が実施されており、調査団直営で実施することは困難と判断、民間会社による整理業務を進める方針を決めた。これに基づき、７月１１日、依頼者である前橋土木事務所と調査団との間で埋蔵文化財発掘調査・整理委託契約を締結。８月９日、民間調査会社である有限会社前橋文化財研究所　代表取締役　折舘　伸二との間で委託契約を締結し、整理業務を開始した。

本報告書の刊行をもって、本遺跡の発掘調査業務のすべてが終了した。



第１図　遺跡位置図

第２章　遺跡の位置と周辺の遺跡

第１節　遺跡の位置

遺跡は前橋市堀越町に所在し、赤城山の南麓に立地する。この地域は火砕流堆積物と火山泥流状堆積物で構成された赤城山南麓の裾野にあり、荒山の東側の谷に源を発する荒砥川を始め、寺沢川・神沢川などが南流し赤城山を中心とする放射状の谷地形を作り出している。本遺跡は、上毛電機鉄道の「大胡駅」から北北西に直線距離で 2.2km にあり、尾引沼と一丁田沼を谷頭とする開析谷を西に望む台地上に位置する。遺跡地の西方は、薬師川や二本松川やその支流、さらに寺沢川が南流する低地と台地が交互に織り成す地形である。遺跡を乗せる台地は、並木Ｄ地点遺跡では南西への傾斜地であり、調査区内で最も高い標高は 221.20m を測る。谷を隔てた東側の丙諏訪遺跡は、南東への傾斜地であり最も高い標高は 225.0m である。

第２節　周辺の遺跡

旧石器時代

旧石器時代の遺跡としては、相沢忠洋氏によって調査された三ツ屋遺跡 (75) が著名であり、尖頭器・スクレーパーなどが出土している。また、堀越甲真木Ｂ地点遺跡 (31) では、弧状のブロック群をなす石器群をＡＴ層下において確認・調査している。その他、西小路遺跡 (72)、上ノ山遺跡 (73)、稲荷窪Ｂ地点遺跡 (68)、堀越丁二本松遺跡 (19) では尖頭器が、横沢新屋敷遺跡 (14) では黒曜石の細石核、日光道東遺跡 (39) では細石核・尖頭器・ナイフ形石器・削器及び剥片などが出土している。

縄文時代

縄文時代の草創期～早期では遺構は確認されていないが、遺物の出土は散見される。浅見遺跡 (41) の天王山地区では草創期の爪形文土器、早期の撚糸文系土器・押型文系土器・貝殻沈線文系土器などが出土し、横沢芳山遺跡 (3) でも撚糸文系の土器片、横沢新屋敷遺跡では押型文系の土器片が出土している。

前期の集落跡は県内でも検出例が多く、花積下層式～二ツ木式期の横沢新屋敷遺跡、堀越芝山遺跡 (15)、堀越中道遺跡 (21)、堀越丁二本松Ｂ地点遺跡 (16) などであり、その分布は標高 200 ～ 230m 前後にある。関山式期では、茂木二本松遺跡 (26) で住居跡が１軒検出されている。黒浜・有尾式期では、稲荷窪Ｂ地点遺跡、西天神遺跡 (8)、天神風呂遺跡 (47 ～ 52)、横沢向山遺跡 (24) などがある。後葉の諸磯式期では、横沢向山遺跡、新畑Ｃ地点遺跡 (20)、堀越丁二本松遺跡、上大屋・樋越地区遺跡群 (55) などで集落が検出されている。また、堀越中道遺跡では十三菩提式期の土器が出土している。

中期に至って遺跡数は増加する。五領ケ台式期の土器を出土した横沢新屋敷遺跡では、北陸に分布の中心を持つ新崎式の土器の出土も見られる。勝坂・阿玉台式期では天神遺跡 (45)、堀越小此木遺跡 (44) などがあげられる。加曾利Ｅ式期ではさらに遺跡数は増加しピークとなる。加曾利Ｅ２・３を中心とする上ノ山遺跡や、甲諏訪遺跡 (11)、稲荷窪Ａ地点遺跡 (70)、西小路遺跡、小林遺跡 (75)、山神遺跡（76）、天神風呂遺跡、諏訪東遺跡 (71)、堀越丁二本松遺跡、横沢柴崎遺跡 (27)、堀越中道遺跡などがある。また、本遺跡も加曾利Ｅ３式期を中心とする集落である。

後期の集落は減少するが、称名寺式期の住居が検出された並木Ｃ地点遺跡 (6) や、低地を挟んだ北側では堀之内式期の住居跡が検出された堀越西一丁田遺跡 (10) などがある。その他、堀之内式から加曾利Ｂ式・三十稲場式土器を出土した天神遺跡などがあげられる。

晩期は確認された遺跡はないが、荒砥川周辺の正治皆戸では個人蔵の注口土器が知られ、遺跡地としては荒砥川低地に存在した可能性が考えられる。

弥生時代

弥生時代の遺跡は再葬墓と考えられる大胡金丸遺跡が知られるのみで、旧大胡町と北に続く旧宮城村、北西で接する富士見村一帯はこの時代の集落が希薄な地域である。

古墳時代

古墳の大部分は荒砥川より西の地域に分布しており、横沢・堀越・茂木の地域に集中している。横沢地区では、寺沢川両岸の帯状台地上に展開している。左岸では横沢柴崎・向山・向田地区の古墳群があり、横沢向山遺跡、横沢向田遺跡 (18) では横穴式石室を持つ古墳が調査されている。横沢柴崎古墳群は 7 世紀後半～末にかけての古墳群であり、大胡町第 39 号墳 (25) からは獅噛環頭が出土している。右岸では横沢五反田・大塚の古墳群が存在する。横沢大塚遺跡 (4)、横沢新屋敷遺跡で横穴式石室を持つ古墳が調査されている。この地域の古墳は大半が横穴式石室の小円墳と考えられる。

これらの古墳群から東方に離れて点在する形で、堀越地区の古墳が存在する。県指定史跡の堀越古墳 (43) は、截石切組積みの石室で終末期古墳として知られている。堀越芝山古墳 (15)、生協団地古墳 (30) も切石を一部に使用する横穴式石室の円墳である。

茂木地区の古墳は、大胡駅の南、荒砥川西の台地にほぼ集中し、長興寺から南方の上ノ山までの約 1km の台地上に展開している。台地の南端部にある上ノ山遺跡では、方形周溝墓を始め、5 世紀後半から 6 世紀初頭の竪穴式石室を有する古墳が調査されている。上ノ山遺跡の西に低地を挟んで位置する西小路遺跡でも竪穴式石室、横穴式石室を有する古墳が調査されている。そのほか横穴式石室の古墳の調査例としては稲荷窪 A 地点遺跡で 2 基、樋越西久保遺跡 (58) で 1 基がある。

4 世紀の集落は、堀越地区では薬師川沿いの台地縁辺部に営まれた堀越中道遺跡、新畑 C 地点遺跡、堀越五十山遺跡 (32 ～ 34) などがあげられる。荒砥川の東側では前橋東商業高等学校遺跡 (80)、上大屋下組遺跡 (81)、下宮関遺跡 (79) などで検出されている。5 世紀代の集落は 4 世紀の集落とほぼ重なり、下宮関遺跡、上大屋天王山遺跡、堀越中道遺跡、堀越五十山遺跡、新畑 C 地点遺跡などで調査されている。6 世紀に入ると集落は大規模化し、天神風呂遺跡、稲荷窪 B 地点遺跡、茂木山神 II 遺跡 (76) などが調査されている。

奈良・平安時代

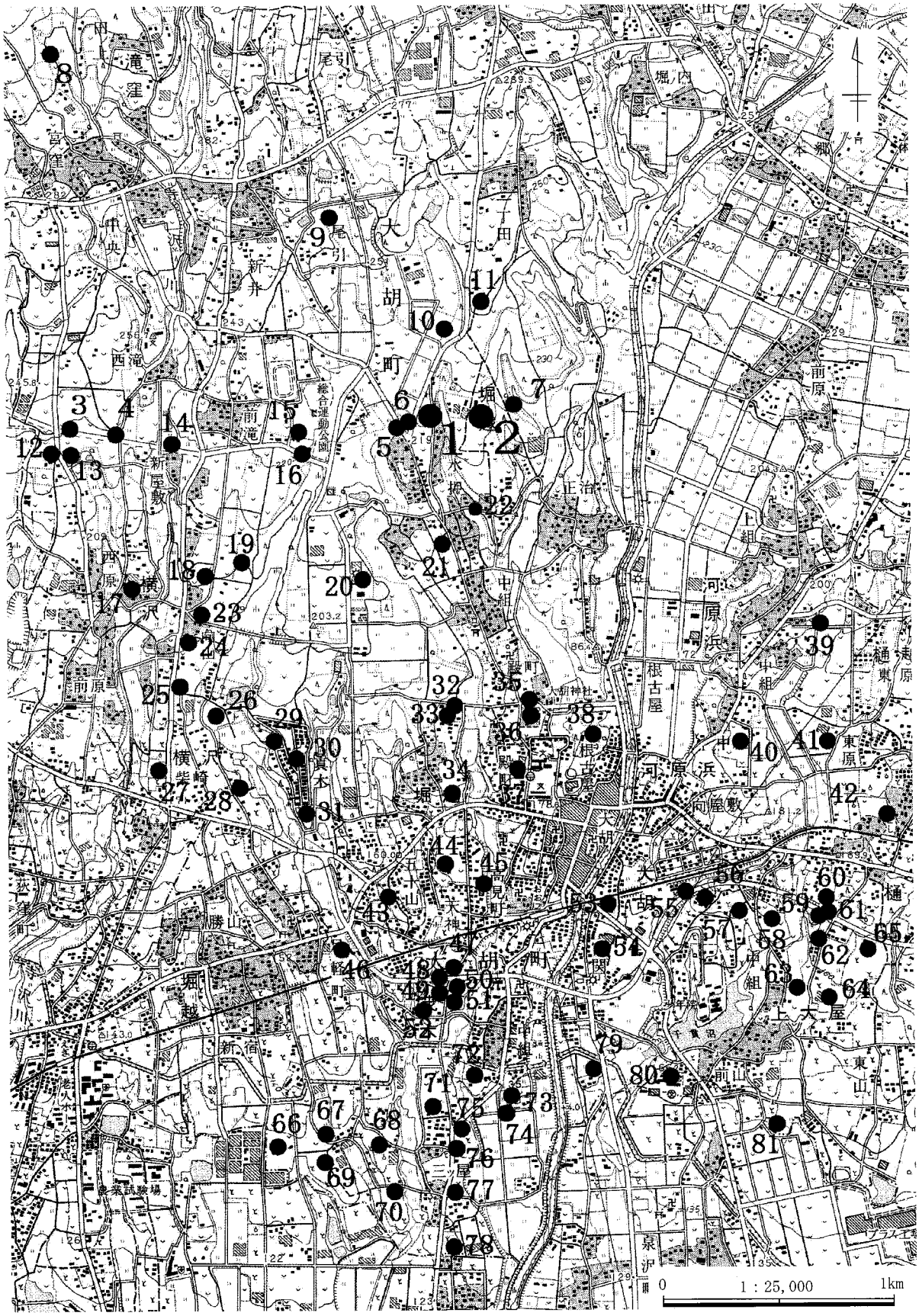
遺跡は普遍的なものとなり、旧大胡町内の南部を中心に多くの遺跡が所在する。瓦塔・浄瓶等の寺院に係わる遺物や、朱墨土器等が出土した拠点的な集落である天神風呂遺跡や、「大兒万財□」の墨書土器が出土した茂木山神 II 遺跡、「立」の文字を共通に持つ焼印と墨書土器が出土した堀越中道遺跡などの大規模な集落が見られる。その他、小規模な集落としては日光道東遺跡、浅見遺跡、小林遺跡、山神遺跡、堀越乙関替戸遺跡 (22)、西天神遺跡、乙西尾引遺跡 (9)、養林寺裏遺跡 (35)、新畑 C 地点遺跡、横沢向山 B 地点遺跡、横沢芳山遺跡などがあげられる。

生産址遺跡としては、弘仁九年 (818) の地震災害で埋没した水田跡が検出された中宮関遺跡 (54)、8 世紀前半代の須恵器窯・製鉄址・炭窯などが調査された八ツケ峰遺跡 (55) などがある。製鉄に係わる遺跡は多く検出されており、9 世紀後半の鍛冶遺構を検出した横沢芳山遺跡、製鉄炉 3 基・炭窯 1 基を検出した乙西尾引遺跡、鍛冶炉を検出した浅見遺跡、堀越丁二本松遺跡などがあげられる。

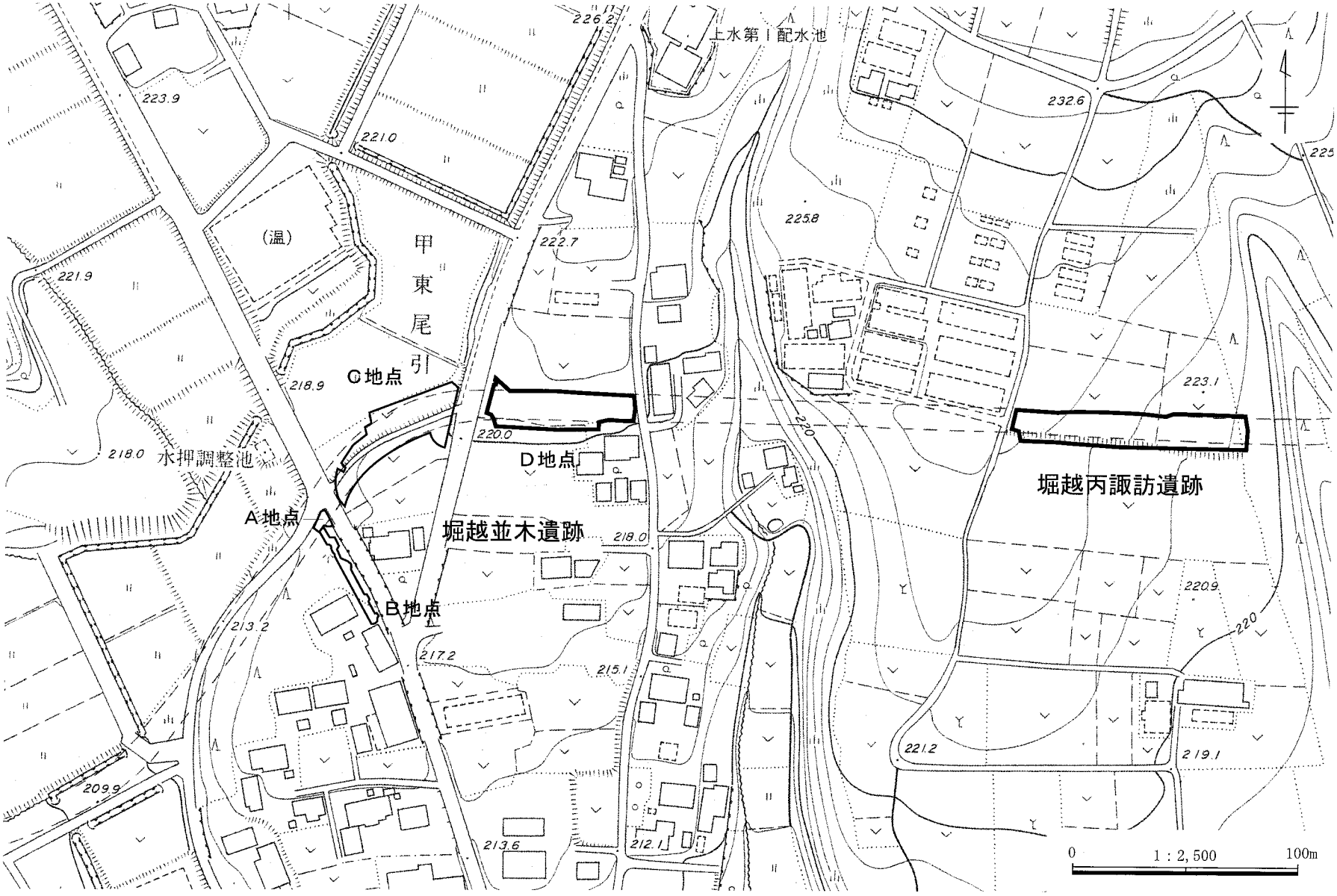
中・近世

中世では鎌倉時代に、この地を本拠地として活躍した秀郷流藤原氏の大胡一族があり、その居城として大胡城（38)、またその西方に位置する養林寺の寺域が居館（36）として推定されている。中世の遺構としては、鎌倉時代末期の年号を刻む板碑や骨臓器が出土した茂木古墓 (74) があり、日光道東遺跡、樋越西久保遺跡でも古墓が検出されている。

近世では、戦国時代に大胡氏が荒砥川右岸の台地上に築いた城に、天正 18 年の牧野康成公が入城したことにより整備された大胡城がある。また、大胡城の支城として内出の小字名を残す横沢城（17)、大胡城武家屋敷址の殿町遺跡 (37)、屋敷跡を検出した上ノ山遺跡、樋越西前沖遺跡（59 ～ 62）などがある。



第２図　周辺の遺跡


上水第1配水池
226.2
223.9
221.0
232.6
225
225.8
222.7
(温)
甲東尾引
221.9
218.9
C地点
223.1
220.0
220
D地点
218.0
水押調整池
A地点
堀越並木遺跡
堀越丙諏訪遺跡
218.0
220.9
B地点
213.2
217.2
215.1
220
221.2
219.1
209.9
213.6
212.1
0
1：2,500
100m

第3図　遺跡配置図

番号	遺跡名	所在地	内容							文献
			旧石器	縄文	弥生	古墳	歴史	中世	近世	
1	堀越並木D地点遺跡	堀越・並木		◎						本書所収
2	堀越丙諏訪遺跡	堀越・丙諏訪		◎			◎			本書所収
3	横沢芳山遺跡	横沢・芳山		○			◎			『横沢芳山遺跡・横沢大塚遺跡』
4	横沢大塚遺跡	横沢・大塚 五反田		◎		◎				『横沢芳山遺跡・横沢大塚遺跡』
5	堀越並木A地点遺跡	堀越・並木		○						『堀越並木A・C地点遺跡』
6	堀越並木C地点遺跡	堀越・並木		◎						『堀越並木A・C地点遺跡』
7	堀越乙諏訪遺跡	堀越・乙諏訪		◎						『堀越乙諏訪遺跡』
8	西天神遺跡	滝窪・西天神		◎			◎			『乙西尾引遺跡・西天神遺跡・柴崎遺跡』
9	乙西尾引遺跡	堀越・乙西尾引		○			◎			『乙西尾引遺跡・西天神遺跡・柴崎遺跡』
10	堀越西一丁田遺跡	堀越・西一丁田		◎					◎	『堀越西一丁田遺跡・堀越乙関替戸遺跡』
11	甲諏訪遺跡	堀越・甲諏訪		◎						『甲諏訪遺跡Ⅰ』
12	横沢芳山A地点遺跡	横沢・芳山					◎			
13	横沢芳山B地点遺跡	横沢・芳山					◎			
14	横沢新屋敷遺跡	横沢・新屋敷	○	◎		◎	◎	◎	◎	『横沢新屋敷遺跡』
15	堀越芝山遺跡	堀越・丁二本松		◎		◎				『堀越芝山遺跡』
16	堀越丁二本松B地点遺跡			◎						『堀越丁二本松B地点遺跡・大胡神社前遺跡・養林寺裏遺跡』
17	横沢城跡	横沢・内出						◎		『大胡町誌』
18	横沢向田遺跡	横沢・向田		◎		◎				『横沢向田遺跡・堀越丁二本松遺跡他』
19	堀越丁二本松遺跡	堀越・丁二本松	○	◎			◎		◎	『横沢向田遺跡・堀越丁二本松遺跡他』
20	新畑C地点遺跡	堀越・新畑		◎		◎	◎			『新畑C地点遺跡』
21	堀越中道遺跡	堀越・中道		◎		◎	◎		◎	『堀越中道遺跡』
22	堀越乙関潜戸遺跡	堀越・乙関替戸					◎			『堀越西一丁田遺跡・堀越乙関替戸遺跡』
23	横沢向山B地点遺跡 (大胡町第36号墳)	横沢・向山		○		◎	◎			『横沢向山B地点遺跡』
24	横沢向山遺跡	横沢・向山		◎		◎	◎			『横沢向田遺跡・堀越丁二本松遺跡他』
25	大胡町第39号古墳	横沢・向山				◎				『乙西尾引遺跡・西天神遺跡・柴崎遺跡』
26	茂木二本松遺跡	茂木・二本松		◎			◎			『横沢向田遺跡・堀越丁二本松遺跡他』
27	横沢柴崎遺跡	横沢・柴崎		◎					◎	『乙西尾引遺跡・西天神遺跡・柴崎遺跡』
28	茂木米野道上遺跡	茂木・米野道上		◎		◎				
29	堀越甲真木遺跡	堀越・甲真木					◎			
30	生協団地古墳	堀越・甲真木				◎				
31	堀越甲真木B地点遺跡	堀越・甲真木	◎	◎			◎			
32	堀越五十山D地点遺跡	堀越・五十山				◎	◎			
33	堀越五十山E地点遺跡	堀越・五十山		◎		◎	◎			
34	堀越五十山C地点遺跡	堀越・五十山				◎	◎			
35	養林寺裏遺跡	堀越・殿町		◎			◎			『堀越丁二本松B地点遺跡・大胡神社前遺跡・養林寺裏遺跡』
36	養林寺館跡	堀越・殿町		○				◎	◎	『堀越丁二本松B地点遺跡・大胡神社前遺跡・養林寺裏遺跡』
37	殿町遺跡	堀越・殿町							◎	『殿町遺跡』
38	大胡城址(県指定史跡)	河原浜・根古屋						◎	◎	『大胡町誌』ほか
39	日光道東遺跡	河原浜・日光道東	◎	◎		◎	◎			『日光道東遺跡』
40	大胡東小学校遺跡	河原浜・山上道上		◎			◎			
41	浅見遺跡	樋越・浅見		◎			◎			『浅見遺跡』
42	丁田城(稲垣屋敷)	樋越・六反畑						◎		『大胡町誌』
43	堀越古墳(県指定史跡)	堀越・房関				◎				『大胡町誌』ほか
44	堀越小此木遺跡	堀越・小此木		◎						
45	天神遺跡	茂木・天神		◎			◎		◎	『群馬県史資料編1』
46	茂木大道下遺跡	茂木・大道下				◎	◎		◎	
47 ～ 52	天神風呂遺跡	茂木・天神風呂		◎		◎	◎			『天神風呂遺跡』

番号	遺跡名	所在地	内容							文献
			旧石器	縄文	弥生	古墳	歴史	中世	近世	
53	上宮関遺跡	大胡・上宮関					◎			
54	中宮関遺跡	大胡・中宮関				◎	◎			
55	上大屋・樋越地区遺跡群	上大屋、樋越		◎			◎			『上大屋・樋越地区遺跡群』
56	八ケ峰遺跡	上大屋・八ケ峰		◎						
57	稲荷塚古墳	上大屋・八ケ峰				◎				
58	樋越西久保遺跡	樋越・西久保		◎		◎	◎			本年度報告書作成予定
59 ～ 62	樋越西前沖遺跡	樋越・西前沖							◎	『上大屋・樋越地区遺跡群』 本年度報告書作成予定
63	上大屋中組遺跡	上大屋・中組						◎		『上大屋下組遺跡・上大屋中組遺跡・上大屋天王山遺跡』
64	上大屋天王山遺跡	上大屋・天王山				◎		◎		『上大屋下組遺跡・上大屋中組遺跡・上大屋天王山遺跡』
65	樋越東前沖遺跡	樋越・東前沖					◎			本年度報告書刊行予定
66	足軽町遺跡	茂木・足軽町		◎		◎	◎			『大胡町誌』ほか
67	梅沢遺跡	茂木・梅沢					◎			
68	稲荷窪Ｂ地点遺跡	茂木・稲荷窪	○	◎		◎	◎			『稲荷窪Ｂ地点遺跡』
69	茂木大日遺跡	茂木・大日					◎			
70	稲荷窪Ａ地点遺跡	茂木・稲荷窪		◎		◎	◎			『稲荷窪Ａ地点遺跡』
71	茂木諏訪東Ｂ地点遺跡	茂木・諏訪東		◎		◎	◎			
72	西小路遺跡	茂木・西小路	○	◎		◎	◎		◎	『西小路遺跡』
73	上ノ山遺跡	茂木・上ノ山	○	◎		◎	◎		◎	『上ノ山遺跡』
74	茂木古墓	茂木・中川原					◎			
75	小林（三ツ屋）遺跡	茂木・小林	◎	◎		◎	◎			『小林・山神・大畑遺跡』
76	茂木山神Ⅱ遺跡	茂木・山神		◎		◎	◎			『茂木山神Ⅱ遺跡』
77	山神遺跡	茂木・山神		◎		◎	◎			『小林・山神・大畑遺跡』
78	大畑遺跡	茂木・大畑		○						『小林・山神・大畑遺跡』
79	下宮関遺跡	大胡・下宮関				◎				
80	前橋東商業高校遺跡	大胡・前山				○				『大胡町誌』
81	上大屋下組遺跡	上大屋・下組		◎		◎	○			『上大屋下組遺跡・上大屋中組遺跡・上大屋天王山遺跡』

◎は遺構が確認されている　　○は遺物のみ確認

堀越並木Ｄ地点遺跡

第４図　堀越並木Ｄ地点遺跡全体図

第３章　堀越並木Ｄ地点遺跡の遺構・遺物

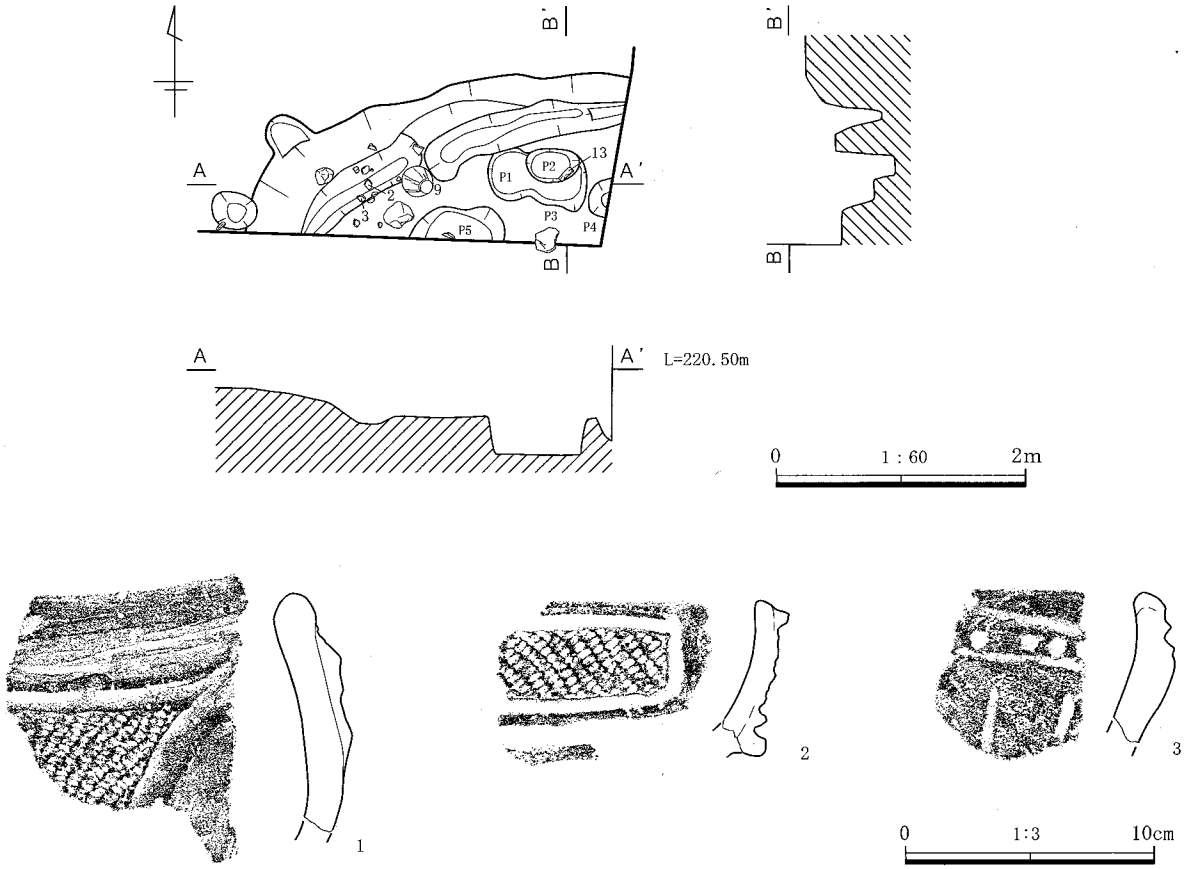
第１節　竪穴住居跡

J1 号住居跡

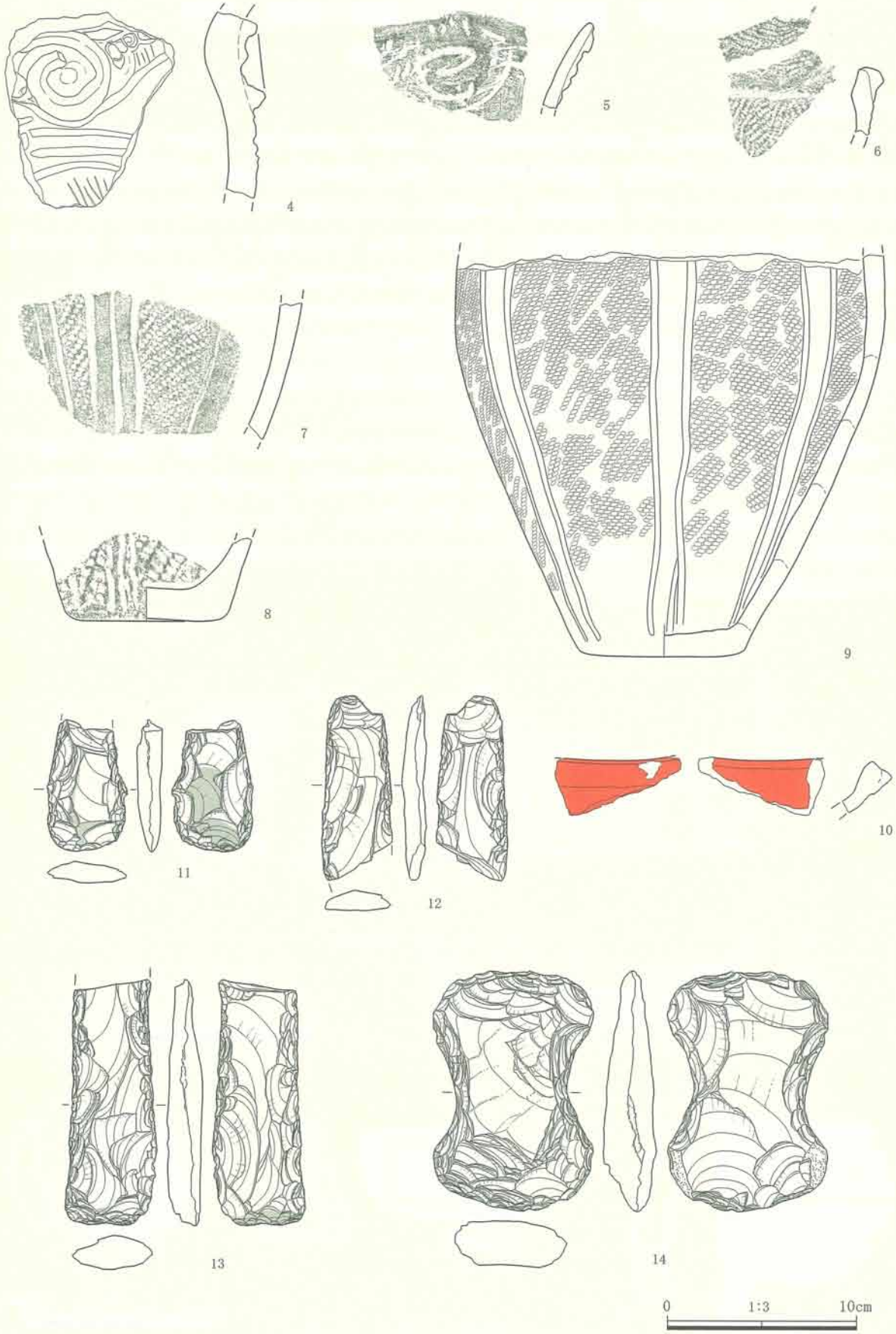
Ｍ－２グリッドに位置する。調査区の東南端であり、重複する遺構はない。北西の一部を検出したが、大半が調査区域外のため平面形態・規模は不明である。おそらく他の住居と同様に円形を呈すものと考えられる。壁は緩やかに立ち上がり、残存壁高は 30cmを測る。床面の状態はやや凹凸が見られるが、ほぼ水平である。壁溝は壁を検出した部分には確認され、幅 20 ～ 30cm、残存壁高は６～ 10cmを測る。柱穴になる可能性の考えられるのはＰ２であり、径 43 × 26cm、深さは 47cmを測る。炉址は検出していない。

出土した遺物は土器と石器である。縄文土器は№ 9 の深鉢が住居内北西部の床面にほぼ密着した状態で出土した。胴部に二本の沈線を垂下して RL 縦方向の縄文帯と無文帯を交互に配置する。その他、住居内出土の土器片は前期諸磯ｂ式期から勝坂・阿玉台式期、称名寺式期から加曾利Ｂ式期のものまで含んでいた。いずれも重複遺構、あるいは周辺遺構からの混入品と考えられる。

石器は打製石斧が８点出土しているが、破損品が多いため４点のみ図示した。撥形、短冊形、分銅形の各形が揃う。№ 13 の短冊形石斧は基端部を欠くが、現状で長さがおよそ 12cm、幅 3cmと比較的大形である。分銅形は№ 14 の図示した１点のみである。その他、剥片石器１点、スクレーパー片２点、剥片 23 点、安山岩製磨石１点、チャート片１点が出土している。以上のことから当住居は縄文時代中期加曾利 E3 式期の中から新段階に属すると考えられよう。



第５図　J1 号住居跡平・断面図、出土遺物 (1)

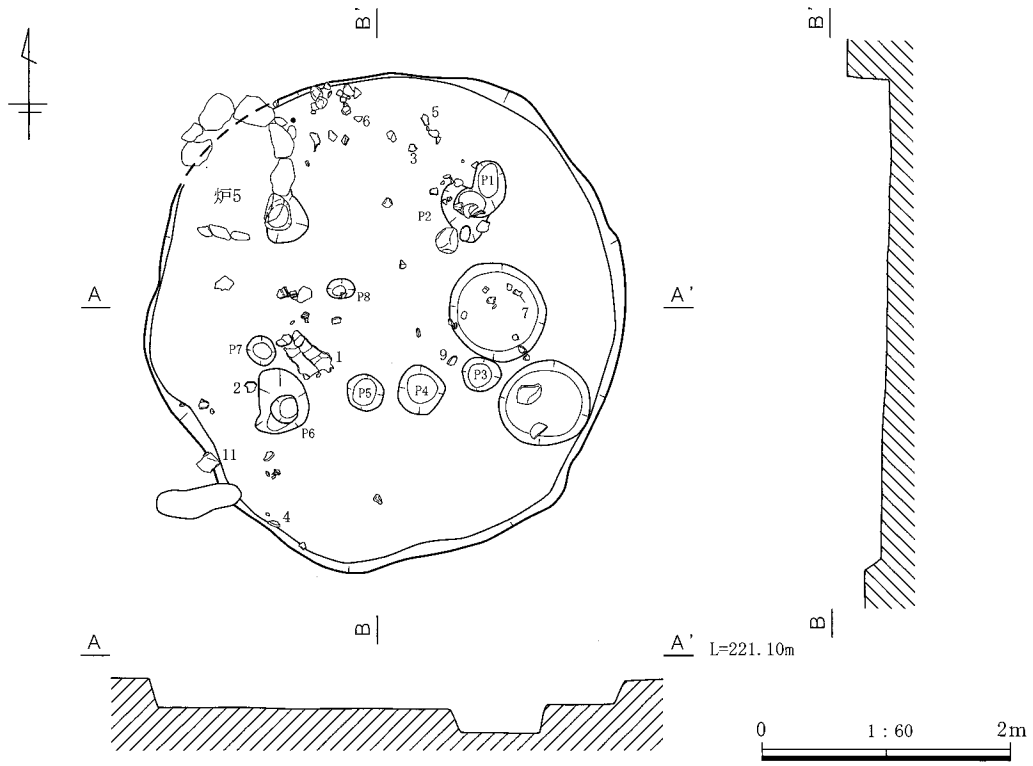


第６図　J1 号住居跡出土遺物 (2)

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄褐色 ③白色粒・黒色粒・石英 ④口縁部破片	隆線・縄文 RL	波状口縁。縄文 RL 施文後、断面三角形の隆線により区画。
2	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄褐色 ③白色粒・黒色粒・石英 ④口縁部破片	凹線・縄文 RL	平縁口縁。隆線を貼付し箱状に区画、縄文 RL を施文後凹線区画。
3	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙～黄褐色 ③白色粒・黒色粒・褐色粒 ④口縁部破片	円形文 沈線	平縁口縁。口縁部沈線間に円形えぐり文、縦方向に沈線を垂下。
4	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・黒色粒・石英 ④口縁部破片	隆線・凹線・沈線	隆線による渦巻文、区画内に円形えぐり文、沈線文充填。胴上位に横線区画を施し沈線文充填。
5	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色～灰黄褐色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部破片	沈線	小波状口縁。波頂部を中心に沈線による渦巻文。
6	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い赤褐色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片	縄文 RL	波状口縁、口縁部端部を肥厚させ、波頂部に三角文を作る。口縁端部に縄文 RL を施文。胴部は縄文 RL を縦位施文。
7	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙色 ③白色粒・黒色粒 ④胴部破片	沈線・縄文 RL	縄文 RL を縦位に施文後、2～3本の沈線を垂下し無文帯を作る。
8	縄文土器 深鉢	①普通 ②赤褐色 ③白色粒・褐色粒・黒色粒 ④胴部下位～底部 1/2 底径 7.8cm	沈線・縄文 RL	縄文 RL を縦位に施文後、3本単位の沈線を垂下し区画。
9	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙色 ③白色粒・黒色粒・礫 ④胴部中位～底部残存 底径 8.5cm	沈線・縄文 RL	沈線を垂下し、縄文 RL を縦位施文した縄文帯と無文帯を交互に配置。
10	縄文土器 浅鉢	①普通 ②明褐～鈍い赤褐色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部破片		口縁端部は平坦。口縁部直下に稜を作る。内外面を研磨し、赤色塗彩。
番号	種　類	法量 (cm)・石材		
11	打製石斧	残存長 6.92　幅 4.23　厚さ 1.33　重さ 45.8 g　細粒安山岩		
12	打製石斧	残存長 9.63　幅 3.73　厚さ 1.29　重さ 52.6 g　黒色頁岩		
13	打製石斧	残存長 12.91　幅 4.84　厚さ 1.88　重さ 135.0 g　黒色頁岩		
14	打製石斧	長さ 12.64　幅 8.42　厚さ 2.77　重さ 347.7 g　細粒安山岩		

J2 号住居跡

K－3・4 グリッドに位置する。南西への傾斜地の中で、調査区では最も高所になる北東部に、J 3 号住居跡と近接して造られる。5 号炉と重複し、本住居跡の方が古い。平面形態は円形を呈し、規模は直径 3.8m、面積 11.49㎡を測る。残存壁高は、南への傾斜地のためか壁は北側の残存状態が良く、北側で 30cm、南側

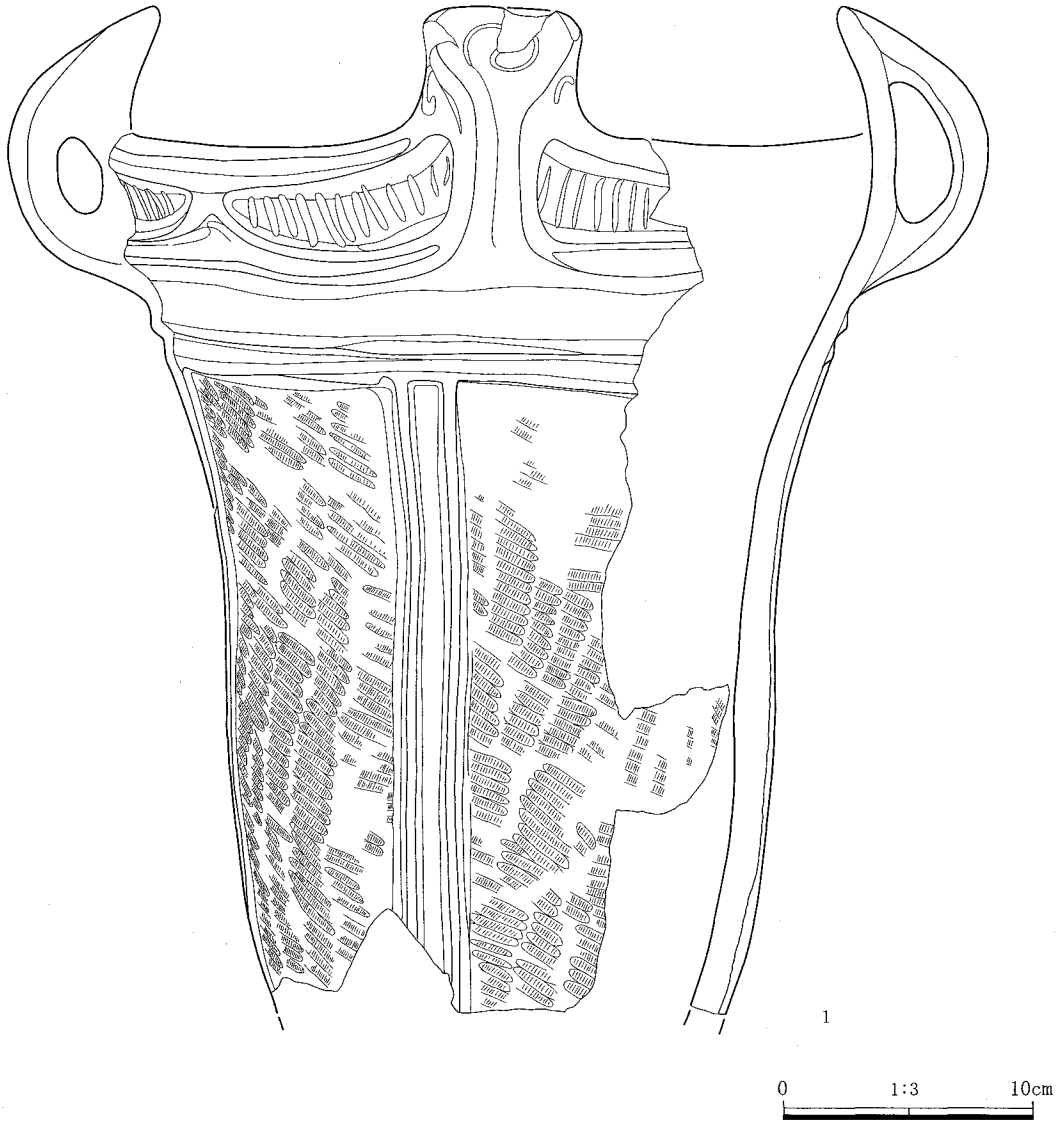


第 7 図　J2 号住居跡平・断面図

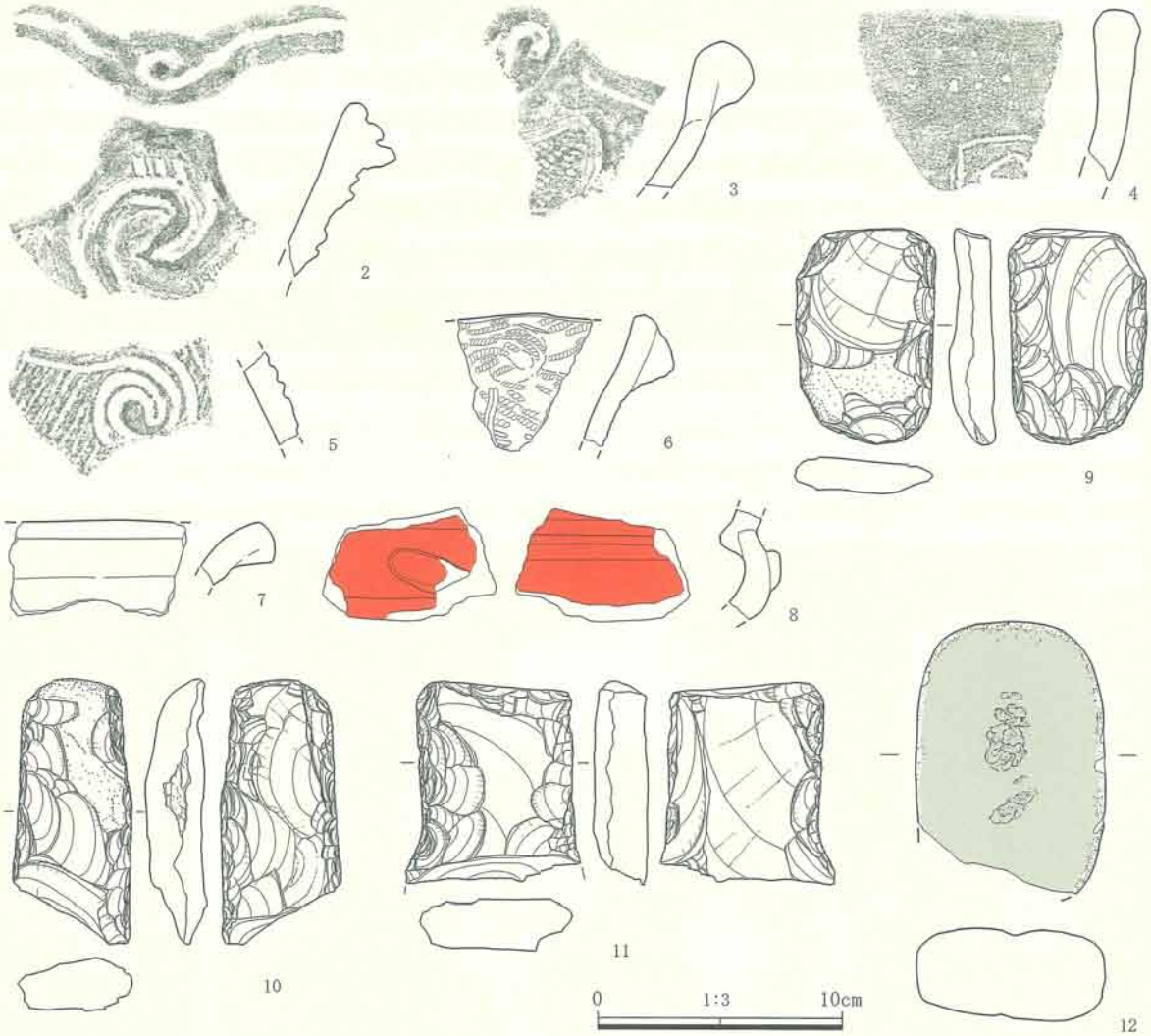
で 14cmを測る。床面はほぼ平坦で整っている。ピットを８基検出しているが、配置等に規則性は見られない。柱穴になる可能性の考えられるものはＰ１・６であり、Ｐ１は径 25 × 40cm、深さは 20cm、Ｐ６は径 40 × 50cm、深さは 70cmを測る。炉は検出していない。

出土した遺物は土器と石器である。土器は深鉢と浅鉢とが出土している。No.1 の深鉢は、住居中央部のやや南西の床面からわずかに浮いた状態で出土した。大きな橋状把手を持ち胴部のくびれは少ない。隆線による横位区画文内を沈線により充填する。充填後に隆線側を撫でる。口縁部文様帯と狭い頸部無文帯を挟んで、胴部に縄文帯と無文帯を交互に配置する。No.2 は箱状の波頂部をもち、口縁端部に横位蕨手文を施す。No.5 は胴部の張る器形で渦巻文を施している。その他では勝坂式期片や、称名寺式期片が認められている。特に勝坂式、阿玉台式期の深鉢片が多く認められ、周辺遺構の存在が推測できる。浅鉢では屈曲のある胴部に粘土貼付による施文を持つ赤彩のもの (No.8) もある。

石器は打製石斧４点が出土し、そのうち３点を図示した。また凹石・磨石が出土している。その他、打製石器片７点、剥片７点、チャート片１点が出土した。以上のことから本住居の時期は、縄文時代中期加曽利Ｅ２式期を中心とした時期に属すると考えられる。



第８図　J2 号住居跡出土遺物 (1)



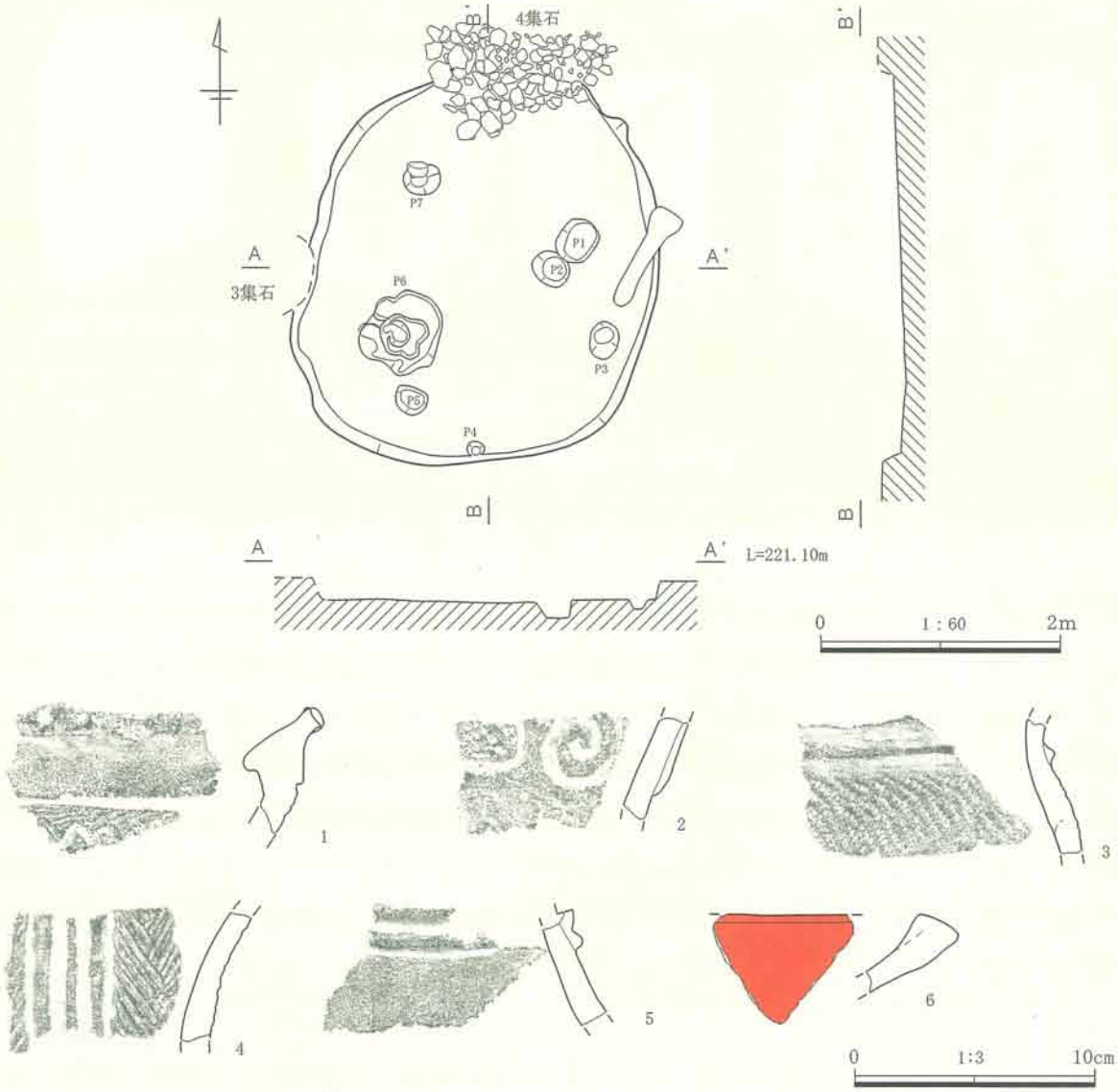
第９図　J2 号住居跡出土遺物 (2)

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部～胴部下位 1/3 口径 (31.2)	隆線・凹線・沈線 縄文 L	波状口縁。波頂部は 4 単位の橋状把手。口縁部は縦位沈線後、凹線による区画。胴部は縄文 L 縦位施文後、隆線・凹線区画。
2	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片	隆線・凹線・沈線	波状口縁。波頂部に隆線・凹線による区画文。口縁端部に沈線による蕨手文。
3	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い橙色 ③白色粒・片岩・礫 ④口縁部破片	隆線・凹線・沈線 縄文 RL	波状口縁。口縁端部に沈線による蕨手文。縄文 RL 施文後凹線による区画。
4	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部破片	沈線	平縁口縁。沈線による施文。
5	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い褐～灰褐色 ③白色粒・黒色粒 ④胴部破片	沈線・縄文	絡状体回転文を施文後、2 本単位の沈線による渦巻文。
6	縄文土器 深鉢	①普通 ②灰黄褐色 ③白色粒 ④口縁部破片	沈線・縄文 RL	口縁部は僅かに、波状を呈す。波頂部直下に瘤状突起を貼付。縄文 RL 施文後、沈線を曲線的に垂下。
7	縄文土器 浅鉢	①普通 ②橙～鈍い褐色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部破片		内外面研磨、外面の研磨は粗い。
8	縄文土器 浅鉢	①普通 ②鈍い褐色 ③白色粒・角閃石 ④胴部破片	貼付文	内外面研磨、赤色塗彩。貼付文。
番号	種　類	法量 (cm)・石材		
9	打製石斧	長さ 8.77　幅 5.62　厚さ 1.89　重さ 122.7 g　ホルンフェルス		
10	打製石斧	長さ 10.74　幅 4.91　厚さ 2.53　重さ 152.2 g　珪質頁岩		
11	打製石斧	残存長 8.24　幅 7.05　厚さ 2.2　重さ 188.9 g　頁岩		
12	敲石・磨石	残存長 11.2　幅 7.60　厚さ 3.70　重さ 514.9 g　粗粒輝石安山岩		

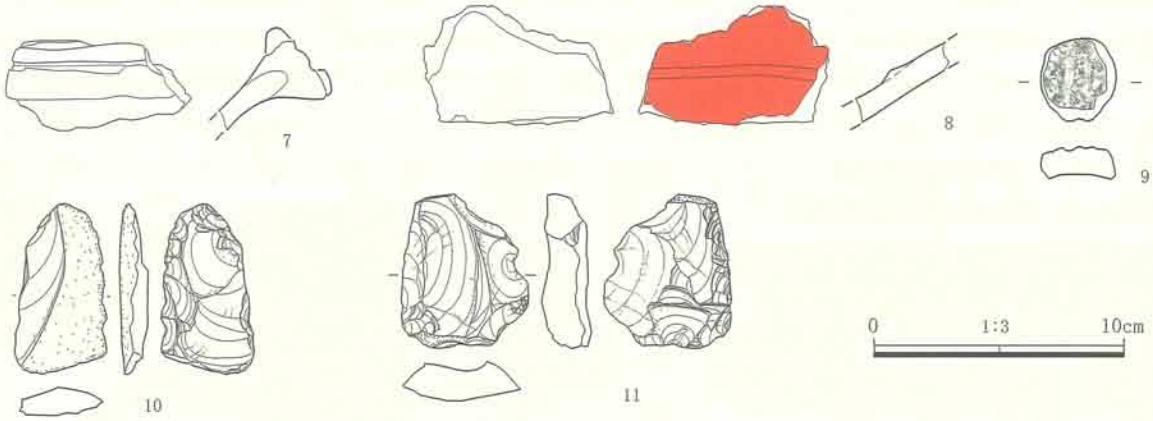
J3 号住居跡

Ｊ－3･4グリッドに位置する。集石3･4と重複し、双方とも住居覆土上面まで石の分布範囲が広がりを持っているため、J3 号住居より集石 3･4 の方が新しいことを確認できる。平面形態は楕円形を呈し、規模は径 3.4 × 2.9m、面積 7.85㎡を測る。残存壁高は、南への傾斜地のためか壁は北側の残存状態が良く、北側で 20 ㎝、南側で 12㎝を測る。床面の状態はやや凹凸はあるが、水平である。ピットは 7 基検出しているが、配置等に規則性は見られない。柱穴になる可能性の考えられるものはＰ 3･5･7 である。Ｐ 3 は径 24 × 32㎝、深さは 45㎝、Ｐ 5 は径 23 × 28㎝、深さは 12㎝、Ｐ 7 は径 25 × 30㎝、深さは 15㎝を測る。炉は検出していない。

全体に遺物量が少なく、住居に属すると特定できるものがなかったが、No1 の口縁部形態や No4 の隆線３本を垂下して綾杉状沈線を充填する深鉢が注目できる。覆土中から勝坂式期から加曽利Ｅ４式期にわたる深鉢片が認められ、また赤彩の浅鉢（No.6・No.8)、土製品 (No.9) が出土している。石器も量的に少なく、図示した打製石器（No.10・No.11）の他は剥片８点のみであった。No.10 は縦剥ぎの剥片で片面に自然面を残し側部に刃部を作る。削器であろう。本住居の時期は縄文時代中期加曽利Ｅ３式期に属すると考えて置きたい。



第 10 図　J3 号住居跡平・断面図、出土遺物 (1)



第 11図　J3 号住居跡出土遺物 (2)

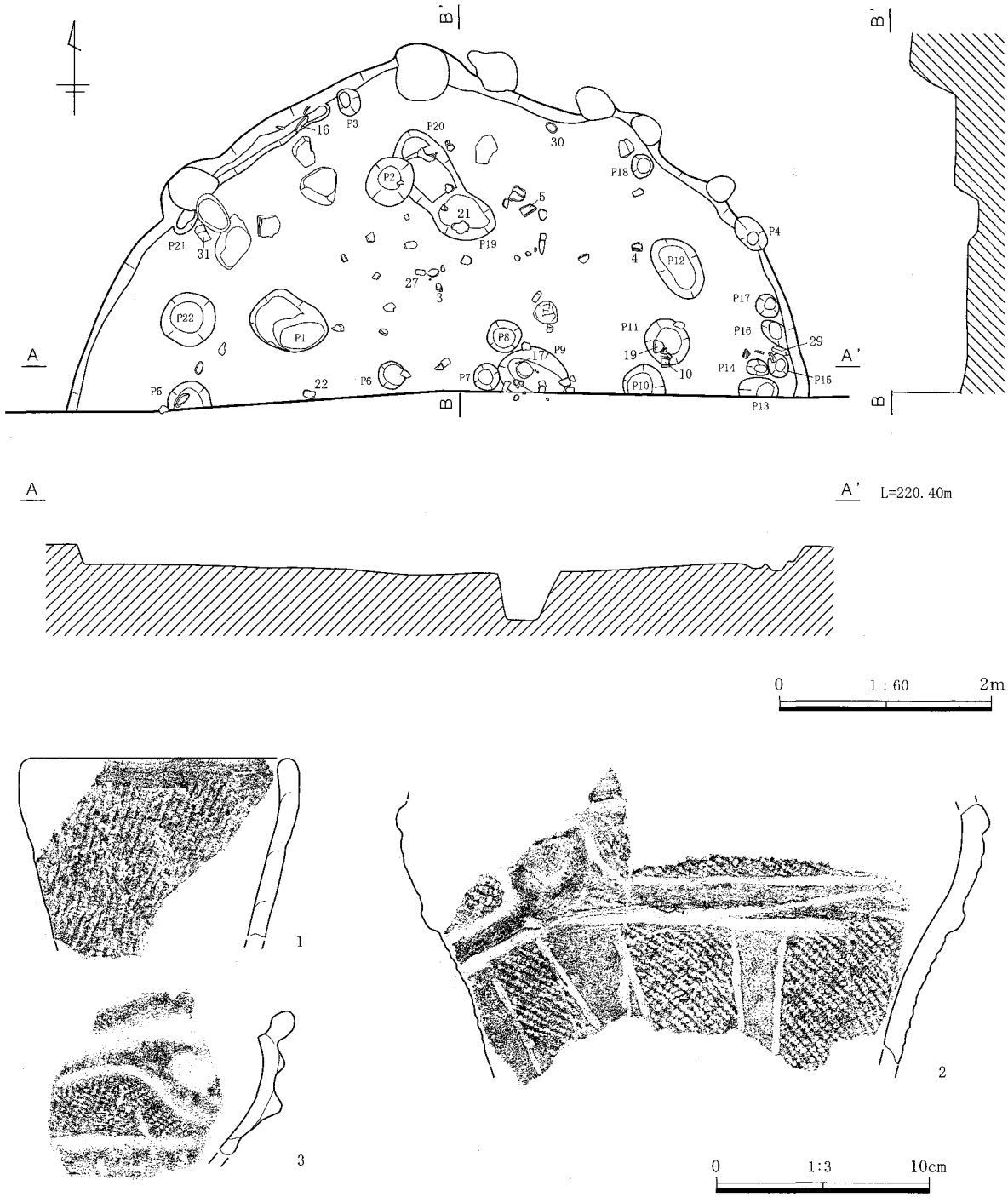
番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙～鈍い黄橙色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部破片	沈線・縄文R	平縁口縁。口縁端部に刻目を施す。縄文Rを施文後沈線、鋸歯状の波状文を施文。
2	縄文土器 深鉢	①普通 ②灰黄褐色 ③白色粒・角閃石 ④胴部破片	隆線・凹線 縄文 LRL	隆線・凹線による渦巻文、縄文 LRL を施文後、凹線により区画。
3	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・黒色粒 ④胴部破片	隆線・凹線 縄文 RL	断面三角形の隆帯。縄文 RL を横位施文後凹線。
4	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・黒色粒 ④胴部破片	隆線・凹線・沈線	3 本単位の隆線を垂下、沈線による綾杉文を施文後凹線により区画。
5	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い赤褐色 ③白色粒・黒色粒 ④胴部破片	隆帯	頸部に隆帯を貼付。
6	縄文土器 浅鉢	①普通 ②褐灰色 ③白色粒 ④口縁部破片		内面研磨、外面赤色塗彩。
7	縄文土器 浅鉢	①普通 ②橙色 ③白色粒・黒色粒石英 ④口縁部破片	沈線	肥厚した口縁端部に 2 本の沈線。内外面研磨。
8	縄文土器 浅鉢	①普通 ②鈍い褐色 ③白色粒・黒色粒・褐色粒・雲母 ④胴部破片		内外面研磨、内面赤色塗彩。
9	土製品 円盤	①普通 ②橙色 ③白色粒・黒色粒 ④胴部破片		深鉢胴部片の転用。
番号	種　類	法量 (cm)・石材		
10	削器	長さ 6.79　幅 3.71　厚さ 1.17　重さ 29.6 g　頁岩		
11	削器	長さ 6.15　幅 5.08　厚さ 1.97　重さ 56.5 g　チャート		

J4 号住居跡

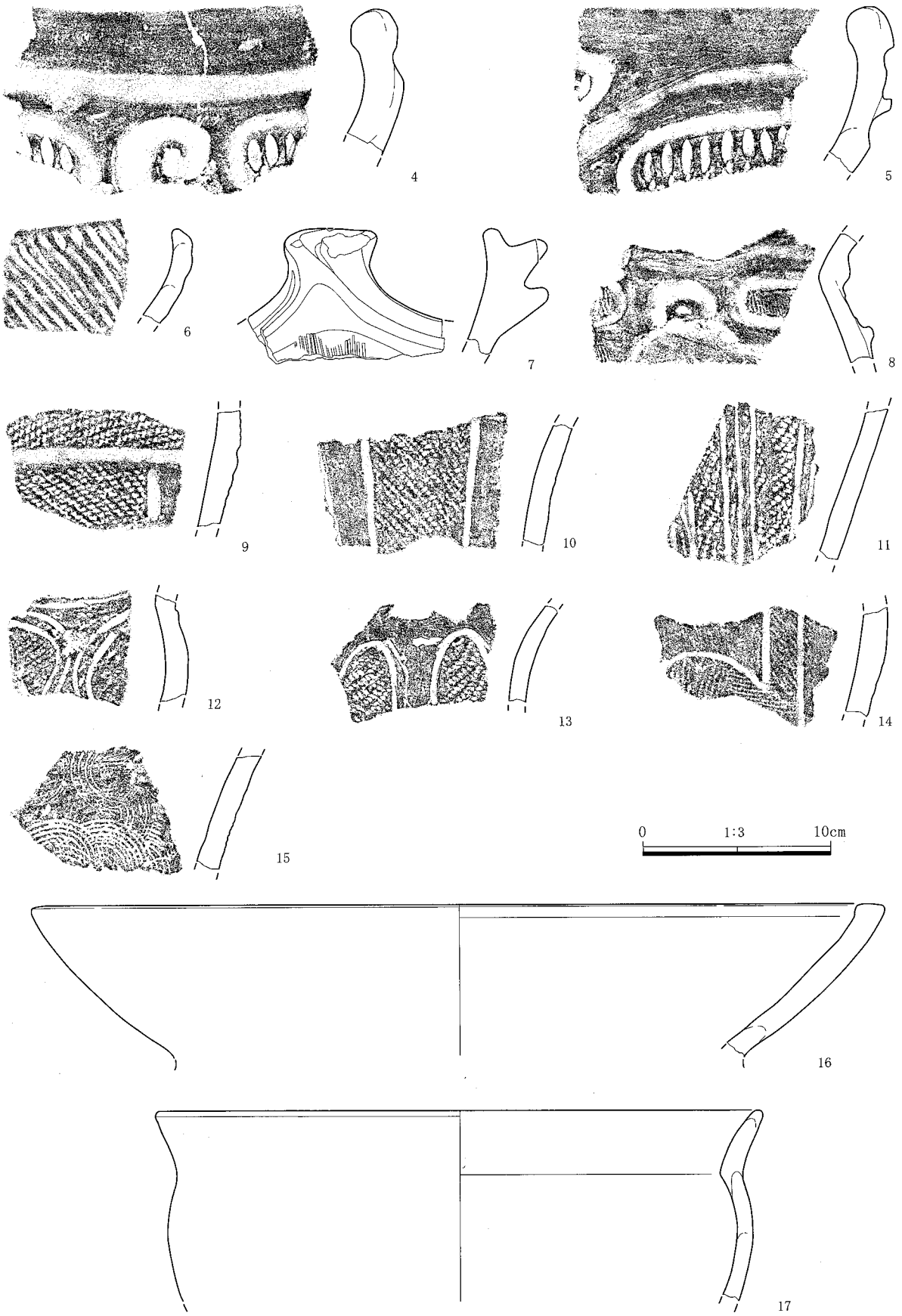
H・I－1 グリッドに位置する。重複する遺構はない。平面形態は南側が調査区域外になるが、形状は円形を呈すと考えられる。規模は約半分が調査区域外であるが、推定で直径 6.9m を測る。残存壁高は、南への傾斜地のためか壁は北側の残存状態が良く、北側で 40cm、南側で 18cmを測る。床面の状態は若干の凹凸はあるが、ほぼ平坦に整っている。ピットは 22 基検出しているが、柱穴と考えられるものはＰ 2・12・22 の 3 基である。Ｐ 2 は径 42 × 48cm、深さは 35cm、Ｐ 12 は径 40 × 63cm、深さは 23cm、Ｐ 22 は直径 48cm、深さは 23cmを測る。炉は検出していない。

遺物は土器と石器が出土している。遺物は北側から中心に向かって流入する状況で検出できた。土器は深鉢と浅鉢とがあり、いずれも完形をなすような破片は見られなかった。中心施設が南の調査区外に存在するためと思われる。比較的床面に近い No.4 の深鉢は、断面の丸い隆線に太い凹線を沿わせて蕨手文、区画文を作り、区画内に縦沈線を充填する。No.5 も No.4 と同一の手法である。No.2 は縄文と隆線、凹線による区画文で、口縁部文様帯直下から胴部文様を配置する。No.11 は縄文施文後 3 本組の沈線を垂下する。No.12 は胴部に張りを持つ器形で、頸部に横線を施して文様帯を分離している。No.13 は楕円形区画文の深鉢片である。No.14 は沈線による J 字文を構成する。No.1 は小型の深鉢で、全面に縄文を施す。No.6 は斜

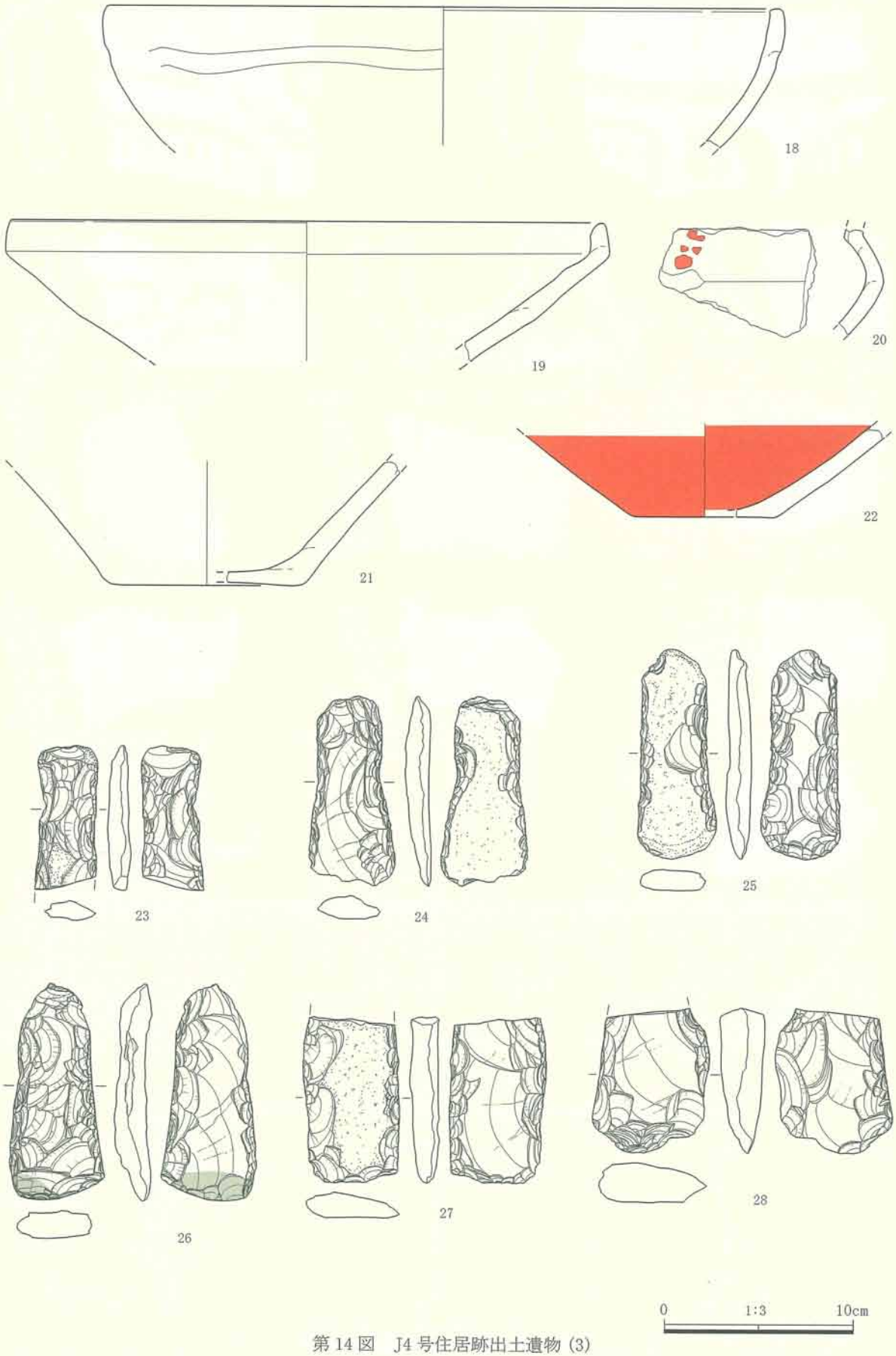
め沈線文の口縁部片である。No.16 は口縁部に無文帯を持つ大型の深鉢で、口縁部端部がわずか内側に立ち上がる。曽利系の要素を持つと見られる。No.18 ～ No.22 は浅鉢で、No.20 と No.22 には赤彩が認められる。石器は打製石斧 25 点あり、その内 18 点は破損品であった。7 点を図化した。打製石斧刃部には使用によって摩耗した痕跡が認められるものが多い。その他打製石器片および未製品 16 点。加工痕のある剥片 20 点、その他の剥片 86 点、チャート片 11 点が出土している。以上のことから本住居は縄文時代中期加曽利 E 3 式期中から新段階を中心とした時期に当てられよう。



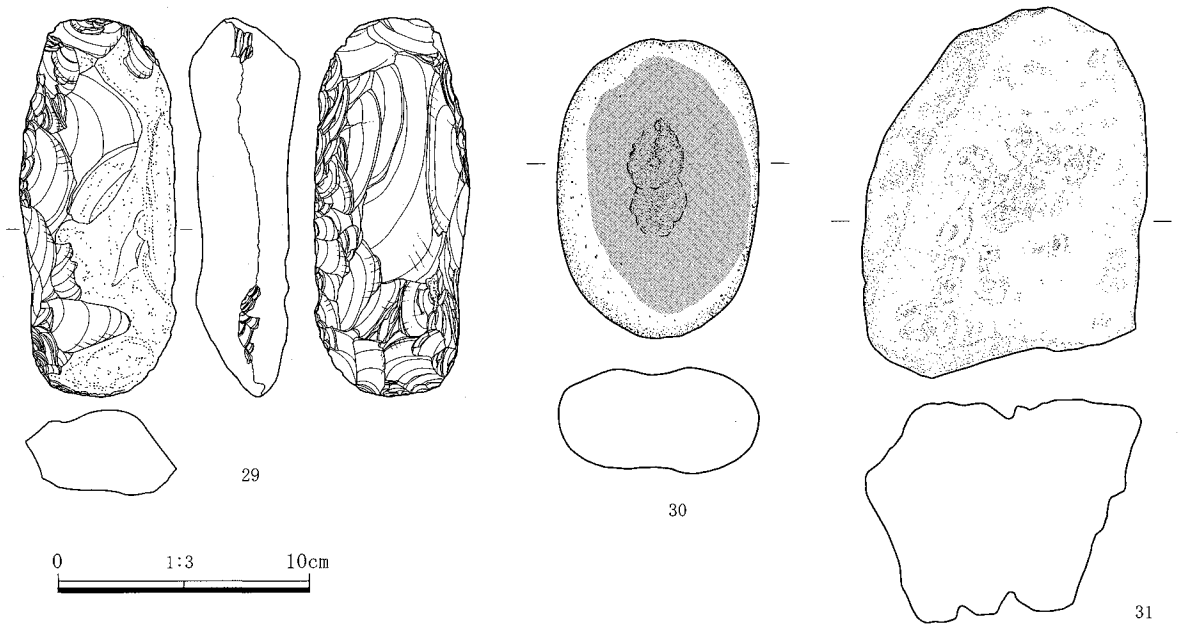
第 12 図　J4 号住居跡平・断面図、出土遺物 (1)



第 13 図　J4 号住居跡出土遺物 (2)



第 14 図　J4 号住居跡出土遺物 (3)



第 15 図　J4 号住居跡出土遺物 (4)

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・角閃石 ④口縁～胴部 1/5 口径 (12.1)	縄文 RL	平縁口縁。縄文 RL を縦位に施文。
2	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・角閃石 ④口縁～胴部中位 1/5	隆線・凹線・沈線 縄文 LRL	口縁部は楕円形の区画、胴部は沈線を垂下し、縄文 LR を縦位施文した縄文帯と無文帯を交互に配置。
3	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片	隆線・凹線 縄文 RL	波状口縁。隆線・凹線による横位の蕨手文、縄文 RL 縦位施文後凹線。
4	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・角閃石・礫 ④口縁部破片	隆線・凹線・沈線	大型の平縁口縁。隆線・凹線による区画、区画内に縦位の短い沈線を充填。
5	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・角閃石・礫 ④口縁部破片	隆線・凹線・沈線	平縁口縁。隆線・凹線による区画、区画内に縦位の短い沈線を充填。
6	縄文土器 深鉢	①普通 ②浅黄橙色 ③白色粒 ④口縁部破片	沈線	波状口縁。沈線を斜位に充填。
7	縄文土器 深鉢	①普通 ②灰黄褐色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片	隆線・凹線・条線	装飾突起を持つ波状口縁。隆線・凹線による区画内に条線を充填。
8	縄文土器 深鉢	①普通 ②灰黄褐色 ③白色粒・角閃石 ④頸部から胴部破片	隆線・凹線・条線	頸部に括れを持つ。隆線・凹線による楕円形の区画、区画内に条線を充填。
9	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③角閃石 ④胴部破片	沈線・縄文 LR	口縁部下位は縄文 LR を横位施文、胴部は縄文 LR を縦位施文後、沈線により区画。
10	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・角閃石 ④胴部破片	沈線・縄文 LR	縄文 LR を縦位に施文後、沈線を垂下。
11	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・石英・角閃石 ④胴部破片	沈線・縄文 RL	縄文 RL を縦位に施文後、3 本単位の沈線を垂下。
12	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・角閃石 ④胴部破片	沈線・縄文 RL	縄文 RL を縦位に施文後、2 本単位の沈線による曲線文。
13	縄文土器 深鉢	①普通 ②浅黄～黄灰色 ③白色粒・角閃石 ④胴部破片	沈線・縄文 RL	縄文 RL を縦位に施文後、沈線による長円形の区画文。
14	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙～鈍い橙色 ③白色粒・角閃石 ④胴部破片	沈線・縄文 LR	縄文 LR を縦位に施文後、沈線による J 字文。
15	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙色、暗灰黄色 ③白色粒・角閃石 ④胴部破片	条線	櫛状工具による曲線文を施文。
16	縄文土器 深鉢	①普通 ②明赤褐～鈍い赤褐色 ③白色粒・角閃石・片岩 ④口縁部～胴部 1/8　口径 (43.8)		大型平縁口縁。内外面研磨。
17	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部～胴部中位 1/8 口径 (31.7)		平縁口縁。内外面研磨。
18	縄文土器 浅鉢	①普通 ②橙～鈍い黄橙色 ③白色粒・褐色粒・雲母 ④口縁部～胴部 1/6 口径 (35.4)	凹線	内外面粗い研磨。

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
19	縄文土器 浅鉢	①普通 ②橙～鈍い黄褐色 ③白色粒・石英・礫 ④口縁部～胴部 1/7 口径 (31.2)		内外面研磨。
20	縄文土器 浅鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒 ④胴部破片		外面は丁寧な研磨、赤色塗彩。内面研磨。
21	縄文土器 浅鉢	①普通 ②鈍い黄橙～褐灰色 ③白色粒・褐色粒 ④胴部下位～底部 1/4 底径 (10.2)		内外面研磨。
22	縄文土器 浅鉢	①普通 ②鈍い黄～黄灰色 ③白色粒・角閃石 ④胴部下位～底部 1/8 底径 (7.4)		内外面研磨・赤色塗彩。

番号	種　類	法量 (cm)・石材
23	打製石斧	残存長 7.63　幅 3.33　厚さ 1.26　重さ 36.1 g　黒色頁岩
24	打製石斧	長さ 9.99　幅 4.54　厚さ 1.38　重さ 65.3 g　細粒安山岩
25	打製石斧	長さ 11.02　幅 4.13　厚さ 1.33　重さ 73.3 g　細粒安山岩
26	打製石斧	長さ 11.44　幅 5.02　厚さ 1.99　重さ 123.0 g　細粒安山岩
27	打製石斧	残存長 8.76　幅 5.10　厚さ 1.57　重さ 90.5 g　砂岩
28	打製石斧	残存長 7.66　幅 6.21　厚さ 2.36　重さ 139.0 g　黒色頁岩
29	打製石斧	長さ 15.04　幅 6.17　厚さ 4.38　重さ 517.3 g　黒色頁岩
30	敲石・磨石	長さ 12.0　幅 8.0　厚さ 4.2　重さ 603.1 g　粗粒輝石安山岩
31	多孔石	長さ 15.0　幅 11.2　厚さ 8.8　重さ 1720 g　粗粒輝石安山岩

J5 号住居跡

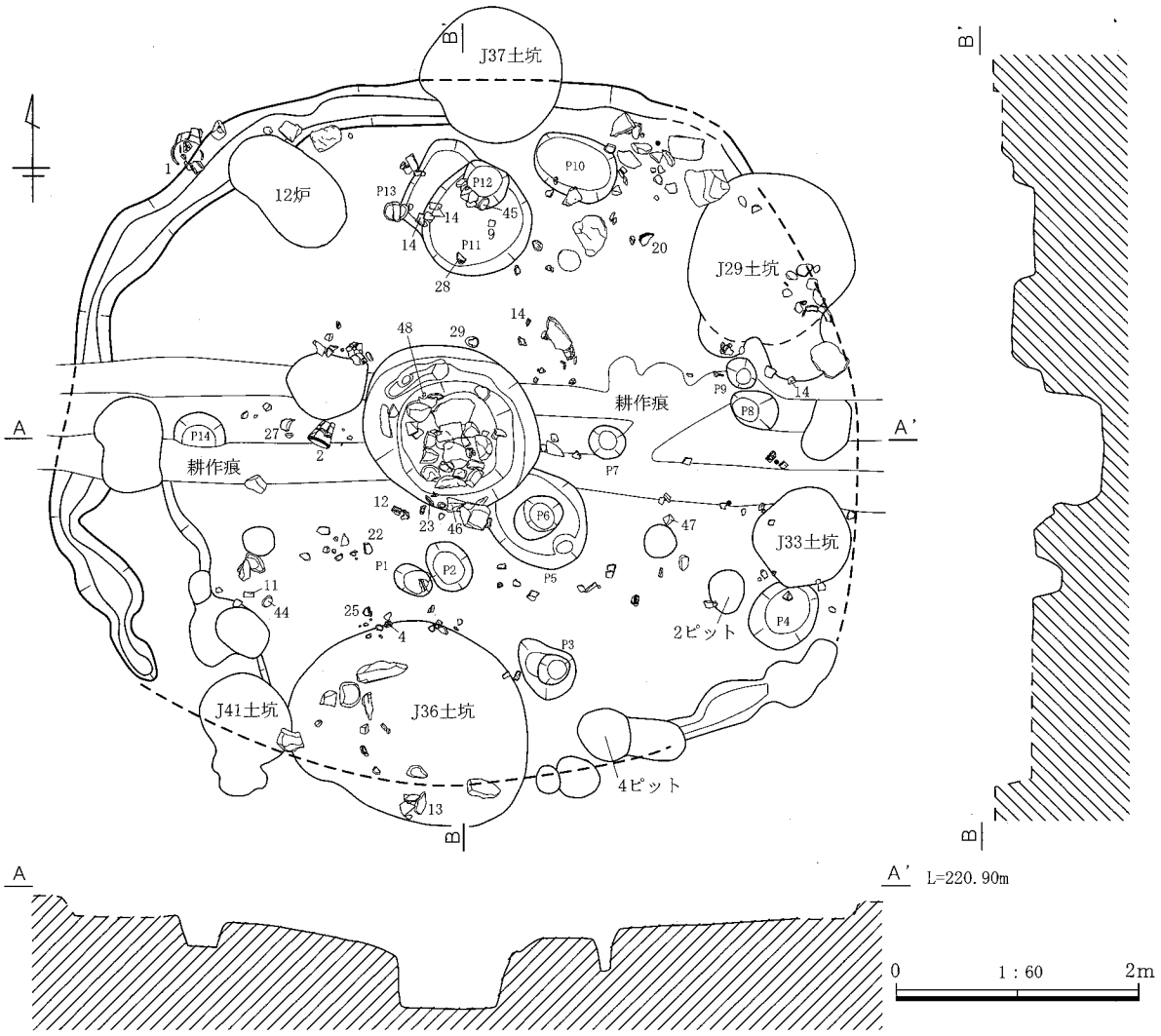
H－3 グリッドを中心に位置する。中央部に現代の耕作溝が重複している他、12 号炉、J29・33・36・37・41 号土坑と重複する。12 号炉は 5 号住より新しいが、土坑との新旧関係は不明である。平面形態は残存状態が悪く不明瞭だが、壁溝の痕跡で平面形を確認した。やや東西に長いがほぼ円形を呈す。規模は径 6.5 × 5.7m、面積は推定で 32.15㎡を測る。残存深度は北側で 5cm程度であり、南東部は壁溝の痕跡も不明瞭である。床面の状態はやや凹凸があり、南半部は床面が捉え難い。壁溝は南西部から北側にかけて、及び南東部に一部確認している。幅 30 ～ 45cm、深さは 5 ～ 10cmを測る。ピットは 14 基検出しているが、柱穴と考えられるものはＰ 3・8・12・14 の 4 基である。Ｐ 3 は径 43 × 57cm、深さは 25cm、Ｐ 8 は径 30 × 40cm、深さは 54cm、Ｐ 12 は直径 40cm、深さは 37cm、Ｐ 14 は直径 42cm、深さは 20cmを測る。炉は住居中央部に位置する。上幅の直径は 1.5m、中段までの残存壁高は 40cmを測る。中段の直径が 95cm、そこから垂直に 50cm程掘り込まれる。30cm位まで土を充填し、その上に礫が多数検出されているが、石の上面が平坦には揃っておらず、炉の底面として敷いた状況ではないと思われる。上部は耕作溝に壊され一部の礫が残存するが詳細は不明である。

本住居は炉、土坑との重複があり、遺物の出土状況も複雑であった。出土した遺物は土器・土製品・石器である。No.1 は口縁部文様帯から接して垂線が下ろされ、縄文帯と無文帯が交互に配置される比較的大型の深鉢で、胴部は顕著なくびれを持たず下位へすぼまる。本住居の北西縁辺から出土しており、出土レベルも高く、重複している 12 号炉に属するかと思われるが、面的に 12 号炉の遺物と捉えられなかった為、本住居の所属とした。No. 2 は住居中央部の炉、西側にやや床面より浮いた状態で出土している。口縁直下に交互刺突文を巡らし、縄文を縦方向に施文後 2 本組の連弧文と沈線を垂下する。頸部でわずかにくびれる深鉢である。No.10・No.11 は口縁部区画文内に沈線文を充填する。No.11 は矢羽根状とする。大きな橋状把手を持つ No.12 は No.10 とともに頸部無文帯を持つと考えられる。No.4 は縄文と隆線、凹線で区画文を構成する。No.14 は頸部に 2 本の隆帯を巡らす。No.20 は住居北東部床面から出土した。所謂「胴部隆帯文」を持つ深鉢である。浅鉢では No.23・No.25 が床面直上で出土している。また、No.26 は鍔部分に小孔を持つ。No.27 は後期堀之内式期の注口土器片である。No.28・No.29 はミニチュア土器で、ともに床面より 30cm 近く高いレベルで出土している。No.30・No31 は円盤状土製品で無文の鉢胴部片の転用である。

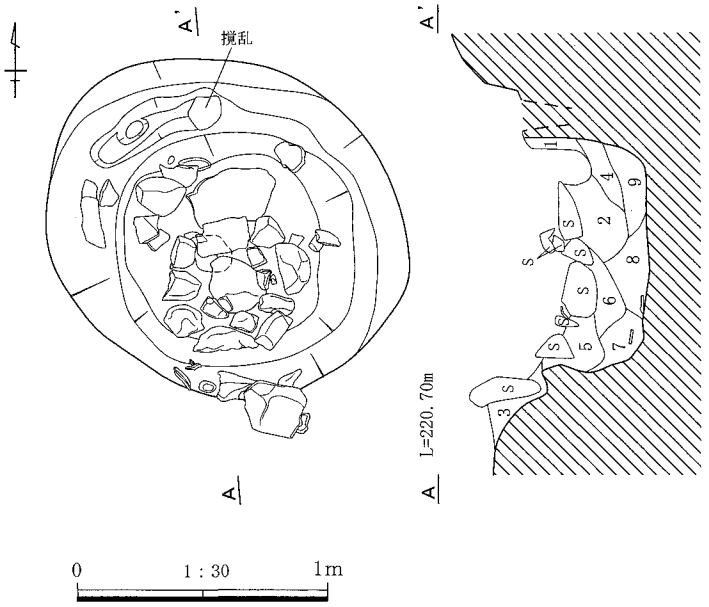
石器は石鏃・石匙・打製石斧・磨製石斧・凹石・敲石・磨石・石皿が出土している。その他ストーンリタッ

チャーと呼ばれる敲石も出土している。当遺跡内では、量的に少ない器種である。石鏃（No.32・No.33）は、凹基鏃である。No.34 は横型石匙でである。

打製石斧は 20 点出土しているが破損品が多い。そのうち７点を図示した。磨製石斧（No.42）は当住居出土の他、19 土坑、11 号ピット、遺構外の２点、計５点である。石材は頁岩・輝緑岩であった。打製石斧に対する量的格差が顕著である。安山岩製台石は１点のみで被熱し破損しているため提示していない。その他チャート片３点、剥片石器・スクレーパー片 25 点、大型剥片石器（スクレイパー）14 点、フレーク・加工痕のある石片類 51 点が出土している。また棒状片岩礫は端部に打痕があり、破損品であった。棒状礫を上下平坦に作って調整している敲石と思われる大型石器も出土している。安山岩敲石は、長円状礫で２点、破損品と未製品２点が出土している。No.43 はストーンリタッチャーといわれる石器で、小型の細長い円礫で先端に打撃による剥離があり、その上から鼠歯状痕が認められている。石材は頁岩である。本住居からは２点出土している。うち２点を提示した。凹石、磨石類は４点出土し、石皿は炉の石組みとして転用されたものである。以上のような遺物の状況から、本住居は縄文時代中期加曽利Ｅ２式期段階からＥ３式期古段階に相当すると考えられよう。注口土器や深鉢のミニチュアは、上位遺構からの混入で縄文時代後期の所産と考えられる。

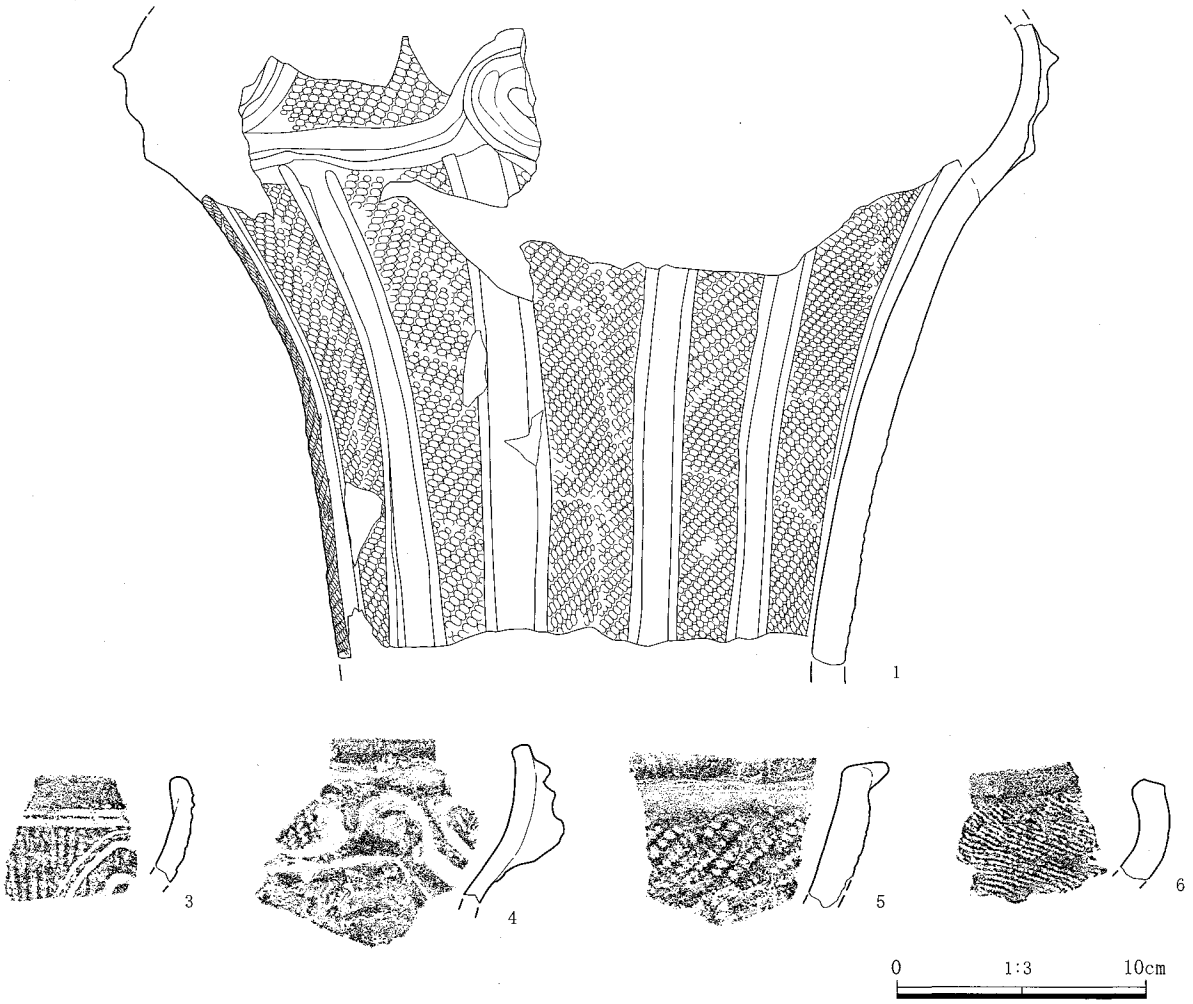


第 16 図　J5 号住居跡平・断面図

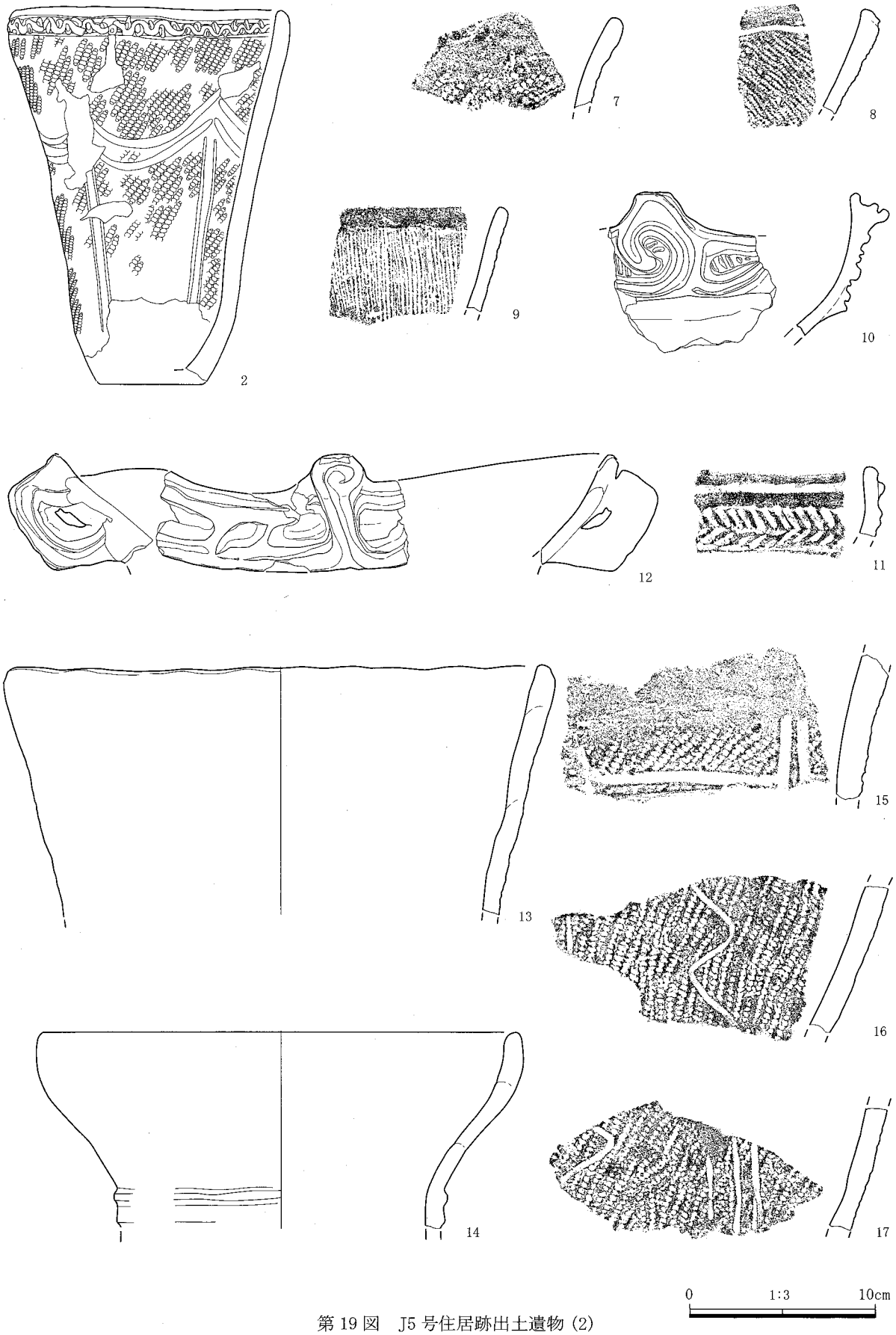


1　暗褐色土：ロームブロック中量を不均質に混入。
2　暗褐色土：ロームブロック・ローム粒少量を不均質に混入。
3　暗褐色土：ローム粒少量をやや不均質に混入、焼土粒微量が不均質に点在。
4　暗褐色土：ローム粒中量を不均質に混入、炭化粒微量が不均質に点在。
5　暗褐色土：ローム粒少量をやや不均質に混入、ロームブロック微量が不均質に点在。
6　ローム粒中量をやや不均質に混入、ロームブロック少量を不均質に混入。
7　暗褐色土：ローム粒中量をやや不均質に混入、炭化粒微量が不均質に点在。
8　暗褐色土：ロームブロック中量を不均質に混入、炭化粒微量が不均質に点在。
9　鈍い赤褐色土：ローム粒多量をやや不均質に混入、ロームブロック中量を不均質に混入、焼土粒少量を不均質に混入。

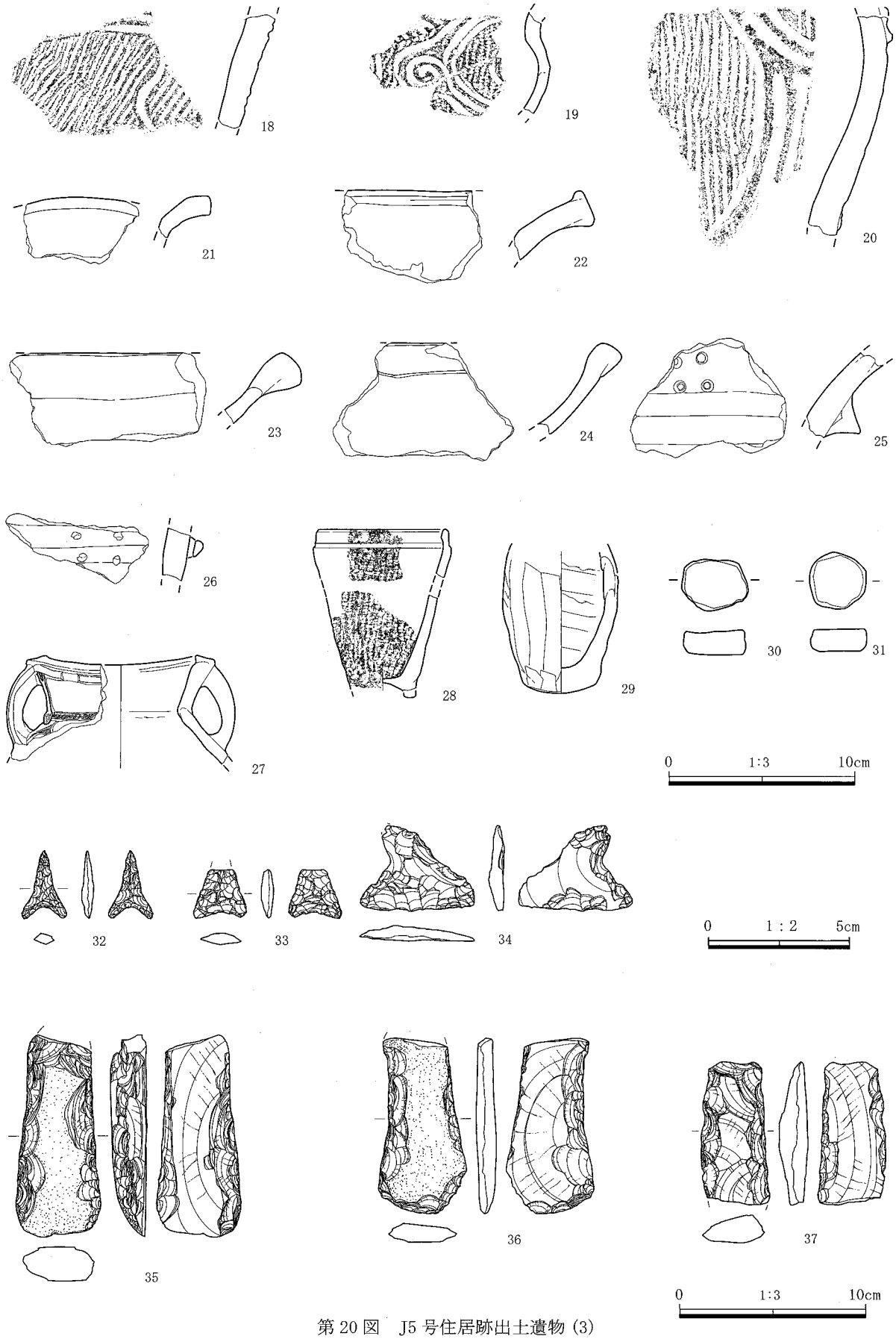
第17図　J5号住居跡炉跡平・断面図



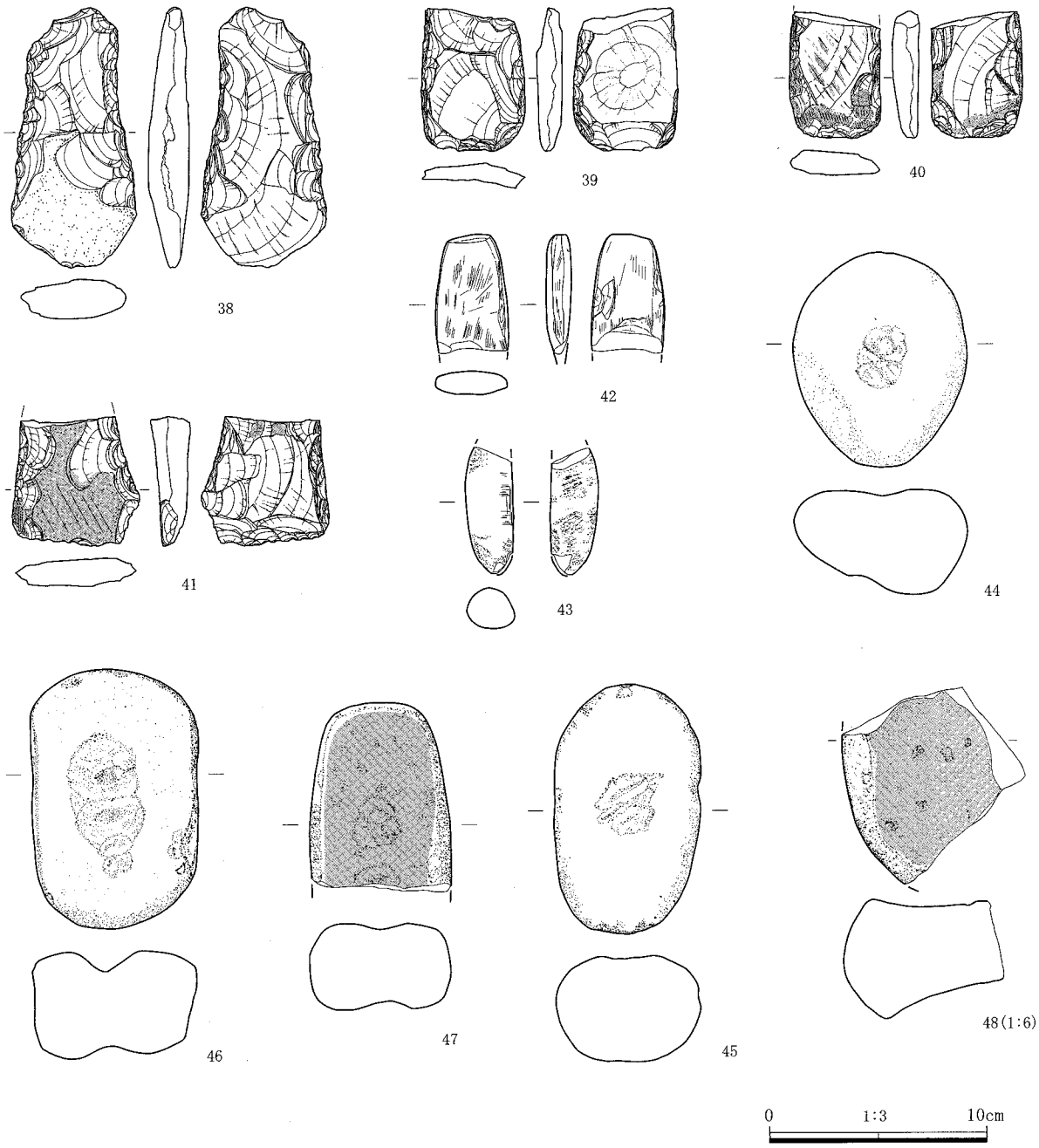
第18図　J5号住居跡出土遺物(1)



第19図　J5号住居跡出土遺物 (2)



第20図　J5号住居跡出土遺物 (3)



第 21 図　J5 号住居跡出土遺物 (4)

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙色 ③白色粒・黒色粒 口縁部～胴部下位 3/5	隆線・凹線・沈線 縄文 RL	口縁部は横位蕨手文と楕円形の区画、胴部は沈線を垂下し、縄文 RL を縦位施文した縄文帯と無文帯を交互に配置。
2	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い褐色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部～胴部下位 3/4 口径 14.0	凹線・沈線 縄文 RL	口縁部直下に交互円形刺突文・縄文 RL を縦位に施文後、連弧文と垂線を配置。
3	縄文土器 深鉢	①普通 ②灰褐～鈍い褐色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部破片	沈線・縄文 RL	縄文 RL を縦位に施文後平行沈線による横線・曲線文を施文。
4	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙～鈍い褐色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部破片	隆線・凹線 縄文 RL	平縁口縁。隆線による区画。区画内に縄文 RL を施文後凹線。胴部には隆線を 2 本単位で垂下。

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
5	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い橙～灰褐色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部破片	凹線・縄文 RL	口縁部直下に凹線、縄文 RL を縦位に施文。
6	縄文土器 浅鉢	①普通 ②鈍い褐色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部破片	縄文 RL	波状口縁。縄文 RL を横位に施文。
7	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い褐色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部破片	縄文 RL	山形突起の波状口縁。胴部縄文 RL を縦位に施文。
8	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い赤褐色 ③白色粒・角閃石・礫 ④口縁部破片	沈線・縄文 RL	波状口縁。縄文 RL を横位に施文後、横位の沈線を巡らす。
9	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部破片	条線	櫛状工具による縦位の条線文。
10	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙～灰黄褐色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部破片	隆線・凹線・沈線	波状口縁、波頂部から横位蕨手文を配置。隆線による区画内に縦位の沈線を施文後、沈線区画。
11	縄文土器 浅鉢	①普通 ②鈍い褐～灰褐色 ③白色粒・石英 ④口縁部破片	隆線・凹線・沈線	平縁口縁。隆線による区画内に綾杉文を施文後凹線。
12	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部破片 口径 (29.6)	隆線・凹線・沈線	口縁部に 4 単位の橋状の装飾把手を貼付。蕨手文配置。口縁部文様帯は隆線で楕円形の区画文を作り沈線を沿わせる。
13	縄文土器 深鉢	①普通 ②灰黄～暗灰黄色 ③白色粒・黒色粒・褐色粒・角閃石 ④口縁～胴上位 1/6 口径 (28.0)		無文の粗製土器。
14	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙色 ③白色粒 ④口縁部 1/3 口径 (25.2)	隆線	平縁口縁。口縁部無文。頸部に隆帯。
15	縄文土器 深鉢	①普通 ②灰黄褐色 ③白色粒・角閃石 ④胴部破片	沈線・縄文 RL	縄文 RL を縦位に施文後、沈線により区画。
16	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄褐色 ③白色粒・黒色粒 ④胴部破片	沈線・縄文 RL	縄文 RL を縦位に施文後、沈線による蛇行文を垂下。
17	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄褐色 ③白色粒・黒色粒 ④胴部破片	沈線・縄文 RL	縄文 RL を縦位に施文後、沈線を垂下、蛇行文を配す。
18	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い橙色 ③白色粒・黒色粒・角閃石 ④胴部破片	沈線・縄文	縄文 (絡条体回転文) を施文後、沈線による横線、蛇行文を垂下。
19	縄文土器 浅鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・黒色粒 ④胴部破片	沈線・縄文 RL	縄文 RL を縦位に施文後、3 本単位の沈線による曲線文・渦巻文。
20	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・黒色粒・褐色粒 ④胴部破片	隆線・沈線・縄文	縄文 (絡条体回転文) を施文後、2 本組隆線・沈線による曲線文。
21	縄文土器 浅鉢	①普通 ②橙色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部破片		外面撫で、内面研磨。
22	縄文土器 浅鉢	①普通 ②鈍い赤褐色 ③白色粒・黒色粒・石英　④口縁部破片		内外面研磨。
23	縄文土器 浅鉢	①普通 ②明赤褐色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部破片		内外面研磨。
24	縄文土器 浅鉢	①普通 ②明赤褐色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部破片		内外面研磨。
25	縄文土器 鉢	①普通 ②鈍い赤褐色 ③白色粒・黒色粒・褐色粒 ④口縁部破片	円形文	断面三角形の鍔付土器。竹管状工具による円形文を配置、外面研磨。
26	縄文土器 鍔付土器	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・黒色粒 ④胴部破片		鍔付土器。鍔部分に小孔。
27	縄文土器 注口土器	①普通 ②橙～灰黄褐色 ③白色粒・黒色粒・角閃石 ④口縁部～胴部上位 1/5 口径 (8.0)	隆線・沈線 縄文 LR	小波状口縁。口縁部内面に沈線。把手 2 単位。口縁部直下と頸部に隆帯を巡らし、上下を隆線で縦位に連結。頸部隆帯上と胴部沈線区画文に縄文 LR 充填。
28	縄文土器 ﾐﾆﾁｭｱ土器 深鉢	①普通 ②橙～鈍い橙色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部～底部 2/3 口径 (6.7)	凹線・縄文 RL	口縁部下に沈線、胴部に縄文 RL を縦位に施文。
29	縄文土器 ﾐﾆﾁｭｱ土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・黒色粒 ④胴部上位～底部 3/4 底径 3.5		内外面粗い撫で。
30	土製品 円盤	①普通 ②鈍い褐色 ③白色粒・黒色粒・褐色粒 ④胴部破片		無文の鉢の胴部破片を転用。
31	土製品 円盤	①普通 ②鈍い黄褐色 ③白色粒・黒色粒 ④胴部破片		内外面研磨の浅鉢の破片を転用。
番号	種　類	法量 (cm)・石材		
32	凹基鏃	長さ 2.42　幅 1.57　厚さ 0.44　重さ 0.9 g　チャート		
33	凹基鏃	残存長 1.73　幅 1.88　厚さ 0.46　重さ 0.9 g　流紋岩質凝灰岩		
34	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	長さ 3.05　幅 4.04　厚さ 0.57　重さ 5.0 g　黒色頁岩		
35	打製石斧	残存長 10.77　幅 4.49　厚さ 1.95　重さ 132.4 g　細粒安山岩		
36	打製石斧	残存長 9.36　幅 4.67　厚さ 1.09　重さ 55.3 g　黒色頁岩		
37	打製石斧	残存長 7.64　幅 3.63　厚さ 1.55　重さ 51.7 g　ホルンフェルス		
38	打製石斧	長さ 11.88　幅 5.68　厚さ 1.89　重さ 144.1 g　変玄武岩		

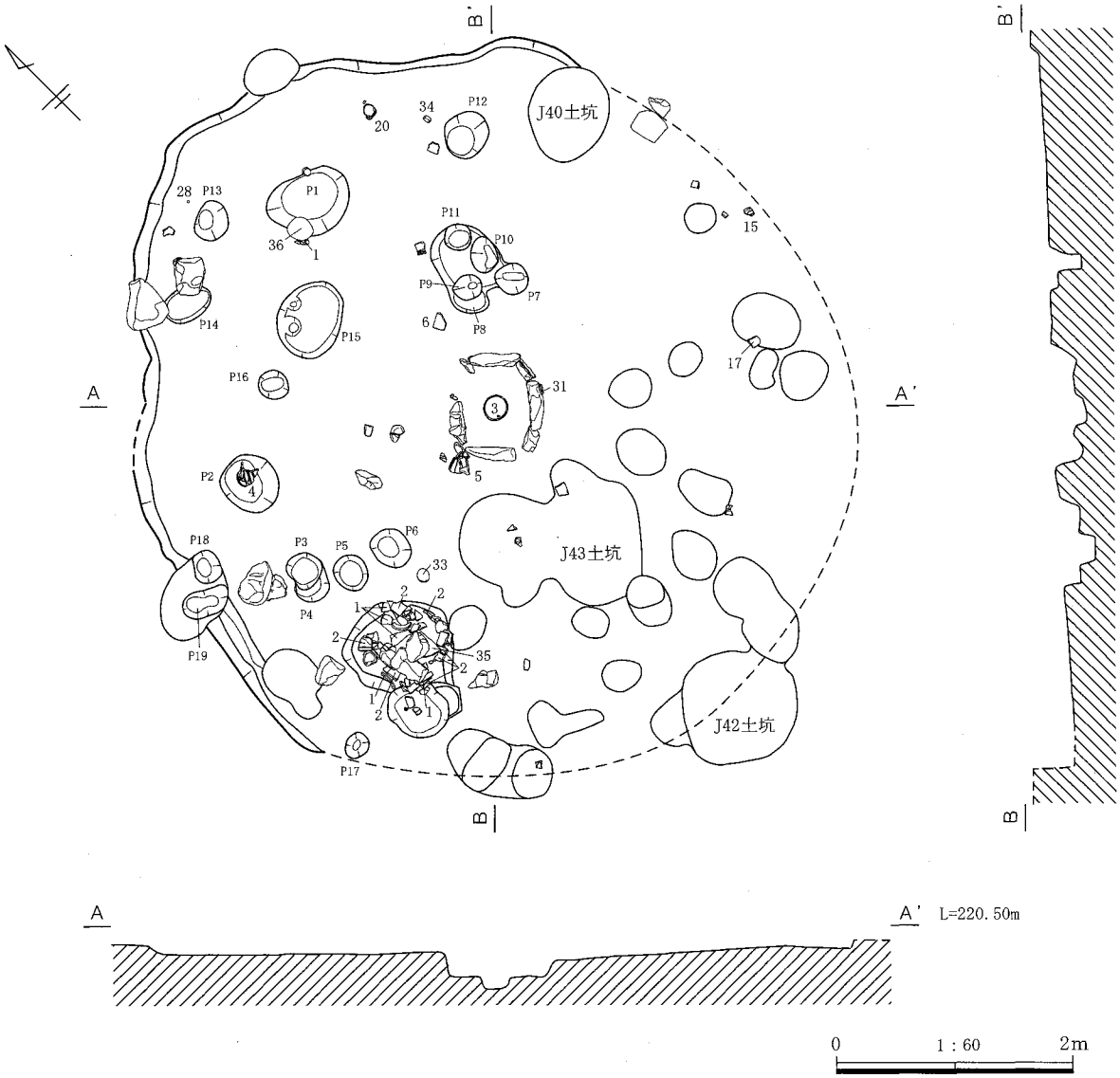
番号	種　類	法量(cm)・石材
39	打製石斧	長さ 6.52　幅 4.79　厚さ 1.18　重さ 42.3 g　黒色頁岩
40	打製石斧	残存長 5.8　幅 4.19　厚さ 1.26　重さ 42.5 g　黒色頁岩
41	打製石斧	残存長 5.9　幅 5.76　厚さ 1.82　重さ 64.2 g　細粒安山岩
42	磨製石斧	残存長 5.5　幅 3.3　厚さ 1.0　重さ 34.3 g　黒色頁岩
43	敲石	残存長 5.9　幅 2.2　厚さ 1.8　重さ 37.2 g　黒色頁岩
44	凹石	長さ 9.9　幅 8.0　厚さ 4.8　重さ 468.5 g　粗粒輝石安山岩
45	凹石	長さ 11.4　幅 6.7　厚さ 4.8　重さ 602.3 g　石英閃緑岩
46	凹石	長さ 11.9　幅 7.6　厚さ 4.9　重さ 535.6 g　粗粒輝石安山岩
47	凹石・磨石	残存長 8.7　幅 6.4　厚さ 3.9　重さ 334.2 g　粗粒輝石安山岩
48	石皿	残存長 18.1　幅 16.6　厚さ 10.7　重さ 2770 g　粗粒輝石安山岩

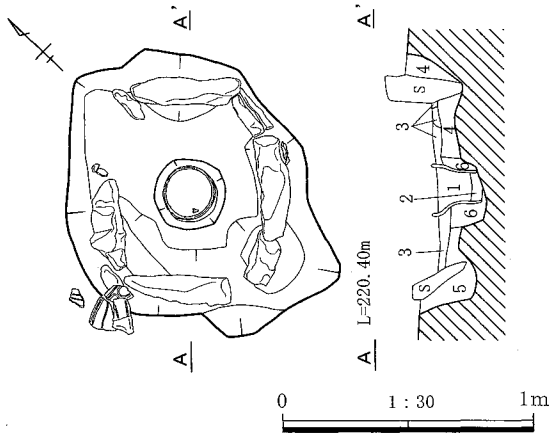
J6 号住居跡

G－2グリッドを中心に位置する。J40・42・43号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。平面形態はやや不整形であるが、円形を呈すと思われる。規模は南半部の壁は検出できないが、推定で直径6.0mを測る。残存深度は北側で8cm程残存するが、南側は確認できない。床面の状態は、北側はほぼ平坦で整っている。ピットは19基検出しているが、柱穴と考えられるものはＰ３・12・16の３基である。Ｐ３は直径30cm、深さは37cm、Ｐ12は径40×36cm、深さは30cm、Ｐ16は直径25cm、深さは25cmを測る。炉は住居中央に位置する。石の外側で計測すると、長軸90cm、短軸75cm、の長方形の石囲い炉である。板状の大形石を埋め込んで用いている。短軸には１石、長軸には大形１石とやや小形の石を組ませて使用している。長辺の北側の１石が欠けているが、抜かれたものか当初からないものかは不明である。中央に深鉢の上半部が埋め込まれている。掘り方は不整形であり、残存壁高は20cm程掘り込み、石を設置し10cm程埋めている。中央部は炉体土器を設置するため、さらに直径25cm、深さ10cm程掘り込んでいる。

遺物は土器・土製品・石器・石製品である。No.1とNo.2の深鉢は、住居中央の炉より南西部分の遺物集中地点から出土している。ともに隆線による横位の蕨手文で口縁部文様帯を作り、直下から胴部に２本の凹線を垂下し、無文帯と縄文帯を交互に配置する文様構成の深鉢である。縄文は縦方向に施文している。No.3は炉体土器で胴下部を欠く。胴部のややくびれる器形で、胴部文様にU字状・アーチ状の沈線を組み合わせH字状の構成としている。No.4は住居西部のＰ２内から出土している。胴部にアーチ状の区画を施す。No.11・No.12は所謂「胴部隆帯文土器」で、No.11は大型品である。No.14・No.15・No.16はＪ字文となり、加曽利Ｅ４式期に当るものである。No.17は胴部がくの字に屈曲する鉢と思われる。No.18は片口で、当遺跡での出土例は少ない。またNo.20は住居内北側で床面から浮いた状態で出土しているが、おそらく上部遺構からの混入品と考えられる。３単位の波状口縁と口縁端部の刻目、内面の数段の沈線、外面の横線と横線内を連結する縦沈線を特徴とする。黒色研磨土器である。縄文時代後期加曽利Ｂ１式期であろう。
石製品No.22は翡翠製で変形の滴状を呈し、平坦面に浅い椀状の凹みが認められる。垂飾未製品であろう。

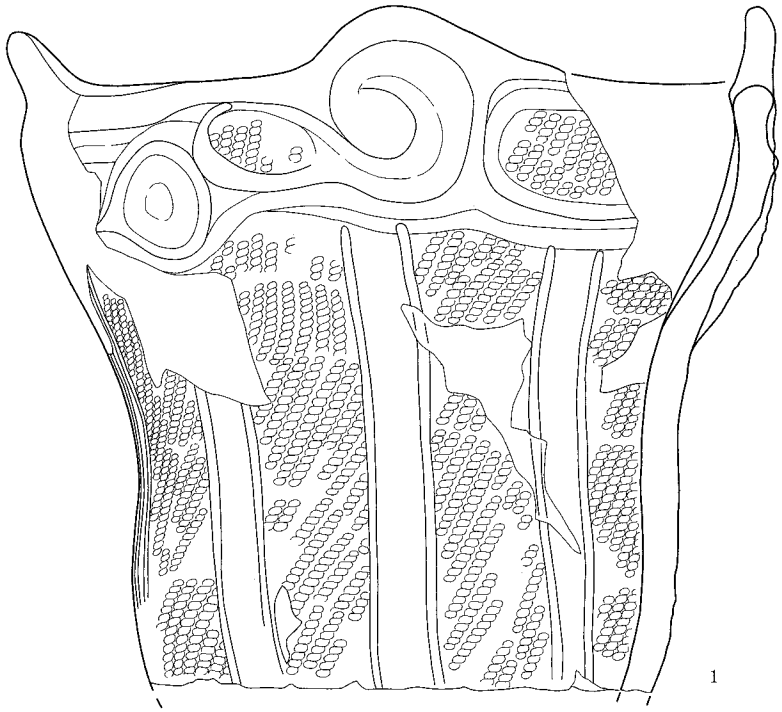
石器では石鏃、打製石斧、凹石、磨り石、石皿、多孔石が出土している。石鏃は４点出土しており、うち３点(No.23・No.24・No.25)を図示した。ともに凹基鏃である。打製石斧は短冊形・撥形・分銅形と各形が出土している。本住居からは22点が出土しているが破損品が多い。うち７点を図示した。横はぎの石片を使用している。石材としては、細粒安山岩・頁岩を使用している。凹石は円盤状のNo.33と方円形のNo.34とがある。この他円盤状の磨り石の破損品１点、軽石の凹石１点、安山岩製台石２点、加工痕のある棒状の片岩が１点、加工痕のある剥片及び剥片石器18点、その他の剥片・石片49点、チャート片８点が出土している。本住居は遺物の状況、とくに遺物集中区出土のNo.1・No.2及び炉体土器のNo.3の様相から縄文時代中期加曽利Ｅ３式期中～新段階に属すると考えられる。





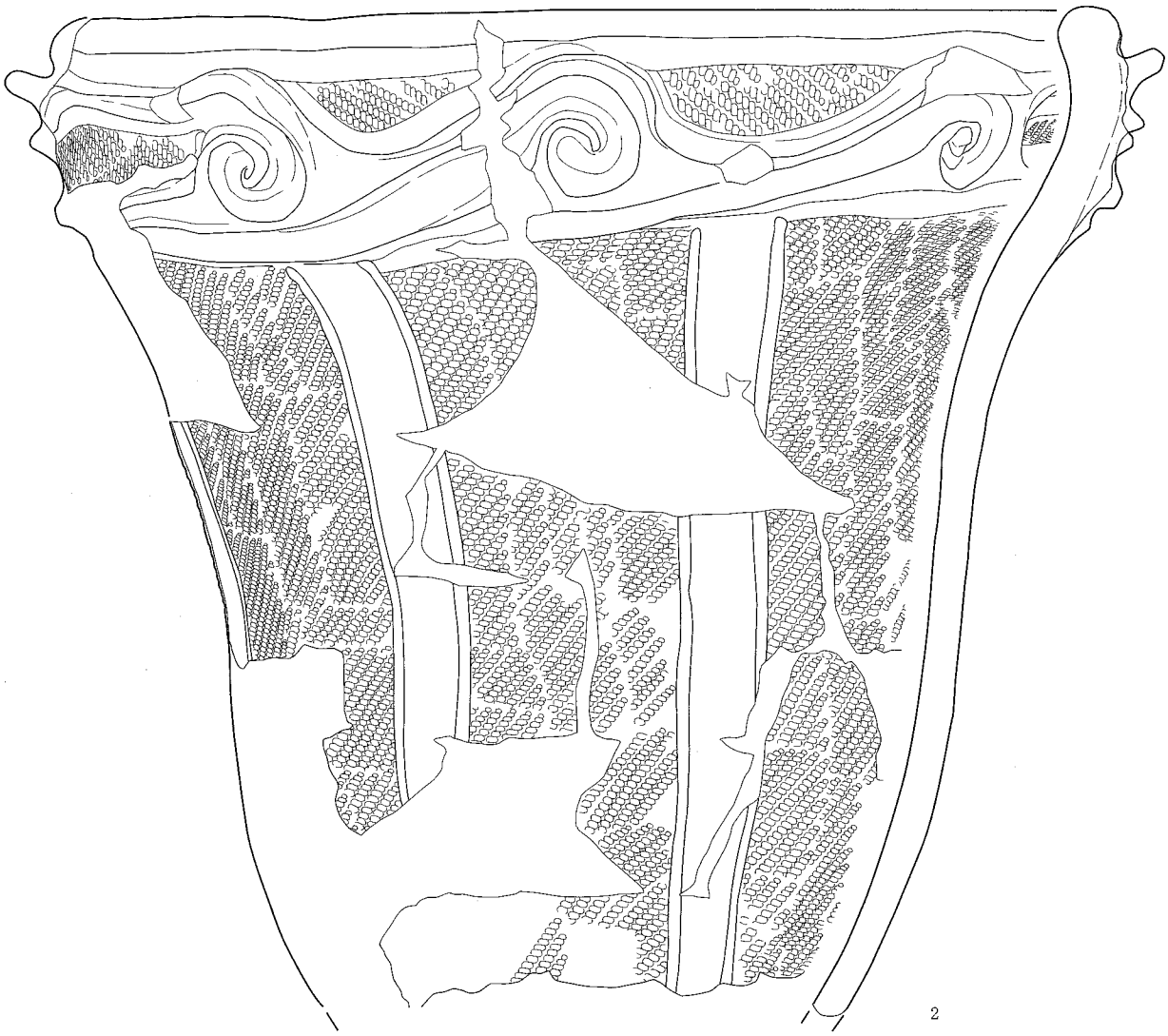
1　暗褐色土：灰白色軽石粒・焼土粒少量をやや不均質に混入、炭化粒微量をやや不均質に混入。
2　鈍い黄褐色土：ローム粒多量をやや不均質に混入。
3　暗褐色土：ロームブロック中量を不均質に混入、ローム粒少量をやや不均質に混入。
4　暗褐色土：ローム粒多量を不均質に混入。
5　暗褐色土：ローム粒多量を不均質に混入。
6　暗褐色土：ローム粒中量、ロームブロック多量を不均質に混入、焼土粒中量を不均質に混入。

第22図　J6号住居跡平・断面図



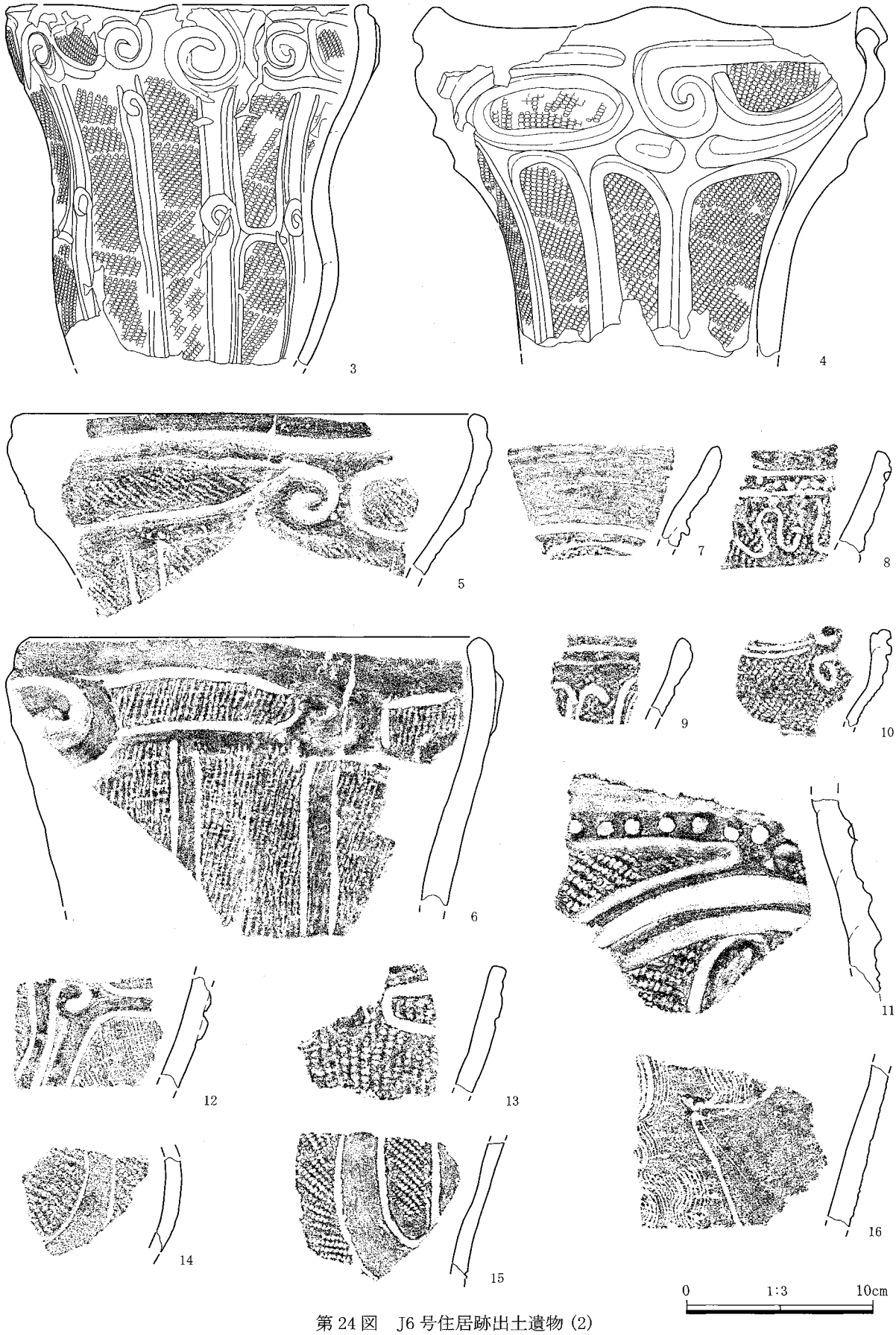
1

0　1:3　10cm

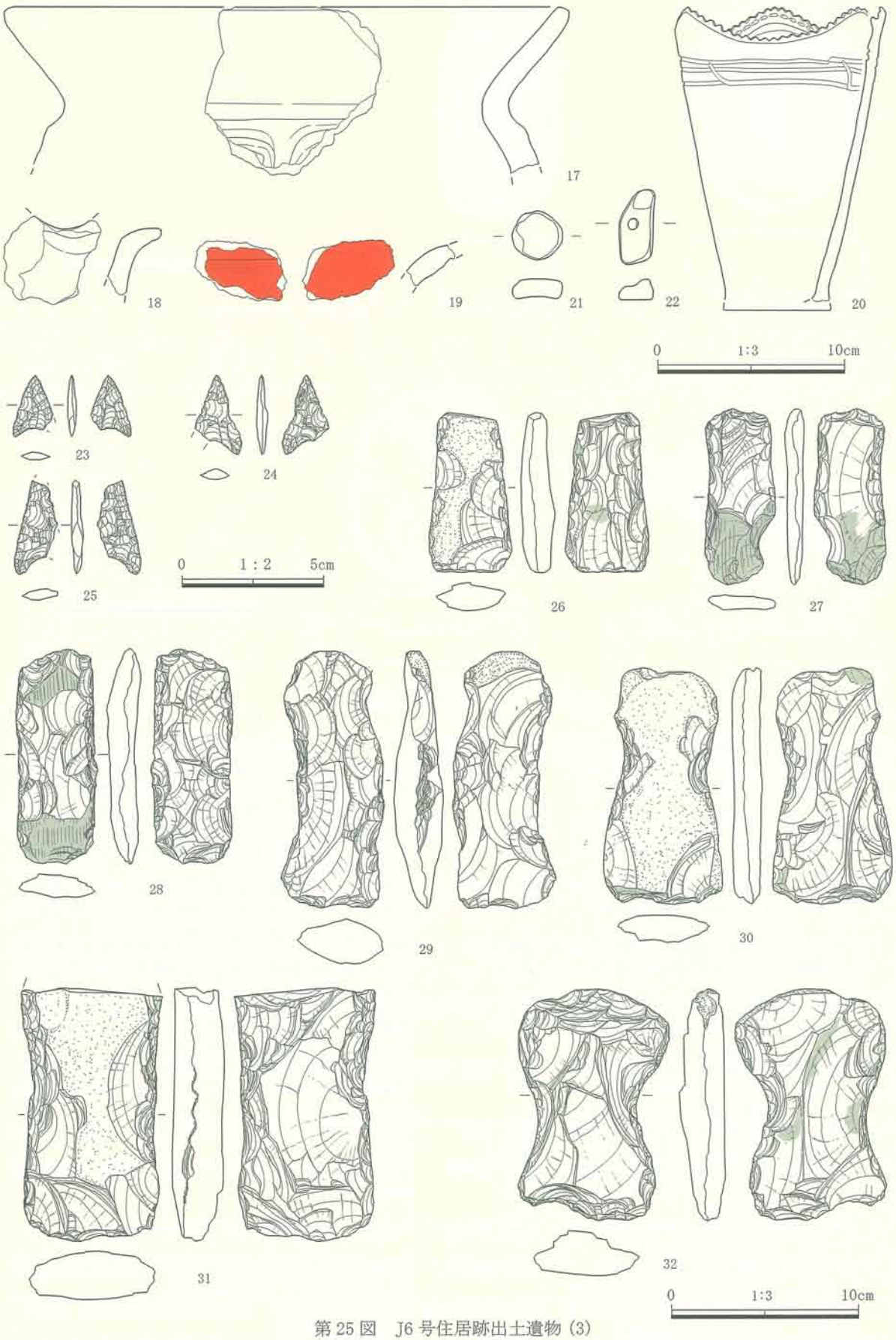


2

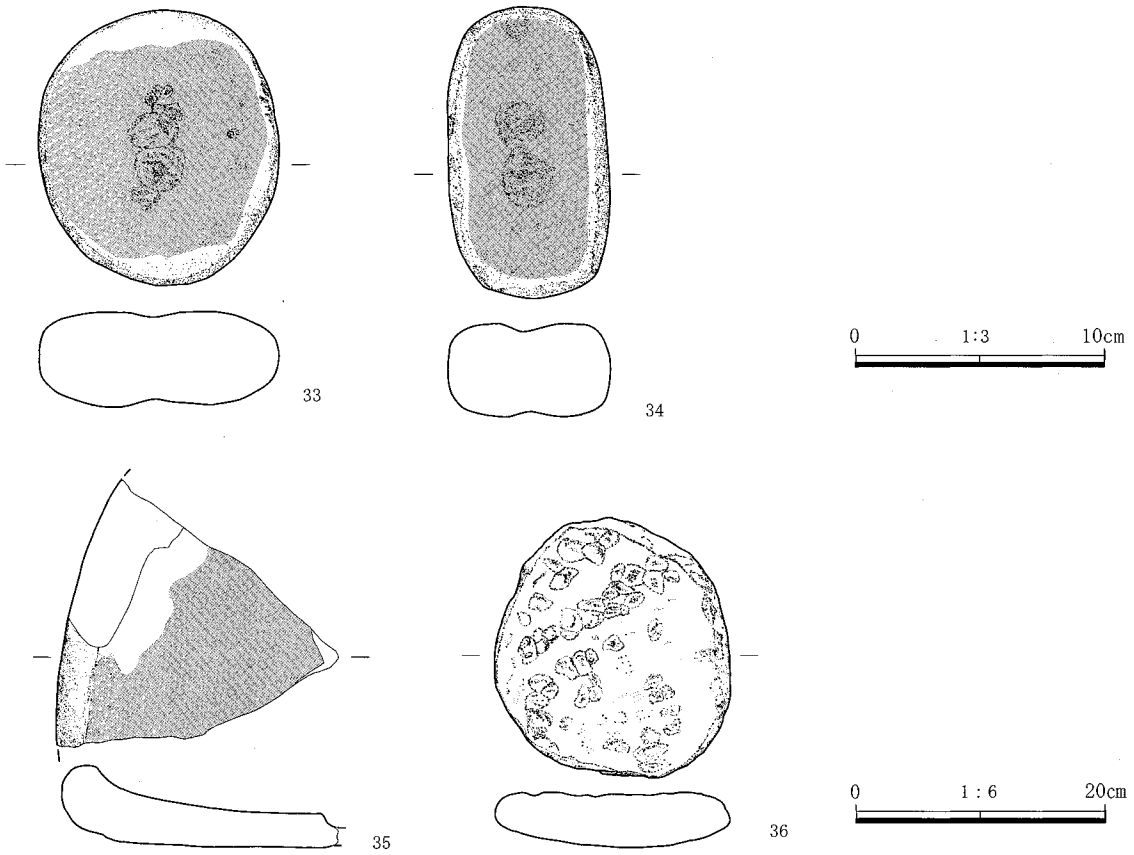
第 23 図　J6 号住居跡出土遺物 (1)



第 24 図　J6 号住居跡出土遺物 (2)



第 25 図　J6 号住居跡出土遺物 (3)



第 26 図　J6 号住居跡出土遺物 (4)

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙色 ③白色粒・角閃石 石英 ④口縁部～胴部下位 3/4 口径 26.2	隆線・凹線・沈線 縄文 RL	波状口縁、山形波頂部 4 単位。口縁部は蕨手文と楕円文を配し、区画内は縄文 RL を縦位に施文。胴部は沈線を垂下し、縄文 RL を縦位施文した縄文帯と無文帯を交互に配置。
2	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部～胴部下位 2/3 口径 41.0	隆線・凹線・沈線 縄文 RL	平縁口縁。口縁部は蕨手文 8 単位を配置。区画内に縄文 RL を横位に施文。胴部は沈線を垂下し、縄文 RL を縦位施文した縄文帯と無文帯を交互に配置。
3	縄文土器 深鉢	①普通 ②赤褐～鈍い褐色 ③白色粒 ④口縁部～胴部下位残存 口径 19.0	隆線・凹線・沈線 縄文 RL	平縁口縁。口縁部は渦巻文と楕円文を配し、楕円文区画内には縄文 RL を横位に施文。胴部は縄文 RL を縦位に施文後、沈線を垂下、U 字状文・逆U字状文・蕨手文を施文。
4	縄文土器 深鉢	①普通 ②黄褐色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部～胴部中位 1/3 口径 (22.5)	隆線・凹線 縄文 RL	4 単位の波状口縁。口縁部は渦巻文と楕円文を配し、楕円文区画内には縄文 RL を横位に施文。胴部は縄文 RL を縦位に施文後、凹線による逆U字状文で区画。
5	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・褐色粒 ④口縁部～胴部上位 1/6 口径 (25.0)	隆線・凹線・沈線 縄文 LR	平縁口縁。口縁部は渦巻文と楕円文を配し、楕円文区画内には縄文 LR を縦位に施文。胴部は沈線を垂下し、縄文 RL を縦位施文した、縄文帯と無文帯を交互に配置。
6	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙～灰黄褐色 ③白色粒・黒色粒・角閃石 ④口縁部～胴部中位 1/5 口径 24.0	隆線・凹線・沈線 縄文	平縁口縁。口縁部は渦巻文と楕円文を配し、楕円文区画内には縄文 (絡条体回転文) を施文。胴部は縄文 (絡条体回転文) を施文後、沈線を垂下。
7	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙～鈍い赤褐色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部破片	隆線・凹線 縄文 LR	平縁口縁。縄文 LR を施文後、隆線と沈線により区画。内外面研磨。
8	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙～鈍い黄褐色 ③白色粒・黒色粒・褐色粒 ④口縁部破片	沈線・縄文 RL 円形文	小波状口縁。縄文 RL を施文後、凹線による横線・波状文、横線間に円形文を配す。
9	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部破片	沈線・縄文 LR	平縁口縁。縄文 LR を施文後、平行沈線、曲線文。
10	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙～黄褐色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部破片	沈線・縄文 LR	小突起を持つ波状口縁。縄文 LR を施文後、沈線により波頂部に 8 字状文を施文。頸部に横線を施文。
11	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄色 ③白色粒・黒色粒・角閃石 ④胴部破片	隆線・凹線・円形文・縄文 LR	隆線上に円形文を配す。隆線と凹線による唐草様文。縄文 LR を縦位に施文後凹線。

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
12	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙色 ③白色粒・黒色粒・角閃石 ④胴部破片	隆線・凹線・条線	条線を施文後、隆線と凹線により区画、蕨手文を配す。
13	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄褐色 ③白色粒・黒色粒・石英 ④口縁部破片	凹線・縄文 RL	平縁口縁。縄文 RL を縦位に施文後、凹線による楕円文。貼付文。
14	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い橙色 ③白色粒・角閃石 ④胴部破片	沈線・縄文 LR	縄文 LR を縦位に施文後、沈線による曲線文。
15	縄文土器 深鉢	①普通 ②褐灰色 ③白色粒・黒色粒 ④胴部破片	沈線・縄文 LR	縄文 LR を縦位に施文後、沈線による曲線文。
16	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙～灰黄褐色 ③白色粒・石英・礫 ④胴部破片	沈線・条線	条線による曲線文を施文後、沈線による J 字文を配す。
17	縄文土器 鉢	①普通 ②赤褐色 ③白色粒・黒色粒・褐色粒 ④口縁部～胴部上位破片 口径 (29.0)	隆線・凹線	口縁部はくの字に外反し、胴部に隆線・凹線による区画、区画内に列点文。内外面研磨。
18	縄文土器 片口	①普通 ②橙色 ③白色粒・黒色粒 ④注口部破片		内外面研磨。
19	縄文土器 浅鉢	①普通 ②鈍い黄褐色 ③白色粒・黒色粒 ④胴部破片		内外面研磨、赤色塗彩。
20	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い橙色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部 1/3 と底部を欠損 口径 9.7	沈線・刻目 列点文	3 単位の波状口縁。口縁端部に刻目を施す。口縁内側に沈線と列点文。外面胴上位に 3 本横位沈線文。沈線間を縦位沈線で区切る。内外面研磨。
21	土製品 円盤	①普通 ②鈍い黄色 ③白色粒 ④胴部破片		無文の深鉢の胴部破片を転用。

番号	種　類	法量 (cm)・石材
22	垂飾未製品	長さ 4.0　幅 1.8　厚さ 1.1　重さ 14.6 g　翡翠
23	凹基鏃	長さ 2.17　幅 1.42　厚さ 0.32　重さ 0.7 g　玉髄
24	凹基鏃	長さ 2.8　幅 1.66　厚さ 0.43　重さ 1.1 g　チャート
25	凹基鏃	残存長 3.31　幅 1.54　厚さ 0.41　重さ 1.7 g　珪質頁岩
26	打製石斧	長さ 8.5　幅 4.38　厚さ 1.81　重さ 75.6 g　細粒安山岩
27	打製石斧	長さ 9.32　幅 3.76　厚さ 1.02　重さ 42.8 g　黒色頁岩
28	打製石斧	長さ 11.37　幅 4.3　厚さ 1.82　重さ 96.6 g　黒色頁岩
29	打製石斧	長さ 13.61　幅 5.46　厚さ 2.63　重さ 182.0 g　黒色頁岩
30	打製石斧	長さ 12.5　幅 6.28　厚さ 1.63　重さ 161.1 g　細粒安山岩
31	打製石斧	残存長 13.43　幅 7.47　厚さ 2.8　重さ 414.2 g　凝灰質砂岩
32	打製石斧	長さ 12.3　幅 7.97　厚さ 2.43　重さ 236.5 g　細粒安山岩
33	敲石・磨石	長さ 11.1　幅 9.6　厚さ 3.8　重さ 578 g　粗粒輝石安山岩
34	敲石・磨石	長さ 11.7　幅 6.5　厚さ 3.7　重さ 500.3 g　粗粒輝石安山岩
35	石皿	残存長 20.8　残存幅 22.0　厚さ 6.6　重さ 1930 g　砂岩
36	多孔石	長さ 20.9　幅 18.8　厚さ 4.2　重さ 3020 g　石英斑岩

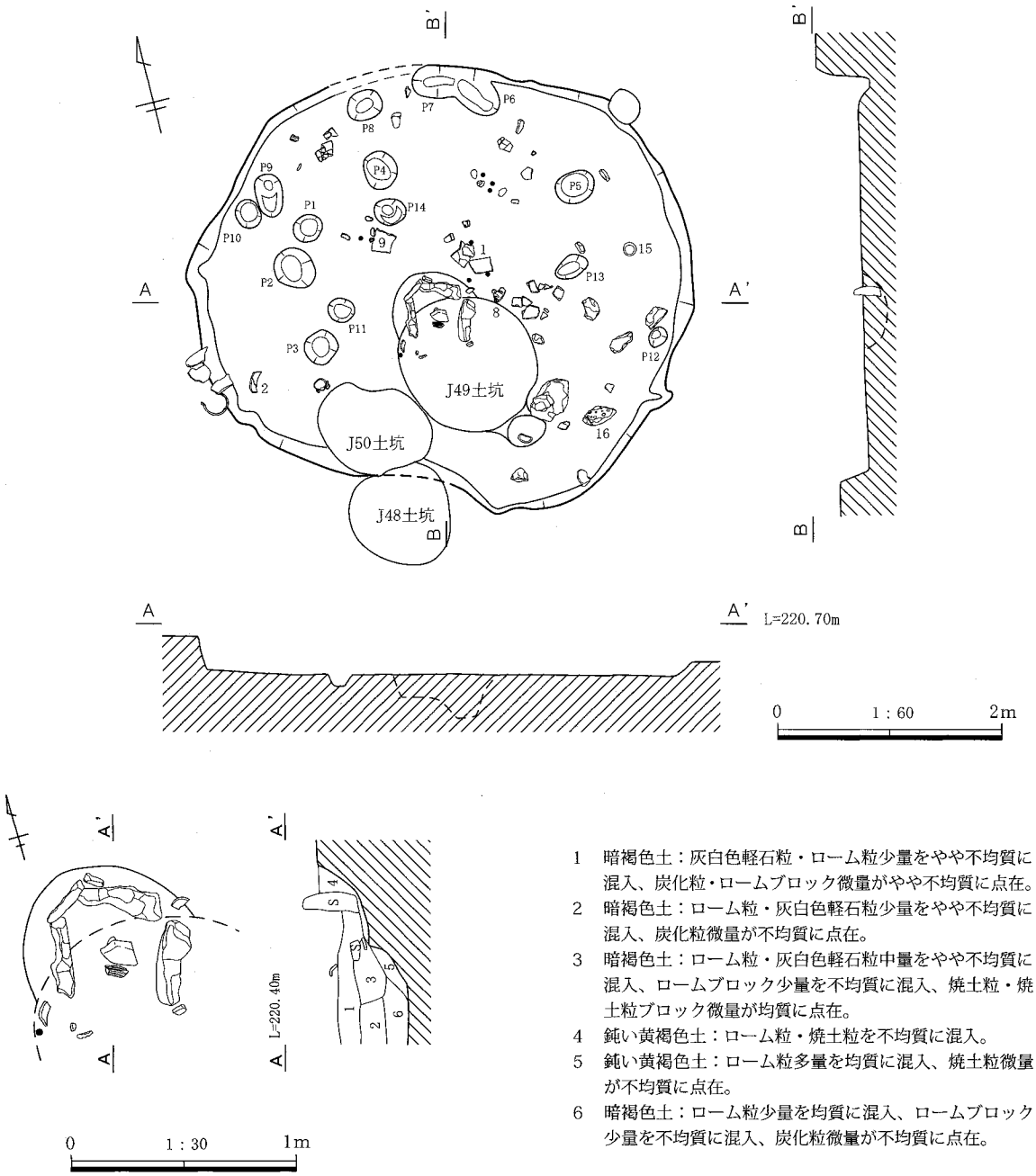
J7 号住居跡

F－2 グリッドを中心に位置する。13 号炉、J48・49・50 号土坑が重複する。J49 号土坑の上に住居の炉石が設置されていること、住居覆土の上面に 13 号炉の石・炉体土器が据えられている関係から、J49 号土坑よりＪ７号住、Ｊ７号住より 13 号炉が新しいことを確認できるが、J48・50 号土坑との新旧関係は不明である。平面形態はやや不整形な円形を呈し、規模は径 4.35 × 4.1m、面積 13.26㎡を測る。残存深度は、南への傾斜地のためか壁は北側の残存状態が良く、北側で 14㎝、南側で 30㎝を測る。床面の状態はほぼ平坦で整っている。ピットは 14 基検出しているが、柱穴と考えられるものはＰ２・３・４・５の４基である。Ｐ２は径 38 × 34㎝、深さは 34㎝、Ｐ３は直径 30㎝、深さは 41㎝、Ｐ４は径 34 × 30㎝、深さは 40㎝、Ｐ５は径 35 × 27㎝、深さは 45㎝を測る。炉は住居中央に位置し、方形の石囲い炉である。三方向に板状の大形石を埋め込み、北西隅には小形の石を配している。南側には石を据えた痕跡は見られない。規模は石の外側で東西 60㎝、南北 50㎝を測る。掘り方は隅丸の方形で、東西軸は 68㎝を測る。南側は J49 号土坑と重複するため、炉の方が上に造られているものの掘り込みは不明瞭である。炉体土器は検出していない。

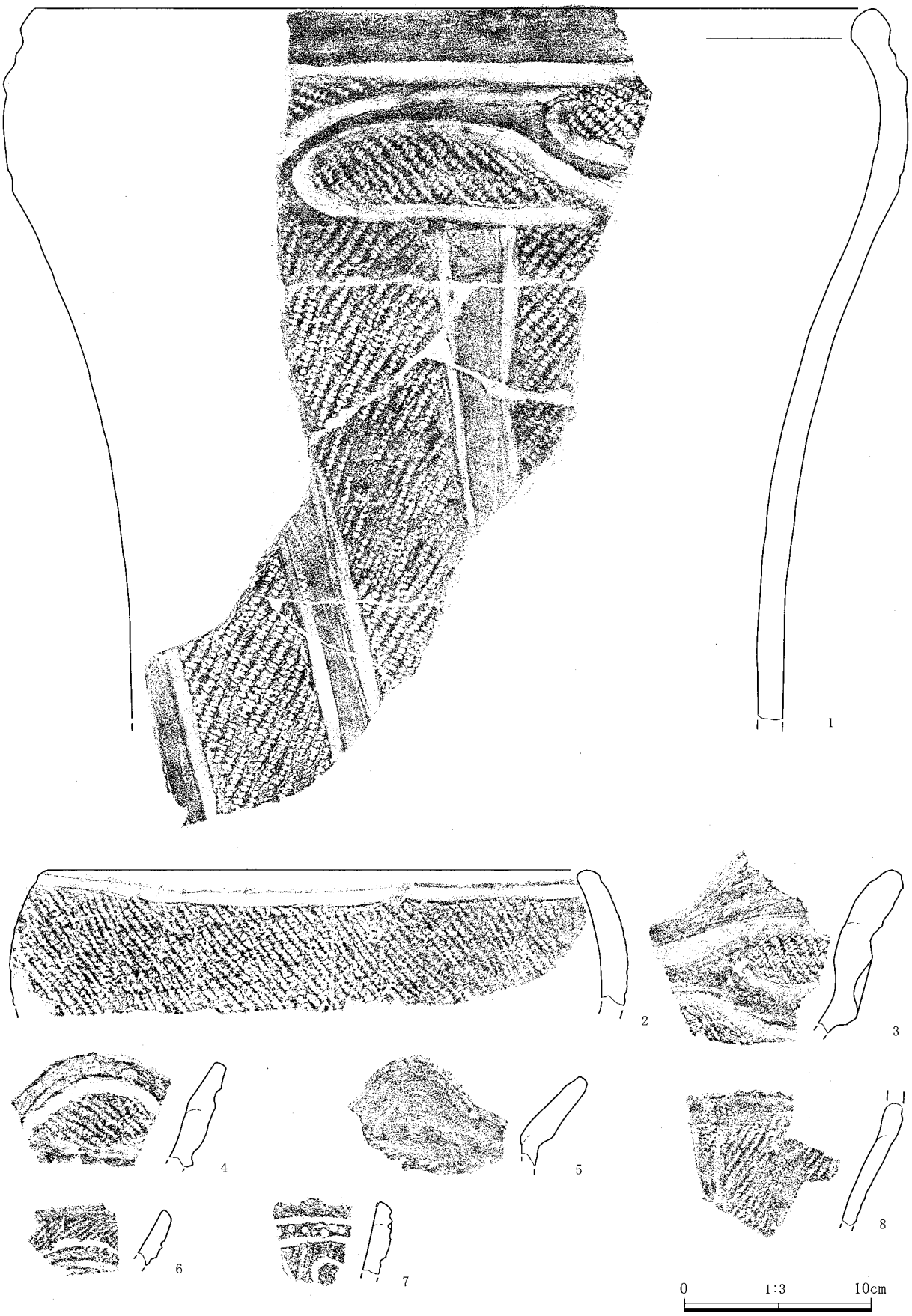
出土遺物は土器と石器である。土器は住居内出土であるが、床面より浮いた状態で出土している。No.1 は住居中央部の石組炉北側より出土している。口縁部文様帯の直下から垂線を下ろし、無文帯と縄文帯を交

互に配置している。No.3・No.4・No.5は山形突起である。No.2は口縁部に強い張りを持つ器形で、縄文施文後口縁直下に凹線を巡らす。

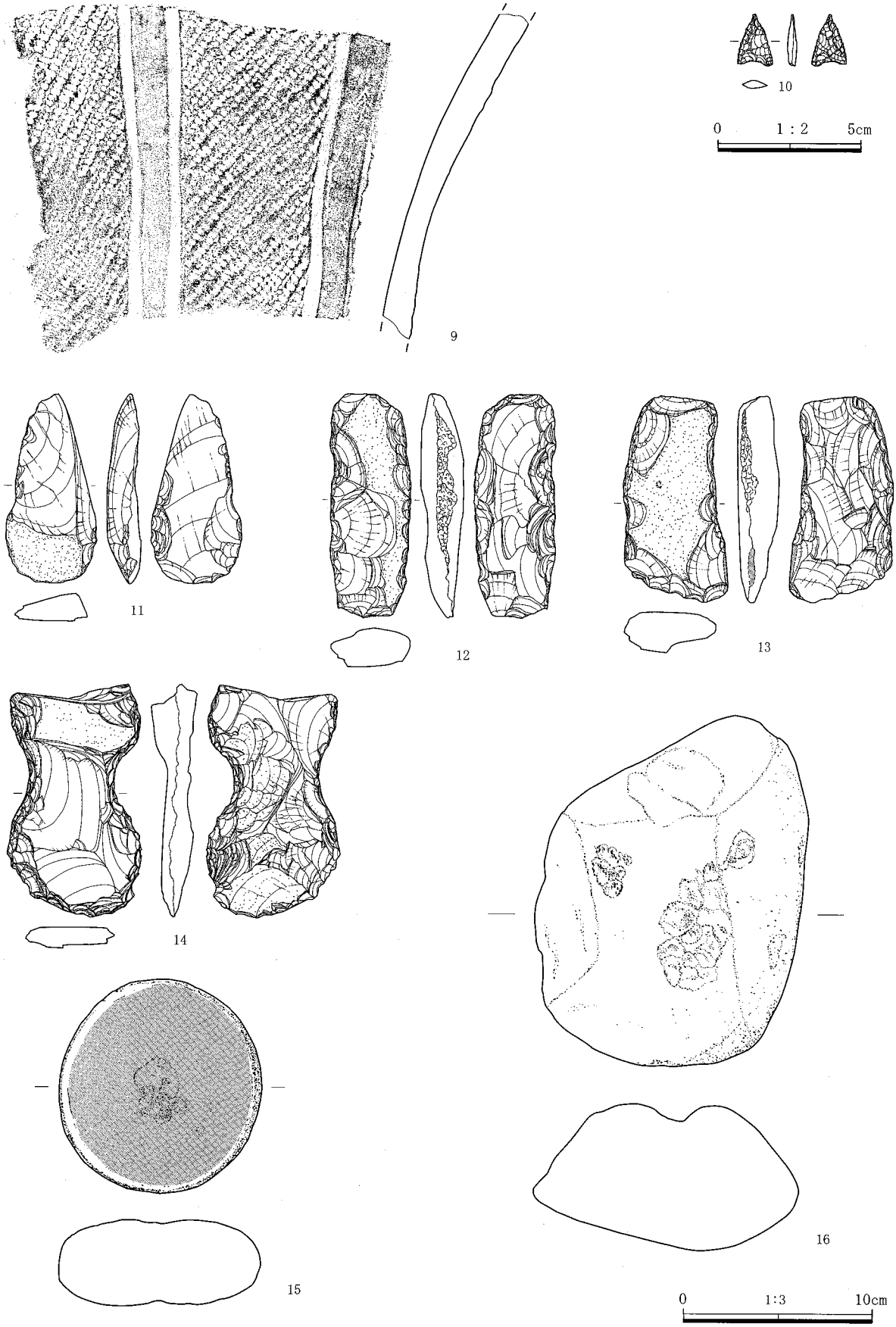
石器は石鏃・打製石斧・凹石・磨石・多孔石が出土している。石鏃3点はすべて凹基鏃である。石材はチャート及び砂岩である。その内1点を図示した。打製石斧は6点出土し石材は頁岩、安山岩である。撥形・短冊形・分銅形が出土している。分銅形は図示した1点のみであった。凹石は磨石としても使用されており、円盤形である。多孔石は不安定な形状の自然礫の片面を使用している。この他破損品ではあるが大型棒状の磨石状石器が1点出土している。また円盤状で扁平な台石1点、その他軽石の丸石1点、調整痕のある剥片および石器片23点、その他の剥片34点チャート片は2点出土している。以上のことから本住居は縄文時代中期加曽利E3式期中段階に属すると考えられよう。



第27図　J7号住居跡平・断面図



第 28 図　J7 号住居跡出土遺物 (1)

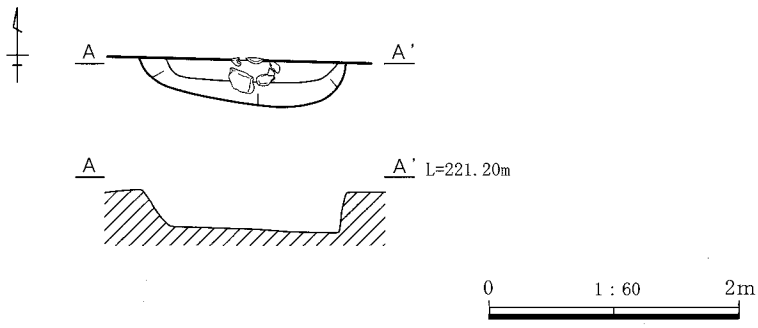


第 29 図　J7 号住居跡出土遺物 (2)

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙色 ③白色粒・黒色粒 褐色粒 ④口縁部～胴部中位 1/5 口径 (43.6)	隆線・凹線 縄文 RL	平縁口縁。口縁部は楕円文を配し、楕円文区画内には縄文 RL を横位に施文。胴部は沈線を垂下し、縄文 RL を縦位施文の縄文帯と無文帯を交互に配置。
2	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙～鈍い黄橙色 ③白色粒・褐色粒・角閃石 ④口縁部～胴部上位 1/3 口径 (28.4)	凹線・縄文 RL	平縁口縁。縄文 RL を横位に施文後、口縁部直下に凹線。
3	縄文土器 深鉢	①普通 ②灰黄褐色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部破片 口径 19.0	隆線・凹線 縄文 LR	波状口縁。隆線・凹線を施文後、縄文 LR を縦位に施文。
4	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い褐色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片	隆線・凹線 縄文 LR	波状口縁。縄文 LR を縦位に施文後凹線。
5	縄文土器 深鉢	①普通 ②灰褐色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片	隆線・凹線	山形突起状の波状口縁。隆線・凹線。
6	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙～褐色 ③白色粒・褐色粒 ④口縁部破片	沈線・縄文 RL	小波状口縁。沈線による曲線文を施文後、縄文 RL を縦位に施文。
7	縄文土器 深鉢	①普通 ②灰黄褐色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片	沈線・縄文 LR	平縁口縁。口縁部直下の横線間に円形文、縄文 LR を施文後、沈線による曲線文。
8	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い橙色 ③白色粒・黒色粒 ④胴部破片	沈線・縄文 RL	縄文 RL を縦位に施文後、沈線を垂下。
9	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙～鈍い黄橙色 ③白色粒・角閃石 ④胴部破片	沈線・縄文 RL	縄文 RL を縦位に施文後、沈線を垂下。
番号	種類	法量 (cm)・石材		
10	凹基鏃	長さ 1.81　幅 1.23　厚さ 0.33　重さ 0.6 g　チャート		
11	打製石斧	長さ 9.93　幅 4.73　厚さ 1.79　重さ 78.8 g　細粒安山岩		
12	打製石斧	長さ 11.76　幅 4.25　厚さ 2.26　重さ 135.3 g　黒色頁岩		
13	打製石斧	長さ 10.85　幅 5.49　厚さ 2.18　重さ 156.4 g　細粒安山岩		
14	打製石斧	長さ 12.2　幅 6.97　厚さ 2.39　重さ 170.3 g　黒色頁岩		
15	敲石・磨石	長さ 11.4　幅 10.6　厚さ 4.5　重さ 780.9 g　粗粒輝石安山岩		
16	多孔石	長さ 18.6　幅 14.0　厚さ 7.6　重さ 2320 g　粗粒輝石安山岩		

J8 号住居跡

Ｉ－４グリッドに位置する。重複する遺構はない。平面形態は大半が調査区域外であり、南壁の一部を検出したのみであり形態は不明であるが、おそらく円形と思われる。規模は計測不可能である。残存深度は28cmを測る。床面の状態は不明である。遺物は出土していない。



第 30 図　J8 号住居跡平・断面図

第2節　炉　跡

炉の遺物としては、炉体に使用していた土器と、炉内及び周辺に土器片がみられ、石組みとして石皿・多孔石等の大型石器が転用されている。また、炉と周辺から石器類も確認された。打製石斧・凹石・磨石がみられる。なお、6号炉跡は欠番である。

1号炉跡

L－2グリッドに位置する。重複する遺構としては、ピットが1号炉跡の下から検出されている。深鉢の下半部を埋めた炉体土器の周囲を半円形状に4個の石で囲っているが、全周していたのかは不明である。規模は石の外側で直径60cmを測る。

№1は炉体土器で、口縁部から胴上位を欠く。胴中位でわずかにくびれる器形で沈線区画によって無文帯と縄文帯を交互に配置している。№2は石組の一部として転用していた多孔石で、あるいは石皿としても使用していたと思われ、平坦面に摩耗痕が認められている。1号炉は土器の特徴から縄文時代中期E3式期中段階と考えられよう。

2号炉跡

L－2グリッドに位置する。重複遺構はないが、南西に1号炉跡、北側に2号集石が近接する。石囲い炉と考えられる。1石のみ設置された状態で検出されたが、他の石は残存していない。形態は不明であるが、縦長の石を使用していることから、他の石囲い炉と同様に方形になる可能性が高い。炉体土器は深鉢の上部を使用している。規模は石の外側から炉体土器の中心まで65cmを測る。掘り方は円形を呈し、径165×120cm、残存壁高は40cmを測る。

№1は炉体土器で胴下半を欠く。緩やかな波状口縁の大型品である。頸部に横位の沈線を巡らせて、口縁部文様帯と胴部文様帯を区画している。大きく内湾する口縁部には連弧文を配置している。加曽利E3式期にみられる連弧文系土器である。2号炉はこの土器の特徴から縄文時代中期加曽利E3式期中段階に属するであろう。石器の出土は少なく、調整痕のある剥片5点のみであった。

3号炉跡

L－2グリッドに位置する。重複遺構はないが、南側に2号集石が近接する。炉体土器のみの検出であり、周囲に石の痕跡はなく形態は不明である。炉体土器の周辺は被熱した状況が確認できた。

№1は炉体土器で、胴部上位の大半を欠く。縄文に3本組の垂線を配した文様構成である。加曽利E3式期のうち、およそ中から新段階に属するであろう。

4号炉跡

K－3グリッドに位置する。重複遺構はないが、東側にJ11号土坑が接している。方形の石囲い炉である。北・東側は大形の石をそれぞれ平坦面が炉の内側に向くように設置している。西・南側はやや小形の3石で構成されるため、平面形態は方形であるが、西側が僅かにくの字状に張り出している。石との隙間には小礫を補填している。西側の石は被熱によりひび割れが顕著である。掘り方は円形で径110×96cm、残存壁高は27cmである。さらに炉の中央やや西寄りを直径29cm、残存壁高は16cmに掘り込み炉体土器を設置している。

№1は炉体土器で、胴下位を欠く。口縁部は丸く張りを持つが、胴部は緩やかにすぼまる器形で、口縁部文様帯の直下から垂線による区画文を配置している。このことから4号炉は加曽利E3式期中段階に属すると考えられる。また炉周辺のほぼ同一レベルからは石器も出土している。打製石斧13点が出土し、そのうちの5点を図示した。磨石1点も出土している。また被熱した石棒状の石器も出土しているが、大きく破損しているため図化しなかった。石材は安山岩であった。調整痕のある剥片及び石器片は28点、その他

の剥片、石片は18点、チャート片1点であった。

5号炉跡

K－4グリッドに位置する。J2号住居跡の上に造られる。円形の石囲い炉である。設置された石が残っているのは半分程であるが、長さ15～30cm程の石を掘り方に沿って円形に置いている。掘り方は円形で、規模は径120×100cm、残存壁高は20cmを測る。この内側にはさらに直径66cm、残存壁高は25cmの掘り込みが検出され、中からは石が多量に出土している。この内側のピットは炉体土器を設置するための穴の可能性が考えられる。

炉体土器として明確な土器は見られなかったが、図示したNo.1・No.2・No.3はともに炉内から出土している。No.1は口縁部の張りも胴部のくびれも持たない器形である。胴部には縄文を施文して垂線とU字状文、アーチ状文を組み合わせて上下に文様帯を分割する。No.2は胴部に張りを持つが、文様構成はNo.1と良く似る。こうした土器の様相から、5号炉は縄文時代中期加曽利E3式期新段階に対比できよう。石器では円盤状の凹石・磨石(No.4)が石組みの北西脇から出土している。その他調整痕のある剥片3点、石片3点、チャート片1点が出土している。

7号炉跡

J－4グリッドに位置する。重複遺構はないが、周辺にJ3号住居跡、3・4号集石、8号炉跡が近接して造られる。炉体土器のみの検出であり、周囲に石の痕跡等はなく詳細は不明である。掘り方は不整形で長さ56cm、幅67cm、残存壁高は18cmを測る。周辺にも深鉢の破片が出土しており、7号炉跡出土として実測している。

炉体土器はNo.3で、他の土器は炉の周辺からほぼ同一レベルで出土している。No.3は口縁部と胴下部を欠く。被熱痕が明らかである。縄文施文後3本組の垂線と蛇行文を配置している。No.5・No.6も同様の手法である。No.1は炉体土器の西側で出土している。頸部がくびれて胴中位に大きく張りをもつ器形で、隆線による区画文を構成する。「胴部隆帯文」である。No.2は外傾する口縁部片で、口縁部直下に沈線を巡らし連弧文を重ねる。連弧文系の変化か曽利系の影響が考えられよう。またNo.4は条線を施文後、するどい沈線による蛇行文を配置している。これらの土器の様相から7号炉は縄文時代中期加曽利E3式期中から新段階に属すると考えられよう。石器は調整痕のある剥片2点、その他石片2点のみであったため図示しなかった。

8号炉跡

I－4グリッドに位置する。重複遺構はないが、周辺にJ8号住居跡、3号集石、7号炉跡が近接して造られる。方形の石囲い炉である。北側が調査区域外となるが石は確認している。炉体土器にほぼ接する状態で板状の石を設置しているため、規模は小さく石の外側で南北42cm、東西38cmである。掘り方は円形で直径55cm、残存壁高は20cmを測る。

No.1は炉体土器である。胴下位を欠く。被熱痕が観察できる。緩やかな山形の波頂部をもち口縁部は丸く張り胴部はくびれながらすぼまる。胴部の区画文は口縁部文様帯直下から垂下している。No.2は石囲い炉の南東部に接近して出土している。大型深鉢で複節の縄文を施している。当遺跡では極少量の施文原体である。この深鉢も口縁部文様帯直下から胴部文様帯を構成している。これらの土器の様相から8号炉は縄文時代中期加曽利E3式期中段階と考えられよう。

9号炉跡

I－2グリッドに位置する。重複遺構はないが、北西にJ5号住居跡が近接する。石囲い炉の可能性もあるが残存状態は悪く、石がほとんど残っていない。北西の一部が設置されていた状態のものと考えられるが、石の大きさや状況から5号炉跡のように円形に配置されていたものと思われる。掘り方は不整形な円径で径88×80cm、残存壁高は10cmであり、さらに炉体土器設置のため中央部を径33×24cm、残存壁高

は 10cmを測る。

No.1 は炉体土器である。口縁部と胴下位を欠き、全体に被熱痕が観察できる。胴部中位で外傾して口縁部に至る器形で、条線を曲線的に縦方向に施文し、沈線で垂線と蛇行文を配置する。以上の土器の様相から縄文時代中期加曽利Ｅ３式期の中から新段階と考えられよう。また石器は、調整痕のある石器片が１点出土したのみである。

10 号炉跡

Ｉ－３グリッドに位置する。重複遺構はないが、Ｊ 28・29 号土坑が近接する。石囲い炉と思われるが、炉体土器と西側の石のみの検出であり詳細は不明である。石は土器にほぼ接して出土しており、８号炉跡と同様の形態になるものと思われる。掘り方は確認できない。

No.1 は炉体土器である。胴下位を欠く。被熱痕が観察できる。口縁部は緩やかな波状を呈する。口縁部に張りを持ち胴部は緩やかにすぼまる器形で、口縁部文様帯の直下から胴部文様帯を構成する。無文帯と縄文帯の幅を比較的均等に作る。以上の様相から 10 号炉は縄文時代中期加曽利Ｅ３式期中段階に属すると考えられよう。

11 号炉跡

Ｈ－４グリッドに位置する。重複遺構はないが、南にＪ５号住居跡が近接する。炉体土器と石が１個出土したのみで、石囲い炉かは不明である。掘り方は炉体土器を設置する部分を確認しており、不整形な楕円形で径 36 × 24cm、残存壁高は 10cmを測る。

No.1 は炉体土器である。口縁部と胴下位を欠き、被熱痕が観察できる。胴中位がくびれるような器形で、縄文施文後垂下する無文帯の幅を狭く作る。以上の土器の様相から 11 号炉は縄文時代中期加曽利Ｅ３式期中段階に属すると考えられよう。その他、頁岩の剥片が１点出土したのみである。

12 号炉跡

Ｈ－３グリッドに位置する。Ｊ５号住居跡の上に造られる。方形の石囲い炉である。北・東側の石は埋め込まれ残存状態は良好であるが、西側は小形の角礫を置いただけで構成されており、抜けている部分が見られる。南側は当初から開いていたものか、判断は付かないが石は出土していない。規模は石の外側で東西 80cm、南北 75cmである。掘り方は、炉体土器の周辺から北・東側の石を設置した部分まで、不整形な掘り込みが確認できるが、南西部分は不明である。

No.1 は炉体土器である。胴上半部を欠き、全体に被熱痕を観察できる。胴部にやや張りを持つ器形と思われる。縄文施文後に垂線と蛇行文を配置する。土器の様相からは、縄文時代中期加曽利Ｅ３式期中段階に属すると考えられよう。石器では石皿 (No.2) が出土している。石組として転用されており破損している。表裏とも多孔石としても使用されており、表面には摩耗痕が認められる。その他調整痕のある頁岩、石片が１点出土している。

13 号炉跡

Ｆ－２グリッドに位置する。Ｊ７号住居跡の上に造られる。炉体土器の周辺に石が出土しており、石囲い炉と考えられる。石は埋め込まれていないため当初の状態か不明であるが、西側の２石は位置的に設置された状態と思われる。掘り方は炉体土器の部分のみ検出しており、平面形は円形を呈し、径 35 × 32cm、残存壁高は 13cmを測る。

No.1 は炉体土器である。口縁部と胴部下半を欠き、全体に被熱痕が認められる。縄文施文後、頸部に横位の沈線を巡らし文様帯を分離している。胴部は３本組の垂線で区画している。区画間には滴様の区画に渦巻き文を配置する。この文様はおそらく曽利系の剣先文の影響を受けていると思われる。これらのことから 13 号炉は縄文時代中期加曽利Ｅ３式期新段階と考えられよう。

14 号炉跡

Ｆ－４グリッドに位置する。重複する遺構はない。石囲い炉である。東・西側の石が一部残存しており、

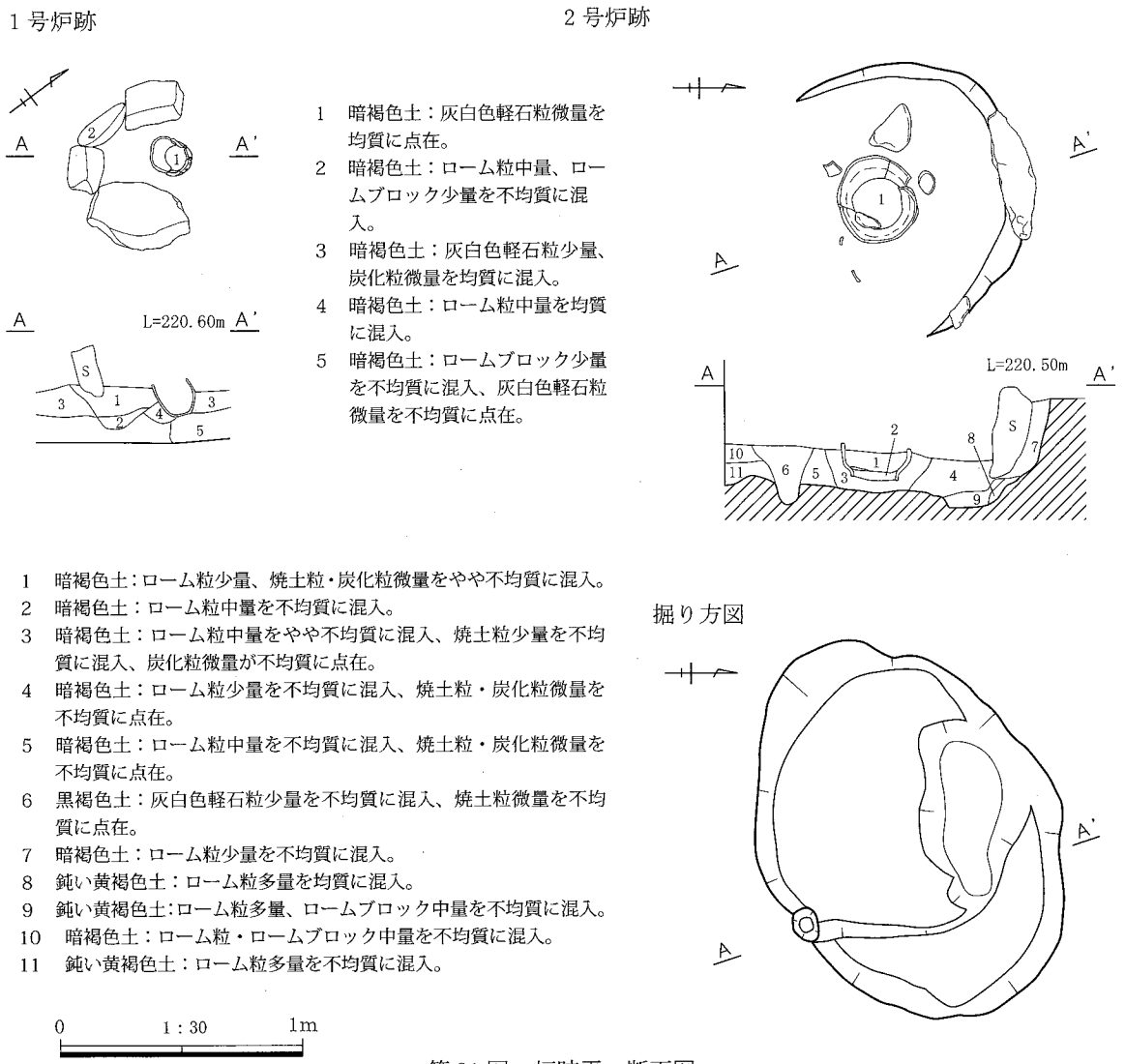
平面形態は方形と考えられる。炉体土器は検出していない。掘り方は円形であるが、南東部は炉石の設置のためと思われる掘り込みが深くＬ字状を呈す。規模は径75×70cm、残存壁高は6cm、深堀部分は16cmを測る。

No.１は炉内から出土している。被熱痕が認められることから炉体土器と考えてよいだろう。胴部上半部を欠く。胴部中位に張りを持つ器形と思われる。縄文施文後に沈線を垂下するが、胴下位のためか明確に無文帯を構成しない。これらのことから14号炉は縄文時代中期加曽利Ｅ３式期中から新段階に属すると考えられよう。

15号炉跡

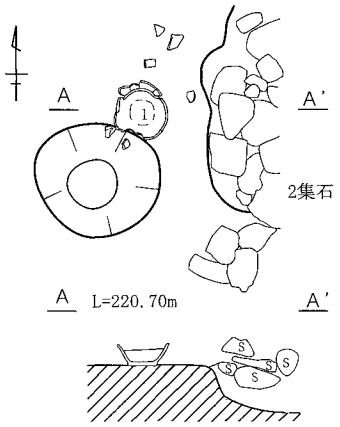
Ｅ－２グリッドに位置する。重複する遺構はない。石囲い炉と思われるが、北東部に石が１個残存しているのみである。掘り方は円形であるが、掘り込みは深く、炉体土器の下の覆土は自然堆積と見られ、埋没した土坑の窪みを利用し構築した可能性も考えられる。径86×75cm、残存壁高は48cmを測る。底部から23cmの位置に炉体土器を据えている。

No.１は炉体土器である。胴下位を欠く。口縁部が緩やかに外傾する器形で、口縁部下に横位の沈線を巡らす。胴部は垂線と蕨手文、Ｕ字状文、蛇行文で構成している。器形と文様構成、沈線による施文から、15号炉は縄文時代中期加曽利Ｅ３式期の中から新段階に属すると考えられよう。石器では打製石器未製品１点の他、チャート片１点が出土している。

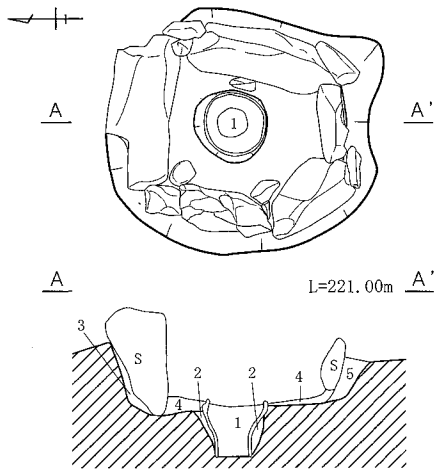


第31図　炉跡平・断面図

3 号炉跡

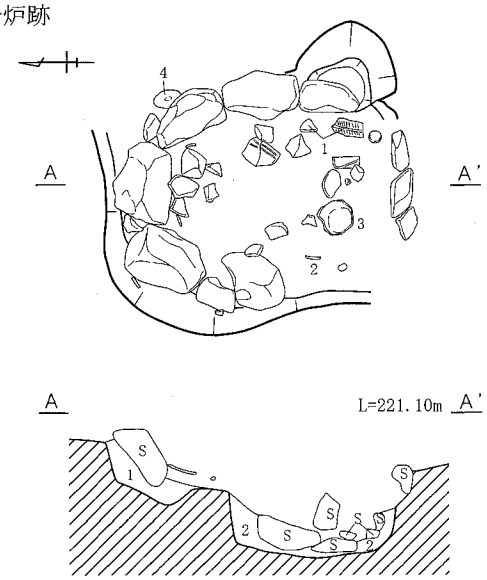


4 号炉跡

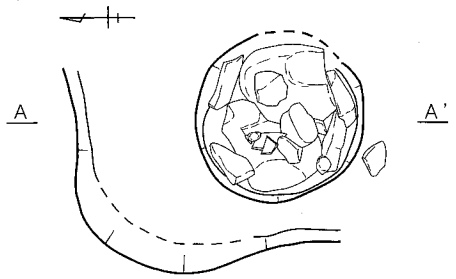


1 暗褐色土：やや砂質、ローム粒・焼土粒少量をやや不均質に混入。
2 暗褐色土：、ローム粒・焼土ブロック・焼土粒少量を不均質に混入。
3 暗褐色土：ローム粒微量をやや不均質に混入。
4 暗褐色土：ローム粒・焼土粒少量を不均質に混入。
5 暗褐色土：ローム粒中量をやや不均質に混入。

5 号炉跡

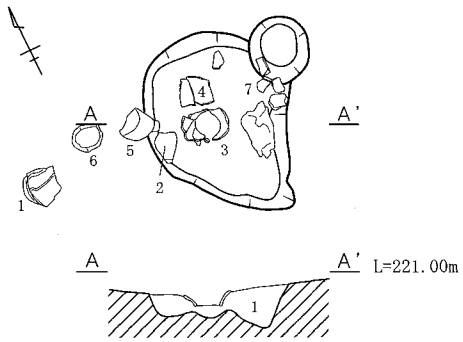


掘り方図



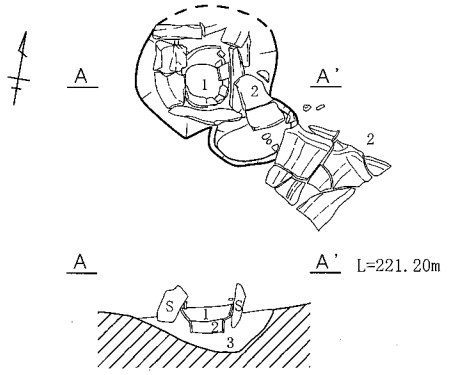
1 暗褐色土：ローム粒少量を不均質に混入、ロームブロック微量が不均質に点在。
2 鈍い黄褐色土：ローム粒・ロームブロック中量を不均質に混入、炭化粒微量を不均質に混入。

7 号炉跡



1 暗褐色土：灰白色軽石粒・ローム粒少量をやや不均質に混入。

8 号炉跡

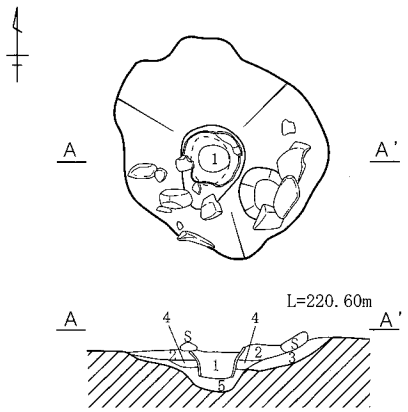


1 暗褐色土：炭化粒少量をやや不均質に混入。
2 鈍い黄褐色土：ローム粒中量をやや不均質に混入。
3 鈍い黄褐色土：ローム粒・ロームブロック中量を不均質に混入。

0 1：30 1m

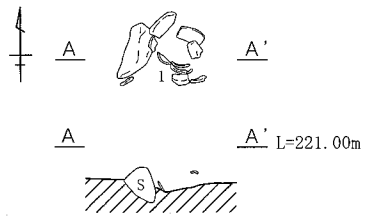
第 32 図　炉跡平・断面図

9 号炉跡

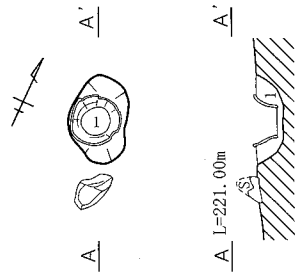


1 黒褐色土：焼土粒・ローム粒・灰白色軽石粒少量をやや不均質に混入。
2 暗褐色土：ローム粒・灰白色軽石粒。
3 暗褐色土：ローム粒中量をやや不均質に混入。
4 暗褐色土：焼土粒多量を不均質に混入。
5 暗褐色土：ローム粒中量をやや不均質に混入。

10 号炉跡

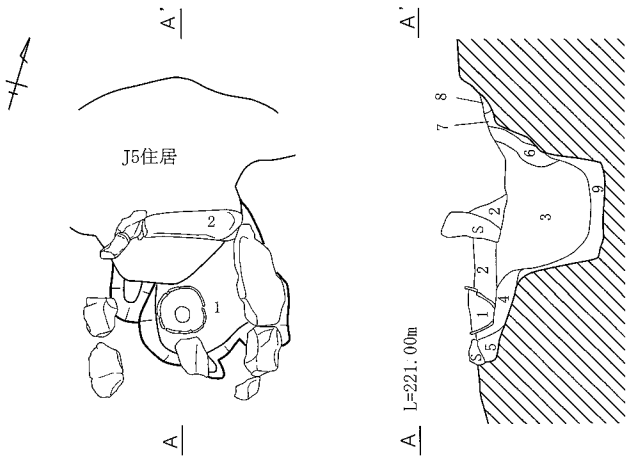


11 号炉跡



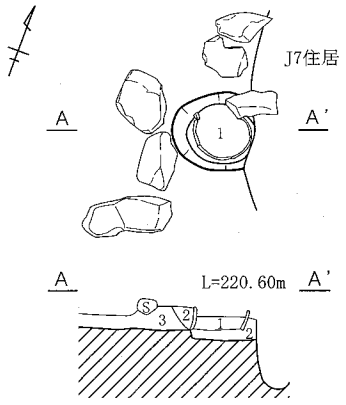
1 鈍い黄褐色土：ローム粒・ロームブロック中量を不均質に混入、炭化粒微量を不均質に混入。

12 号炉跡



1 黒褐色土：焼土粒・ローム粒・灰白色軽石粒少量をやや不均質に混入。
2 黒褐色土：ローム粒・灰白色軽石粒少量、炭化粒微量を均質に混入。
3 黒褐色土：灰白色軽石粒・ローム粒・炭化粒少量をやや不均質に混入。
4 暗褐色土：ローム粒中量を均質に混入、焼土粒・炭化粒少量をやや不均質に混入。
5 暗褐色土：ロームブロックを不均質に混入。
6 暗褐色土：ロームブロック中量を不均質に混入、ローム粒少量をやや不均質に混入。
7 鈍い黄褐色土：ローム粒多量を均質に混入。
8 暗褐色土：ローム粒中量やや不均質に混入。
9 鈍い赤褐色土：ローム粒多量をやや不均質に混入。

13 号炉跡

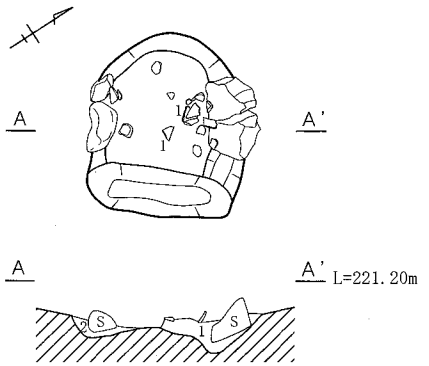


1 暗褐色土：焼土粒微量を不均質に混入。
2 暗褐色土：灰白色軽石粒中量を不均質に混入。
3 暗褐色土：ローム粒中量をやや不均質に混入。

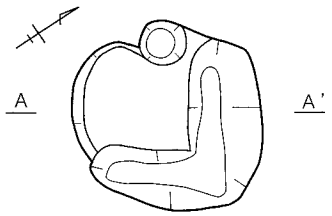
0 1：30 1m

第 33図　炉跡平・断面図

14 号炉跡

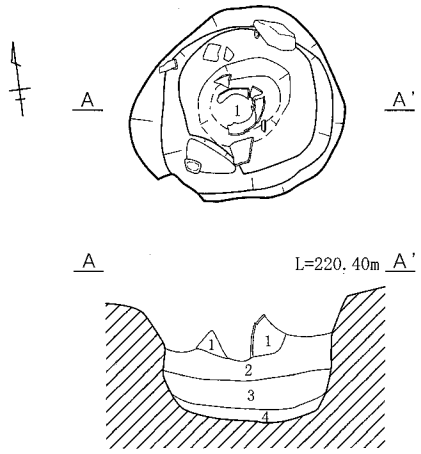


堀り方図



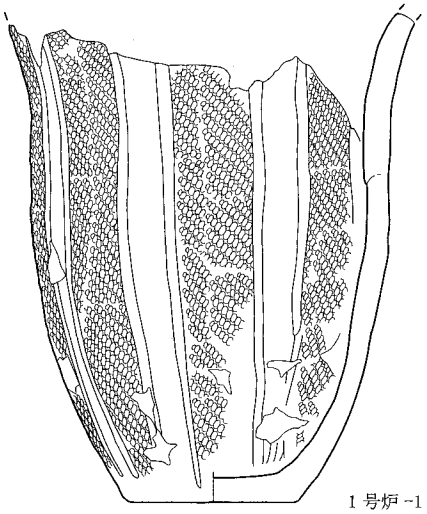
1　暗褐色土：焼土粒・炭化粒微量を不均質に点在。
2　暗褐色土：炭化粒微量を不均質に点在。

15 号炉跡



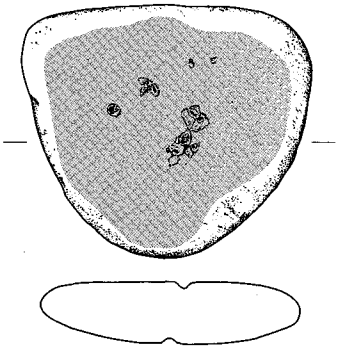
1　暗褐色土：ローム粒・ロームブロック中量をやや不均質に混入、焼土粒・焼土ブロック少量を不均質に混入。
2　暗褐色土：ローム粒・ロームブロック中量をやや不均質に混入、炭化粒微量が均質に点在。
3　暗褐色土：ローム粒中量をやや不均質に混入、ロームブロック少量をやや不均質に混入、炭化粒・焼土粒微量が不均質に点在、灰白色軽石粒微量がやや不均質に点在。
4　鈍い黄褐色土：ローム粒多量を不均質に混入、炭化粒微量が不均質に点在。

0　1：30　1m



1 号炉 -1

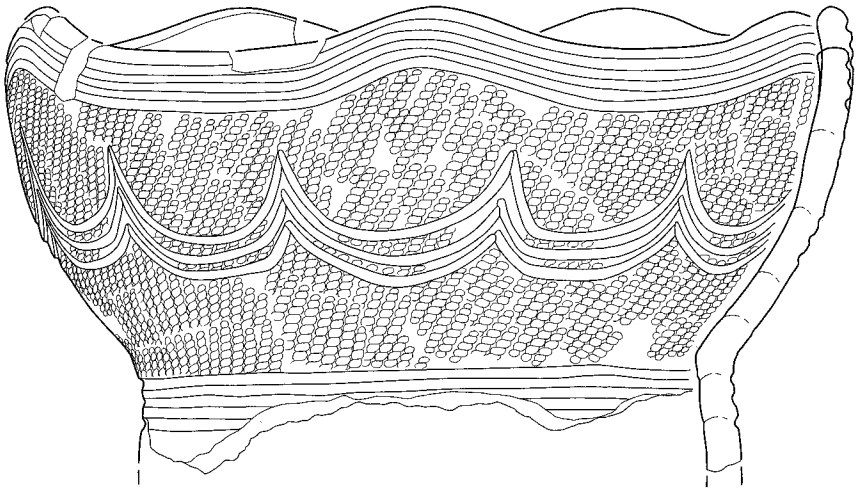
0　1:3　10cm



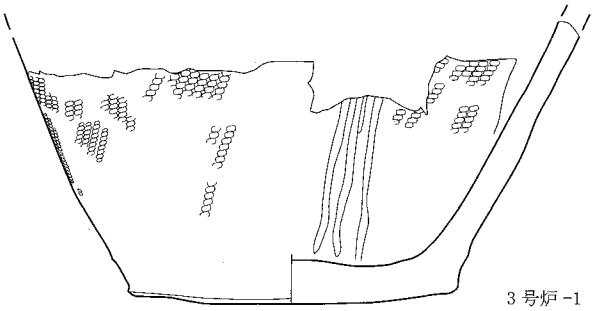
1 号炉 -2

0　1：6　20cm

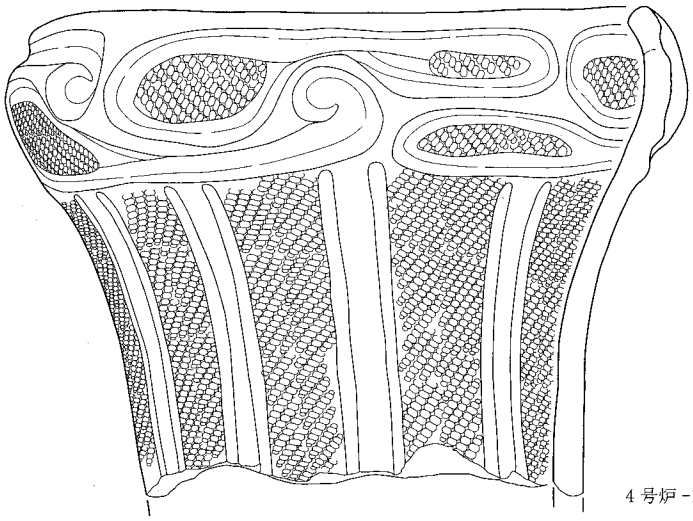
第 34 図　炉跡平・断面図、出土遺物 (1)



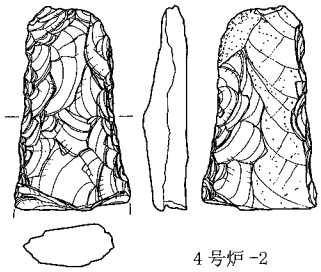
2 号炉 -1



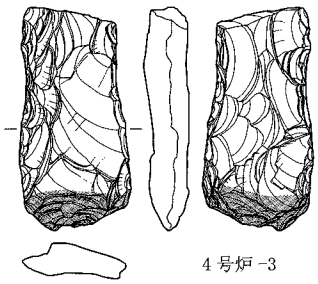
3 号炉 -1



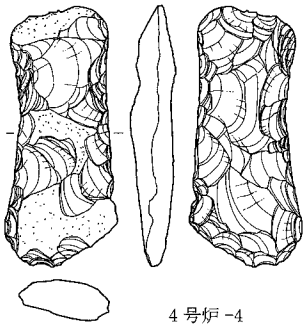
4 号炉 -1



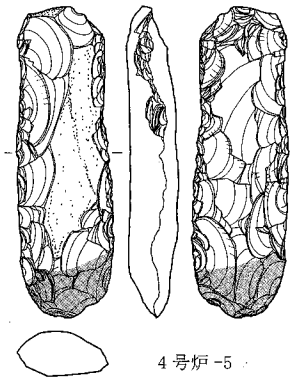
4 号炉 -2



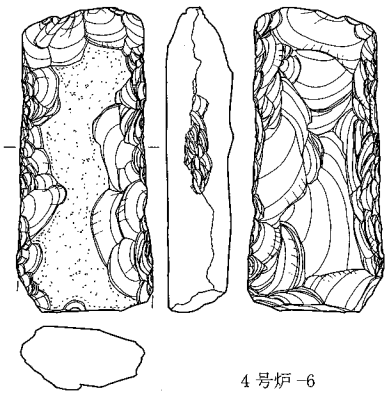
4 号炉 -3



4 号炉 -4



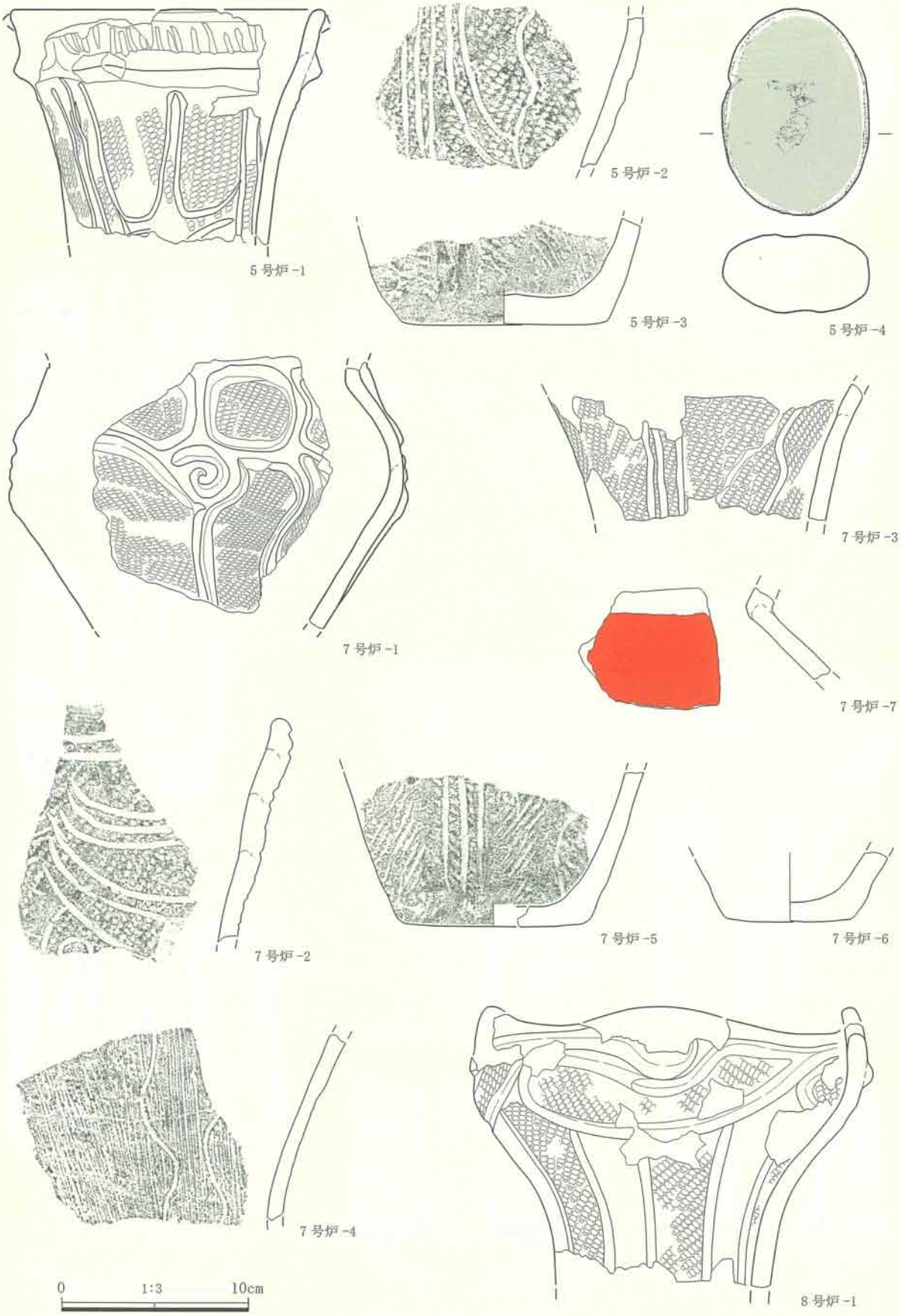
4 号炉 -5



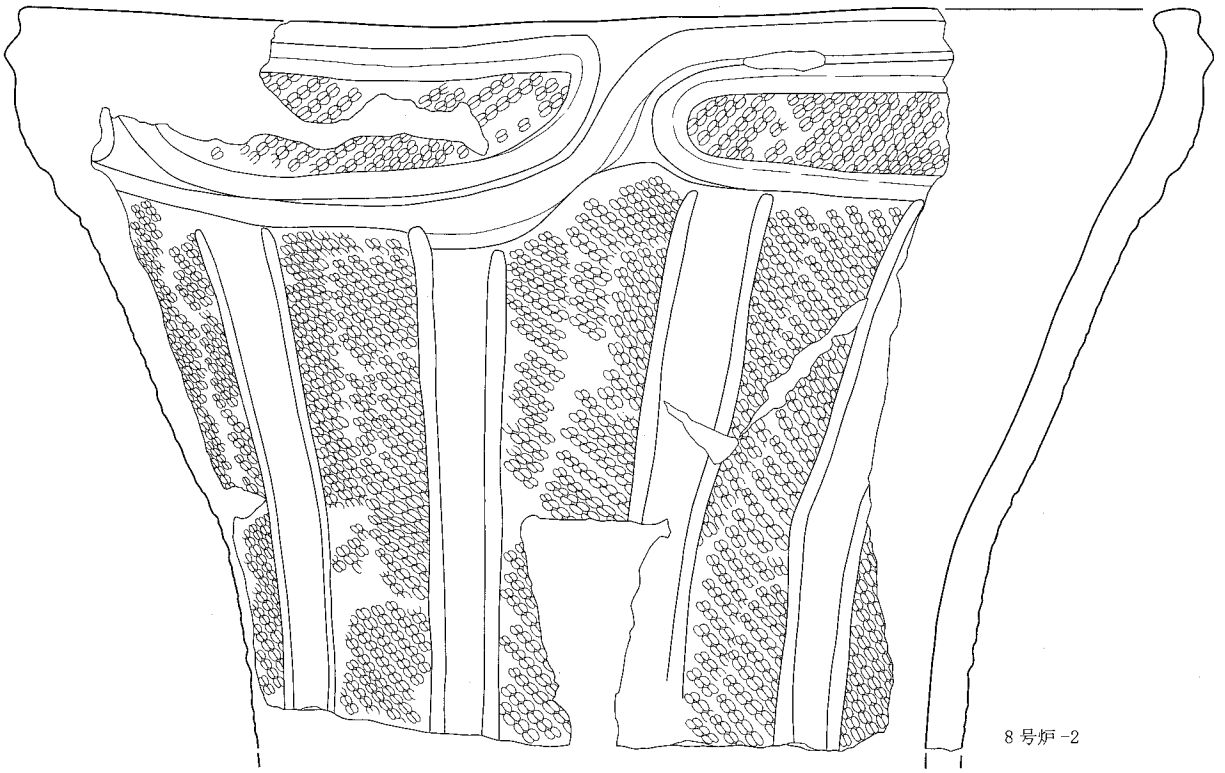
4 号炉 -6

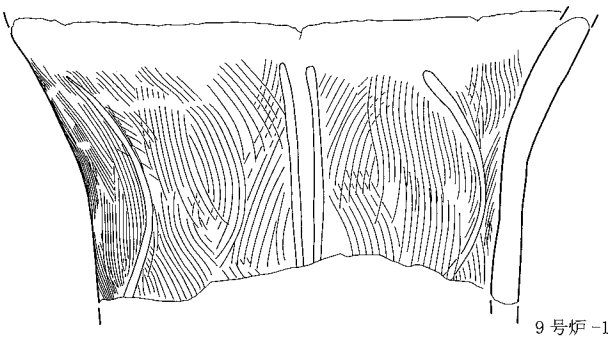
0　1:3　10cm

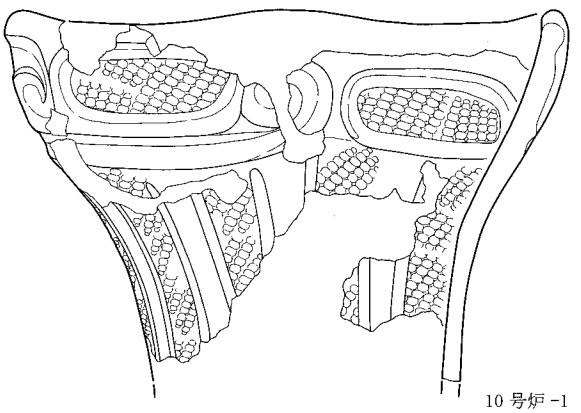
第 35 図　炉跡出土遺物 (2)

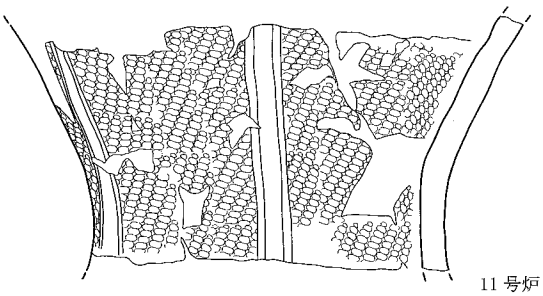


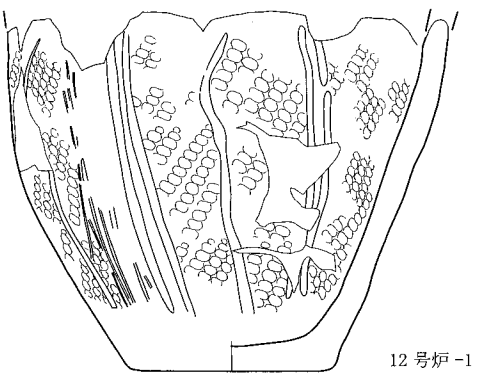
第 36 図　炉跡出土遺物 (3)





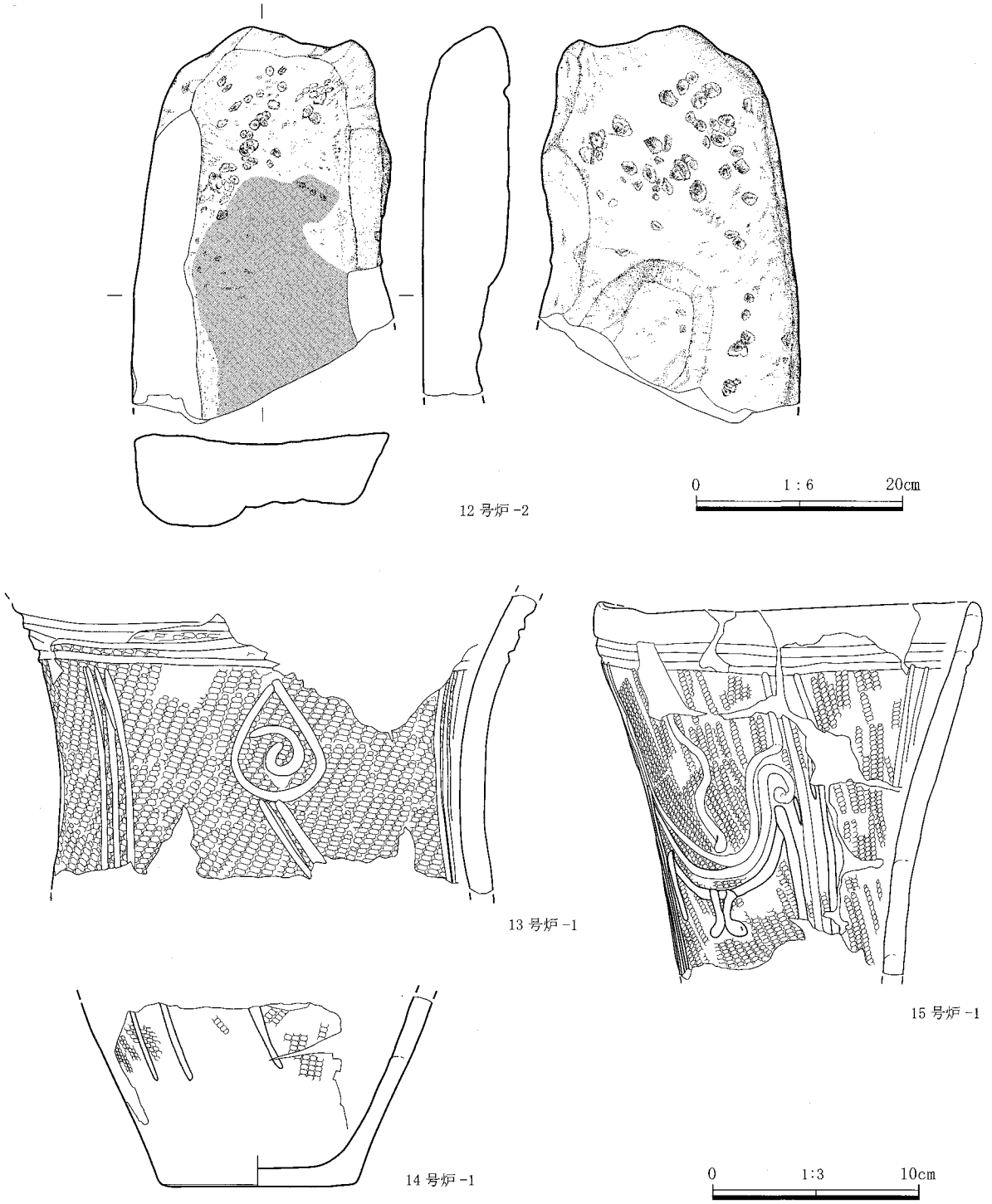






0 1:3 10cm

第 37 図　炉跡出土遺物 (4)



第 38 図　炉跡出土遺物 (5)

1 号炉跡

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い赤褐色 ③白色粒・黒色粒 ④胴部上位～底部残存 底径 (6.6)	沈線・縄文 LR	胴部は沈線を垂下し、縄文ＬＲを縦位施文した縄文帯と無文帯を交互に配置。
番号	種　類	法量 (cm)・石材		
2	多孔石	長さ 20.3　幅 23.3　厚さ 5.0　重さ 3690 g　粗粒輝石安山岩		

2号炉跡

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部～胴部中位 4/5 口径 31.0	沈線・縄文 RL	5単位の波状口縁。縄文 RL を縦位に施文後、3本単位の沈線による口縁部直下の波状文と連弧文。頸部に横線文を施し胴部を区画する。

3号炉跡

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②赤褐～鈍い赤褐色 ③白色粒 ④胴部下位～底部 2/3 底径 12.6	沈線・縄文 RL	縄文 RL を縦位に施文後、沈線を垂下。

4号炉跡

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・角閃石・褐色粒 ④口縁部～胴部中位残存 口径 (24.0)	隆線・凹線 沈線 縄文 RL	平縁口縁。口縁部は渦巻文と楕円文を配し、楕円文区画内には縄文 RL を横位に施文。胴部は沈線を垂下し、縄文 RL を縦位施文した、縄文帯と無文帯を交互に配置。
番号	種　類	法量 (cm)・石材		
2	打製石斧	残存長 8.17　幅 4.56　厚さ 1.79　重さ 69.0 g　黒色頁岩		
3	打製石斧	長さ 8.88　幅 4.41　厚さ 1.81　重さ 80.3 g　細粒安山岩		
4	打製石斧	長さ 10.39　幅 4.51　厚さ 1.81　重さ 91.2 g　粗粒輝石安山岩		
5	打製石斧	長さ 12.34　幅 3.88　厚さ 2.05　重さ 120.1 g　黒色頁岩		
6	打製石斧	残存長 12.16　幅 5.46　厚さ 2.67　重さ 264.4 g　黒色頁岩		

5号炉跡

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙～鈍い黄橙色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部～胴部中位 1/4 口径 16.4	隆線・凹線 沈線 縄文 RL	平縁口縁。口縁部は隆線による区画内に縦位の沈線で充填。胴部は、縄文 RL を縦位に施文後、沈線による垂線・U字状文。
2	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・黒色粒 ④胴部破片	沈線・縄文 RL	縄文 RL を縦位に施文後、沈線を垂下、弧線文・蛇行文。
3	縄文土器 深鉢	①普通 ②明赤褐～鈍い黄橙色 ③白色粒・角閃石 ④胴部下位～底部残存 底径 11.0	隆線・縄文 LR	縄文 LR を縦位に施文後、隆線を2本垂下。
番号	種　類	法量 (cm)・石材		
4	凹石・磨石	長さ 11.1　幅 7.8　厚さ 4.1　重さ 523.6 g　粗粒輝石安山岩		

7号炉跡

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙～鈍い橙色 ③白色粒・黒色粒・礫 ④胴部破片	隆線・凹線 縄文 RL	頸部がくびれ、胴部にしまりを持つ。縄文 RL を縦位施文後、隆線による半円・楕円形の区画文・垂下文・蛇行文を配置。
2	縄文土器 深鉢	①普通 ②灰黄色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部～胴部上位破片	沈線・縄文 RL	縄文 RL を縦位に施文後、沈線による連弧文を重ねて配置。
3	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒 ④胴部中位残存	沈線・縄文 RL	縄文 RL を縦位に施文後、沈線による垂線・蛇行文。
4	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙～灰黄褐色 ③白色粒 黒色粒・褐色粒 ④胴部破片	沈線・条線	条線を充填後沈線による蛇行文。
5	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い赤褐色～鈍い黄褐色 ③白色粒・角閃石 ④胴部下位～底部 1/3 底径 (9.4)	凹線・縄文 R	縄文 R を縦位に施文後、3本単位の沈線を垂下。
6	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い赤褐～橙色 ③白色粒・黒色粒 ④胴部下位～底部 2/3 底径 6.8		胴部下位は無文。
7	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・角閃石 ④胴部破片		内外面強い研磨、赤色塗彩。

8号炉跡

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部～胴部中位 7/8 口径 (19.3)	隆線・凹線 沈線 縄文 RL	波状口縁。山形波頂部4単位。口縁部は楕円形の区画、区画内には縄文 RL を横位に施文。胴部は沈線を垂下し、縄文 RL を縦位施文した縄文帯と無文帯を交互に配置。
2	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部～胴部中位 1/4 口径 (46.0)	隆線・凹線 沈線 縄文 LRL	平縁口縁。口縁部は楕円形の区画、区画内に縄文 LRL を横位に施文。胴部は沈線を垂下し、縄文 LRL を縦位施文した縄文帯と無文帯を交互に配置。

9号炉跡

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い褐色 ③白色粒・黒色粒 ④胴部上位残存	沈線・条線	弧状の条線を施文後、沈線を垂下、蛇行文を配置。

10号炉跡

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②明褐色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部～胴部中位 2/3 口径 (21.3)	隆線・凹線 沈線 縄文 RL	ゆるい波状口縁。口縁部は渦巻文と楕円文を配し、区画内は縄文 RL を縦位に施文。胴部は沈線を垂下し、縄文 RL を縦位施文した無文帯を交互に配置。

11 号炉跡

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い橙色 ③白色粒・黒色粒 ④胴部中位残存	沈線・縄文 RL	縄文 RL を縦位に施文後、沈線を垂下。

12 号炉跡

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い褐色 ③白色粒・黒色粒 ④胴部中位～底部 1/3 底径 8.0	沈線・縄文 RL	縄文 RL を縦位に施文後、沈線による垂線・蛇行文。
番号	種　類	法量 (cm)・石材		
2	石皿	残存長 38.5　幅 24.9　厚さ 8.7　重さ 1180 g　粗粒輝石安山岩		

13 号炉跡

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・黒色粒 ④胴部中位残存 口径 (43.6)	沈線・縄文 RL	縄文 RL を縦位に施文後、沈線による横線・垂線。滴状の区画内に渦巻文を配置し、下位に蛇行文を施す。

14 号炉跡

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙～鈍い赤褐色 ③白色粒 ④胴部中位～底部残存 底径 9.2	沈線 縄文 RL	縄文 RL を縦位に施文後、沈線による垂線。

15 号炉跡

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙～明赤褐色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部～胴部下位 2/3 口径 17.8	沈線 縄文 LR	縄文 LR を縦位に施文後、沈線による垂線・蛇行文・U字状文・蕨手文文。

第3節　埋　甕

1 号埋甕

F－1 グリッドに位置する。重複する遺構はない。掘り方は円形を呈し、直径 13cm、残存壁高は 15cm を測る。深鉢を正位で埋めている。

No. 1 は筒状の胴部の深鉢である。2 本組の垂線と蛇行文を配置するが、無文帯を作らない。器形と文様から縄文時代加曽利 E 3 式期古段階に属すると考えられよう。

2 号埋甕

D－3 グリッドに位置する。重複する遺構はない。掘り方は円形を呈し、径 32 × 29cm、残存壁高は 20 cmを測る。深鉢を正位で埋めているが、底部は出土していない。

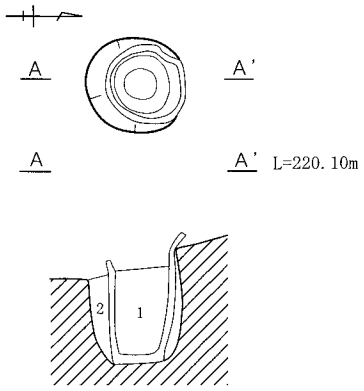
No. 1 は単体で出土している。口縁部がわずかに内湾して胴部のくぼみを作り、胴下位へすぼまる大型の深鉢である。口縁部下に断面三角形の隆帯を一条巡らし、帯状に刻み目を施している。隆帯下の胴部上半は縄文を横方向に施文、胴下半部は無文である。口縁内側には一条の沈線が巡る。器面の調整は粗く、粗製土器と考えてよいだろう。隆帯や縄文施文方法、口縁部形状からみて縄文時代後期堀之内式期と考えられるだろう。

3 号埋甕

I－2 グリッドに位置する。J 85 号土坑の上に造られる。掘り方は円形を呈し、直径 38cm、残存壁高は 26cmを測る。

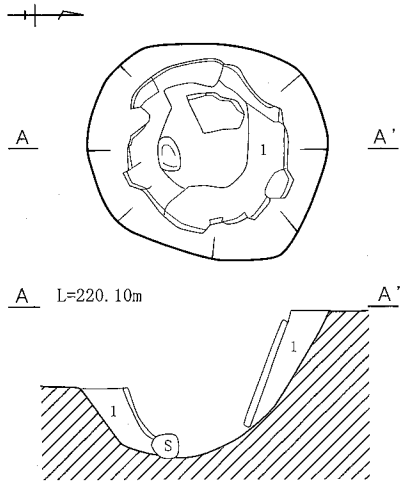
No. 5 以外は周辺から出土した土器である。No. 5 は埋甕の本体である。口縁部がわずかに内湾して緩やかに胴下位にすぼまる器形である。底部は一度すぼまって立ち上がる。口縁部から胴部中位までは縄文を横方向に施文し、胴下位は無文である。底部は網代痕が認められている。2 号埋甕No. 1 と器形、調整技法が近似する。同時期の所産、縄文時代後期堀之内式期としてよいだろう。No. 1 ～No. 4 は周辺遺構からの混入と考えられよう。石器は周辺から打製石斧片 1 点、調整痕のある剥片 5 点その他の剥片 7 点、チャート片 1 点が出土している。

1号埋甕



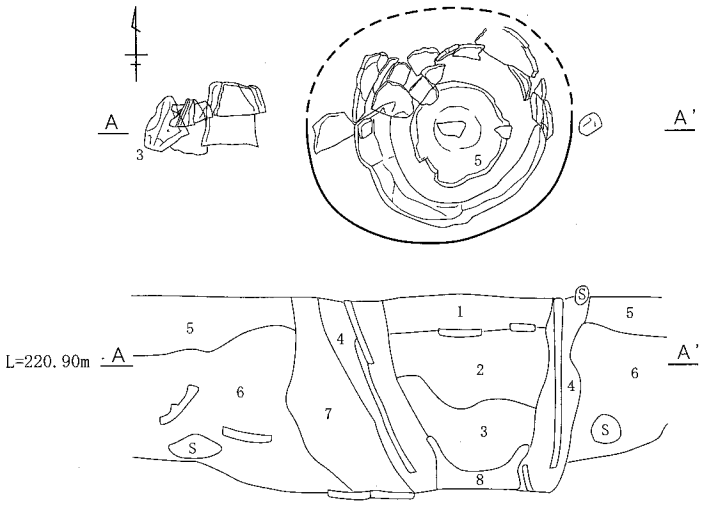
1　暗褐色土。
2　鈍い黄褐色土：ローム粒多量を均質に混入。

2号埋甕



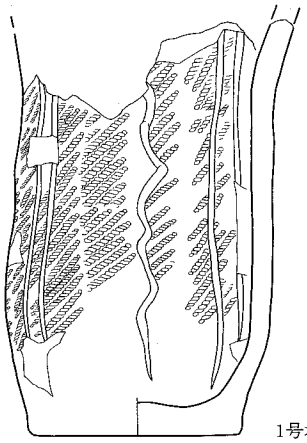
1　暗褐色土：灰白色軽石粒中量をやや不均質に混入。

3号埋甕

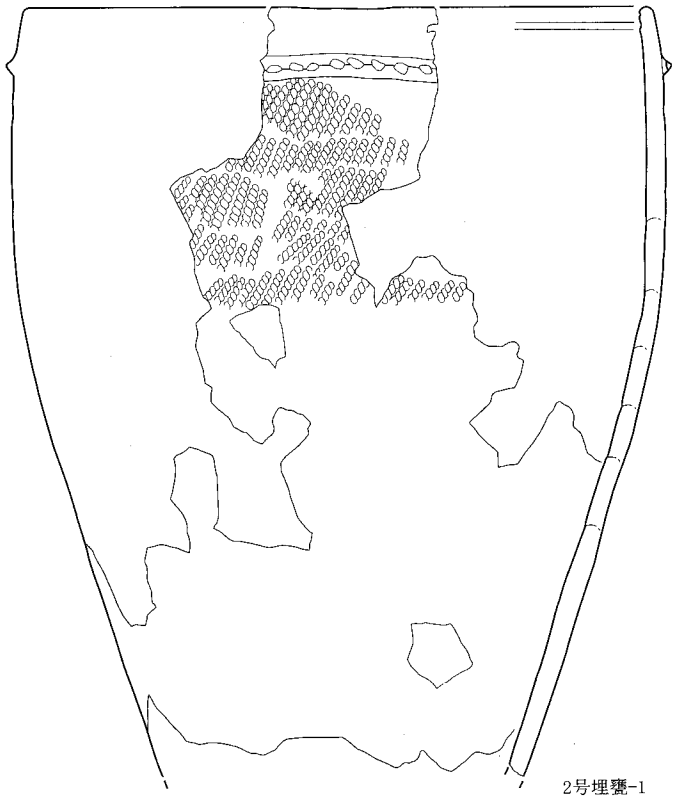


1　暗褐色土：ややしまりが弱い、ローム粒少量を不均質に混入。
2　暗褐色土：ローム粒少量を不均質に混入、焼土粒微量が不均質に点在。
3　暗褐色土：粒度が細かく揃った層、炭化粒微量。
4　暗褐色土：ローム粒中量を不均質に混入。
5　暗褐色土：ローム粒少量をやや不均質に混入。
6　暗褐色土:ローム粒少量をやや不均質に混入、焼土粒微量が不均質に点在。
7　暗褐色土：ローム粒少量を不均質に混入、灰白色軽石粒少量をやや不均質に混入、焼土粒微量が不均質に点在。
8　暗褐色土：灰白色軽石粒少量を不均質に混入、焼土粒・炭化粒少量をやや不均質に混入。

0　1：10　40cm



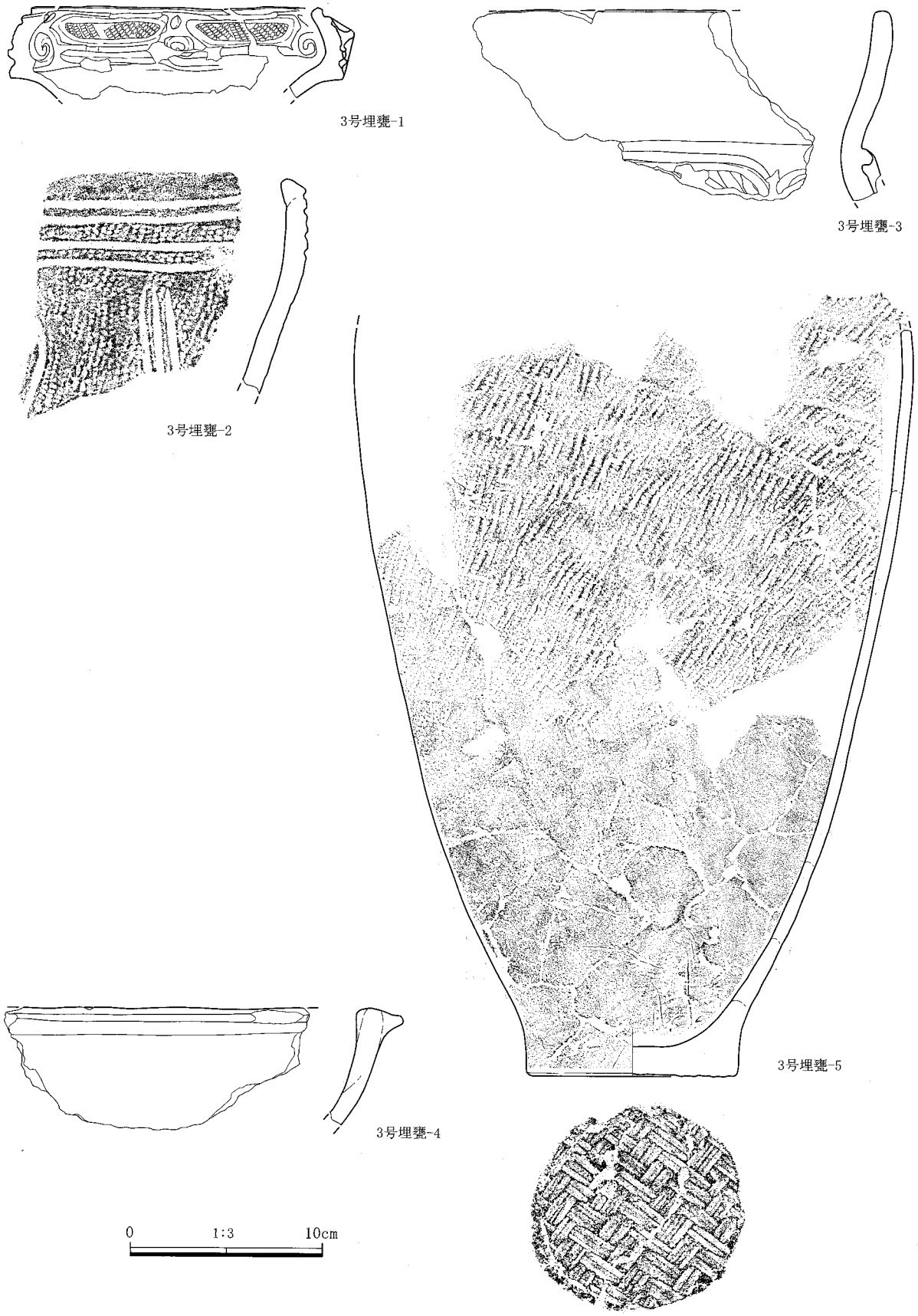
1号埋甕-1



2号埋甕-1

0　1:3　10cm

第 39 図　埋甕平・断面図、出土遺物 (1)



第 40 図　埋甕出土遺物 (2)

1号埋甕跡

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い褐色 ③白色粒・黒色粒・角閃石・石英 ④胴部上位～底部残存 底径 8.1	沈線・縄文 RL	縄文 RL を縦位に施文後、沈線による垂線・蛇行線。

2号埋甕跡

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い赤褐色 ③白色粒・角閃石・石英 ④口縁部～胴部下位 1/3 口径 (24.6)	隆帯・縄文 LR	平縁口縁。口縁部内面に沈線。口縁部外面に断面三角形の隆帯、胴部に縄文 LR を横位に施文。

3号埋甕跡

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・雲母 ④口縁部～胴部上位 1/3 口径 (14.6)	隆線・凹線 縄文 RL	平縁口縁。口縁部に隆線による渦巻・楕円文の区画を配し、縄文 RL を横位に施文後凹線。
2	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙～鈍い黄褐色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部破片	沈線・縄文 RL	縄文 RL を施文後、口縁部直下に横位の沈線を巡らす。胴部は3本単位の沈線を垂下。
3	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片	隆線・沈線	平縁口縁。縦位沈線を充填後区画。
4	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い赤褐色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部破片		内外面研磨。
5	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙～明赤褐色 ③白色粒・角閃石・石英 ④胴部上位～底部 2/3 底径 10.6	縄文 LR	口縁部は接合しないが破片があり、平縁口縁で内面に沈線を1本巡らす。口縁部～胴部中位に縄文 LR を横位に施文。底部に網代痕あり。(2本越し、2本くぐり、1本送り)

第4節　集　石

集石の時期やその性格を決定しうる遺物は確定できなかった。遺構とその周辺出土遺物には、土器、土製品、石器が認められた。

1号集石

L－2グリッドに位置する。重複遺構はないが、周辺に集石や炉等の遺構が集中する。径 95 × 80cmの楕円形状の範囲内に 10 ～ 40cm程度の角礫が集中している。石は平面的に分布しており、積み上げられてはいない。多孔石が1点出土している。掘り込みは不明瞭で掘り方は確認できない。

No.1 は口縁部は内湾せず、頸部に無文帯を持つ。口縁部の区画内には縄文施文後、羽状の沈線を充填する。No.2 は口縁部に張りを持つ器形で、口縁部下に横位の沈線が巡る。No.3 は波頂部に左右から C 字状の貼付文を施し、頂部より J 字状になると思われる無文帯を垂下する。この他、円盤状土製品が出土している。土器の様相からは、縄文時代中期加曽利 E 2式期から E 4式期 が想定できる。またこの他、後期称名寺式・堀之内式期の土器も出土している。石器は打製石斧、小型の石皿、磨石、多孔石が出土した。小型の石皿としたNo. 6 は、椀状の凹に顕著な摩耗痕が観察できる。また裏面には調整痕と思われる打痕が楕円状に施されている。出土例が少ない石器である。その他、チャート製石鏃未製品1点、打製石斧片4点、調整痕のある剥片9点、その他の剥片 10 点が出土した。

2号集石

L－2グリッドに位置する。重複遺構はないが、南側に2号炉跡、北側に3号炉跡が近接する。径 110 × 90cmの楕円形状の範囲内に 10 ～ 30cm程度の礫が集中している。掘り方は楕円形状を呈し径 125 × 90cm、残存壁高は 18cmを測る。また、この2号集石の付近には土器片が多く集中して出土しており、周辺の土坑内から出土した遺物と接合するものもある。No.1 は口縁部外傾して頸部でくびれる器形で、口縁部直下に横線と爪形文、2本の波状文を配置する。No.2 は本集石の周辺で出土しているものだが、底部から胴部へ大きく開く器形で、両耳壺と思われる。条線を曲線的に施している。この他加曽利 E 3式から E 4式期の土器も出土している。土器の様相からは、縄文時代中期加曽利 E 式期を中心とする時代に属すると考えられよう。石器は石皿、凹石、多孔石が出土している。石皿は使い込まれた摩耗痕が確認でき、縁部や裏面には凹

み穴が認められる。また、№4の石皿は23号土坑付近で出土した石皿の破片と接合した。その他、石鏃未製品1点、調整痕のある剥片石器1点、その他の剥片1点が出土した。

3号集石

J－4グリッドに位置する。J 3号住居跡・J 83号土坑と重複し、両遺構の上にも石が分布していることから、3号集石が新しいと考えられる。径95×105cmの楕円形状の範囲に石の分布が見られるが、特に南側に集中し、径95×65cmの範囲に長さ7～30cmの石が積み重なって集中している。北側には25～30cmの石が少量まとまっている。掘り方は南側の集中部分が円形状を呈し、径70cm、残存壁高は20cmを測る。北側に広がる部分に関してはJ 83号土坑と重複しているため不明瞭である。

No.1は大きな橋状把手上に蕨手文を配する深鉢である。No.2は頸部と胴部に強い屈曲を持つ鉢であろう。No.3は口縁部がわずかに内湾して胴部へすぼまる器形で、口縁部の区画文内に沈線の羽状文を充填する。No.4も口縁部の区画文内を沈線で充填している。No.3・No.4ともに頸部に無文帯をもうけている。No.5・No.6は沈線による幾何学文でNo.6は器面を研磨している。No.7は口縁部内側に蕨手文を施している。No.9は網代痕のある底部片である。No.1～No.4の様相からは、縄文時代中期加曽利E 2式期に属すると考えられ、またNo.5・No.6・No.9については後期堀之内式期に属するとできよう。本遺構の属する時期は周辺遺構の重複関係から後期堀之内式期に属すると考えられよう。石器は凹石、磨石、石皿、多孔石が出土した。石皿№11は片面に摩耗痕があり、さらに表裏とも凹み穴が多数認められている。その他、打製石斧片1点、円盤状凹石片1点、調整痕のある剥片石器1点、その他の石片1点、チャート片1点が出土している。

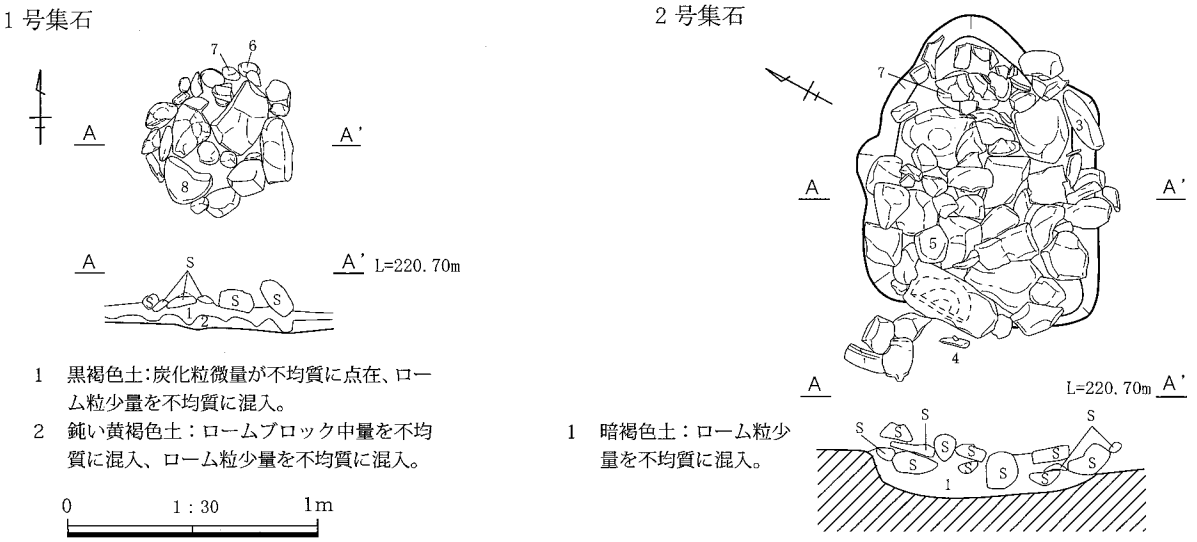
4号集石

J－4グリッドに位置する。J 3号住居跡の上に造られる。北側は調査区域外となり形態・規模は不明だが、検出した部分は長さ105cm、幅90cmの範囲内に分布している。長さ5～20cmの石が平面的に分布しており、積み上げられてはいない。掘り込みは不明瞭なため掘り方は確認できなかった。

土器片が小片のみであったため、図示できなかった。石器は安山岩製多孔石№1が出土した。破損しているが、板状の石で安定した形状である。表裏とも多くの錐もみ状の凹み穴が認められている。

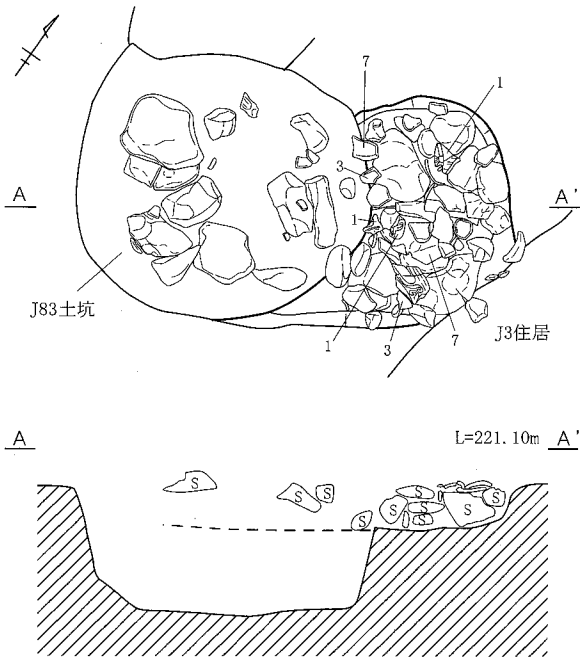
5号集石

G－3グリッドに位置する。重複遺構はないが、J 54・55・84号土坑が近接する。径47×40cmの範囲に、長さ15～30cmの石が積み重なって出土した。掘り方は円形を呈し、直径80cm、残存壁高は25cmを測る。遺物は出土していない。

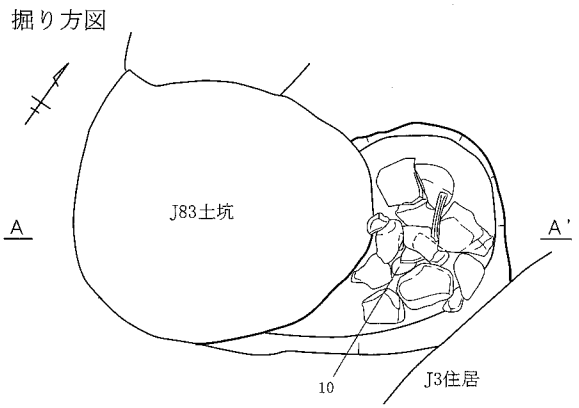


第41図　集石平・断面図

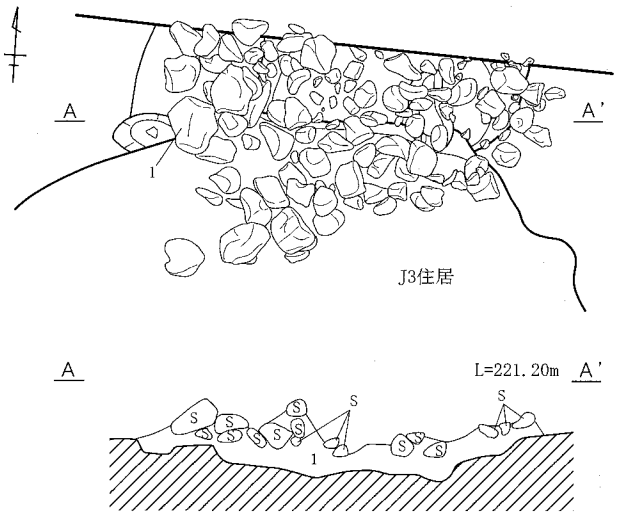
3 号集石



掘り方図

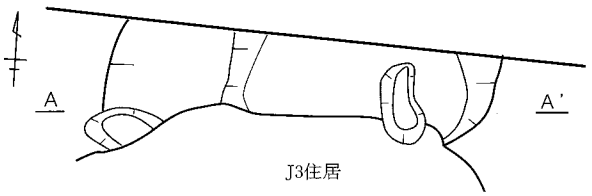


4 号集石

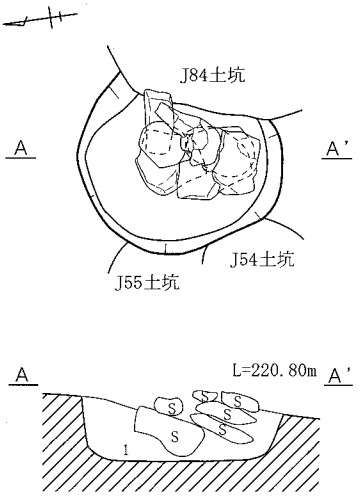


1　黒褐色土：ローム粒少量を不均質に混入、炭化粒微量が不均質に点在。

掘り方図



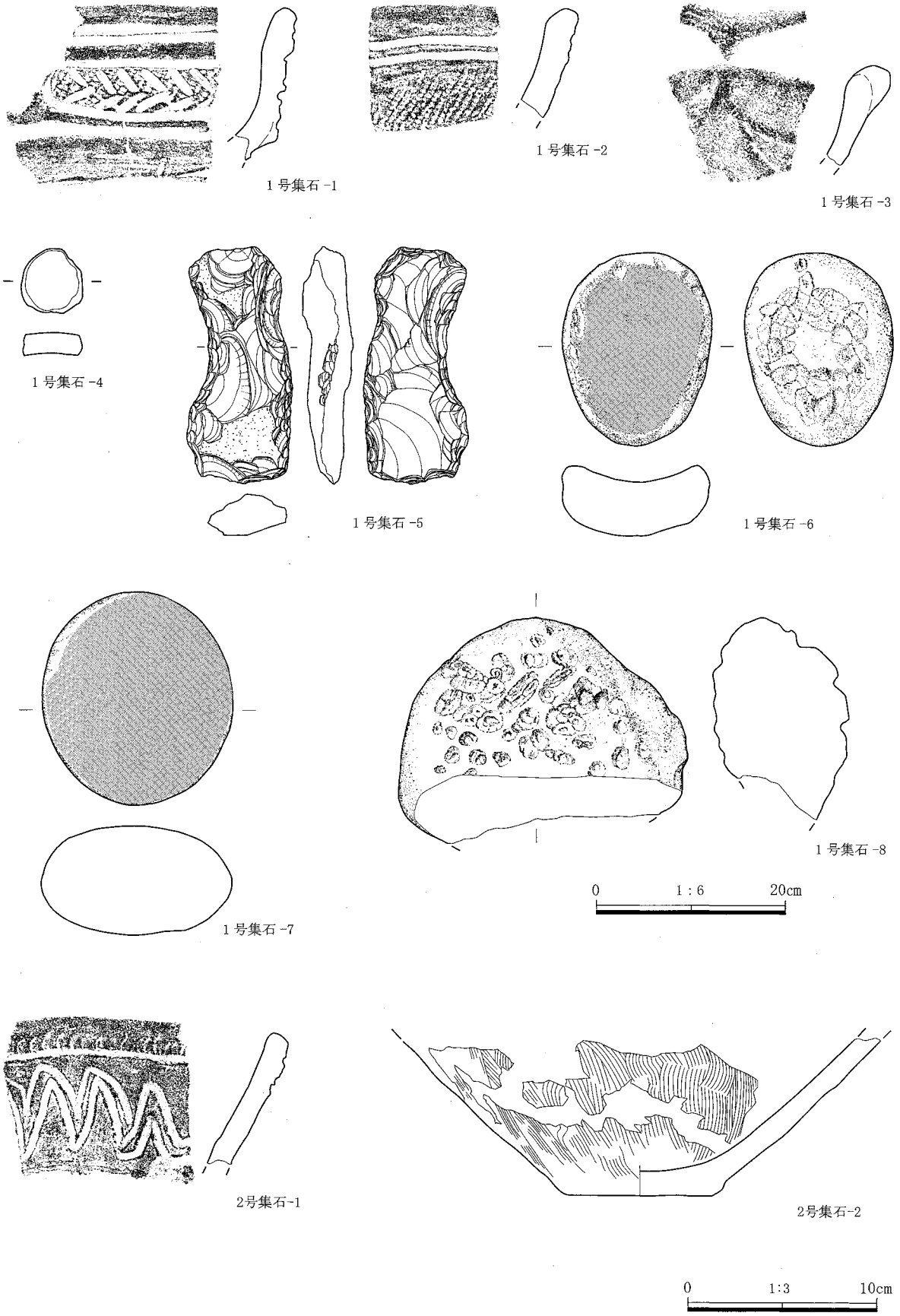
5 号集石



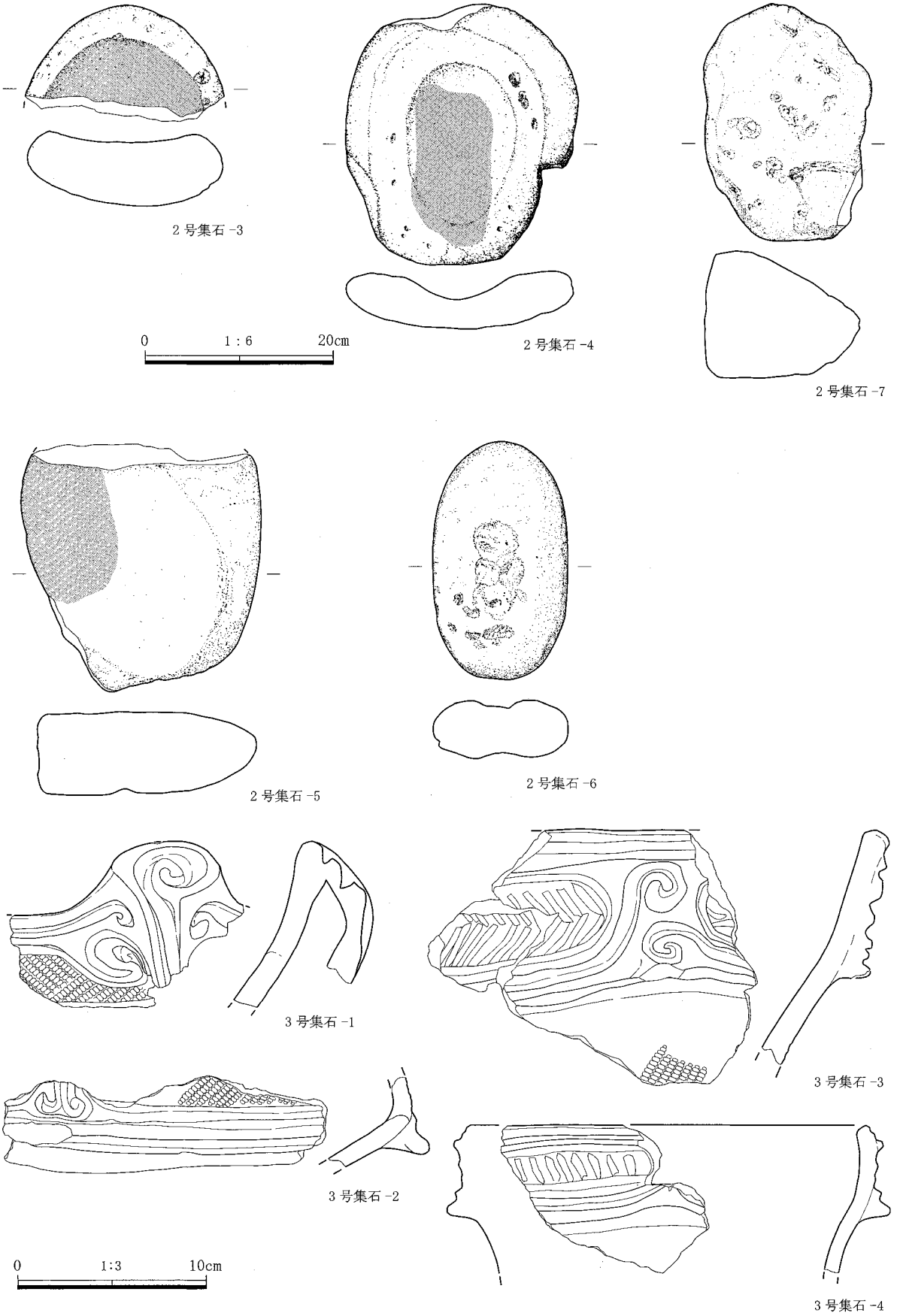
1　暗褐色土：灰白色軽石粒中量をやや不均質に混入、ローム粒少量を不均質に混入、炭化粒微量が不均質に点在。

0　1：30　1m

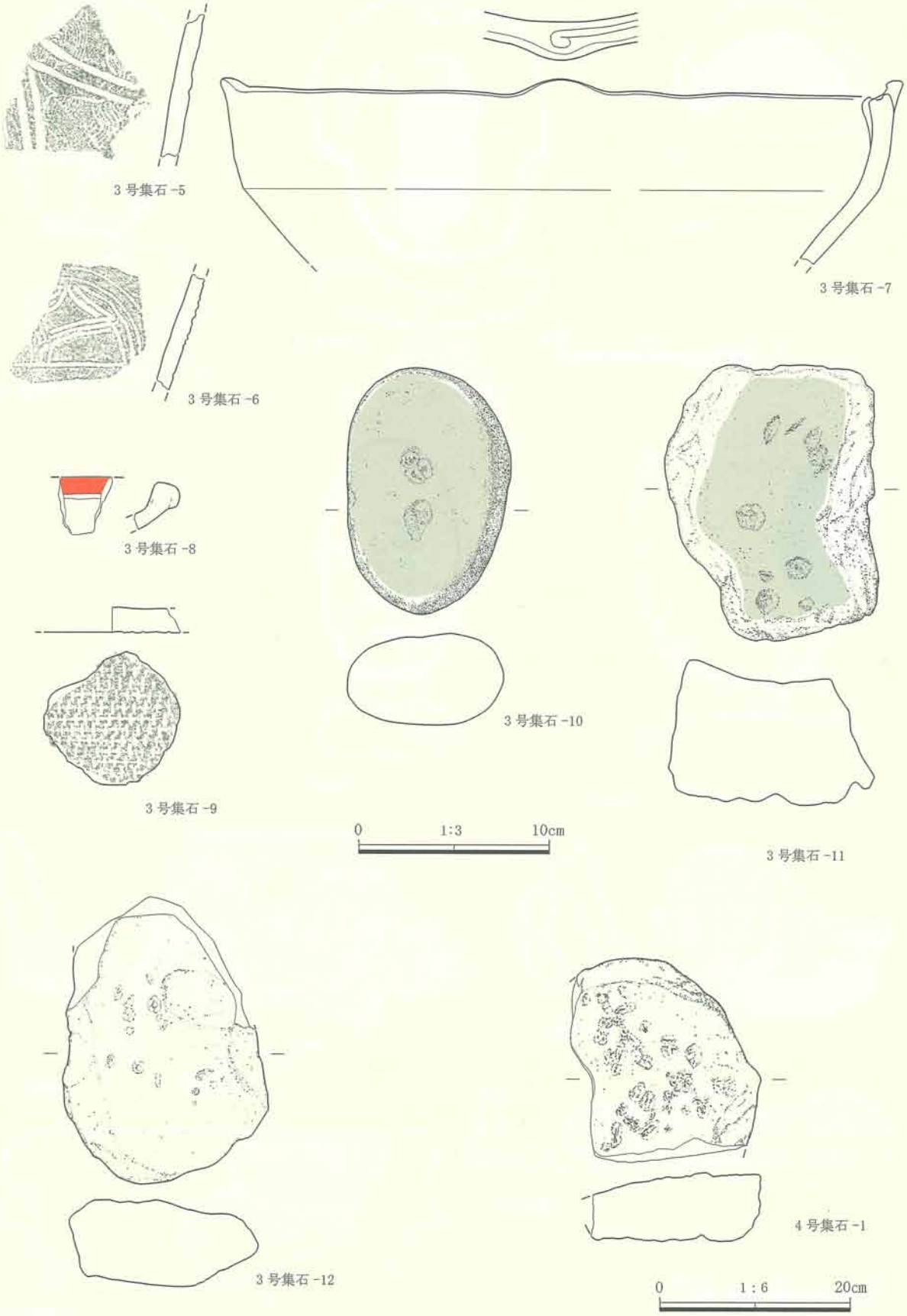
第 42 図　集石平・断面図



第 43 図　集石出土遺物 (1)



第 44図　集石出土遺物 (2)



第 45 図　集石出土遺物 (3)

1号集石

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②灰黄褐色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部破片	隆線・凹線 沈線・縄文 RL	楕円形の区画内に縄文 RL を縦位に施文後、羽状に沈線を施文。
2	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い橙色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部破片	沈線・縄文 RL	口縁部直下に沈線、縄文 RL を縦位に施文。
3	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙～灰黄褐色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部破片	隆線	小波状口縁。波頂部より断面三角形の隆線を曲線的に垂下。
4	土製品 円盤	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・角閃石 ④完形		無文の深鉢の胴部破片を転用。
番号	種　類	法量 (cm)・石材		
5	打製石斧	長さ 12.42　幅 5.49　厚さ 2.66　重さ 169.1 g　黒色頁岩。		
6	小型石皿	長さ 10.3　幅 7.8　厚さ 3.1　重さ 360.5 g　粗粒輝石安山岩		
7	磨石	長さ 11.2　幅 10.0　厚さ 5.8　重さ 927.9 g　粗粒輝石安山岩		
8	多孔石	残存長 23.9　幅 30.0　厚さ 14.0　重さ 8200 g　粗粒輝石安山岩		

2号集石

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い赤褐色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部破片	沈線	口縁部直下に爪形文・横線、沈線による 2 本単位の波状文を施文。
2	縄文土器 両耳壺	①普通 ②鈍い赤褐色 ③白色粒・黒色粒・褐色粒 ④胴部下位～底部 3/5 底径 7.5	条線	条線による直線・曲線文を充填。
番号	種　類	法量 (cm)・石材		
3	石皿	残存長 12.4　幅 21.0　厚さ 6.8　重さ 2260 g　粗粒輝石安山岩		
4	石皿	長さ 27.9　幅 24.5　厚さ 5.1　重さ 4000 g　粗粒輝石安山岩		
5	石皿	残存長 13.3　幅 12.6　厚さ 4.4　重さ 918.3 g　粗粒輝石安山岩		
6	凹石	長さ 12.7　幅 7.2　厚さ 3.0　重さ 422.1 g　粗粒輝石安山岩		
7	多孔石	長さ 25.4　幅 17.8　厚さ 13.6　重さ 5120 g　粗粒輝石安山岩		

3号集石

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部破片	隆線・凹線 縄文 RL	波状口縁。箱状の装飾把手を橋状とする。縄文 RL を横位と縦位に施文後隆線・凹線による蕨手文。
2	縄文土器 鉢	①普通 ②橙色 ③白色粒・褐色粒 ④胴部破片	隆線・凹線 縄文 RL	縄文 RL を施文後、凹線による区画。
3	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・黒色粒・石英・礫 ④口縁部破片	隆線・凹線 沈線 縄文 RL	平縁口縁。口縁部に渦巻・楕円形の区画、区画内に沈線による羽状文を施文。胴部に縄文 RL を縦位に施文。頸部に無文帯あり。
4	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い橙～鈍い黄褐色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部～胴部上位破片 口径 (21.0)	隆線・沈線	平縁口縁。口縁部に縦位沈線後、隆線・沈線による区画。頸部に無文帯あり。
5	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙～鈍い赤褐色 ③白色粒・褐色粒・角閃石・石英 ④胴部破片	条線・凹線	コンパス文状の条線を施文後、2 本単位の凹線による幾何学文、8 字状文。
6	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い褐色 ③白色粒・角閃石 ④胴部破片	沈線・縄文 RL	沈線後、縄文 RL を横位に施文。菱形文・弧状文による幾何学文。
7	縄文土器 浅鉢	①普通 ②橙～明赤褐色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部～胴部中位 1/3 口径 34.0		山形突起の波状口縁。口縁端部に蕨手文。内外面研磨。
8	縄文土器 浅鉢	①普通 ②明赤褐～鈍い橙色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部破片		内外面研磨、赤色塗彩。
9	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い橙色 ③白色粒・黒色粒・角閃石 ④底部破片		網代痕。(2 本越し、1 本くぐり)
番号	種　類	法量 (cm)・石材		
10	敲石・磨石	長さ 13.0　幅 8.5　厚さ 4.8　重さ 734.1 g　粗粒輝石安山岩		
11	石皿	長さ 14.5　幅 10.8　厚さ 7.1　重さ 1210 g　粗粒輝石安山岩		
12	多孔石	残存長 30.2　幅 21.6　厚さ 9.1　重さ 6730 g　粗粒輝石安山岩		

4号集石

番号	種　類	法量 (cm)・石材
1	多孔石	残存長 21.5　残存幅 17.7　厚さ 7.0　重さ 4150 g　粗粒輝石安山岩

第５節　土坑・ピット

Ｊ１号土坑

Ｍ－２グリッドに位置する。平面形態はほぼ円形を呈し、規模は径85×80cm、残存壁高15cmを測る。遺物は覆土中から縄文時代中期勝坂式期・加曽利Ｅ式期の土器片がごく少量出土したのみである。

Ｊ２号土坑

Ｍ－３グリッドに位置する。平面形態はほぼ円形を呈し、規模は径115×105cm、残存壁高は45cmを測る。壁は垂直に近く立ち上がる。

遺物は胎土中に繊維を含む土器群が出土した。No.１は口縁端部に押圧の刻目を施している。頸部には浅く不明瞭な横位沈線を施す。No.２は胴上位にくびれをもって、口縁部が外行する器形である。口縁部下に丸い断面の隆帯を２段貼付する。隆線は波状を描いており、おそらく口縁部も波状を呈するかと思われる。胴部はアナダラ属の貝類による圧痕文であろう。当地域では、花積下層式期の土器に認められているが出土例は少ない。さらに類例を待って再検討したい。No.３・No.５は羽状縄文である。土器の様相からは縄文時代前期花積下層式期から黒浜式期に属すると思われる。この他、調整痕のある剥片１点が出土している。

Ｊ３号土坑

Ｌ－２グリッドに位置する。平面形態はほぼ円形を呈し、規模は径90×80cm、残存壁高は82cmを測る。壁はやや袋状を呈する。

No.１は土坑内で比較的まとまって出土している。一単位の台形把手をもち、頸部でわずかにくびれる器形である。把手頂部に横位蕨手文を配し、口縁端部の沈線に連結させる。頸部に円形文を配列し、胴部には垂線とアーチ状区画文、蛇行文を配置している。No.６も土坑内よりまとまって出土しているが、２号集石周辺出土の破片とも接合している。口縁部に平坦面をもち、口縁部から頸部及び胴部で大きく屈曲する鉢である。頸部にのみ文様帯を構成し、横位蕨手文の区画内に縄文を施文している。No.２は山形の突起をもち、口縁部がわずかに張りをもつ器形である。平坦な口縁端部には凹線を施す。波頂部を中心に蕨手文を施文したものか。口縁部直下に横線と２本の連弧文を配置している。No.７は鍔付土器で、鍔部分に上方向から小孔が穿たれている。土器の様相からは縄文時代中期加曽利Ｅ３式の中段階に属すると考えられよう。この他、打製石斧１点、磨石１点、打製石器の未製品１点、調整痕のある剥片２点、その他の剥片１点が出土している。

Ｊ４号土坑

Ｌ－２グリッドに位置する。平面形態はほぼ円形を呈し、規模は径75×65cm、残存壁高は40cmを測る。壁は漏斗状に立ち上がる。遺物出土量は少量であった。No.１は胴部上位へ外傾する器形で、垂線と蛇行文で文様を構成する。縄文時代中期加曽利Ｅ３式期中段階に属すると考えられよう。この他、調整痕のある剥片１点が出土している。

Ｊ５号土坑

Ｌ－３グリッドに位置する。平面形態はほぼ円形を呈し、規模は径85×80cm、残存壁高は60cmを測る。袋状土坑であり、底面の直径は110cmを測る。

No.１・No.２・No.３は胎土中に雲母粒を含む土器群である。No.１は大きくうねる波状口縁の扇状突起である。端部に刻目を施し、直下に櫛状工具による波状文を描く。No.２は櫛状工具による条線文を地文とし、

断面の丸い隆線を弧状に貼付して線状に刻目を施している。No.3はY字に粘土紐を貼付し、垂線部分に押圧を施す。No.4は筒状の胴部に爪形文、ペン先文を施している。この他に前期の土器片が少量出土している。土器の様相からは、縄文時代中期阿玉台式期・勝坂式期に属すると言えよう。石器類は掻器未製品1点、その他、剥片1点が出土している。

J 6号土坑

L－3グリッドに位置する。平面形態はほぼ円形を呈し、規模は径100×94cm、残存壁高は43cmを測る。壁は垂直に近く立ち上がる。8～25cmの礫が多数出土しており、遺物は礫の間に深鉢の破片が少量出土している。

No.1は口縁部下に断面三角形の隆線を巡らす深鉢である。No.2は口縁部に瘤状の貼付文を設け、沈線による区画文を施している。No.3は沈線によるJ字状の区画文を施す。共に縄文時代中期加曽利E4式期の特徴を持つ土器群である。石器では石皿が出土している。片面には凹穴が認められており多孔石としても使用されていたことがわかる。この他では調整痕のある剥片1点が出土した。

J 7号土坑

L－2グリッドに位置する。平面形態は楕円形を呈し、規模は径130×85cm、残存壁高は60cmを測る。壁は垂直に近く立ち上がり、底面は平坦である。遺物は覆土中から打製石斧1点、調整痕のある剥片1点が出土しているのみである。

J 8号土坑

K－2グリッドに位置する。南側半分が調査区域外であるが、平面形態は円形と思われる。規模は直径105cm、残存壁高は20cmを測る。壁はやや傾斜を持って立ち上がる。

遺物は底面から10cm上で深鉢の下半部(No.1)が横位で出土した。筒型の胴部をもつ深鉢で、胴上位に半截竹管状工具による横位沈線を巡らせ、3本組の沈線を垂下して文様帯を区画する。区画内に爪形文、ペン先文を箱状に配置している。勝坂式期古段階に当たる。

J 9号土坑

K－2グリッドに位置する。J 10号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。平面形態はやや不整形な円形を呈し、規模は径125×110cm、残存壁高は30cmを測る。壁は垂直に近く立ち上がり、底面は平坦である。遺物は覆土中から、縄文時代前期関山式期及び中期の土器片が少量出土した。石器は円盤状の凹石・磨石1点、調整痕のある剥片5点、その他の剥片3点、黒曜石片1点が出土している。

J 10号土坑

K－2グリッドに位置する。J 9号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。平面形態はほぼ円形を呈し、規模は径120×110cm、残存壁高は75cmを測る。壁は垂直に近く立ち上がり、底面は平坦である。

No.1は隆線と凹線による区画文、No.4は胴上位でくびれる器形で、沈線によるJ字文と思われる。これら土器の様相から縄文時代中期加曽利E3からE4式期に属すると思われる。この他、石器は調整痕のある剥片3点、その他の剥片1点、チャート片1点が出土した。

J 11 号土坑

K－3グリッドに位置する。西側に4号炉が接している。平面形態はやや不整形な円形を呈し、規模は径100×90㎝、残存壁高は35㎝を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり底面は平坦である。遺物は覆土中から縄文時代中期勝坂式期の土器片が少量と、チャート片が1点出土している。

J 12 号土坑

J－2グリッドに位置する。J 13号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。平面形態はほぼ円形を呈し、規模は径90×86㎝、残存壁高は47㎝を測る。壁は垂直に近く立ち上がり、底面は平坦である。遺物は覆土中から縄文時代中期に属すると思われる浅鉢片と、石器剥片1点が出土した。

J 13 号土坑

J－3グリッドに位置する。J 12・14号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。平面形態は不整形であり、規模は径150×115㎝、残存壁高は35㎝を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。遺物は覆土中から縄文時代中期阿玉台式期に属する土器片が少量、掻器未製品1点、調整痕のある剥片2点が出土している。

J 14 号土坑

J－3グリッドに位置する。J 13号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。平面形態はほぼ円形を呈し、規模は径85㎝、残存壁高は40㎝を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は出土していない。

J 15 号土坑　欠番である。

J 16 号土坑

J－3グリッドに位置する。平面形態はほぼ円形を呈し、規模は径82×77㎝、残存壁高は20㎝を測る。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、底面は凹凸が顕著である。遺物は縄文時代中期の土器小片が出土した。

J 17 号土坑

I・J－4グリッドに位置する。J 83号土坑と重複するが新旧関係は不明である。平面形態はほぼ円形を呈し、規模は径95×85㎝、残存壁高は40㎝を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。遺物は覆土中から縄文時代中期加曽利E 2からE 3式期の土器片が少量出土した。

J 18 号土坑

J－2グリッドに位置する。平面形態はやや不整形な円形を呈し、規模は径82×77㎝、残存壁高は47㎝を測る。壁は緩やかに立ち上がる。遺物は覆土中から、縄文時代中期阿玉台式期・勝坂式器期の土器片が少量出土した。

J 19 号土坑

J－2グリッドに位置する。J 23号土坑と重複するため西側の壁が不明だが、平面形態はおそらく楕円形を呈すと思われる。規模は長軸120㎝、短軸不明、残存壁高は58㎝を測る。壁は垂直に近く立ち上がり、

底面は平坦である。

遺物は覆土中から縄文時代中期阿玉台式期・勝坂式期の土器片が少量出土した。石器ではチャート製石鏃(凹基鏃)が1点、磨製石斧1点が出土している。

J 20号土坑

Ⅰ－2・3グリッドに位置する。J 27号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。平面形態はほぼ円形を呈し、規模は径145×135cm、残存壁高は53cmを測る。壁はやや傾斜を持って立ち上がる。

№1は口縁端部を欠く口縁部片で、口縁直下に横位の沈線と波状文を施す。№2は無文で椀状の鉢である。縄文時代中期加曽利E 1式期にあてられよう。石器では、打製石斧1点、調整痕のある剥片6点、その他の剥片3点が出土している。

J 21号土坑

J－1グリッドに位置する。東側半分が調査区域外であるが、平面形態は円形と思われる。規模は径120cm、残存壁高は5cmと浅く、壁の状況は不明である。

遺物は図示した縄文時代前期の土器が1点出土した。胎土中に繊維を含み、半截竹管状工具によって三角文を構成する。関山式期に属すると考えられよう。この他調整痕のある剥片2点が出土している。

J 22号土坑

J－1・2グリッドに位置する。平面形態は円形を呈し、規模は直径105cm、残存壁高は48cmを測る。やや袋状を呈する土坑であり、底面の直径は110cmを測る。

遺物は覆土中から、縄文時代中期阿玉台式期・勝坂式期から堀之内式期にわたる土器片が出土している。中でも一定量が出土している時期の深鉢を図示した。口縁部が丸く張りを持ち、縄文の上に大きな波状文を描き、波状間には蕨手文を配すると思われる。縄文時代中期加曽利E 3式期に属するであろう。この他、打製石斧1点、多孔石の破片1点、加工痕のある石片1点が出土している。

J 23号土坑

Ⅰ・J－2グリッドに位置する。J 19・24号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。平面形態は楕円形を呈し、規模は径130×85cm、残存壁高は24cmを測る。壁はやや傾斜を持って立ち上がる。

遺物は覆土中から、縄文時代中期加曽利E 3式期の土器片が少量出土している。小片の為図示しなかった。この他、打製石斧が2点(№1・№2)、調整痕のある剥片1点、加工痕のある石片2点が出土した。

J 24号土坑

Ⅰ－2グリッドに位置する。J 23号土坑と重複するため東側の壁が不明だが、平面形態はおそらく楕円形を呈すと思われる。規模は径55cm、残存壁高は15cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。遺物は深鉢の破片が出土している。

J 25号土坑

Ⅰ・J－2グリッドに位置する。J 26号土坑と重複するため西側の壁が不明だが、平面形態はおそらく円形を呈すと思われる。規模は径115cm、残存壁高は50cmを測る。壁は傾斜を持って立ち上がる。

遺物は覆土中から、縄文時代前期諸磯式期から中期阿玉台式期・勝坂式期・加曽利Ｅ式期までの深鉢土器片が出土したが、小片の為図示しなかった。

Ｊ 26 号土坑

Ｉ－２グリッドに位置する。25・27 号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。平面形態は楕円形を呈し、規模は径 107 × 90cm、残存壁高は 64cmを測る。壁はやや傾斜を持って立ち上がる。

No. 1 は口縁部を欠く為明確にできないが、胴部に強い屈曲を持つ鉢と思われる。頸部に横位蕨手文の区画文を作り、縄文を充填している。胴部への屈曲部分には、隆帯を貼付する。加曽利Ｅ３式期中段階に当てられよう。No. 2 はくびれた胴部から口縁部へ外傾する器形で、口縁端部が立ち上がって内屈する深鉢である。縄文時代後期称名寺式期に属するであろう。この他、調整痕のある剥片１点が出土している。

Ｊ 27 号土坑

Ｉ－２グリッドに位置する。Ｊ 20・26 号土坑と重複するため不明だが、平面形態は円形を呈すと思われる。規模は約径 110cm、残存壁高は 40cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

遺物はNo. 1 の深鉢が比較的まとまって出土している。胴部上位へ開く器形で、胴上位に隆帯を巡らし、口縁部と文様帯を分離させている。胴部文様帯は上位の隆帯から直線的に垂下させた隆線と、曲線的な隆線に沈線、ペン先文、三角文を配置している。土器の様相からは縄文時代中期勝坂式期に属すると思われる。この他、打製石斧２点、調整痕のある剥片１点、その他の剥片１点、黒曜石片１点が出土している。

Ｊ 28 号土坑

Ｉ－３グリッドに位置する。平面形態はやや不整形な楕円形を呈し、規模は径 183 × 154cm、残存壁高は 67cmを測る。壁は垂直に近く立ち上がり、上半部が大きく開く。

No. 1 は波状口縁の波頂部から楕円状の隆線を貼付し、線上に沈線を施す。波頂部からは沈線を沿わせて区画文を作る。No. 2 は沈線区画文の深鉢。No. 3 は舟形の装飾突起を持つ深鉢で、共に縄文時代後期称名寺式期に属すると思われる。この他、調整痕のある剥片２点、その他の剥片４点、チャート片１点が出土している。

Ｊ 29 号土坑

Ｈ・Ｉ－３グリッドに位置する。平面形態は楕円形を呈し、規模は径 145 × 132cm、残存壁高は 38cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がる。

No. 1 は口縁部に丸く張りを持ち端部が屈曲する器形の深鉢である。半截竹管状工具による連続半円文を重ねて連華文を並べ、ペン先文を沿わせている。縄文時代中期勝坂式期に属すると言えよう。No. 2 は口縁部が丸く張って頸部でくびれる器形で、口縁部から垂線と蛇行線を配置している。加曽利Ｅ３式期でも新段階に当たるであろう。この他、磨石片２点、調整痕のある剥片５点が出土している。

Ｊ 30 号土坑

Ｊ－１グリッドに位置する。南側が調査区域外となり不明だが、平面形態は円形を呈すと思われる。規模は東西軸の径 125cm、残存壁高は 113cmを測る。壁はやや袋状を呈する。

No. 1 は口縁部が丸く張る器形で、断面が三角形の隆線を巡らし、沈線による区画文を曲線的に配置する。No. 2 は同一個体と思われる。No. 3 は口縁部から頸部へ強く屈曲する鉢で、No. 4・No. 5 は口縁部下に円形文

を並べる。ともに加曽利Ｅ３式期からＥ４式期に属するものである。石器は磨石・凹石（No.6)、多孔石（No.7)の他、打製石斧１点、小型棒状の敲石片１点、調整痕のある剥片12点、その他の剥片３点が出土している。

Ｊ31号土坑

Ｉ－１グリッドに位置する。平面形態はほぼ円形を呈し、規模は径135×120cm、残存壁高は60cmを測る。壁はややオーバーハング気味に立ち上がる。遺物は覆土中から、縄文時代中期加曽利Ｅ２式期・Ｅ３式期の深鉢と浅鉢の小片が出土している。No.1は赤彩が施されている。

Ｊ32号土坑

Ｉ－１グリッドに位置する。平面形態は円形を呈し、規模は直径80cm、残存壁高は22cmを測る。壁は垂直に近く立ち上がる。遺物は覆土中から、縄文時代前期関山式期から黒浜式期の深鉢片、中期の浅鉢小片が出土している。また石器剥片が１点出土した。

Ｊ33号土坑

Ｉ－３グリッドに位置する。Ｊ５号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。平面形態は円形を呈し、規模は直径80cm、残存壁高は100cmを測る。壁はややオーバーハング気味に立ち上がり、底面は平坦である。

No.1は沈線による横位と縦位の区画文を構成し、横線間に円形の交互刺突文を配置している。No.2は断面台形の隆帯による施文である。「胴部隆帯文」の深鉢であろう。No.3・No.4は浅鉢である。No.1は縄文時代中期五領ヶ台式期、No.2は加曽利Ｅ式期に属すると言えよう。

Ｊ34号土坑

Ｇ－１グリッドに位置する。平面形態はほぼ円形を呈し、規模は径112×102cm、残存壁高は16cmを測る。壁は傾斜を持って立ち上がり、底面は平坦である。遺物は出土していない。

Ｊ35号土坑

Ｈ－２グリッドに位置する。平面形態は楕円形を呈し、規模は径145×110cm、残存壁高は25cmを測る。壁は傾斜を持って立ち上がり、底面は平坦である。

No.1は口縁部の区画文中に縦位沈線を充填する深鉢である。縄文時代中期加曽利Ｅ３式期に属すると言えよう。この他、中期阿玉台式期・勝坂式期の土器片が少量出土した。石器では調整痕のある剥片２点、その他の剥片２点、黒曜石片１点、石片１点が出土している。

Ｊ36号土坑

Ｈ－２グリッドに位置する。Ｊ５号住居跡、Ｊ41号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。平面形態は楕円形を呈し、規模は径200×158cm、残存壁高は170cmを測る。壁は大きく開いて立ち上がり、中段からオーバーハング気味となっている。

No.2は大型の深鉢で、縄文及び沈線による施文である。No.6・No.7は無文の胴部に沈線によるＪ字文や蛇行文を施している。No.8は断面三角形の隆線による渦巻文である。この他、前期、中期阿玉台式期・勝坂式期・加曽利Ｅ３式期の土器片も出土しているが、主体を占めるのは、中期加曽利Ｅ４式期から後期称名寺式期である。また石器では打製石斧片１点、調整痕のある剥片４点が出土している。

J 37 号土坑

H－3グリッドに位置する。J 5号住居跡と重複するが、新旧関係は不明である。平面形態はほぼ円形を呈し、規模は径 120 × 110cm、残存壁高は 30cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。

遺物は覆土中から土器片が少量出土している。No. 1 は口縁部下の沈線内に円形刺突文を並べている。No. 2 は胴部上位の横線から垂線を下ろして区画する。縄文時代中期加曽利E式期の古段階に属するかと考えられる。また打製石斧片 1 点 (No. 3) の他、石器剥片 3 点が出土している。

J 38 号土坑

H－4グリッドに位置する。平面形態はほぼ円形を呈し、規模は径 83 × 77cm、残存壁高は 63cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。遺物は覆土中から、縄文時代前期、中期阿玉台式・勝坂式期・加曽利E式の土器片が少量出土している。また、多孔石片が出土した。

J 39 号土坑

G・H－1グリッドに位置する。平面形態は楕円形を呈し、規模は径 177 × 147cm、残存壁高は 135cmを測る。壁は垂直に近く立ち上がり、上半部が開く。底面は平坦である。

No. 1 は胴部上位に張りをもつ器形の「胴部隆帯文」土器である。No. 2 は口縁部へ外行する胴部上位に断面三角形の隆帯を巡らし、条線で弧線を垂下している。NO.3 は無文に J 字文を施している。No. 1 は縄文時代中期加曽利E 3式期に属し、No. 2・No. 3 は後期称名寺式期に属すると考えられよう。この他石器では、磨製石斧片 1 点、調整痕のある剥片 2 点、その他の剥片 3 点が出土している。

J 40 号土坑

H－2グリッドに位置する。平面形態はほぼ円形を呈し、規模は径 82 × 67cm、残存壁高は 60cmを測る。壁は垂直気味に立ち上がり、底面はやや凹凸が見られる。遺物は覆土中から、縄文時代中期加曽利E 2からE 3式期の深鉢片が少量出土している。また調整痕のある剥片 2 点も出土した。

J 41 号土坑

H－2グリッドに位置する。J 5号住居跡、J 36 号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。平面形態は楕円形を呈し、規模は径 80 × 67cm、残存壁高は 48cmを測る。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、底面は凹凸が顕著である。

遺物は覆土中から、縄文時代中期勝坂式期の深鉢片及び中期の浅鉢片が少量出土している。この他、調整痕のある剥片 1 点が出土した。

J 42 号土坑

G－1グリッドに位置する。平面形態は円形を呈し、規模は直径 100cm、残存壁高は 45cmを測る。壁は垂直に近く立ち上がり、底面はやや凹凸が見られる。遺物は出土していない。

J 43 号土坑

G－1グリッドに位置する。平面形態は楕円形を呈し、規模は径 105 × 83cm、残存壁高は 15cmを測る。壁は傾斜を持って立ち上がり、底面は平坦である。遺物は覆土中から、縄文時代中期加曽利E 3式期の深鉢

片が少量出土している。

J 44 号土坑

G－2・3グリッドに位置する。J 45 号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。平面形態は楕円形を呈し、規模は径 170 × 140㎝、残存壁高は 45㎝を測る。壁は緩やかに立ち上がる。底面には径 22㎝、深さ 24㎝の小ピットが穿たれる。遺物は覆土中から、縄文時代中期阿玉台式期の深鉢片が少量出土している。

J 45 号土坑

G－2・3グリッドに位置する。J 44 号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。平面形態はほぼ円形を呈し、規模は径 95 × 92㎝、残存壁高は 45㎝を測る。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、底面は平坦である。遺物は覆土中から、縄文時代中期加曽利Ｅ３式期の深鉢片が少量出土している。この他、頁岩製の石鏃１点、調整痕のある剥片１点が出土した。

J 46 号土坑

G－3グリッドに位置する。平面形態は楕円形を呈し、規模は径 130 × 110㎝、残存壁高は 32㎝を測る。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、底面は平坦である。遺物は覆土中から、縄文時代中期加曽利Ｅ３式期の深鉢片が少量出土している。

J 47 号土坑

G－4グリッドに位置する。平面形態はほぼ円形を呈し、規模は径 118 × 113㎝、残存壁高は 15㎝を測る。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、底面は平坦である。

遺物は覆土中から、縄文時代中期阿玉台式期・加曽利Ｅ４式期の深鉢片が少量出土している。この他、調整痕のある剥片１点、その他の剥片１点が出土した。

J 48 号土坑

F－2グリッドに位置する。J 7 号住居跡、J 50 号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。平面形態は円形を呈し、規模は直径 88㎝、残存壁高は 50㎝を測る。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、底面はやや凹凸が見られる。

遺物は覆土中から、縄文時代中期勝坂式期・加曽利Ｅ３式期の深鉢片が少量出土している。この他、打製石斧片１点、調整痕のある剥片２点が出土した。

J 49 号土坑

F・G－2グリッドに位置する。J 7 号住居跡と重複し本土坑が古い。平面形態はほぼ円形を呈し、規模は径 120 × 116㎝、残存壁高は 35㎝を測る。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、底面はやや凹凸が見られる。遺物は覆土中から縄文時代中期加曽利Ｅ３式期の深鉢片が少量出土している。

J 50 号土坑

F－2グリッドに位置する。J 7 号住居跡、J 48 号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。平面形態は楕円形を呈し、規模は径 100 × 76㎝、残存壁高は 46㎝を測る。壁はややオーバーハング気味に立ち

上がり、底面は平坦である。遺物は覆土中から、縄文時代中期加曽利Ｅ３式期の深鉢片が少量出土している。

Ｊ 51 号土坑

Ｆ－３グリッドに位置する。Ｊ 52 号土坑と重複するため不明だが、平面形態は円形を呈すと思われる。規模は東西軸の径 90㎝、残存壁高は 35㎝を測る。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、底面はやや凹凸が見られる。遺物は覆土中から縄文時代後期堀之内式期の深鉢片や、黒曜石片１点が出土している。

Ｊ 52 号土坑

Ｆ－３グリッドに位置する。Ｊ７号住居・Ｊ 51 号土坑と重複するため不明だが、平面形態は円形を呈すと思われる。規模は東西軸の径 80㎝、残存壁高は 35㎝を測る。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、底面はやや凹凸が見られる。遺物は覆土中から縄文時代後期堀之内式期の深鉢片が少量出土している。

Ｊ 53 号土坑

Ｆ－３グリッドに位置する。Ｊ 54 号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。平面形態は楕円形を呈し、規模は径 103 × 75㎝、残存壁高は 38㎝を測る。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、底面は平坦である。遺物は覆土中から、縄文時代後期堀之内式期の深鉢片が少量出土している。

Ｊ 54 号土坑

Ｆ－３グリッドに位置する。Ｊ 53 号土坑、Ｊ 55 号土坑と重複するため不明であるが、平面形態は楕円形を呈すと思われる。規模は東西軸の径 85㎝、残存壁高は 30㎝を測る。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、底面は平坦である。遺物は覆土中から、縄文時代後期堀之内式期の深鉢片が少量出土している。

Ｊ 55 号土坑

Ｆ－３グリッドに位置する。Ｊ 54 号土坑と重複するため不明であるが、平面形態は楕円形を呈すと思われる。規模は東西軸の径 97㎝、残存壁高は 20㎝を測る。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、底面は平坦である。遺物は覆土中から、縄文時代中期加曽利Ｅ３式期の深鉢片が少量と、調整痕のある剥片１点、その他の剥片１点が出土している。

Ｊ 56 号土坑

Ｆ－３グリッドに位置する。平面形態は円形を呈し、規模は直径 68㎝、残存壁高は 25㎝を測る。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、底面は凹凸が見られる。遺物は出土していない。

Ｊ 57 号土坑

Ｆ－１グリッドに位置する。平面形態は楕円形を呈し、規模は径 70 × 60㎝、残存壁高は 28㎝を測る。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、底面は凹凸が見られる。遺物は出土していない。

Ｊ 58 号土坑

Ｆ－２グリッドに位置する。平面形態は円形を呈し、規模は直径 80㎝、残存壁高は 95㎝を測る。壁はオーバーハングしており、底面は平坦である。

No.1は口縁部と胴下位を欠く中型の深鉢で、口縁部へ外傾する器形である。当遺跡内では炉体土器として転用されている加曽利E３式期の深鉢に多く認められる器形である。胴部の文様は「胴部隆帯文」といわれる唐草文である。No.2は口縁部が丸く張りをもつ器形で、口縁部下の隆帯から連結させて曲線文を構成している。No.3は小波状口縁で瘤状の貼付文を持つ。出土遺物の様相からは、縄文時代中期加曽利E３式期から４式期の様相が混在している。また中期勝坂式期の深鉢片も少量出土している。この他、調整痕のある剥片２点、その他の剥片４点が出土した。

J 59号土坑

F－２・３グリッドに位置する。平面形態は円形を呈し、規模は直径96cm、残存壁高は20cmを測る。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、底面は平坦である。遺物は覆土中から、縄文時代中期阿玉台式期の深鉢片が少量出土している。

J 60号土坑

F－３グリッドに位置する。平面形態はほぼ円形を呈し、規模は径53×50cm、残存壁高は15cmを測る。壁は垂直に近く立ち上がり、底面はやや凹凸が見られる。

No.1は口縁部がわずかに内湾する器形で、横位蕨手文の区画文で文様帯を構成する。区画内に円形刺突文を配置している。口縁部文様帯直下からアーチ状の沈線を垂下して、無文帯を配する。縄文時代中期加曽利E３式期に属するであろう。

J 61号土坑

F－３グリッドに位置する。平面形態は楕円形を呈し、規模は径76×52cm、残存壁高は50cmを測る。壁はやや傾斜を持って立ち上がる。

遺物は覆土中から、縄文時代中期阿玉台式期・加曽利E３式期からE４式期の深鉢片が少量出土している。また打製石斧１点(No.1)の他剥片１点が出土した。

J 62号土坑

E－１グリッドに位置する。平面形態は楕円形を呈し、規模は径57×50cm、残存壁高は65cmを測る。袋状土坑である。遺物は覆土中から、縄文時代中期加曽利E２式期からE３式期の深鉢片が少量出土している。

J 63号土坑

E－１グリッドに位置する。北東側がピットと重複し不明だが、平面形態は楕円形を呈すと思われる。規模は東西軸の径175cm、残存壁高は32cmを測る。壁はやや傾斜して立ち上がる。遺物は出土していなかった。

J 64号土坑

E－１グリッドに位置する。J 63号土坑と一部重複するが平面形態はほぼ円形を呈し、規模は径105×90cm、残存壁高は50cmを測る。壁はやや傾斜して立ち上がる。遺物は覆土中から、縄文時代中期勝坂式期・加曽利E３式期・後期加曽利E式期の深鉢片が少量出土している。

J 65 号土坑

E－1グリッドに位置する。東側がコンクリート構造物のため不明だが、平面形態は円形を呈すと思われる。規模は南北軸の径 98cm、残存壁高は 46cmを測る。壁はやや傾斜して立ち上がる。

遺物は覆土中から、縄文時代中期、加曽利E３式期の深鉢片が少量出土している。強い被熱痕が認められた。この他、調整痕のある剥片２点、黒曜石片１点が出土した。

J 66 号土坑

E－２グリッドに位置する。平面形態は楕円形を呈し、規模は径 118 × 60cm、残存壁高は 45cmを測る。壁はやや傾斜して立ち上がる。

遺物は縄文時代後期称名寺式期から堀之内式期の土器片が認められた。No.１は口縁部が外行する器形の深鉢で、口縁端部を内屈させている。細い隆帯を２本巡らして胴上位には沈線による曲線文を配置する。No.３は同一個体であろう。No.４は胴部に沈線による帯状の区画をつくり、沈線文と縄文を充填する。No.２は頸部から口縁部へ外反する器形で、口縁端部がわずかに内屈して立ち上がり円形文を並べる。ともに後期称名寺式期から堀之内式期に属すると考えられる。No.５・No.６は胴下位から底部へ外反する深鉢である。この他円盤状土製品（No.7）が出土した。また、石器の剥片３点が出土している。

J 67 号土坑

E－２グリッドに位置する。北側がピットと重複するため不明だが、平面形態は楕円形を呈すと思われる。規模は東西軸の径 85cm、残存壁高は 42cmを測る。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、底面は凹凸が顕著である。遺物は覆土中から、縄文時代中期阿玉台式期・加曽利E３式からE４式期・後期堀之内式期の深鉢片が少量出土している。また敲石片１点、多孔石１点（No.1）調整痕のある剥片１点が出土した。

J 68 号土坑

E－２グリッドに位置する。平面形態は楕円形を呈し、規模は径 165 × 125cm、残存壁高は 50cmを測る。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

No.１は頸部に無文帯を持ち、口縁部の区画内に比較的細かい縦沈線を配する。胴部との区割りには横位の沈線を巡らしている。No.２は口縁部が丸く張り、口縁部区画文から直接胴部文様帯を構成している。No.３は口縁端部を外側に肥厚させて稜を作る。波頂部からは沈線による曲線区画文を配置する。No.５は山形の装飾突起で、円形刺突文を並べる。器面調整は粗い。縄文時代中期加曽利E２式期・E４式期・称名寺式期に属する土器片が認められた。No.６は打製石斧であるが、刃部が鋸歯状を呈している。この他、打製石斧１点、打製石器未製品２点、台石状石皿１点・多孔石片１点、調整痕のある剥片 11 点、剥片８点片、岩棒状礫片１点、チャート片５点、黒曜石片８点が出土している。

J 69 号土坑

E－２・３グリッドに位置する。平面形態はほぼ円形を呈し、規模は径 110 × 105cm、残存壁高は 85cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。

縄文時代中期加曽利E４式期から後期称名寺式期の深鉢が比較的まとまって出土している。No.１・No.２は口縁部がわずかに内湾する大型の深鉢で、No.１は口縁部下に断面三角形の隆帯、No.２は沈線を巡らす。No.３は円孔をもった装飾突起で沈線と円形刺突文を配置する。No.５は胴上位でくびれるやや小型の深鉢で、沈

線によるＪ字文を組み合わせる。№６は同様な器形の深鉢底部である。№７は精製された胎土で、胴部に丸く張りを持つ器形である。この他、調整痕のある剥片１点、その他の剥片５点が出土している。

Ｊ 70 号土坑

Ｅ－３・４グリッドに位置する。平面形態は楕円形を呈し、南側に半円状の張り出しが見られる。規模は径 183 × 140cm、残存壁高は 105cm、張り出し部は長さ 67cm、幅 100cm、深さ 15cmを測る。壁はややオーバーハングして立ち上がり、底面は平坦である。

縄文時代後期称名寺式から堀之内式期また加曽利Ｂ式期の深鉢がまとまって出土している。№１はＪ字文の大型深鉢である。№２は口縁部端部が立ち上がる深鉢で、方形の区画文を配置している。№４・№５は無文の深鉢で、№４は口縁内側に沈線を設ける。№３は口縁部に波状の装飾を貼付し、器面を研磨した深鉢である。内面に数段の横沈線を巡らしている。外面は横沈線を３本巡らし、底部には網代圧痕が認められている。また時期的には中期に属すると思われる、器台形土器（№8）も出土した。石器類も多数出土している。打製石斧は 10 点出土し、そのうち４点（№９～№12）を図示した。円盤状の磨石１点（№13）、比較的整った側縁部を作り出した石皿（№14）１点、台石ともいえそうな石皿１点（№15）、多孔石４点（№16 ～ 19）が出土した。また、大型石棒片かと推測できる石片が１点、調整痕のある剥片 10 点、その他の剥片 14 点、チャート片１点、黒曜石片４点が出土している。

Ｊ 71 号土坑

Ｄ－１グリッドに位置する。平面形態は不整形であり、規模は径 95 × 80cm、残存壁高は 20cmを測る。壁はやや傾斜を持って立ち上がる。

遺物は覆土中から、縄文時代中期阿玉台式期・加曾利Ｅ３からＥ４式期、後期加曾利Ｂ式期と思われる深鉢片が混在して出土している。この他、黒曜石製石鏃が１点（№1）、調整痕のある剥片２点が出土した。

Ｊ 72 号土坑

Ｄ－１グリッドに位置する。平面形態は楕円形を呈し、規模は径 140 × 126cm、残存壁高は 87cmを測る。壁はオーバーハングして立ち上がり、底面は平坦である。

遺物は覆土中から、縄文時代中期加曾利Ｅ３式期の深鉢片が出土しているが小片であった。№１は口縁部が丸く張りを持つ深鉢である。口縁部の下に２本の横位沈線を巡らし、弧線文を配置している。№２は深鉢のミニチュアで底部に縄文が認められる。№１は縄文時代中期加曾利Ｅ３式期に、№２は前期に属すると言えよう。この他、片岩製の石皿かと思われる石片が１点出土している。

Ｊ 73 号土坑

Ｄ－１グリッドに位置する。平面形態はほぼ円形を呈し、規模は径 83 × 72cm、残存壁高は 42cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。遺物は覆土中から、縄文時代中期加曾利Ｅ３式期からＥ４式期の深鉢小片が出土している。この他、黒曜石片１点が出土している。

Ｊ 74 号土坑

Ｄ－２グリッドに位置する。平面形態は不整形であり、規模は径 125 × 100cm、残存壁高は 43cmを測る。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、底面は平坦である。

No.1は直線的に外傾する深鉢で、胴部上位に刻目を付けた隆帯を巡らし8字状の貼付文を配置する。胴部中位には2本の沈線による蛇行文を配置している。No.2は鋭い沈線による幾何学文である。共に縄文時代後期堀之内式期に属すると考えられよう。

J 75号土坑

C－3グリッドに位置する。平面形態はほぼ楕円形を呈し、規模は径105×95cm、残存壁高は35cmを測る。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、底面は平坦である。遺物は覆土中から、縄文時代中期加曾利E 4式期と後期堀之内式期に属する深鉢片が混在して出土している。

J 76号土坑

B・C－3・4グリッドに位置する。平面形態は楕円形を呈し、規模は径142×122cm、残存壁高は94cmを測る。壁はオーバーハングして立ち上がり、底面は平坦である。

遺物は覆土中から、縄文時代中期阿玉台式期・勝坂式期・加曾利E 3式期の深鉢片が出土しているが、いづれも小片でまとまりを持たなかった。また、後期称名寺式期の土器片も少量出土した。この他円盤状土製品(No.1)が出土した。石器では打製石斧片1点、磨石1点(No.2)、調整痕のある剥片3点、その他の剥片5点、黒曜石片1点が出土している。磨石は凝灰岩製で上下面とも平坦な磨面を作り、全体は丸く重量もある。用途を考えさせられる石器である。

J 77号土坑

C－4グリッドに位置する。平面形態は楕円形を呈し、規模は径105×65cm、残存壁高は67cmを測る。壁は垂直に立ち上がる。

No.1は口縁部内側に沈線や刻目を施す深鉢で、内外を研磨している。No.2は外面に2本の隆帯を巡らして、さらに横位沈線で胴部を区画している。内外とも丁寧な研磨調整である。No.4は胴部に横位沈線で区画した文様帯を持つ深鉢である。文様は磨消縄文で三角状を基本とする幾何学的文様構成をとる。共に縄文時代後期堀之内式期に属すると言えよう。No.3は8字を作る装飾突起である。この他チャート片が出土している。

J 78号土坑

B－2グリッドに位置する。平面形態はほぼ円形を呈し、規模は径96×87cm、残存壁高は50cmを測る。壁はややオーバーハング気味に立ち上がり、底面は平坦である。遺物は覆土中から、縄文時代中期の深鉢片が少量出土している。

J 79号土坑

B－2・3グリッドに位置する。平面形態は不整形であり、規模は径145×105cm、残存壁高は27cmを測る。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、底面はやや凹凸が見られる。

遺物は覆土中から、縄文時代中期加曾利E 3式期からE 4式期の深鉢片が少量出土している。この他、多孔石としても使用された石皿が1点、調整痕のある剥片2点が出土した。

J 80号土坑

A・B－3グリッドに位置する。平面形態は楕円形を呈し、規模は径107×80cm、残存壁高は80cmを測る。

壁はやや傾斜を持って立ち上がる。

№1は底部に網代圧痕が認められる深鉢であり、縄文時代後期に属すると考えられよう。この他、打製石斧片が1点出土している。

J 81号土坑

A－2・3グリッドに位置する。西側が調査区域外のため不明であるが、平面形態は楕円形を呈し、規模は東西が推定で径85cm、南北75cm、残存壁高は54cmを測る。壁は緩やかに立ち上がる。遺物は覆土中から、縄文時代中期勝坂式期の深鉢片が少量出土している。この他、黒曜石片1点が出土している。

J 82号土坑

A－3グリッドに位置する。西側が調査区域外のため不明であるが、平面形態は円形を呈すと思われる。規模は直径80cm、残存壁高は50cmを測る。袋状土坑であり、底面の径125cmを測る。

遺物は覆土中から、縄文時代後期堀之内式期の深鉢が比較的まとまって出土している。№1は大型の深鉢で口縁部に円形文を貼付した装飾突起を持ち、内側に沈線と稜を設ける。外面は口縁部下に刻目のある隆帯と、上下に沈線で区画した横位の文様帯を配置している。№2は隆帯と沈線による文様構成で口縁部内側に沈線を施す。№3も同様の文様構成を持つ。№5は装飾突起である。頂部は渦巻文で丸い側面は沈線を羽状に施す。口縁端部との接合部は8字状に重ねて円形文を配置する。丁寧な調整の土器である。共に後期堀之内式期に属すると考えられよう。この他、調整痕のある剥片1点が出土している。

J 83号土坑

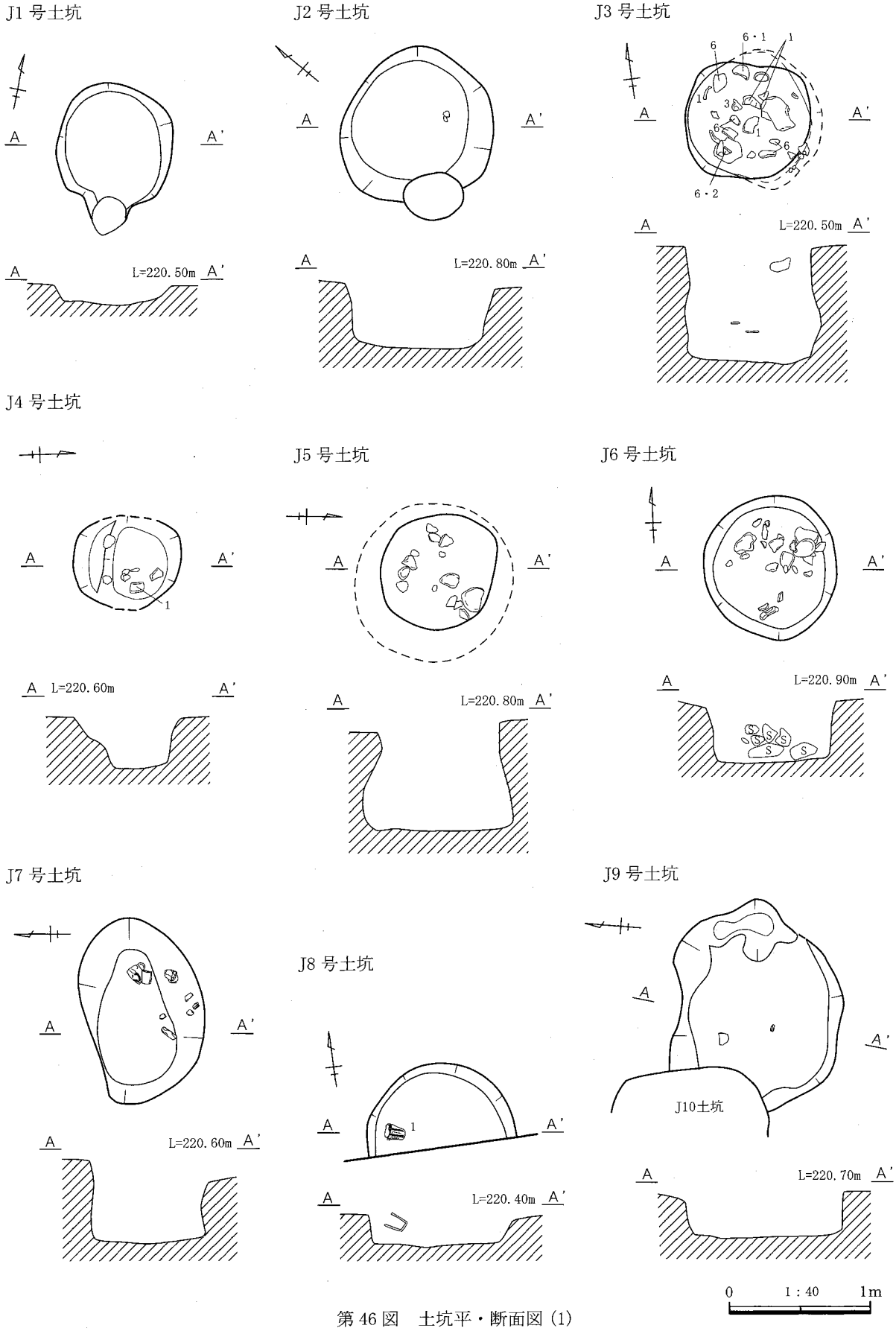
J－3・4グリッドに位置する。3号集石、J 17号土坑と重複し、J 83号土坑より3号集石の方が新しく、J 17号土坑とは新旧関係は不明である。平面形態はほぼ円形を呈し、規模は径117×105cm、残存壁高は50cmを測る。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、底面は平坦である。遺物は覆土中から打製石斧2点、剥片が1点出土した。

J 84号土坑

G－3グリッドに位置する。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は径103×70cm、残存壁高は46cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はやや凹凸が見られる。遺物は覆土中から、縄文時代中期加曾利E3式期の深鉢片が出土している。

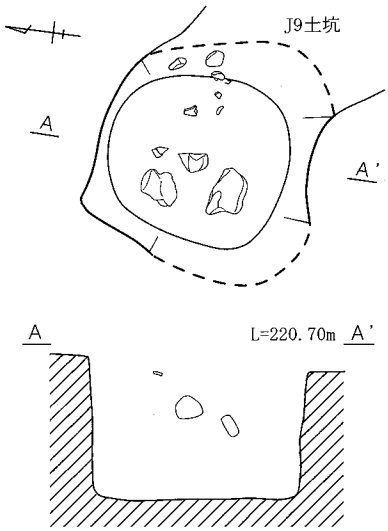
J 85号土坑

I－2グリッドに位置する。3号埋甕と重複し、J 85号土坑→3号埋甕の順で新しい。平面形態は円形を呈し、規模は直径105cm、残存壁高は50cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。遺物は出土していない。

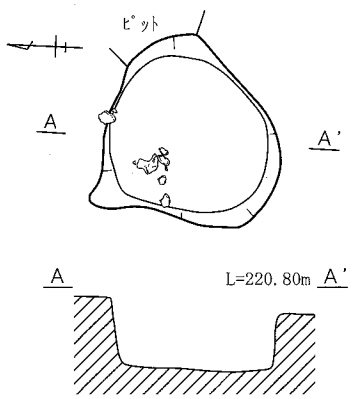


第46図　土坑平・断面図 (1)

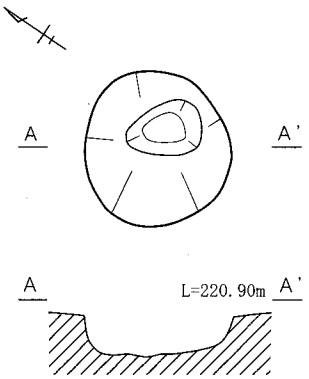
J10 号土坑



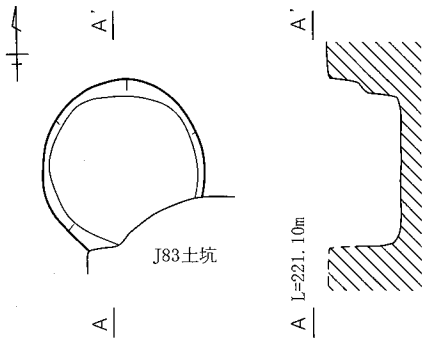
J11 号土坑



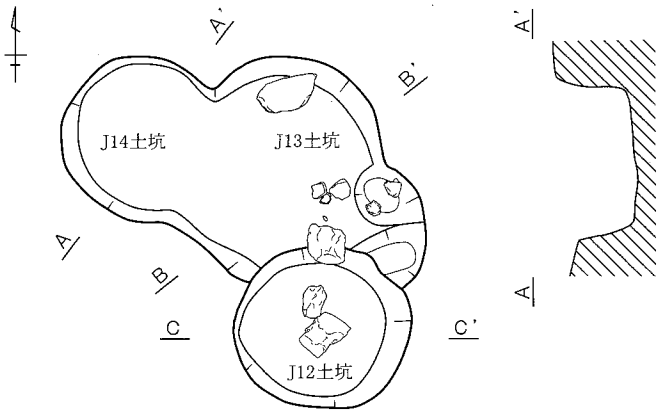
J16 号土坑

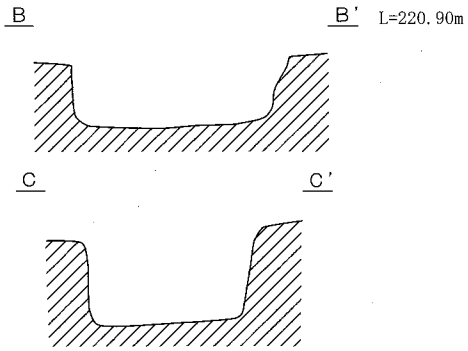


J17 号土坑

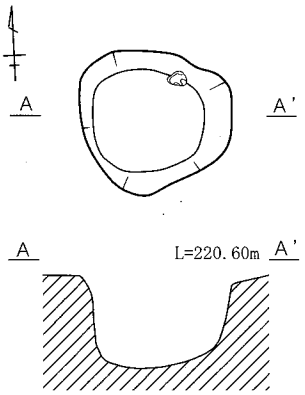


J12・13・14 号土坑





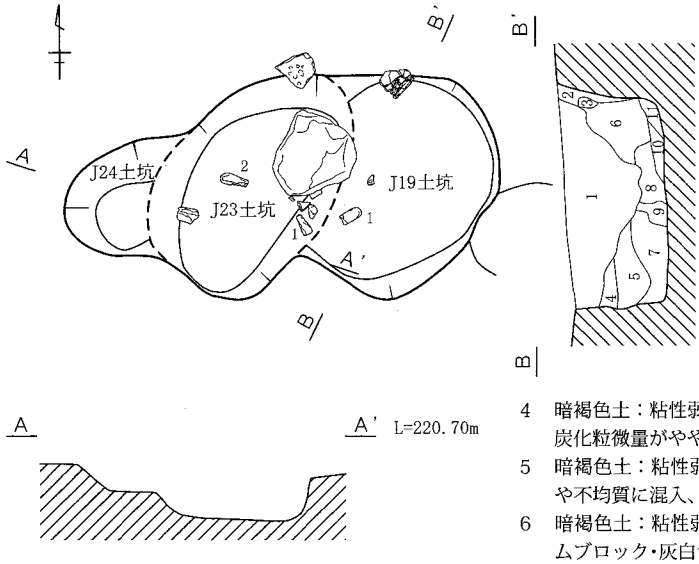
J18 号土坑



0　1：40　1m

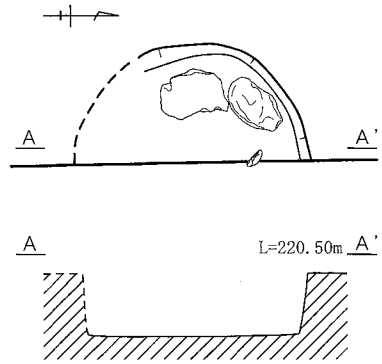
第 47 図　土坑平・断面図 (2)

J19・23・24 号土坑



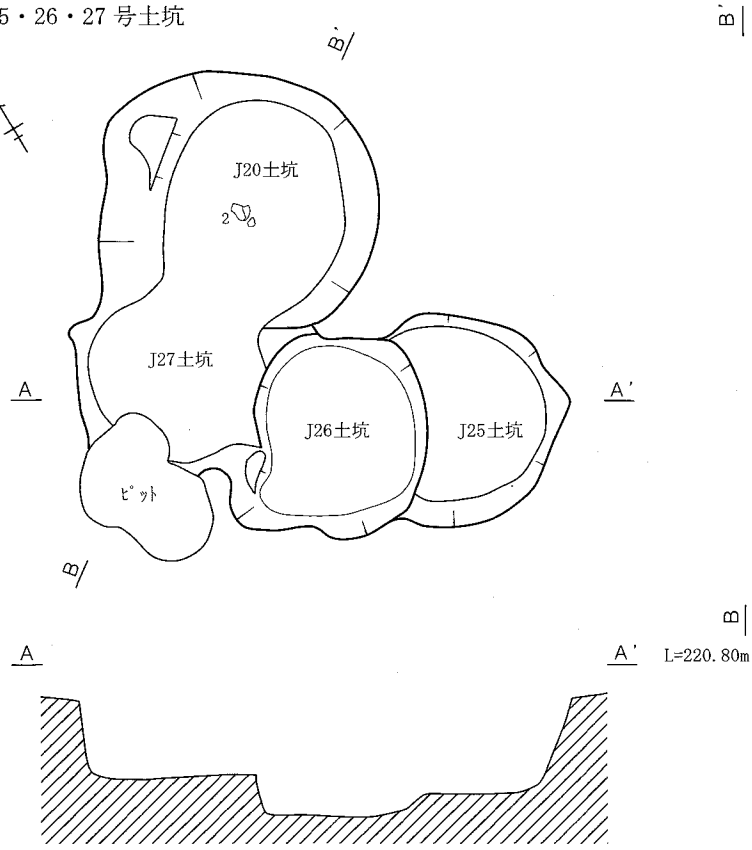
1　暗褐色土：粘性弱く、しまり強い。灰白色軽石粒中量を均質に混入、ローム粒・ロームブロック少量を不均質に混入、炭化粒微量がやや不均質に点在。
2　暗褐色土：粘性弱く、しまりあり。1層に類似するが灰白色軽石粒の混入がやや多く、ローム粒・ロームブロックの混入はやや多い。
3　暗褐色土：粘性弱く、しまりあり。ローム粒・灰白色軽石粒中量を不均質に混入。

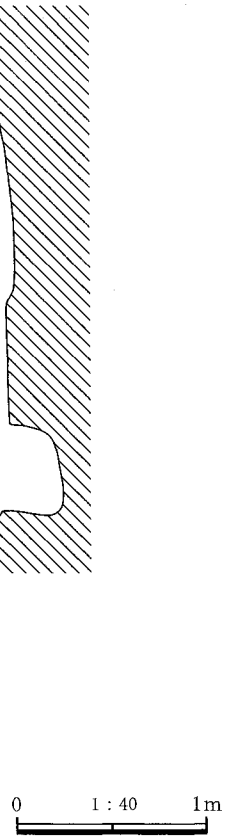
J21 号土坑



4　暗褐色土：粘性弱く、しまりあり。灰白色軽石粒少量をやや不均質に混入、炭化粒微量がやや不均質に点在。
5　暗褐色土：粘性弱く、しまりあり。ローム粒・ロームブロック中量をやや不均質に混入、炭化粒微量をやや不均質に混入。
6　暗褐色土：粘性弱く、しまりあり。ローム粒中量やや不均質に混入、ロームブロック・灰白色軽石粒少量を不均質に混入、炭化粒微量が不均質に点在。
7　暗褐色土：粘性弱く、しまりあり。ローム粒炭化粒を均質に混入、炭化粒。灰白色軽石粒微量がやや不均質に点在。
8　暗褐色土：粘性弱く、しまりあり。7層に類するがやや暗い。
9　暗褐色土：粘性弱く、しまりあり。ローム粒少量を不均質に混入、炭化粒微量が均質に点在。
10　暗褐色土：粘性弱く、しまりあり。ローム粒中量をやや不均質に混入。
11　暗褐色土:粘性弱く、しまりあり。10層に類似、炭化粒微量が不均質に点在。

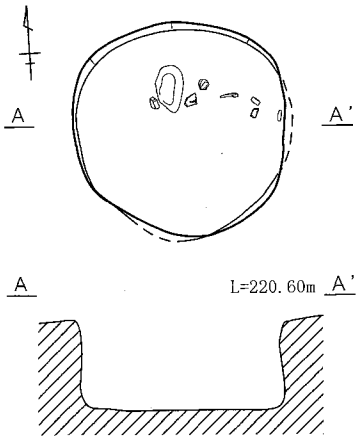
J20・25・26・27 号土坑



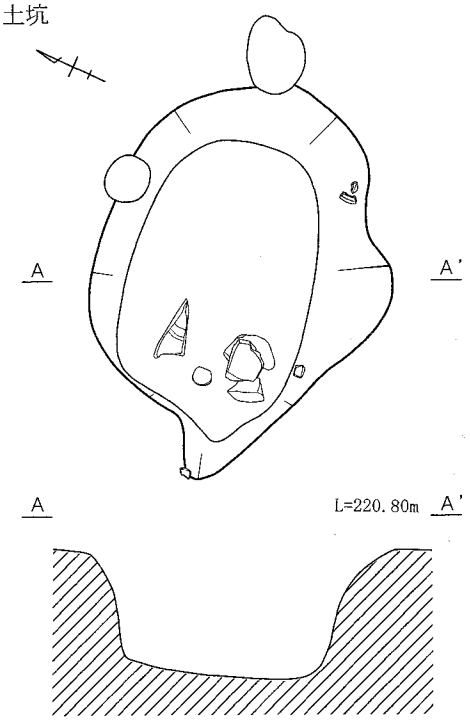


第 48 図　土坑平・断面図 (3)

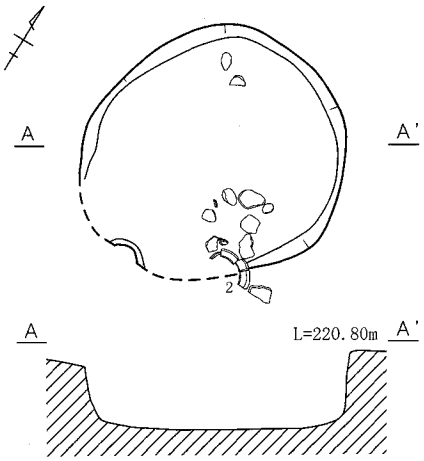
J22 号土坑



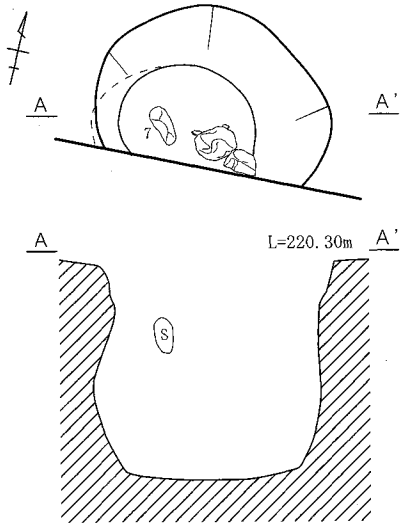
J28 号土坑



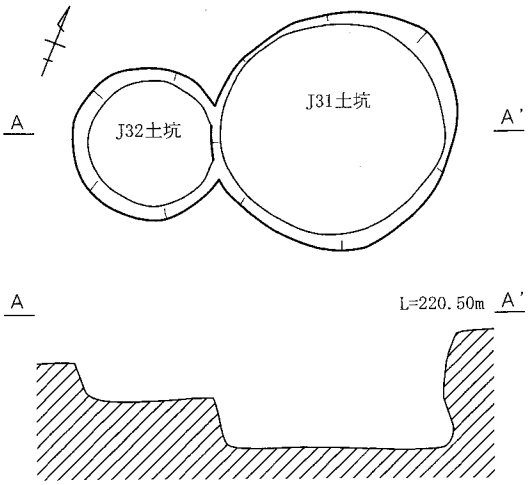
J29 号土坑



J30 号土坑



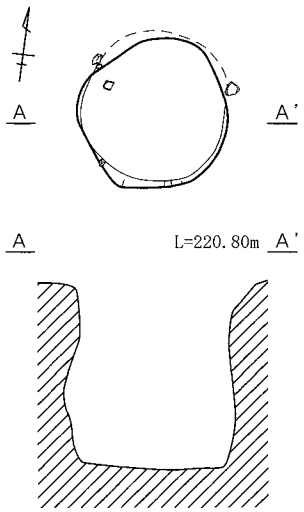
J31・32 号土坑



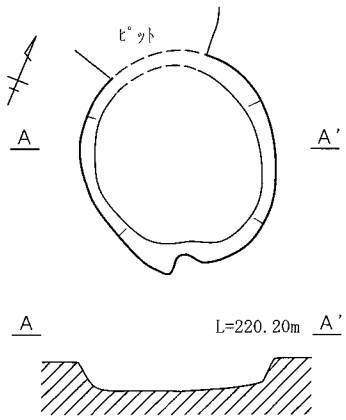
0　1：40　1m

第 49 図　土坑平・断面図 (4)

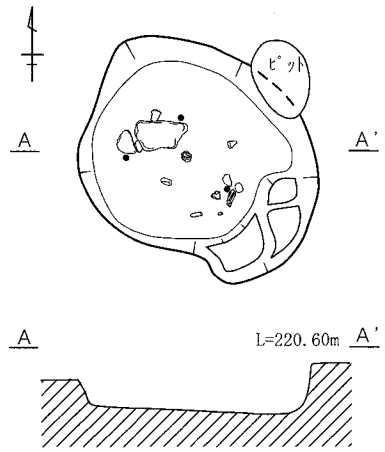
J33 号土坑



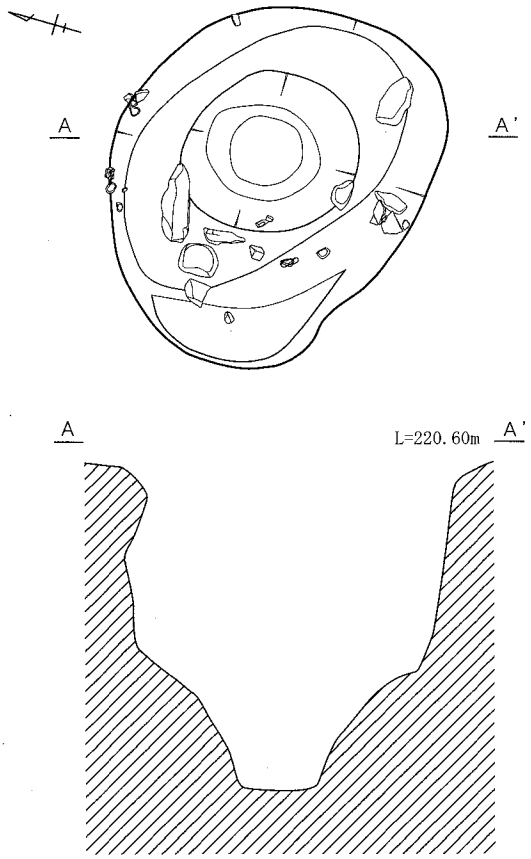
J34 号土坑



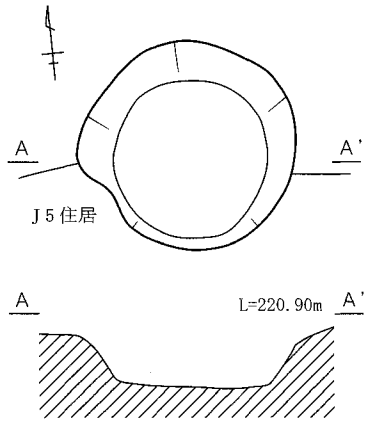
J35 号土坑



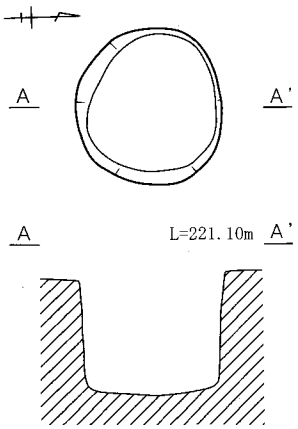
J36 号土坑



J37 号土坑

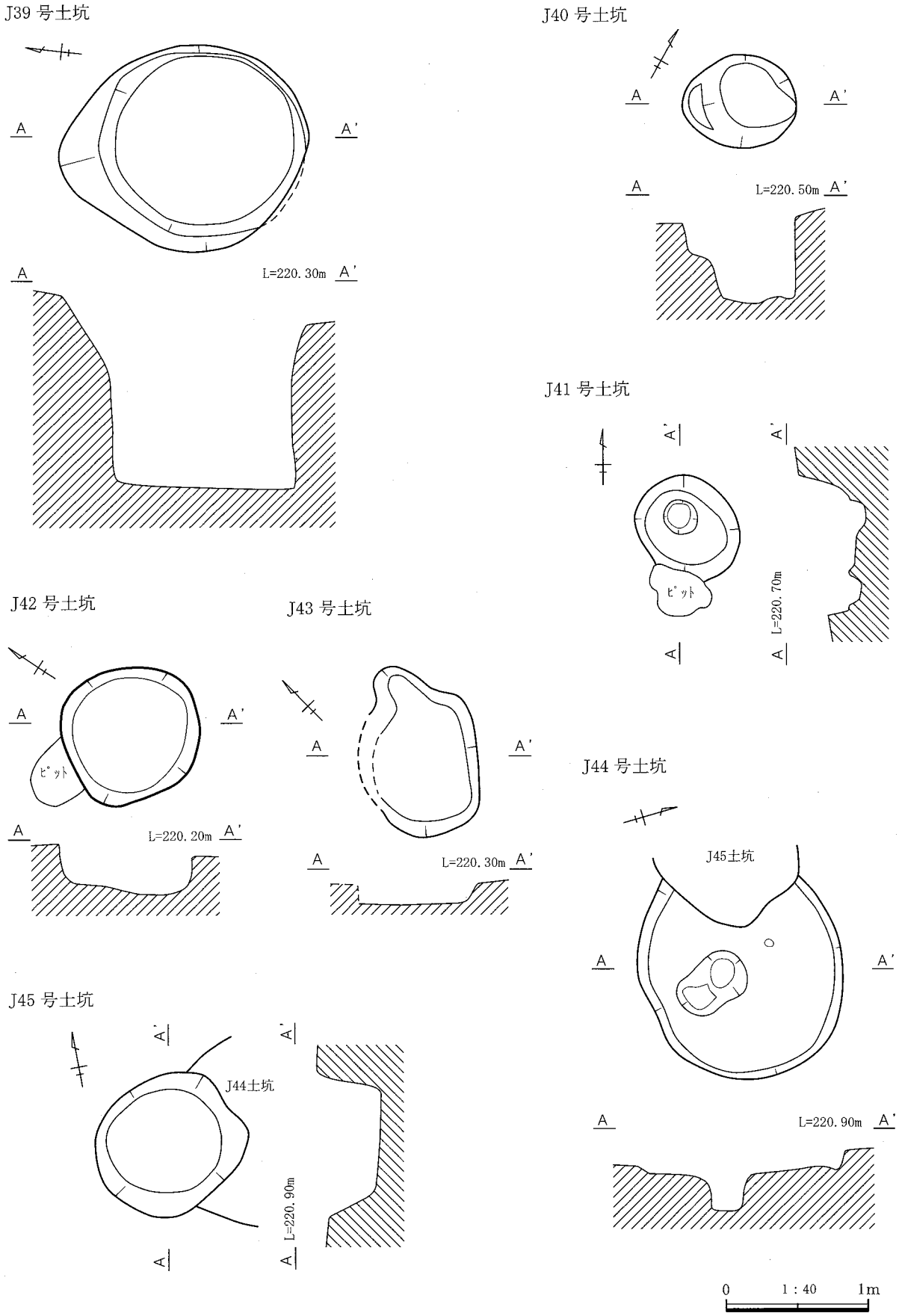


J38 号土坑



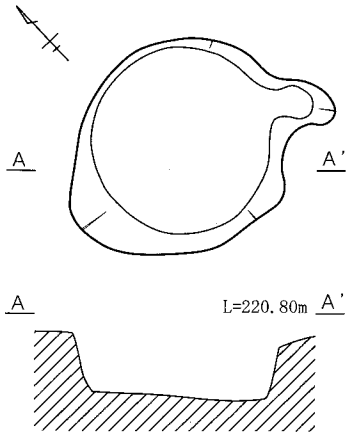
0　1：40　1m

第 50 図　土坑平・断面図 (5)

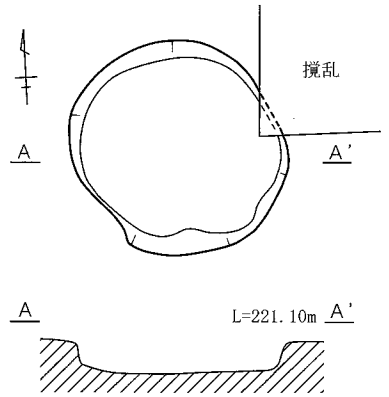


第 51 図　土坑平・断面図 (6)

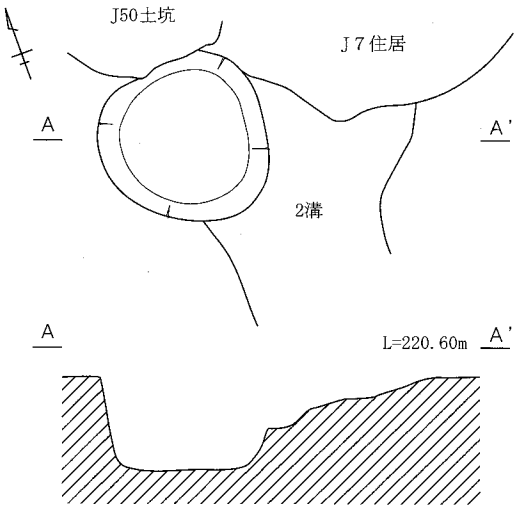
J46 号土坑



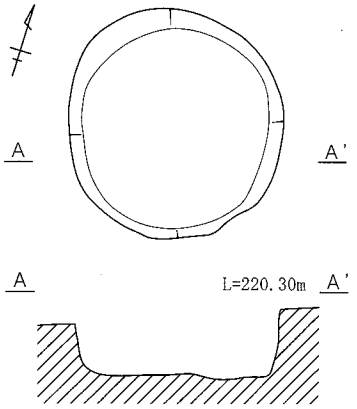
J47 号土坑



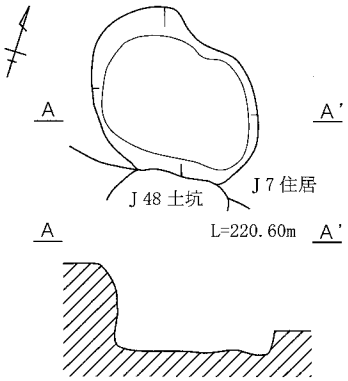
J48 号土坑



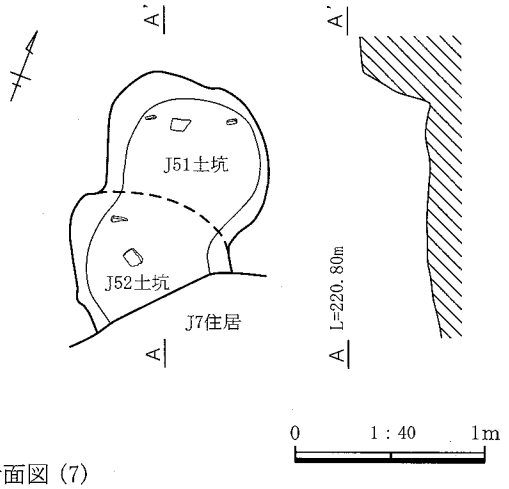
J49 号土坑



J50 号土坑

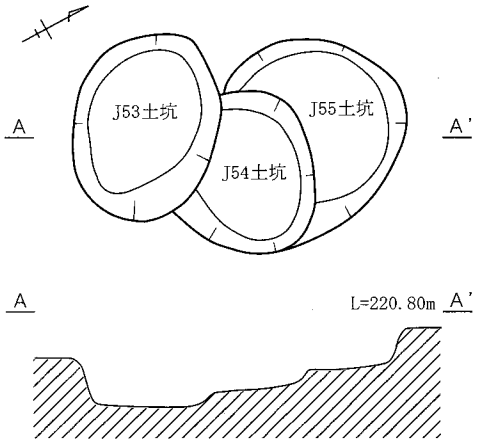


J51・52 号土坑

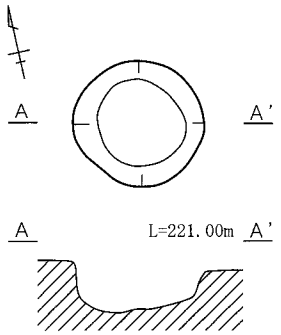


第 52 図　土坑平・断面図 (7)

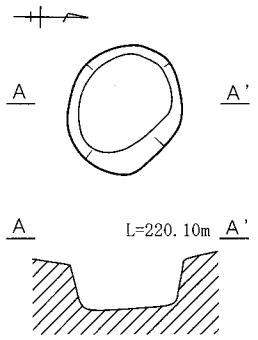
J53・54・55 号土坑



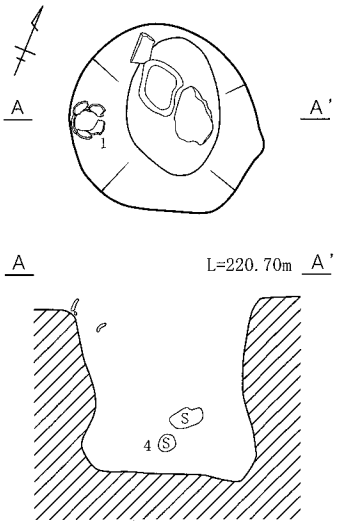
J56 号土坑



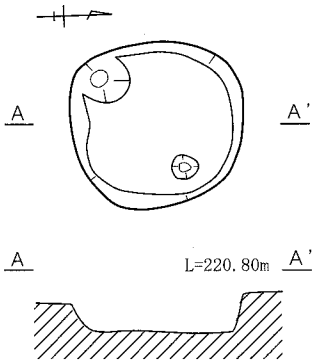
J57 号土坑



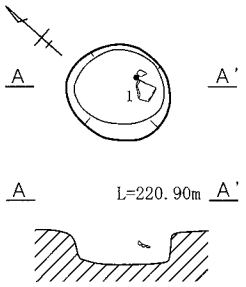
J58 号土坑



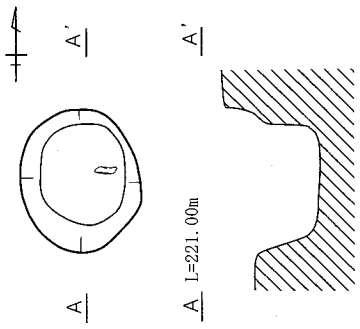
J59 号土坑



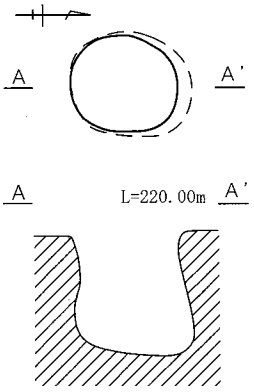
J60 号土坑



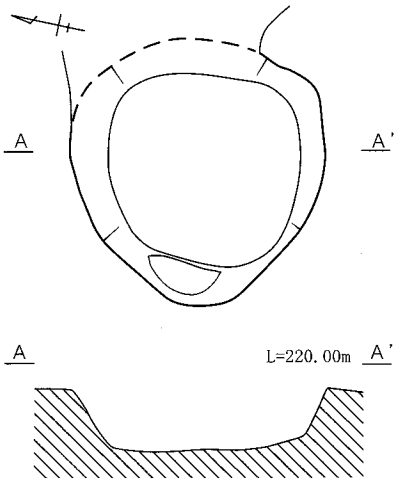
J61 号土坑



J62 号土坑

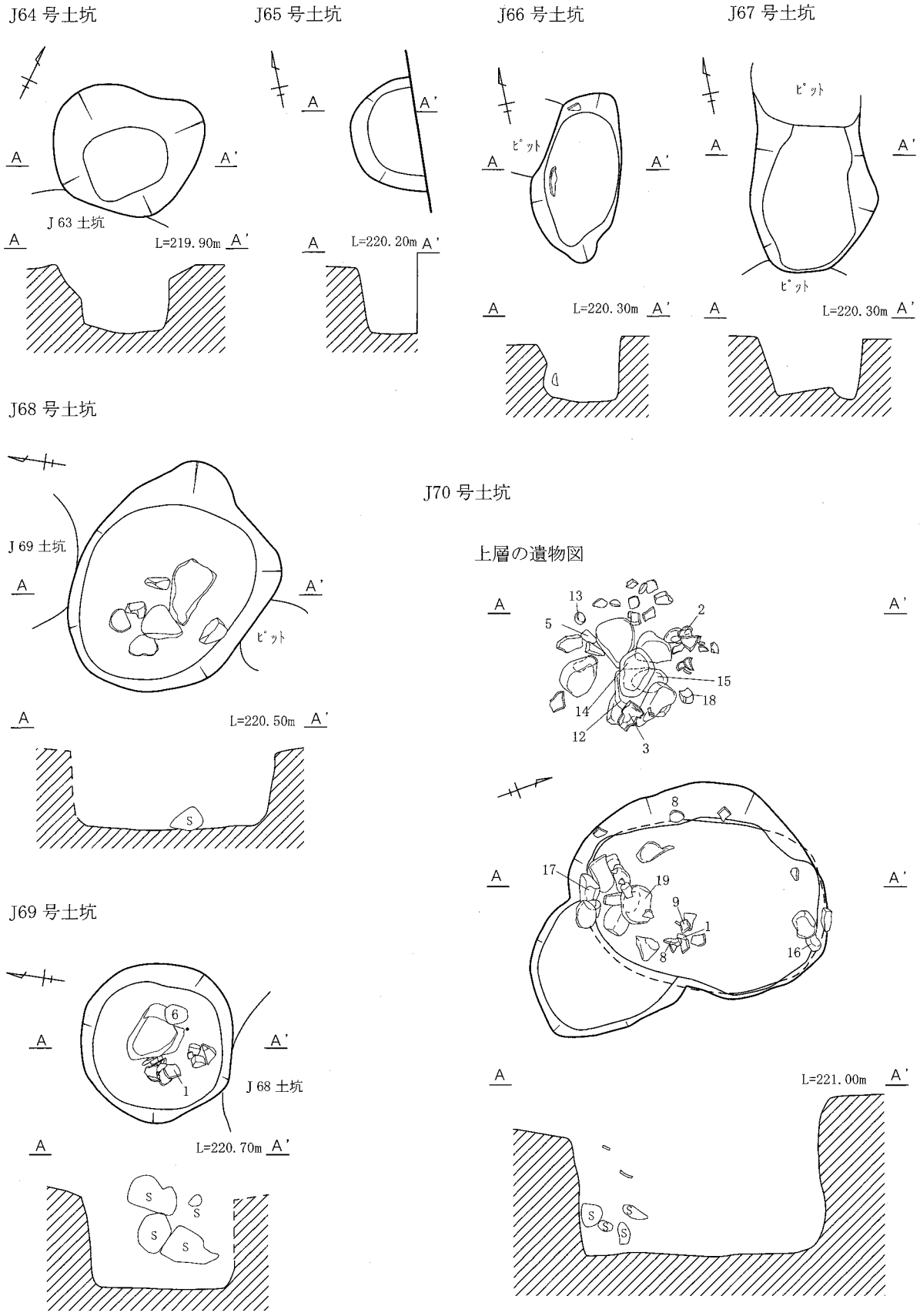


J63 号土坑

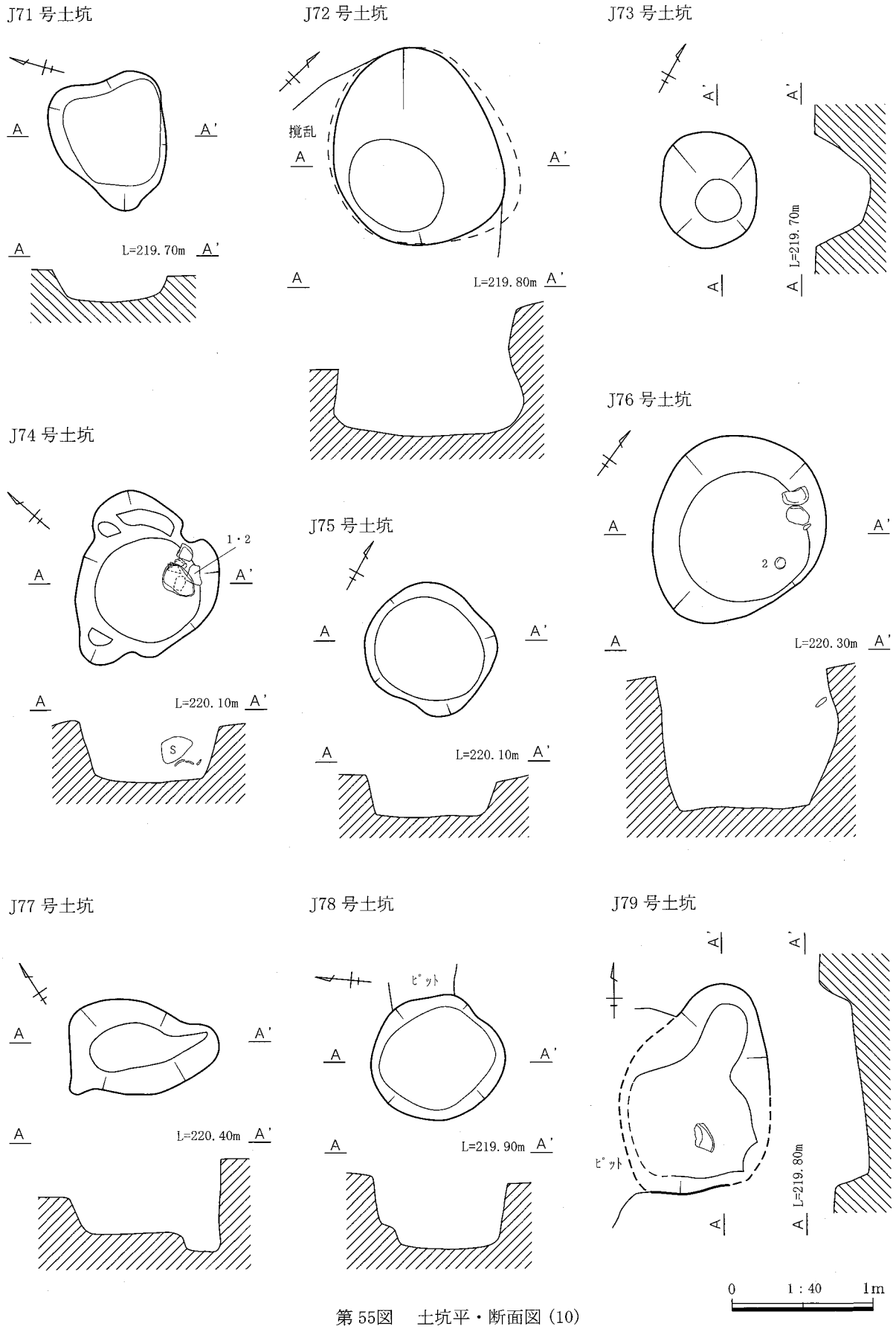


0　1：40　1m

第 53 図　土坑平・断面図 (8)

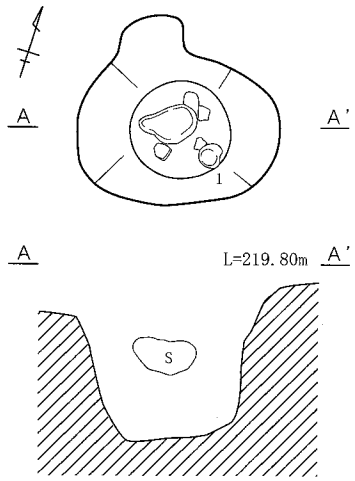


第 54 図　土坑平・断面図 (9)

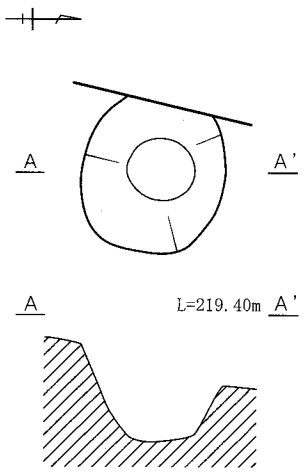


第 55図　土坑平・断面図 (10)

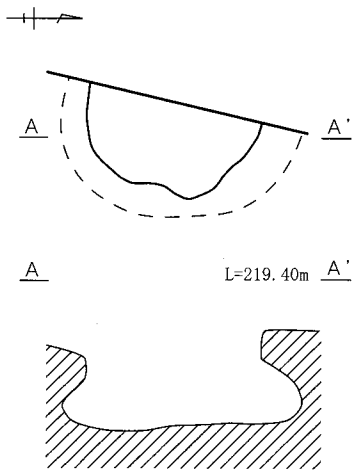
J80 号土坑



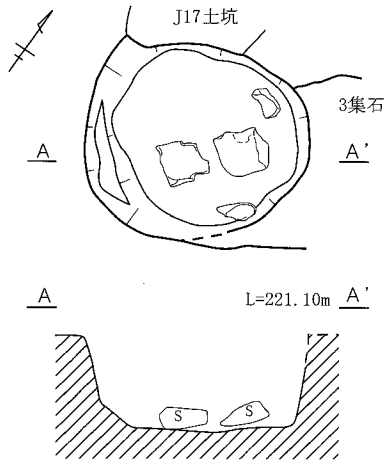
J81 号土坑



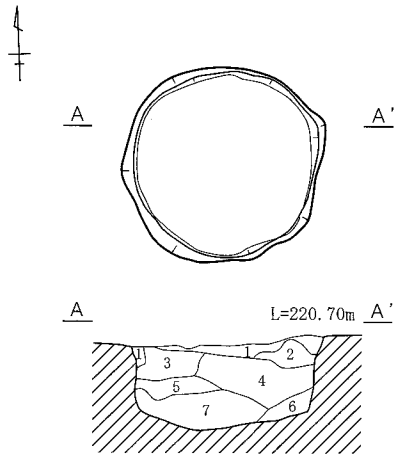
J82 号土坑



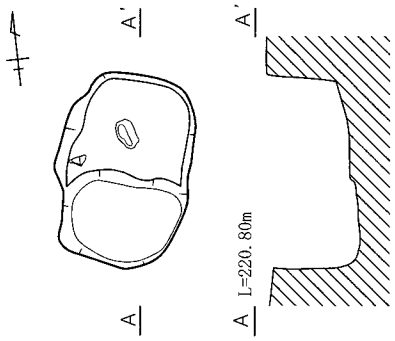
J83 号土坑



J85 号土坑



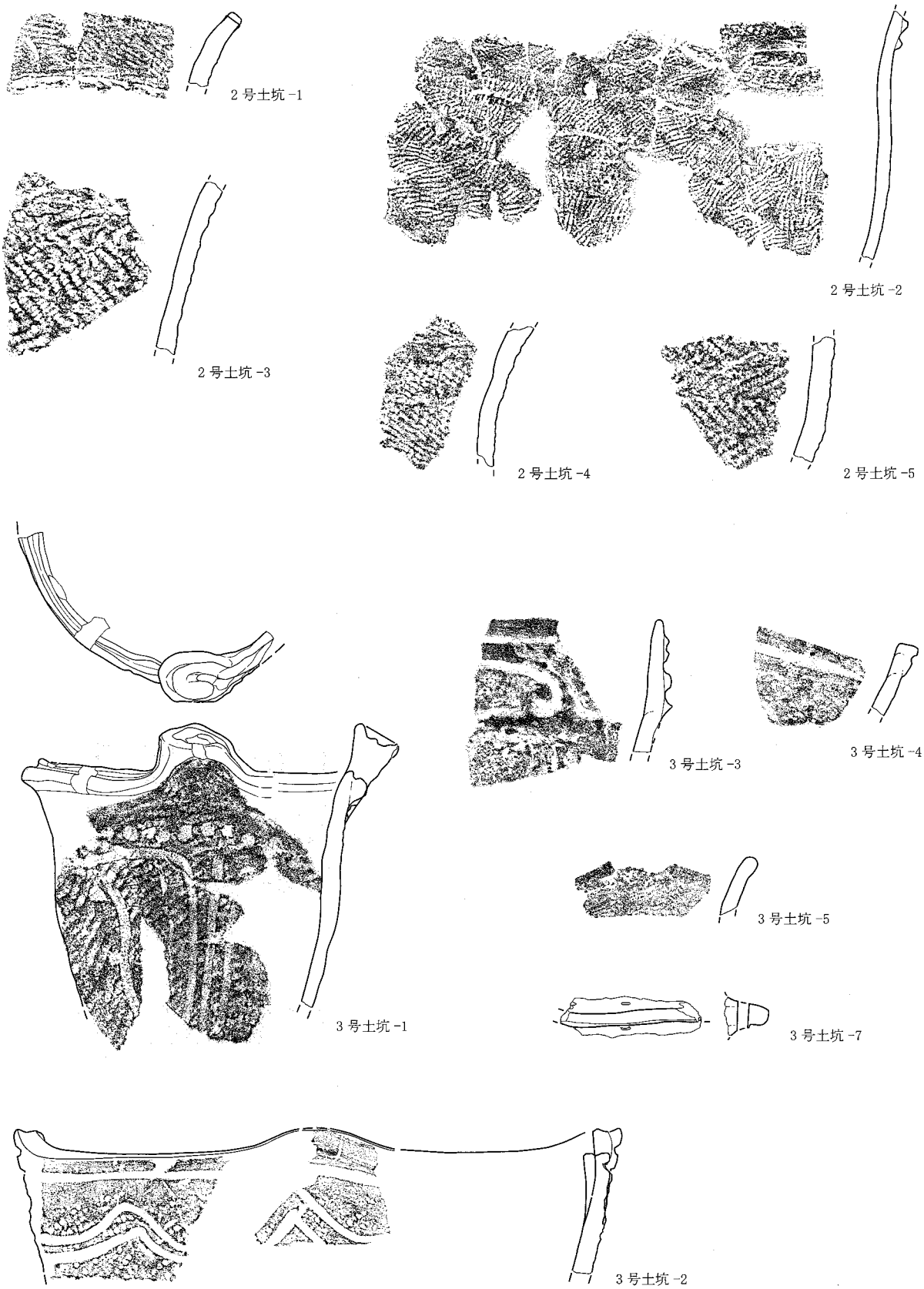
J84 号土坑



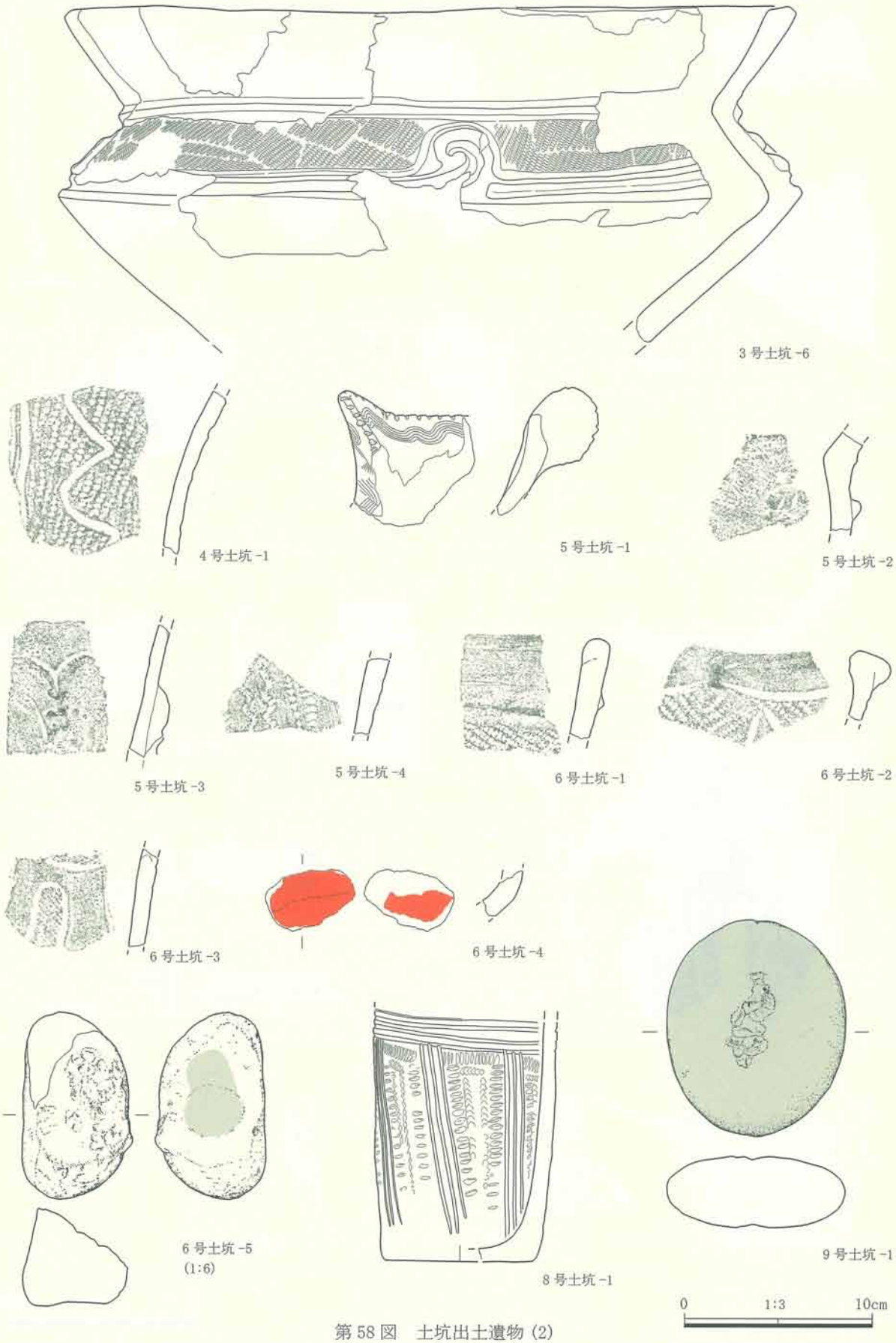
1　暗褐色土：ロームブロック中量を不均質に混入。
2　暗褐色土：ローム粒中量を不均質に混入、炭化粒・ロームブロック微量が不均質に点在。
3　暗褐色土:灰白色軽石粒少量をやや不均質に混入、ローム粒・炭化粒微量が不均質に点在。
4　暗褐色土：ローム粒中量を不均質に混入、炭化粒・ロームブロック微量が不均質に点在。
5　暗褐色土：ローム粒少量を不均質に混入、ロームブロック微量が不均質に点在。
6　暗褐色土：ローム粒少量を不均質に混入。
7　暗褐色土：ローム粒・ロームブロック少量を不均質に混入。

0　1：40　1m

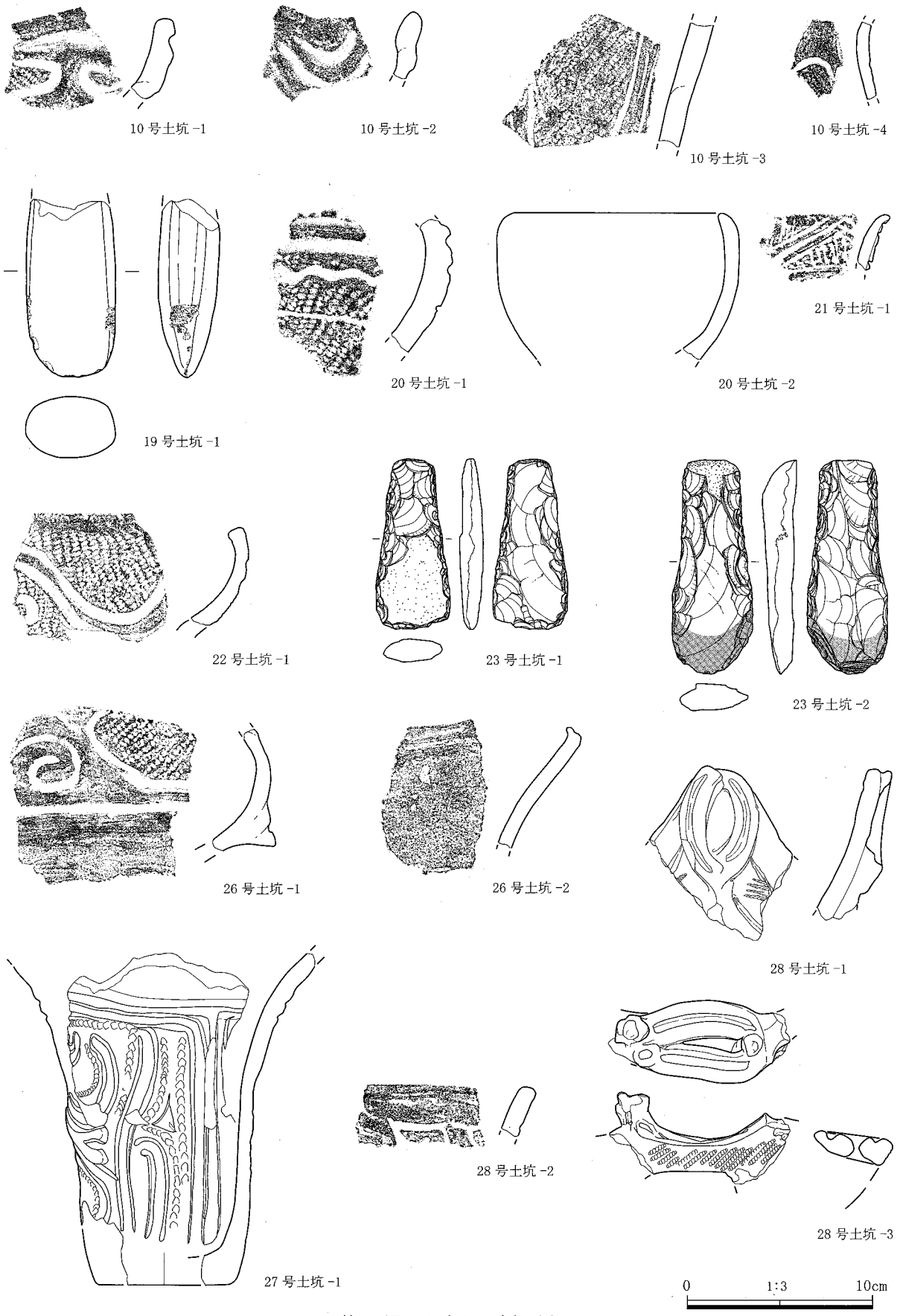
第 56 図　土坑平・断面図 (11)



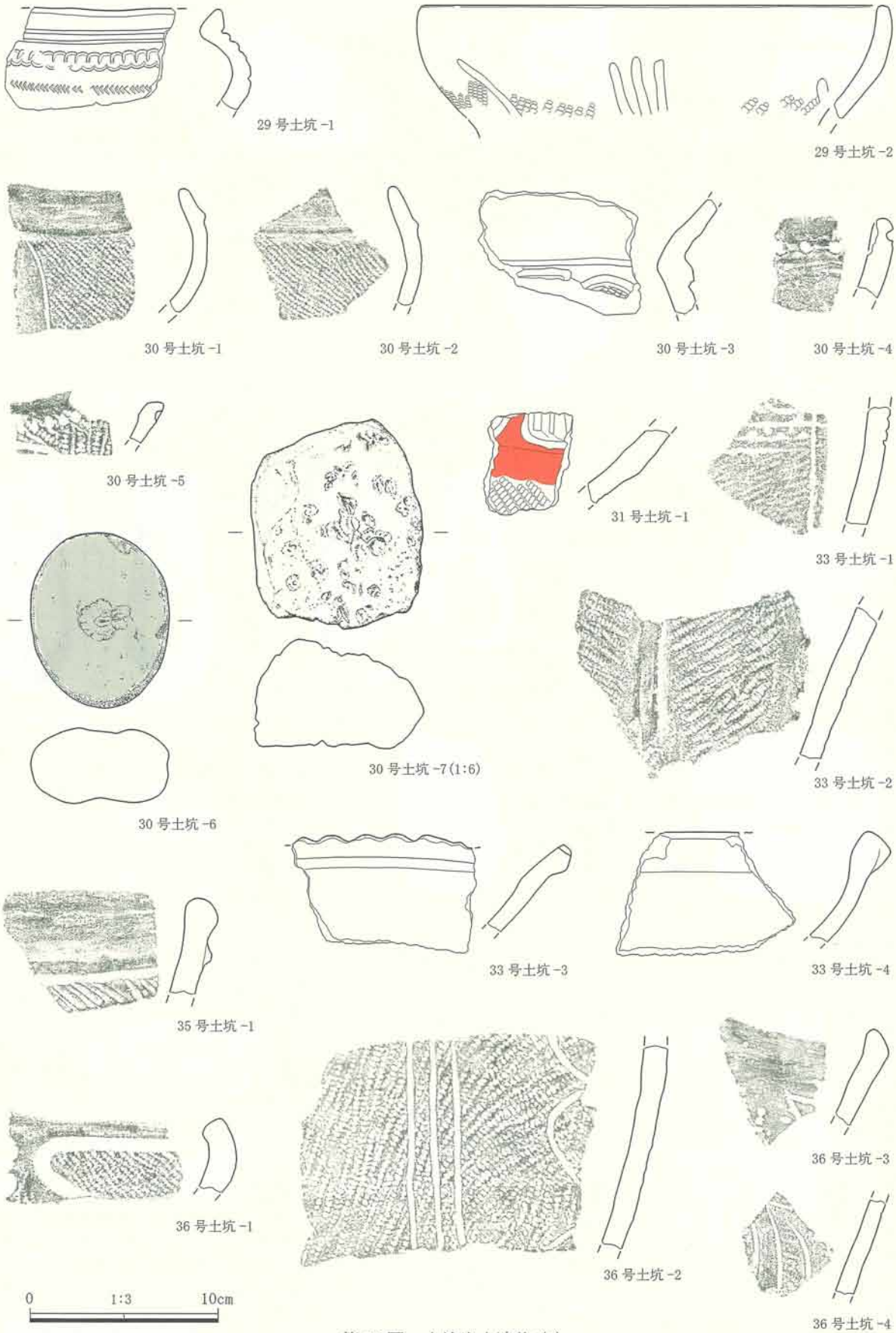
第57図　土坑出土遺物(1)



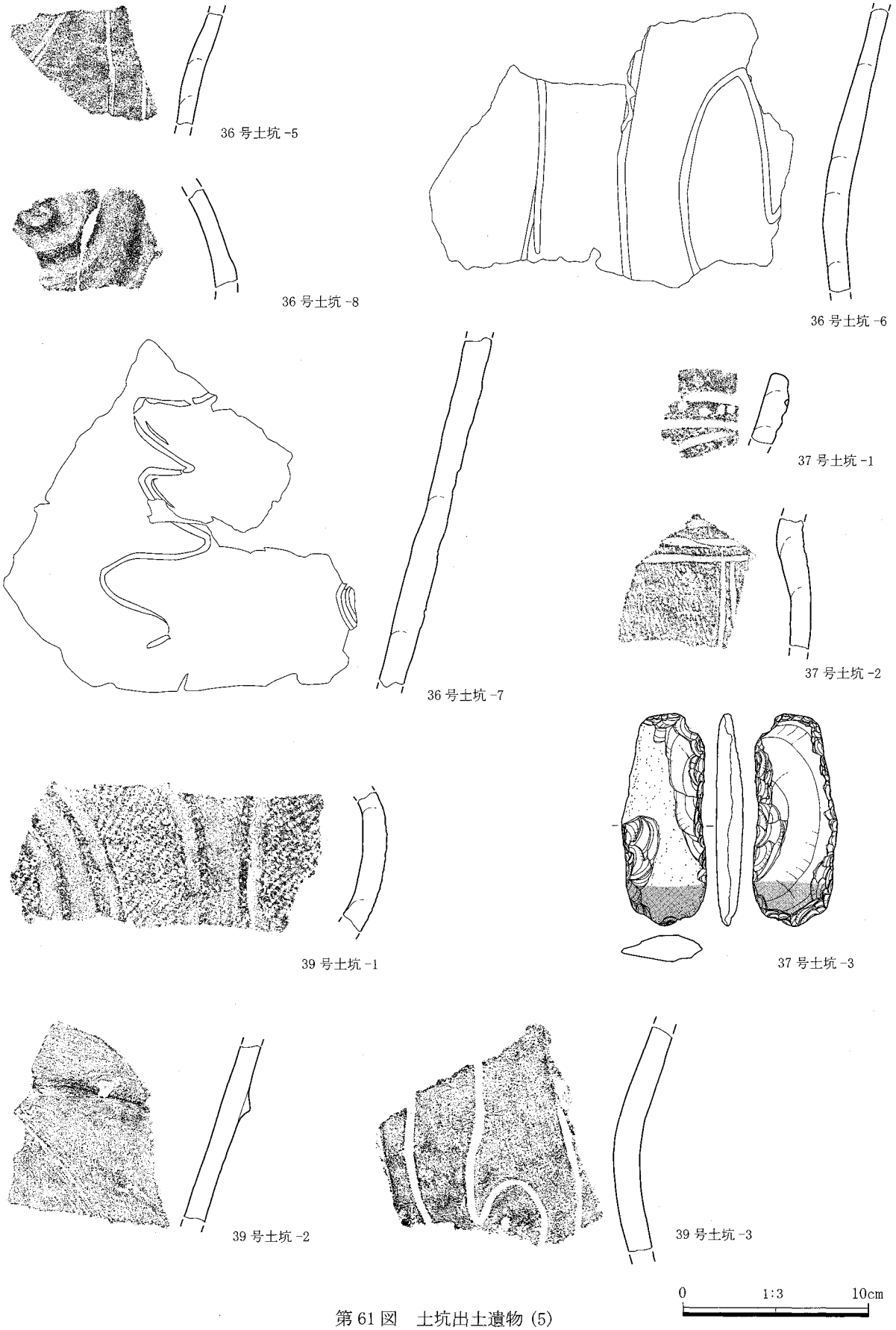
第 58 図　土坑出土遺物 (2)



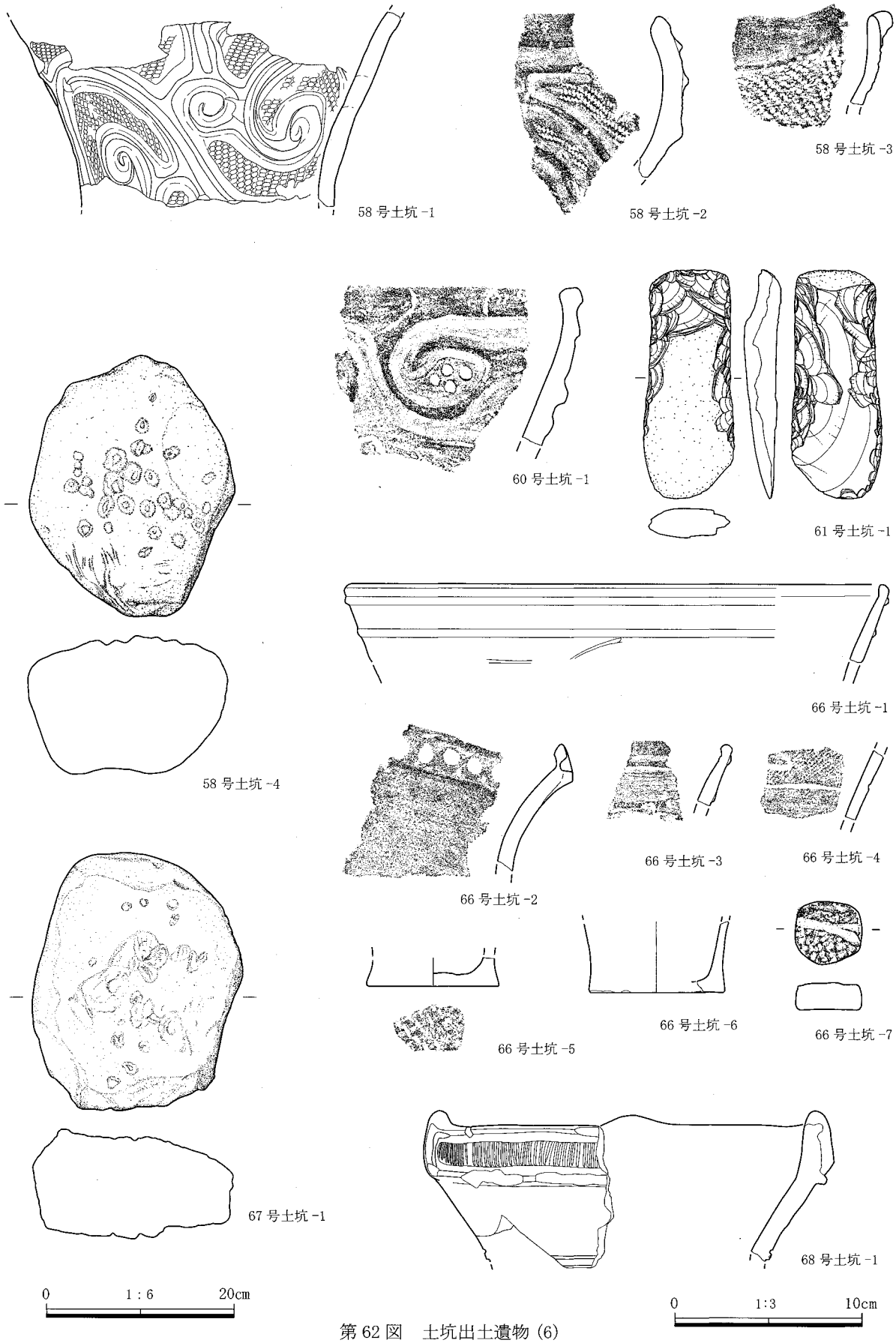
第 59 図　土坑出土遺物 (3)



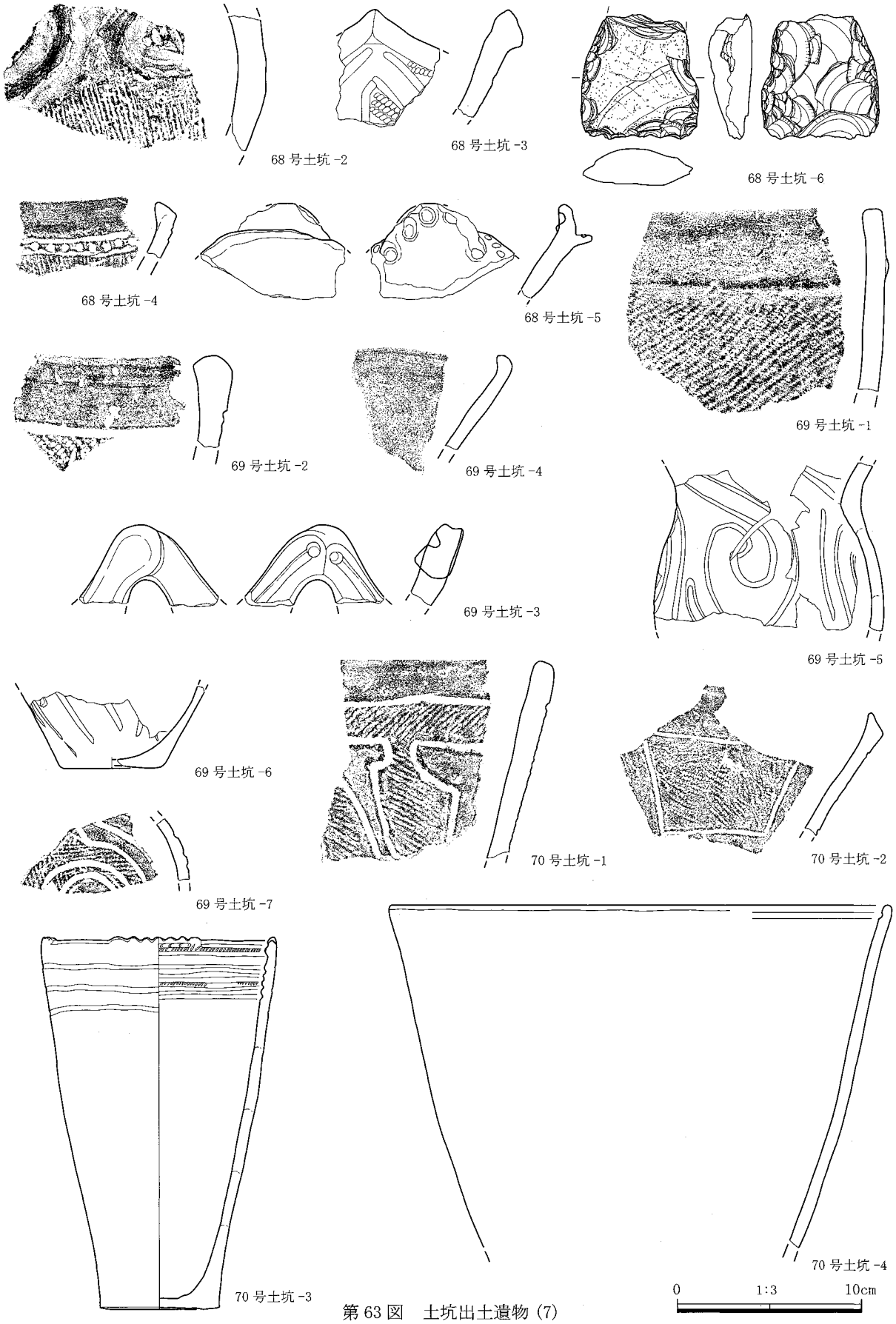
第 60 図　土坑出土遺物 (4)



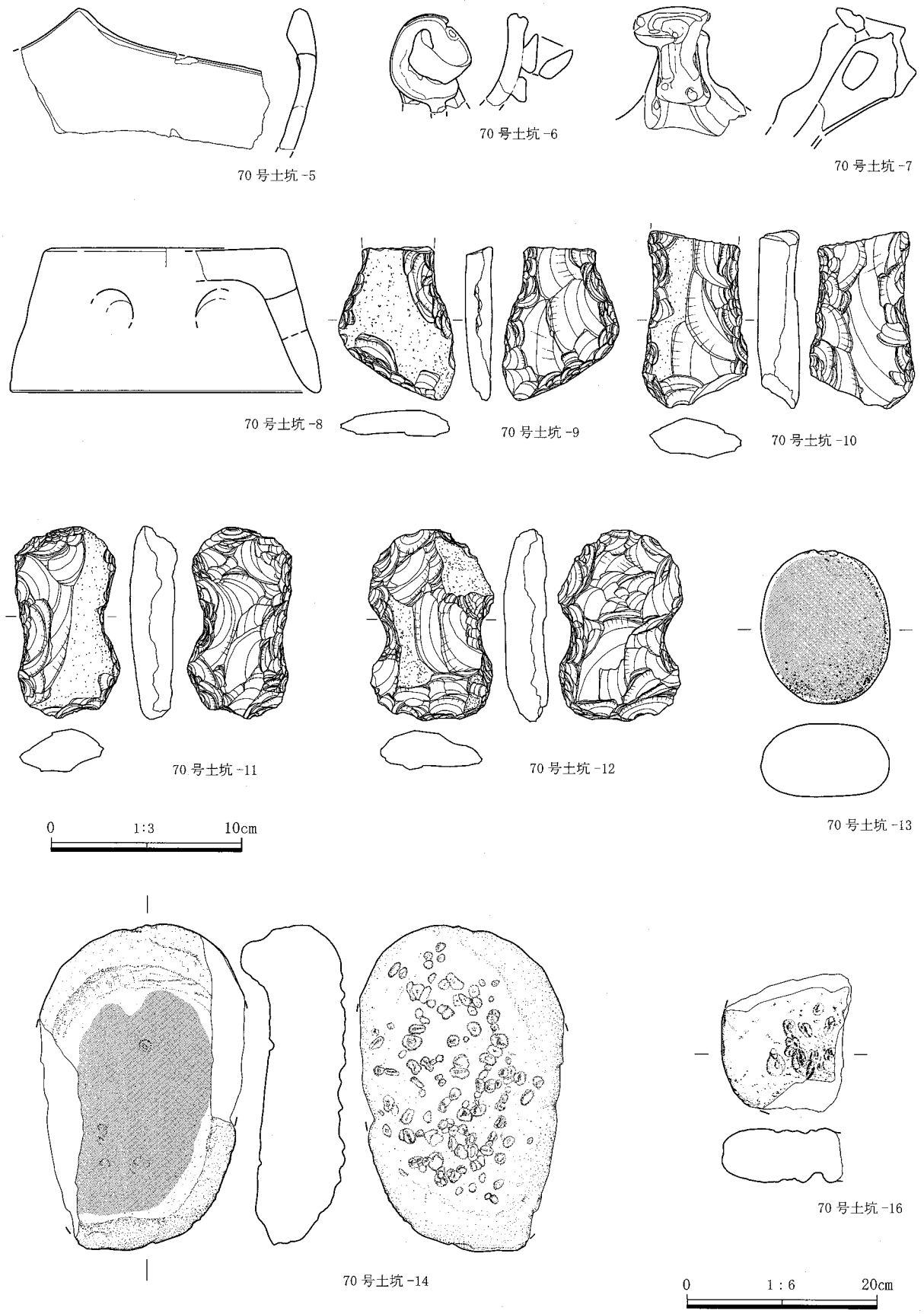
第 61 図　土坑出土遺物 (5)



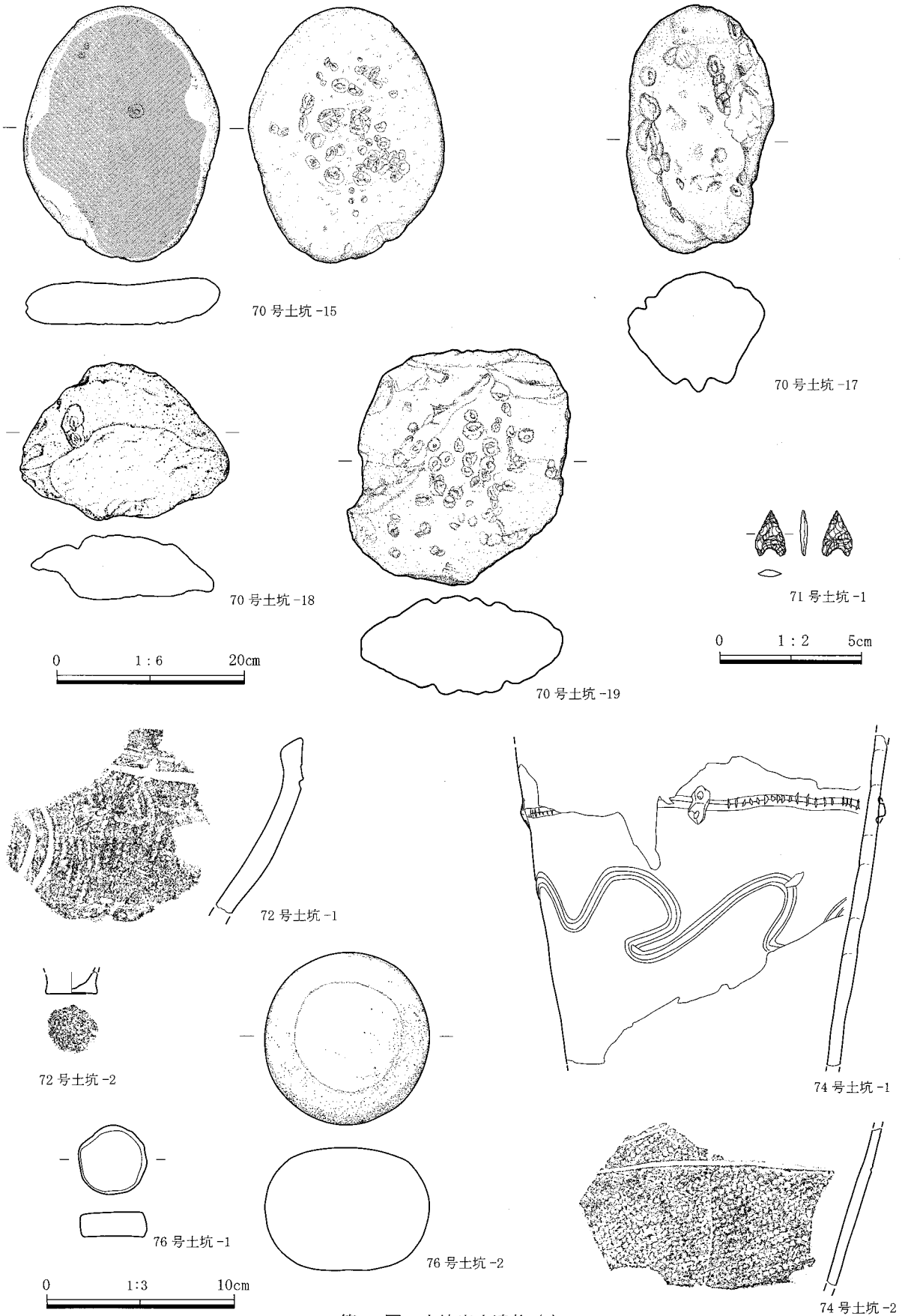
第 62 図　土坑出土遺物 (6)



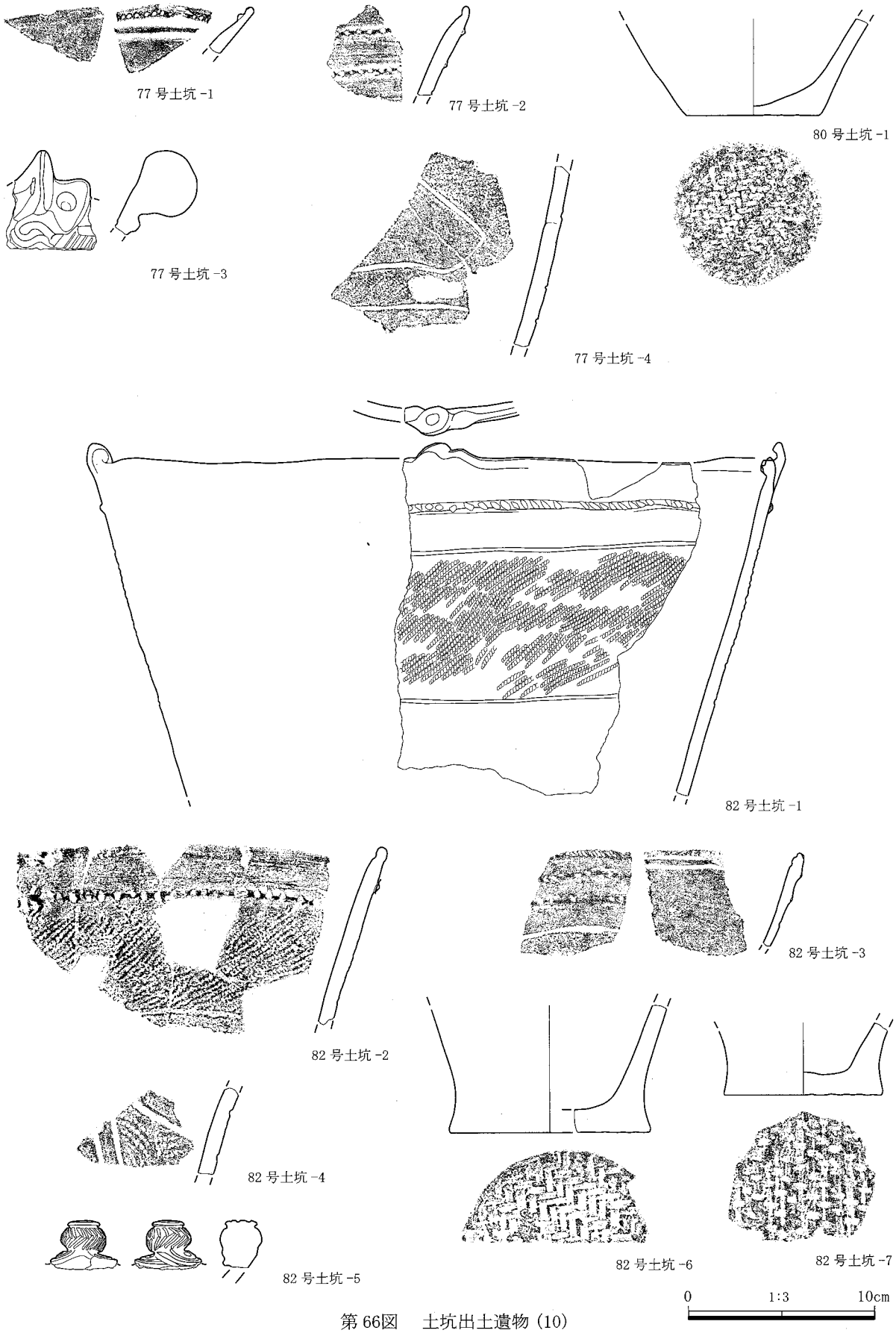
第 63 図　土坑出土遺物 (7)



第 64 図　土坑出土遺物 (8)



第 65 図　土坑出土遺物 (9)



第 66図　土坑出土遺物 (10)

2号土坑

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い褐色 ③白色粒・繊維 ④口縁部破片	刻目・縄文R	平縁口縁。口縁端部に押圧による刻目。縄文Rを横位に施文。
2	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙～鈍い褐色 ③白色粒 繊維 ④胴部破片	隆線 貝殻圧痕文	口縁部下に隆帯。アナダラ属、貝殻圧痕文。
3	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙色 ③白色粒・礫・繊維 ④胴部破片	縄文RL+LR	羽状縄文。口縁部に横位蕨手文の区画文、胴部に横線文。
4	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙色 ③白色粒・繊維 ④胴部破片	隆線・縄文LR	縄文LRを横位に施文。
5	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い褐色 ③白色粒・礫・繊維 ④胴部破片	縄文RL+LR、 (0段多条)	羽状縄文。

3号土坑

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部～胴部中位 2/3 口径 16.0	凹線・縄文RL 沈線	1ヶ所に台状突起。突起端部に蕨手文。胴部に縄文RLを縦位に施文後、円形えぐり文、沈線による区画文。
2	縄文土器 深鉢	①普通 ②暗灰黄色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部～胴部上位 1/5 口径 (30.0)	凹線・縄文RL	4単位の小波状口縁。縄文RLを縦位に施文後、沈線による2本単位の連弧文。
3	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙～灰褐色 ③白色粒・礫 ④口縁部破片	隆線・凹線・沈線	平縁口縁。口縁部は横位蕨手状文。胴部沈線による垂線。
4	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄褐～灰褐色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片	凹線	波状口縁。口縁端部に平坦面を持つ。口縁部下に凹線。
5	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い橙～鈍い黄褐色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片		山形突起の波状口縁。無文。
6	縄文土器 鉢	①普通 ②橙～鈍い褐色 ③白色粒・黒色粒・礫 ④口縁部～胴部中位 1/3 口径 38.0	隆線・凹線 縄文LR	平縁口縁。口縁部無文、端部平坦面を持つ。頸部と胴部中位が屈曲。縄文LRを横位に施文後、区画。内外面研磨。
7	縄文土器 鍔付土器	①普通 ②灰褐色 ③白色粒・角閃石・雲母 ④破片		鍔付土器。鍔部分に小孔。

4号土坑

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙～灰黄褐色 ③白色粒・角閃石・石英 ④胴部破片	沈線・縄文RL	縄文RLを縦位に施文後、沈線を垂下し、蛇行文を配置。

5号土坑

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②赤褐色 ③白色粒・雲母 ④口縁部破片	条線・刻目	装飾突起。端部に刻目、条線による波状文。
2	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄褐色 ③白色粒・黒色粒・雲母 ④胴部破片	隆線・条線	櫛状工具による条線・蛇行文。隆線・曲線文。
3	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・黒色粒・雲母 ④胴部破片	隆線	粘土紐貼付、頂部に押圧。
4	縄文土器 深鉢	①普通 ②黒色・鈍い黄橙色 ③白色粒・角閃石・雲母 ④胴部破片	刺突文	爪形文・角押し文。

6号土坑

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙色 ③白色粒・角閃石礫 ④口縁部破片	隆線・縄文LR	平縁口縁。口縁部下に断面三角形の隆帯を配置。縄文LRを縦位に施文。
2	縄文土器 深鉢	①普通 ②褐灰色・灰黄褐色 ③白色粒 ④胴部破片	沈線・縄文RL	波状口縁。口縁部に瘤状の突起を持つ。縄文RLを施文後沈線。
3	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙色 ③白色粒・雲母 ④胴部破片	沈線・縄文LR	沈線後、縄文LRを充填。
4	縄文土器 浅鉢	①普通 ②赤色 ③白色粒 ④胴部破片		胴部は内湾する。内外面赤色塗彩。

番号	種　類	法量 (cm)・石材
5	多孔石	長さ 20.0　幅 11.8　厚さ 10.4　重さ 2380 g　粗粒輝石安山岩

8号土坑

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い橙色 ③白色粒・黒色粒 ④胴部中位～底部残存 底径 7.8	沈線・刺突文	平行沈線文、3本単位の沈線を垂下して区画、区画内に爪形文・ペン先連続押引き文を充填。

9号土坑

番号	種　類	法量 (cm)・石材
1	凹石・磨石	長さ 11.6　幅 9.5　厚さ 3.8　重さ 606.2 g　粗粒輝石安山岩

10 号土坑

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い褐色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片	隆線・凹線 縄文 RL	波状口縁、縄文 RL を横位に施文後、区画。
2	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い橙色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片	隆線・凹線	波状口縁。口縁部内側は肥厚して段を持つ。
3	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・黒色粒 ④胴部破片	沈線・縄文 RL	縄文 RL を縦位に施文後、沈線垂下による区画。
4	縄文土器 深鉢	①普通 ②褐灰色・橙色 ③白色粒角閃石 ④胴部破片	沈線・縄文 LR	縄文 LR を縦位施文後、沈線による区画、曲線文。

19 号土坑

番号	種 類	法量 (cm)・石材
1	磨製石斧	残存長 9.6　幅 4.8　厚さ 3.3　重さ 235.3 g　ホルンフェルス

20 号土坑

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い褐～褐灰色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片	沈線 縄文 RL	沈線を施文後、縄文 RL を縦位に施文。沈線による横線・波状文。
2	縄文土器 鉢	①普通 ②橙～鈍い褐色 ③白色粒褐色粒・石英・礫 ④口縁部～胴部下位 1/3 口径 (11.2)		口縁部は内湾する。無文、粗い研磨。

21 号土坑

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②明赤褐色・褐色 ③白色粒・軽石粒・石英 ④口縁部破片	平行沈線	竹管状工具による平行沈線文、幾何学文。

22 号土坑

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い橙～黒褐色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片	沈線・縄文 RL	平縁口縁。縄文 RL を横位に施文後 2 本単位の沈線による波状文。

23 号土坑

番号	種 類	法量 (cm)・石材
1	打製石斧	長さ 9.12　幅 4.0　厚さ 1.24　重さ 54.8 g　ホルンフェルス
2	打製石斧	長さ 11.45　幅 4.33　厚さ 1.83　重さ 95.2 g　黒色頁岩

26 号土坑

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 鉢	①普通 ②褐灰色・明赤褐色 ③白色粒 ④胴部破片	隆線・凹線 縄文 RL	縄文 RL を縦位に施文後、区画。内外面研磨。
2	縄文土器 深鉢	①普通 ②褐灰～灰褐色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片	凹線	波状口縁。口縁端部は内傾し、端部に凹線、口縁部からくびれ部は無文。

27 号土坑

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い橙色 ③白色粒・黒色粒 ④胴部上位～底部 3/5 底径 (7.0)	隆線・沈線 ペン先文	隆線による区画文、曲線文。隆線脇に平行沈線を沿わせる。ペン先状連続押し引き文、三角えぐり文を充填。

28 号土坑

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒 ④口縁部破片	沈線・縄文 LR 隆線	波状口縁。波頂部に 8 字状貼付文。沈線による区画後、縄文 LR を充填。口縁端部内側に稜を持つ。
2	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒 ④口縁部破片	沈線	平縁口縁。口縁部直下より沈線区画文を配置。
3	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片	沈線・縄文 LR	舟形の装飾口縁。円形えぐり文と沈線を配置。外面に縄文 LR を施文。

29 号土坑

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片	沈線・刺突文 コンパス文	半截竹管状工具による、蓮華状のコンパス文にペン先文を配置。
2	縄文土器 深鉢	①普通 ②暗灰黄色 ③白色粒・角閃石 ④口縁～胴部上位 1/2 口径 24.0	沈線・縄文 RL	口縁部無文帯を持つ。胴部上位は縄文 RL を縦位に施文後、沈線を垂下、蛇行文を配置。

30 号土坑

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・角閃石・石英 ④口縁部破片	隆線・沈線 縄文 LR	波状口縁。断面三角形の隆帯を配置。沈線を弧状に垂下した後、縄文 LR を縦位に施文。
2	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙色 ③白色粒・角閃石・石英 ④口縁部破片	隆線・縄文 LR	断面三角形の隆帯を配置後、縄文 LR を縦位に充填。
3	縄文土器 鉢	①普通 ②橙～灰褐色 ③白色粒・角閃石 ④胴部破片	隆線・凹線 縄文 LR	頸部と胴部で屈曲する。区画内に縄文 LR を施文。

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
4	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒 ④口縁部破片	沈線・円形文	平縁口縁。口縁部直下に沈線、円形えぐり文、胴部は無文。
5	縄文土器 深鉢	①普通 ②灰黄褐色 ③白色粒 ④口縁部破片	沈線・縄文 R-LR 円形文	波状口縁。口縁部内側は肥厚する。縄文 R-LR を施文後沈線・円形刺突文。
番号	種 類	法量 (cm)・石材		
6	凹石・磨石	長さ 9.3　幅 7.3　厚さ 4.0　重さ 357.2 g　デイサイト		
7	多孔石	長さ 22.3　幅 17.9　厚さ 11.2　重さ 4120 g　粗粒輝石安山岩		

31 号土坑

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 浅鉢	①普通 ②鈍い黄橙色・赤褐色 ③白色粒 ④胴部破片	隆線・凹線・沈線 縄文 RL	隆線・凹線の区画内に縦位沈線、縄文 RL を横位に施文。外面赤色塗彩。

33 号土坑

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙色 ③白色粒・角閃石 石英 ④胴部破片	沈線・縄文 RL	平行沈線、沈線間に交互刺突文後、縄文 RL を縦位に施文。
2	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙色 ③白色粒・角閃石 ・石英 ④胴部破片	隆線・縄文 RL	2 本の隆線を配置後、縄文 RL を縦位・横位に充填。
3	縄文土器 浅鉢	①普通 ②鈍い褐色 ③白色粒・雲 母 ④口縁部破片		口縁端部に押圧による刻目、内面に稜を持つ。内外面研磨。
4	縄文土器 浅鉢	①普通 ②赤褐色 ③白色粒・礫 ④口縁部破片		口縁部は外側に肥厚。内外面研磨。

35 号土坑

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・ 角閃石 ④口縁部破片	隆線・凹線・沈線	平縁口縁。沈線を施文後、隆線・凹線による区画。

36 号土坑

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・ 角閃石・礫 ④口縁部破片	隆線・凹線 縄文 RL	隆線・凹線による区画、縄文 RL を横位に充填。
2	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄褐色 ③白色粒・ 褐色粒・雲母 ④胴部破片	縄文 RL・沈線	縄文 RL を縦位に施文後、垂線・蛇行線を配置。
3	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・ 角閃石・石英 ④口縁部破片	沈線	波状口縁。沈線による施文。内外面研磨。
4	縄文土器 深鉢	①普通 ②灰黄褐色 ③白色粒・角 閃石 ④胴部破片	沈線・縄文 LR	縄文 LR を縦位施文後、沈線による弧線文。
5	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙色 ③白色粒・角閃石 ④胴部破片	沈線	沈線による幾何学文。
6	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・ 角閃石・石英 ④胴部破片	沈線	沈線による J 字文。
7	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い赤褐色 ③白色粒・ 石英 ④胴部破片	沈線	沈線による蛇行文・平行沈線。
8	縄文土器 鉢	①普通 ②橙色 ③白色粒・角閃石 ④胴部破片	隆線	断面三角形の隆線による渦巻文。

37 号土坑

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②灰黄色 ③白色粒 ④口縁部破片	沈線・円形刺突文	平行する沈線内に円形刺突文を配置。
2	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙～黄灰色 ③白 色粒・角閃石 ④胴部破片	沈線・縄文 L	縄文 L を縦位に施文後、沈線による横線・垂線。
番号	種 類	法量 (cm)・石材		
3	打製石斧	長さ 11.3　幅 4.56　厚さ 1.44　重さ 94.0 g　ホルンフェルス		

39 号土坑

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②浅黄色 ③白色粒・角閃 石 ④胴部破片	隆線・凹線 縄文 RL	縄文 RL を縦位に施文後、隆線・凹線による曲線区画文。
2	縄文土器 深鉢	①普通 ②浅黄～黄灰色 ③白色粒 ・角閃石 ④胴部破片	隆線・条線	断面三角形の隆帯を貼付、条線による弧線文。
3	縄文土器 深鉢	①普通 ②浅黄色 ③白色粒・角閃 石 ④胴部破片	沈線	沈線による J 字文。

58 号土坑

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙色 ③白色粒・角閃石 ④胴部中位残存	隆線・凹線 縄文 RL	隆線による唐草様文、縄文 RL を縦位に施文後、凹線。

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
2	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片	隆線・凹線 縄文 RL	縄文 RL を施文後、隆線・凹線による区画、渦巻文。
3	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒 ④口縁部破片	隆線・縄文 RL	山形の小突起を持つ波状口縁。断面三角形の隆帯配置後、縄文 RL を横位に施文。
番号	種 類	法量 (cm)・石材		
4	多孔石	長さ 28.0　幅 21.6　厚さ 14.5　重さ 9800 g　粗粒輝石安山岩		

60 号土坑

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②灰黄褐色 ③白色粒・黒色粒・角閃石 ④口縁部破片	隆線・凹線 縄文 LR・円形文	平縁口縁。口縁部に隆線による蕨手文の区画、区画内に円形文。胴部に縄文 LR を縦位に施文。

61 号土坑

番号	種 類	法量 (cm)・石材
1	打製石斧	長さ 12.16　幅 4.82　厚さ 1.97　重さ 125.8 g　細粒安山岩

66 号土坑

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②灰黄褐色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部破片 口径 (28.2)	隆線・沈線	口縁部に 2 本の隆帯が巡る。胴部に沈線による幾何学文。内外面研磨。
2	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄褐色 ③白色粒・黒色粒・角閃石 ④口縁部破片	円形文	波状口縁。口縁端部に円形えぐり文、頸部に無文帯。
3	縄文土器 深鉢	①普通 ②灰黄褐色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部破片	隆線・沈線	口縁部直下に 2 本の隆帯が巡る。口縁部内面に沈線、内外面研磨。
4	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄褐色 ③白色粒 ④胴部破片	沈線・縄文 LR	縄文 LR を横位に施文後沈線による区画、曲線文。
5	縄文土器 深鉢	①普通 ②灰黄褐色 ③白色粒 底部破片 底径 (7.0)		底部に網代痕。(1 本越し、1 本くぐり、1 本送り)
6	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒 ④胴下位～底部破片 底径 (7.0)		胴部下位は無文、内外面研磨。
7	土製品 円盤	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・黒色粒 ④完形	凹線・縄文 RL	深鉢の胴部の破片を転用。

67 号土坑

番号	種 類	法量 (cm)・石材
1	多孔石	長さ 27.7　幅 21.9　厚さ 11.1　重さ 9800 g　粗粒輝石安山岩

68 号土坑

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②灰黄褐色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片 口径 (20.0)	隆線・凹線・条線	4 単位の波状口縁。区画内に縦位の条線を施文後、凹線。胴上位くびれ部に平行沈線。
2	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒 ④口縁部破片	隆線・凹線・条線	口縁部の区画内に縦位の沈線を施文後、凹線。胴部に条線を縦位に充填。
3	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙～褐色 ③白色粒・石英 ④口縁部破片	沈線・縄文 LR	波状口縁。縄文 LR を縦位に施文後、沈線による曲線文を垂下。
4	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒 ④口縁部破片	沈線・条線 円形文	波状口縁。口縁部内側に肥厚する。条線後沈線を施文し沈線間に円形文を配す。
5	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片	円形文 刺突文	波状口縁。山形の波頂部内側に円形文・刺突文を配列。
番号	種 類	法量 (cm)・石材		
6	打製石斧	残存長 6.74　幅 6.36　厚さ 2.34　重さ 120.2 g　黒色頁岩		

69 号土坑

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③黒色粒・礫 ④口縁部破片	隆線・縄文 RL	平縁口縁。口縁部直下に断面三角形の隆帯、胴部に縄文 RL を縦位に施文。
2	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部破片	沈線・縄文 LR	平縁口縁。縄文 LR を縦位に施文後、縦位に 2 本の区画線。
3	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片	隆線・沈線 円形文	装飾把手。山形を呈し、透孔を作る。内面に沈線・円形文を配置。
4	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部破片		平縁口縁。口縁部内側に屈折する。口縁部から胴部上位は無文。
5	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い橙色 ③白色粒・角閃石 ④頸部～胴部中位 1/2	沈線	沈線による J 字区画文を配置。
6	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い褐色 ③白色粒・黒色粒 ④胴部下位～底部 2/3 底径 5.0	沈線	沈線による垂線文、内外面丁寧な研磨。№ 5 の下部か。
7	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・角閃石 ④胴部破片	沈線・縄文 LR	沈線による曲線文、区画内は縄文 LR を縦位・斜位に充填。

70 号土坑

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②灰黄色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部破片	沈線・縄文 L	平縁口縁。沈線による区画後、縄文 L を充填。
2	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部破片	沈線・縄文 LR	波状口縁。沈線による幾何学文区画後、縄文 LR を充填。
3	縄文土器 深鉢	①普通 ②明赤褐～鈍い橙色 ③白色粒・角閃石 ④ 1/3 口径 (12.4) 底径 (6.4)、器高 20.2	沈線	口縁部に波状の装飾 4 単位。外面に沈線を 3 本施文、沈線は研磨なし。内面口縁部に沈線・刻目による施文。底部網代痕。(2 本越し、2 本くぐり、1 本送り)
4	縄文土器 深鉢	①普通 ②灰黄褐色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部～胴部下位 1/4	沈線	平縁口縁。口縁部内側に沈線を 1 本巡らす。外面は無文。 文。
5	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙色 ③白色粒・角閃石礫 ④口縁部破片		波状口縁、山形の波頂部。口縁部内側に稜を持つ。外面は無文。
6	縄文土器 深鉢	①普通 ②赤褐色 ③白色粒 ④破片	沈線・円形文	装飾突起。蕨手文を立体的に作る。端部に沈線文・円形文を配置。内外面研磨。
7	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・石英 ④破片	沈線・円形文	装飾把手。頂部と外面に蕨手文を施文。橋状に作る。
8	縄文土器 器台	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・角閃石・石英 ④ 1/5 台部径 (12.0) 底径 (15.8) 器高 7.6		円形の透孔を数個配置。

番号	種 類	法量 (cm)・石材
9	打製石斧	残存長 8.03　幅 6.07　厚さ 1.42　重さ 80.1 g　細粒安山岩
10	打製石斧	残存長 9.3　幅 5.54　厚さ 2.17　重さ 147.7 g　黒色頁岩
11	打製石斧	長さ 10.05　幅 5.46　厚さ 2.48　重さ 149.8 g　黒色頁岩
12	打製石斧	長さ 10.02　幅 6.52　厚さ 2.32　重さ 172.2 g　黒色頁岩
13	磨石	長さ 8.1　幅 6.8　厚さ 3.9　重さ 341.1 g　粗粒輝石安山岩
14	石皿	長さ 34.4　幅 21.3　厚さ 10.5　重さ 9200 g　粗粒輝石安山岩
15	石皿	長さ 27.4　幅 20.7　厚さ 4.5　重さ 2940 g　粗粒輝石安山岩
16	多孔石	残存長 14.6　残存幅 13.0　厚さ 5.7　重さ 1420 g　粗粒輝石安山岩
17	多孔石	長さ 26.7　幅 15.5　厚さ 12.8　重さ 4970 g　粗粒輝石安山岩
18	多孔石	長さ 16.9　幅 22.3　厚さ 6.9　重さ 2350 g　粗粒輝石安山岩
19	多孔石	長さ 25.3　幅 22.3　厚さ 10.3　重さ 6460 g　粗粒輝石安山岩

71 号土坑

番号	種 類	法量 (cm)・石材
1	凹基鏃	長さ 1.61　幅 1.08　厚さ 0.27　重さ 0.4 g　黒曜石

72 号土坑

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②浅黄色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片	沈線・縄文 RL	平縁口縁。縄文 RL を縦位に施文後、沈線による横線・曲線 文。
2	縄文土器 ﾐﾆﾁｭｱ土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③黒色粒 ④胴部下位～底部残存 底径 2.6		胴部は無文、底部に網代痕あり。(1 本越し、1 本くぐり)

74 号土坑

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙色 ③白色粒・黒色粒 ④胴部上位～中位 2/3	沈線・刻目 貼付文	断面三角形の隆帯上に刻目、8 字状貼付文。胴部に 2 本の沈線による波状文。
2	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄色 ③白色粒・角閃石 ④胴部破片	沈線・縄文 LR	縄文 LR を横位に施文後、沈線による区画、幾何学文。

76 号土坑

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	土製品 円盤	①普通 ②褐灰色 ③白色粒・角閃石・石英 ④完形		粗製深鉢の胴部片を転用。
番号	種 類	法量 (cm)・石材		
2	磨石	長さ 9.2　幅 8.8　厚さ 6.6　重さ 735.3 g　凝灰岩		

77 号土坑

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②灰黄褐色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片	隆線・刻目	口縁部端部内側に刻目、口縁内側に隆帯、内外面研磨。
2	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い赤褐色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片	隆線・凹線・沈線 刻目	口縁端部内屈、口縁部内側に凹線、外面隆帯を貼付、隆線上に刻目。胴部上位に沈線による横線を施す。
3	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙～灰黄褐色 ③白色粒・角閃石 ④破片	隆線・凹線・沈線 円形文	装飾突起。横位 8 字状の装飾、中心に円形文を配す。
4	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄褐色 ③白色粒・角閃石 ④胴部破片	沈線・縄文 LR	沈線による幾何学文区画後、縄文 LR を縦位・横位に充填。

80号土坑

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・褐色粒 ④胴部下位～底部残存 底径 7.3		胴部下位無文。底部網代痕 (2本越し、2本くぐり、1本送り)

82号土坑

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い赤褐色 ③白色粒・角閃石・石英 ④口縁部～胴部中位 1/7 口径 (35.7)	隆線・沈線・刻目円形文・縄文 LR	4単位の山形突起。頂部内側に円形文を施す。口縁部内側に稜を持つ。外面、隆帯を配置、隆帯上に刻目、胴上位2本の沈線間に縄文 LR を横位に充填。
2	縄文土器 深鉢	①普通 ②灰黄褐～黒褐色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部破片	隆帯・沈線 縄文 LR	平縁口縁。口縁部内側に沈線。外面隆帯上に刻目、胴部中位に横線後、縄文 LR を横位に充填。
3	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片	隆線・沈線・刻目	口縁内側に2本の沈線。口縁端部に刻目を施す。外面、断面三角形の隆帯に刻目、胴部に沈線による区画。
4	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・角閃石 ④胴部破片	沈線・縄文 LR	沈線による幾何学文施文後、縄文 LR を縦位・横位に充填。
5	縄文土器 深鉢	①普通 ②黒褐色 ③白色粒 ④破片	沈線・円形文	装飾突起。頂部に渦巻文、羽状沈線文・肩部に8字状文を作る。
6	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄褐色 ③白色粒・角閃石・石英 ④胴部下位～底部 1/3 底径 (10.6)		胴部下位無文、底部網代痕 (2本越し、3本くぐり、1本送り)
7	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・角閃石 ④胴部下位～底部 1/2 底径 8.4		胴部下位無文、底部網代痕。(1本越し、1本くぐり)

ピット出土遺物

1号ピットでは、覆土中から№1の深鉢が出土した。胴部から口縁部に向かって外行し、口縁部でわずかに内湾する器形である。口縁部文様帯は隆帯区画文で構成し、胴部は沈線による施文である。胴上位に横線を巡らせ、胴部は垂線と曲線文を配置している。文様帯を分離していることや、胴部曲線文から縄文時代中期加曾利Ｅ２式期に属すると考えられよう。この他、加曾利Ｅ３式期・称名寺式期の深鉢片も出土している。また、調整痕のある剥片が1点出土した。

2号ピットの№1は胴部上位でわずかにくびれを持つ器形の大型深鉢である。半截竹管状工具腹面による平行沈線文で施文し隆帯の効果を持つ。縄文時代中期加曾利Ｅ２式期に属する異系統の土器と考えられよう。この他では加曾利Ｅ３式期の深鉢片が出土している。

3号ピットでは、覆土中から縄文時代中期阿玉台式期の深鉢片が少量出土している。また、多孔石 (№1) が出土した。各面に錐揉みきり状の凹穴が認められる。

4号ピットの№1は口縁部が内湾し、胴部へ緩やかにくびれる器形の深鉢で、縄文の施文も緻密で丁寧である。口縁部は隆帯で区画文を作り、口縁部文様帯直下から垂線と蛇行線を配置している。縄文時代中期加曾利Ｅ３式期でも古段階に属するであろう。

5号ピットの№1は大きな眼鏡状の装飾突起で、4方向から透孔を持つ大型の深鉢である。深い凹線によって蕨手文を施文する。口縁部直下には隆帯による区画文が配されている。縄文時代中期加曾利Ｅ２式器からＥ３式期古段階に属すると考えられよう。この他、加曾利Ｅ３式期の深鉢片が出土している。

6号ピットでは、覆土中から縄文時代後期称名寺式期から堀之内式期の深鉢片が出土した。№1は口縁端部を内屈させる深鉢で、外面は口縁部下に沈線による区画文を配置する。無文部は丁寧に研磨している。№2は大型の深鉢で口縁部を外側に肥厚させて稜を作り出す。外面は沈線による曲線文である。№3は頸部でくびれる器形で比較的小型の深鉢である。波頂部から垂下した隆帯上に円形刺突文と沈線を施している。№4は外面を研磨した小型深鉢である。その他、剥片が3点出土した。

7号ピットの№1は鋭い条線を縦位に施文して、口縁部に沿った横位の沈線を配する深鉢である。縄文時代加曾利Ｅ４式期から後期称名寺式期に属すると考えられよう。この他、打製石斧が2点出土し、うち1点 (№2) を図示した。

8号ピットのNo.1は外面に条線による格子状文を施文する大型の深鉢である。口縁端部に特色が認められる。No.2は舟形の装飾突起を持つ深鉢で、2個の瘤状突起間を凹線で結んでいる。外面は無文である。共に縄文時代後期称名寺式期から堀之内式期に属すると考えられよう。この他、打製石斧片が1点出土している。

9号ピットのNo.1は外面に沈線による幾何学文を構成する深鉢である。縄文時代後期称名寺式期に属すると考えられよう。この他、中期加曾利E3式期の深鉢片や浅鉢片も出土している。石器では調整痕のある剥片2点、その他の剥片2点が出土した。

10号ピットのNo.1は口縁部が丸く張りを持ち、頸部のくびれる深鉢で口縁端部内側に稜を持つ。口縁部には半截竹管状工具による平行沈線文で三角形の区画文を配置している。縄文時代中期勝坂式期に属すると考えられよう。

11号ピットではNo.1の磨製石斧が出土した。両側部を調整して後、研磨を行っている。刃部は細かい剥離痕が見られるが、整形痕と考えられる。この他、縄文時代中期加曾利E3式期、後期堀之内式期の深鉢片が少量出土している。

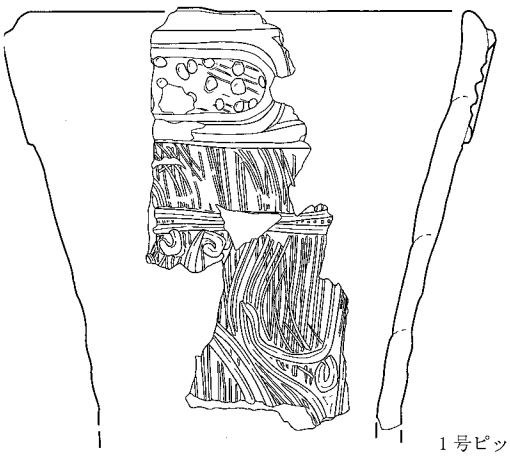
12号ピットではNo.1の深鉢が出土した。口縁端部は内屈して平端面を作る。口縁部は環状の突起を貼付する。口縁部文様帯は幅が狭く、隆線で弧状に突起間を結合させる。胴部上位に隆帯を巡らせて頸部文様帯を区画する。頸部文様帯は横位蕨手文を連続させて沈線を沿わせ、のびやかな三叉文や三角文を配置している。胴部は隆帯から2本の垂線を下ろし、1本は中程から渦巻文を描く。区画内は沈線を沿わせ、三叉文・三角文・円形文を配置する。胴下位まで施文している。縄文時代中期焼町土器の系譜に属するだろう。

13号ピットは、覆土中から縄文時代中期・後期の深鉢片が少量出土している。この他、打製石斧片1点が出土した。

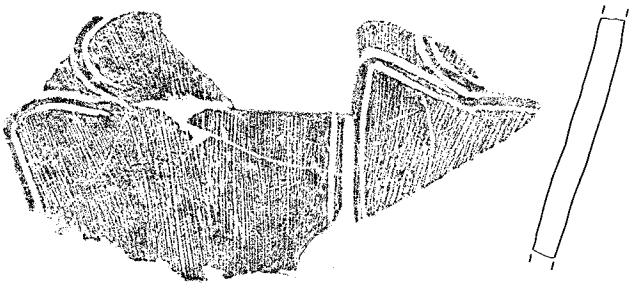
14号ピットの覆土中からは、縄文時代中期加曾利E3式期の深鉢片や、無文の深鉢片が出土している。また、赤彩のある注口土器片(No.1)も出土している。沈線による曲線文で縄文時代後期称名寺式期から堀之内式期に属すると考えられよう。

15号ピットのNo.1は口縁部へ外行する器形の深鉢胴部である。胴部中位を横線で区分し、上位は斜格子文を充填し、下位は無文である。縄文時代後期堀之内式期に属すると考えられよう。

16号ピットではNo.1の石皿片が出土している。良く磨耗しており底面は多孔石としても使用されている。



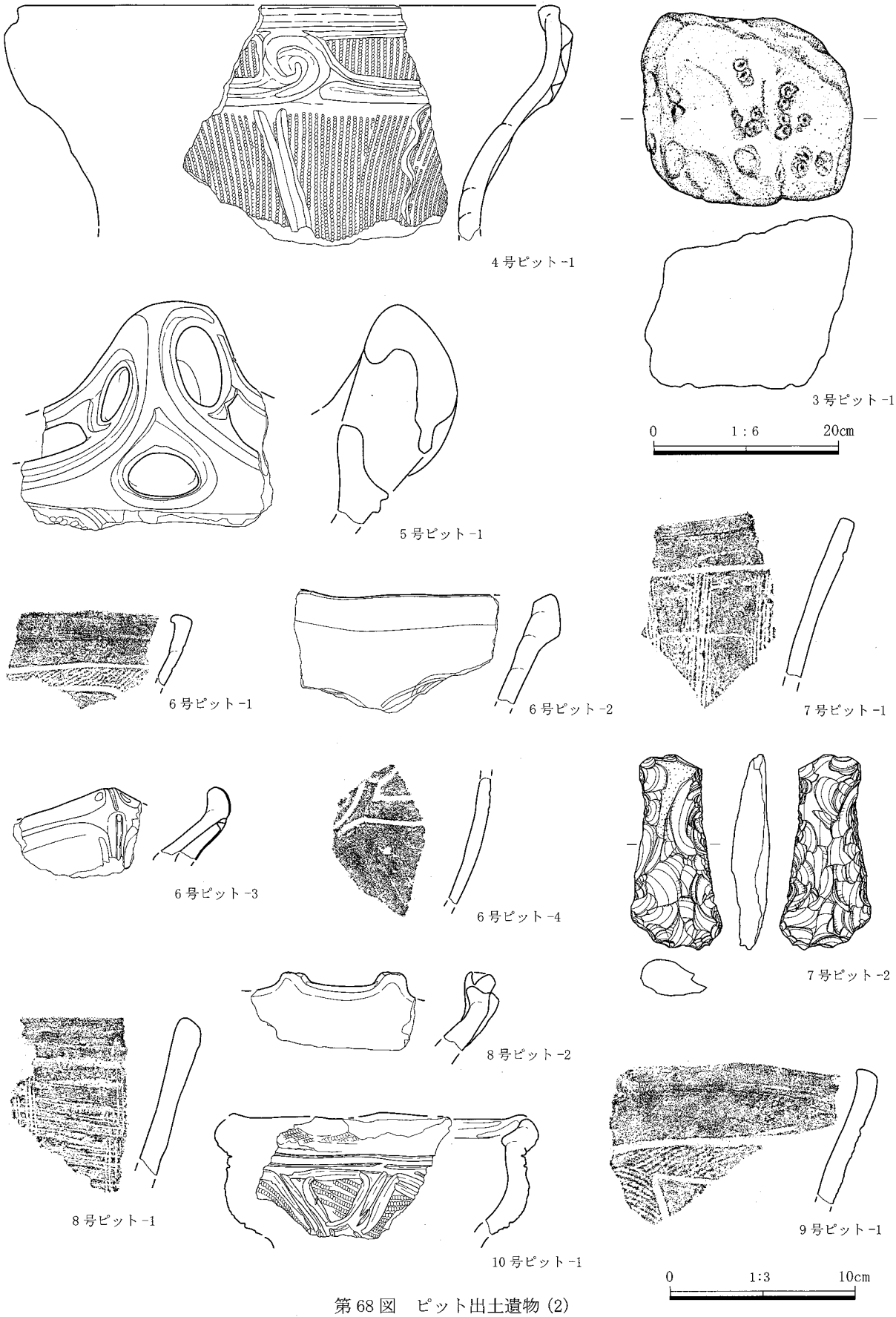
1号ピット-1



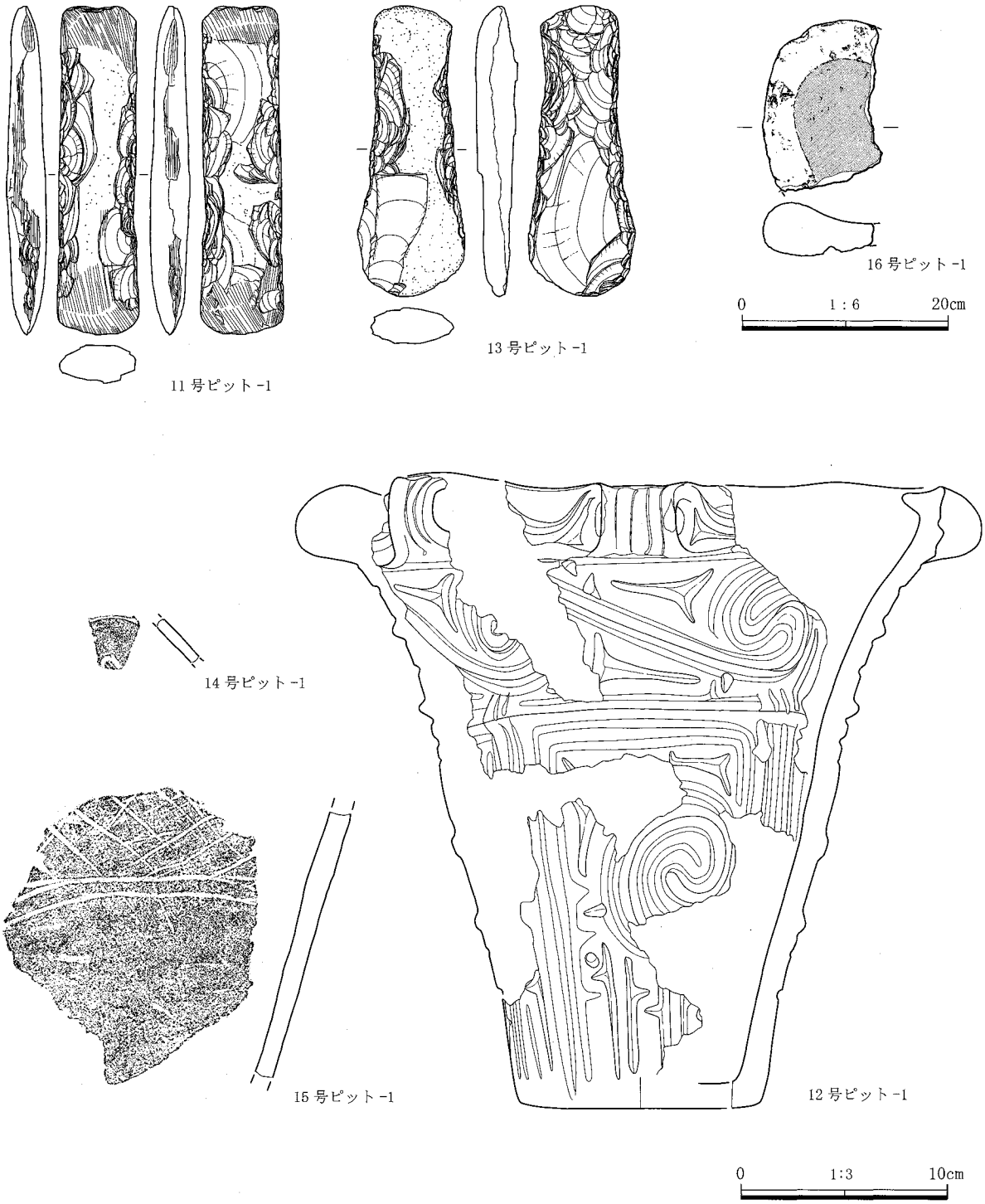
2号ピット-1

0　1:3　10cm

第67図　ピット出土遺物(1)



第68図　ピット出土遺物(2)



第 69 図　ピット出土遺物 (3)

1 号ピット

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②褐灰色 ③白色粒・礫 ④口縁部～胴部下位 1/8 口径 (17.4)	隆線・凹線・条線 沈線・円形文	平縁口縁。口縁部は隆線による楕円形の区画、区画内に円形文・条線を施文後凹線。胴部条線を施文後、蕨手文等配置。

2 号ピット

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・雲母 ④胴部破片	沈線・条線	条線を垂下後、平行沈線による曲線文。

3号ピット

番号	種　類	法量(cm)・石材
1	多孔石	長さ 20.4　幅 22.6　厚さ 18.0　重さ 12500 g　粗粒輝石安山岩

4号ピット

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色・灰黄褐色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部～胴部上位 1/8 口径 (28.0)	隆線・凹線 縄文	平縁口縁。縄文(絡条体回転文)を施文後、口縁部は隆線・凹線により渦巻文・楕円文を区画。胴部は隆線を垂下、蛇行文を配置。

5号ピット

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙～鈍い黄橙色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部破片	隆線・凹線 縄文 LR	大型把手。円形透孔を作る。縄文 LR を縦位に施文後、隆線・凹線により区画。

6号ピット

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄褐色 ③白色粒 ④口縁部破片	沈線・縄文 LR	平縁口縁。口縁端部は内側に屈曲。縄文 LR を施文後、沈線による区画。
2	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙～鈍い黄褐色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片	沈線	波状口縁。口縁部外側に肥厚し稜を持つ。沈線文を施文。
3	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄褐～黒褐色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片	隆線・沈線 円形文	波状口縁。山形の波頂部。波頂部より隆線を垂下、線上に円形文、沈線を配置。
4	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い橙色 ③白色粒・角閃石 ④胴部破片	沈線	沈線による曲線の区画文。

7号ピット

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②暗灰黄色 ③白色粒 ④口縁部破片	沈線・条線	波状口縁。口縁部下に沈線、条線を縦位に充填。

番号	種　類	法量(cm)・石材
2	打製石斧	長さ 10.27　幅 4.81　厚さ 2.02　重さ 82.9 g　黒色頁岩

8号ピット

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③黒色粒 ④口縁部破片	条線	平縁口縁。条線による斜格子文。
2	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片	凹線 円形文	双頭の小突起、頂部に円形文、突起間に凹線を施文。外面は無文。

9号ピット

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片	沈線・縄文 LR	平縁口縁。沈線による区画後、縄文 LR を縦位・横位施文で充填。

10号ピット

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②明赤褐色 ③白色粒・石英 ④口縁部 1/4 口径 (16.2)	沈線・縄文 LR	小波状口縁。口縁部内側に稜を持つ。縄文 LR を縦位に施文後、沈線による三角形の区画文。

11号ピット

番号	種　類	法量(cm)・石材
1	磨製石斧	長さ 15.77　幅 3.93　厚さ 1.91　重さ 166.4 g　頁岩

12号ピット

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②褐色 ③白色粒・角閃石 ④ 1/3 口径 (28.8) 底径 (11.4) 器高 29.9	隆線・沈線	口縁部にコイル状の突起配置。断面三角形の隆線と沈線による横位蕨手文入組み文・三叉文・円形文・交互のT字文を配置。

13号ピット

番号	種　類	法量(cm)・石材
1	打製石斧	長さ 13.93　幅 5.13　厚さ 2.04　重さ 147.5 g　ホルンフェルス

14号ピット

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 注口土器	①普通 ②橙色 ③白色粒・角閃石 石 ④胴部破片	沈線・縄文 RL	沈線による曲線の区画後、縄文 RL を横位施文で充填。 外面に赤彩あり。

15号ピット

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙色 ③白色粒・角閃石 ④胴部破片	沈線	沈線による横線と斜格子文。

16号ピット

番号	種類	法量(cm)・石材
1	石皿	残存長 16.6　幅 11.1　厚さ 5.0　重さ 1240 g　粗粒輝石安山岩

第６節　遺構外出土遺物

遺構外からは大量の縄文土器片と、石器類が出土している。このうちから本遺跡の時代的な特徴を示すと思われる遺物を抽出して図示した。土器は縄文時代前期花積下層式期から諸磯式期、中期の阿玉台式・勝坂式期・加曽利Ｅ式期、後期称名寺式期・堀之内式期・加曽利Ｂ式期が認められている。この他後期後半の土器も散見するが、少量である。

No.１～No.５は縄文時代前期に属する。No.１～No.４は胎土中に繊維を含む土器群である。No.１は口縁部が外反する器形で、端部に円形の貼付文と刻目を施している。外面は貝殻圧痕文と思われる。同様の施文は２号土坑出土の深鉢（No.２）にも認められている。２号土坑とは出土地点も離れており、また直接に接点が見いだせないため別固体とした。No.２は束状の縄文を蕨手状に押圧して、刺突文を充填している。二ッ木式期の深鉢に多用される文様である。No.４は単軸絡条体回転文の第４類に近似する。この種の土器は当遺跡の中でもこの１点しか見い出せなかった。東北系の円筒下層式Ｃに見られる施文方法であるという。小片ながら注目できる土器である。No.５は胎土中に繊維を含まず、細かい縄文を施文している。

No.６～No.18は中期に属する土器群である。No.16にみられるような口縁部に隆帯と凹線、縄文による区画文と、胴部に無文帯と縄文帯を交互に配置する文様構成の土器群が量的にも主体を占めている。またこれらの加曽利Ｅ３式期の土器群とともに、「胴部隆帯文」土器と呼ばれる唐草文の深鉢（No.15）や連弧文系の深鉢（No.10）が認められている。No.15は橋状把手を貼付していたか、剥離痕が認められている。No.18は胴部がくびれる器形で、断面三角形の隆線を垂下する。加曽利Ｅ４式期に属するであろう。No.16は口縁部の区画文や胴部の無文帯を箱状に囲むことから加曽利Ｅ３式期でも新段階に属するといえよう。No.６・No.11・No.12は中期前半の阿玉台式期・勝坂式期、No.７・No.９は加曽利Ｅ１式期からＥ２式期とできよう。

No.19～No.54は後期称名寺式期から堀之内式期・加曽利Ｂ式期に属する土器群である。この時期の遺物群は当遺跡にもう一つのピークのあることを示している。土坑以外は明確な遺構としては捉えられないが、土器の出土量としては中期のものにひけを取らないだろう。No.19は、器形と口縁部の形状に縄文時代後期称名寺式期から堀之内式期の特色を持つ。No.20は口縁直下と胴中位に沈線を巡らし、文様帯を構成する。文様は沈線施文である。蕨手文を入り組ませ、三叉文を組込む。No.23・No.24も上下を横位沈線で区画して、文様帯を構成している。No.27も同様であろう。No.26は刻目のある隆帯と、隆帯間をつなぐ鎖状の貼付文を施している。さらに沈線を巡らして文様帯を構成する。No.28は胴下位無文の小型深鉢である。No.29は波状口縁で、頸部が強くくびれる器形の黒色研磨土器である。口縁端部と内側に装飾が認められる。頸部には刺突文を充填した沈線を重ねている。胴部片を欠くため、器形の全容を明らかにできないが、口径が推定でおよそ26cmとなる大型の深鉢である。加曽利Ｂ式期か、あるいは後期後葉に属すると思われる。No.25は外面に粗い縄文を施す深鉢で、口縁内側に沈線を巡らす。表面から穿孔した補修孔があり、裏面には貫通しない穿孔途中の痕跡も認められている。後期前半期の粗製土器である。No.30は口縁部が屈曲して、橋状装飾把手を持つ浅鉢である。上面が方形を呈すると思われる。把手部分は円形の透かし穴を持つ。把手両脇に円形刺突文を並べた隆線を貼付する。No.31は台形の装飾把手を持ち、胴上位でくびれる器形の深鉢である。頂部は楕円形を呈し中空である。頂部から弧状に沈線を沿わせ、刻目を施した隆線を垂下している。No.32・No.33は内外赤彩の浅鉢である。No.34は鍔付土器で、胴部に小孔を穿つ。No.35～No.47は内湾する鉢や注口土器の類である。No.48は角状の注口土器把手である。No.49・No.50は注口部である。No.51～No.54は底部に網代圧痕を持つ深鉢である。籠編状のもの（No.51・No.52）、綾杉状のもの（No.53・No.54）とが認められる。No.55～No.57はミニチュア土器で、所属時期は確定できない。この他、耳飾（No.58）、円盤状土製品（No.59～No.63）が出土している。またNo.64は断面がわずかに湾曲する土製品で、口縁側に２個

の小孔を並べる。蓋であろう。

石器類も多量に出土している。器種としては、石鏃・石錐・石匙・スクレイパー・石槍・打製石斧・磨製石斧・凹石・磨石・敲石・台石・石棒・多孔石がある。その他、調整痕のある剥片石器・フレーク類・石片類が多量に出土している。石材は石鏃ではチャート・頁岩・安山岩・黒曜石が使用されている。磨石・石皿・敲石類では主に粗粒安山岩が選択されている。

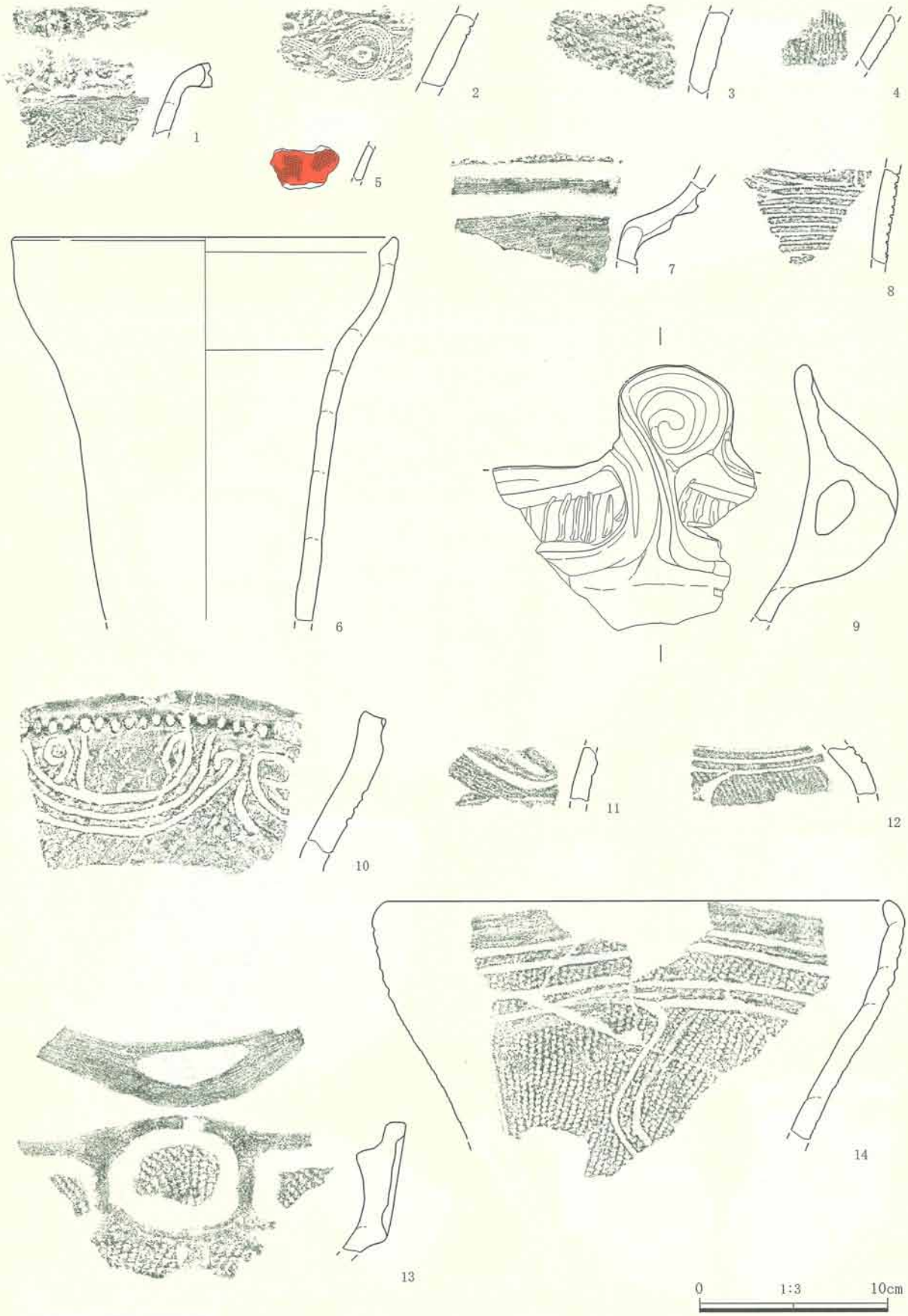
石鏃は32点で、その内11点を図示した。ほとんどが凹基鏃で30点を占める。平基鏃としたものは2点(No. 74・75) のみである。チャート製は12点、その他は黒色安山岩・頁岩類である。石錐はNo. 76の他は破損品が4点出土している。いずれも頁岩製であった。No. 77は石槍であり、この1点のみ確認できた。ほぼ完形で中程で稜を作り柄部は細身とする。押出型ポイントと称される一群に属する。前期の土器群に対応できるだろう。

打製石斧は多量に出土しており、256点を数えた。破損品が多くこの内9点を図示した。短冊形が多く撥形は比較的少ない。また分銅形はごく少量であった。石材は黒色頁岩・細粒安山岩が選択されている。短冊形打製石斧のうち左右側縁形状が非対象のもの (No. 80・No. 81・No. 84) が認められている。また大型で重量のあるもの (No. 82) に対して、No. 86のように厚さが薄く重量も軽いものも散見する。定型的な打製石斧とは機能が異なるであろう。またNo. 88は分銅形で長さおよそ20cm, 巾は10cm近い大型品である。中央部側面に抉りを入れており、先端には使用痕が認められている。この形状の石斧は縄文時代後期後葉に属するといわれている。No. 78・No. 79は輝緑岩製磨製石斧片である。

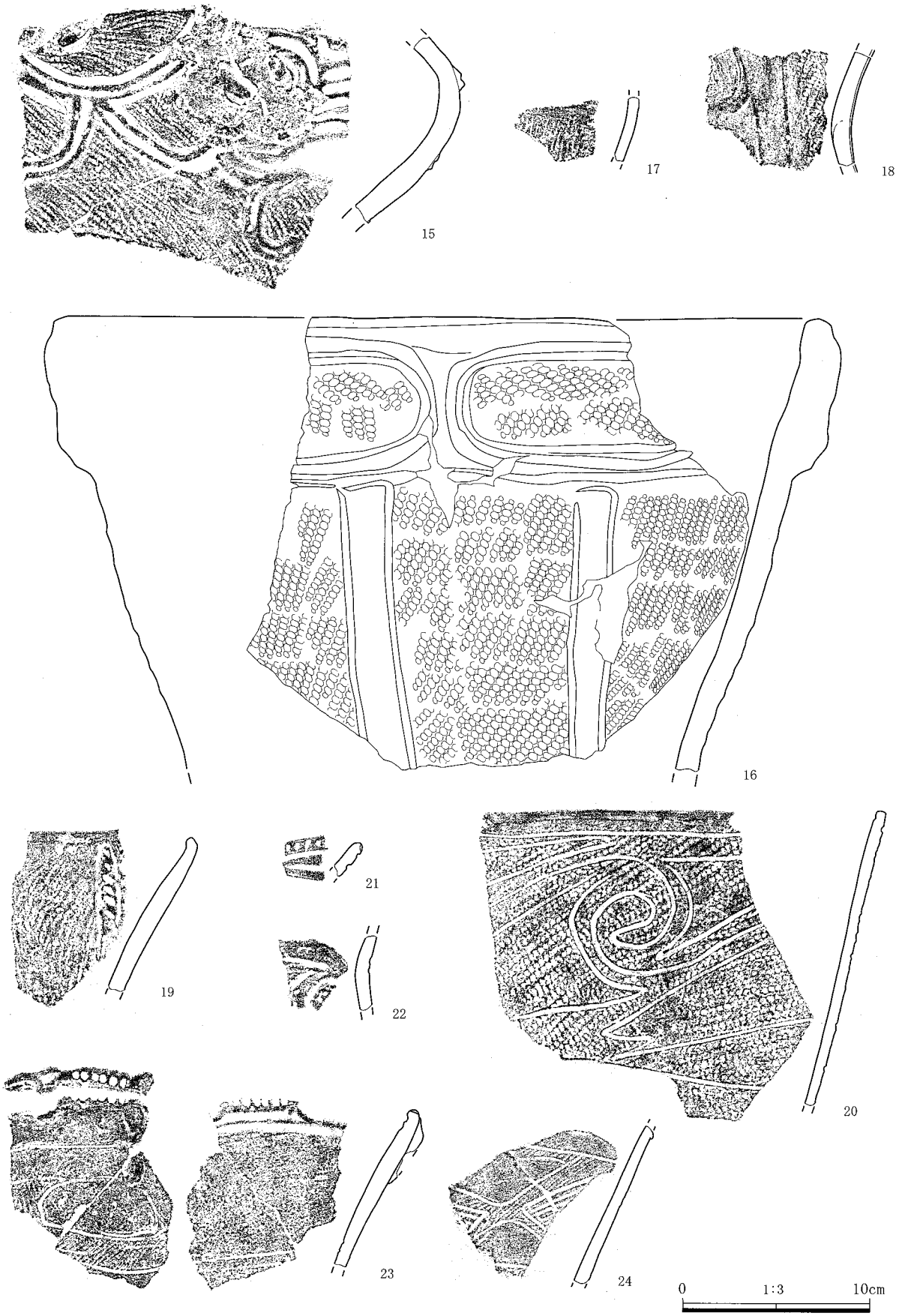
石皿は破片状態で出土し、7点確認できた。うち2点を図示した。No. 89は厚さが4cmほどと比較的薄く、外縁部の作り出しは低い。No. 90は大型品で広い摩耗痕が認められる。多孔石としても使用されていたと思われ、錐もみ状の凹穴が多数認められている。安山岩製である。多孔石はこの他2点出土している。

磨石は10点確認できた。うち3点を図示した。No. 91・No. 92・No. 93とも凹石としても使用している。凹石・敲石は10点出土し、4点を図示した。

この他打製石器片および未製品や調整痕のある剥片も多量出土している。遺構外より出土した石器数の総数は、1663点を数える。このうちの多くの石材は頁岩、安山岩が中心で、粘板岩・砂岩がみられる。またチャート82点、黒曜石片は69点であった。片岩も少量ながら認められている。

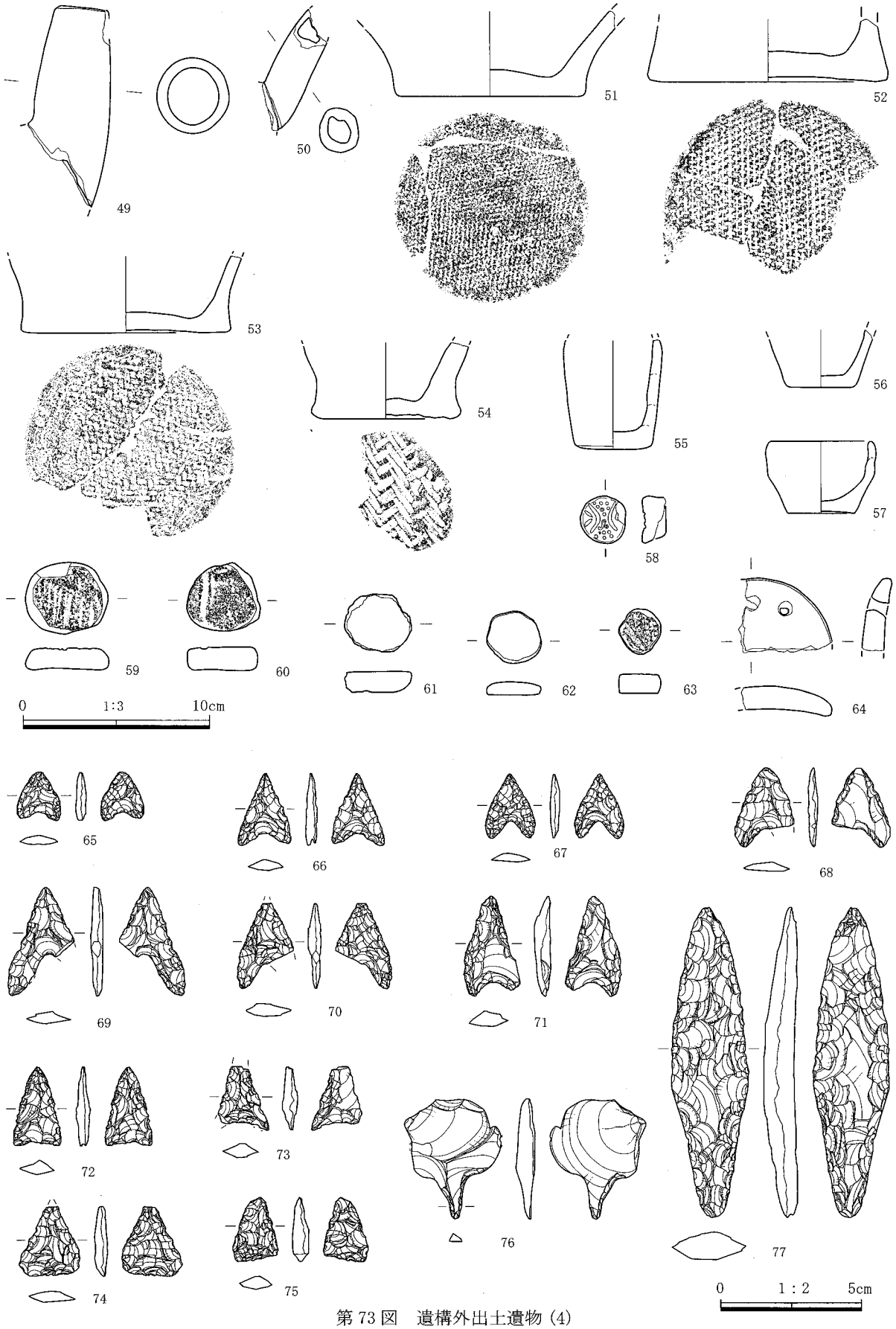


第 70 図　遺構外出土遺物 (1)



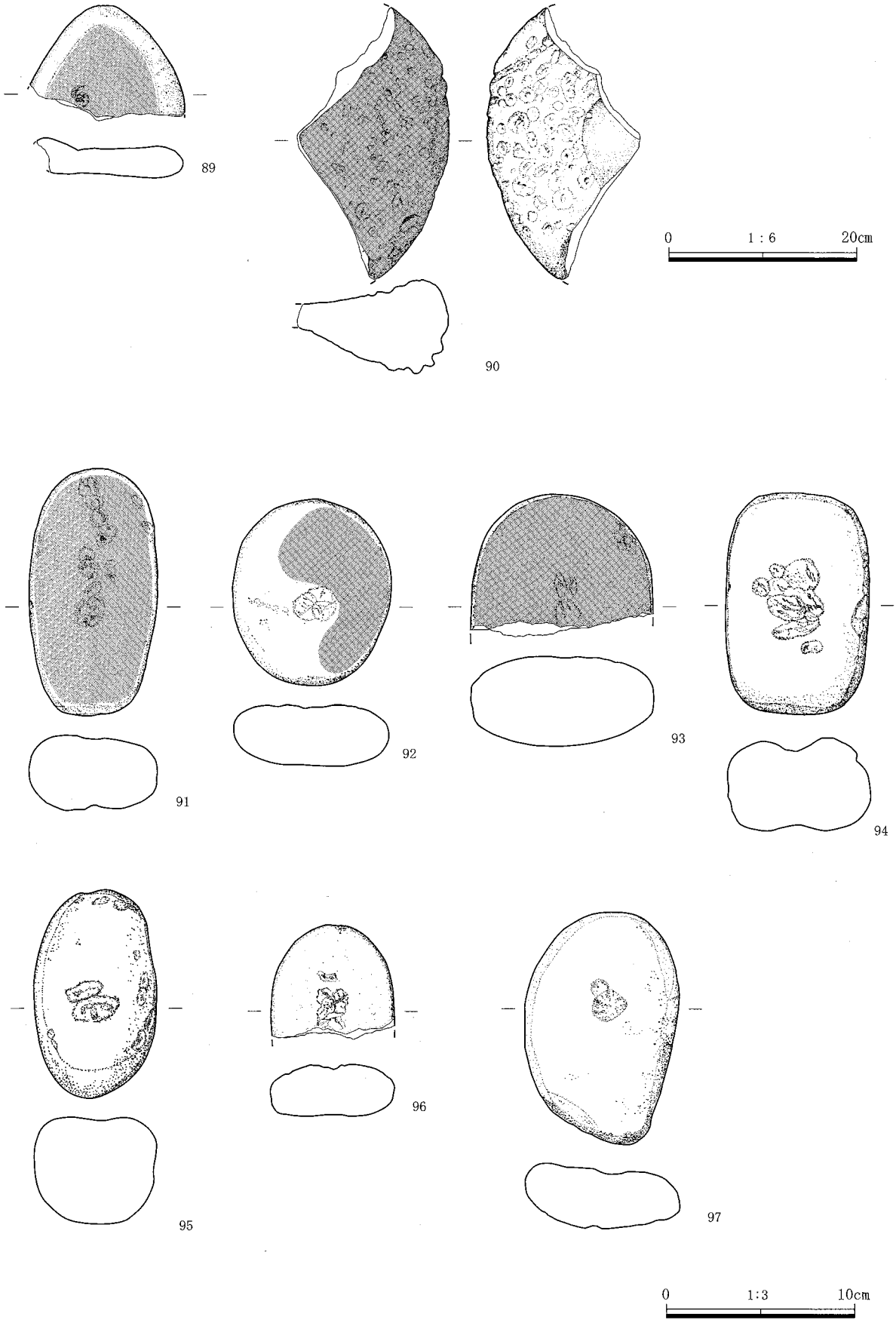
第 71 図　遺構外出土遺物 (2)

第 72 図　遺構外出土遺物 (3)



第73図　遺構外出土遺物 (4)

第 74 図　遺構外出土遺物 (5)



第75図　遺構外出土遺物 (6)

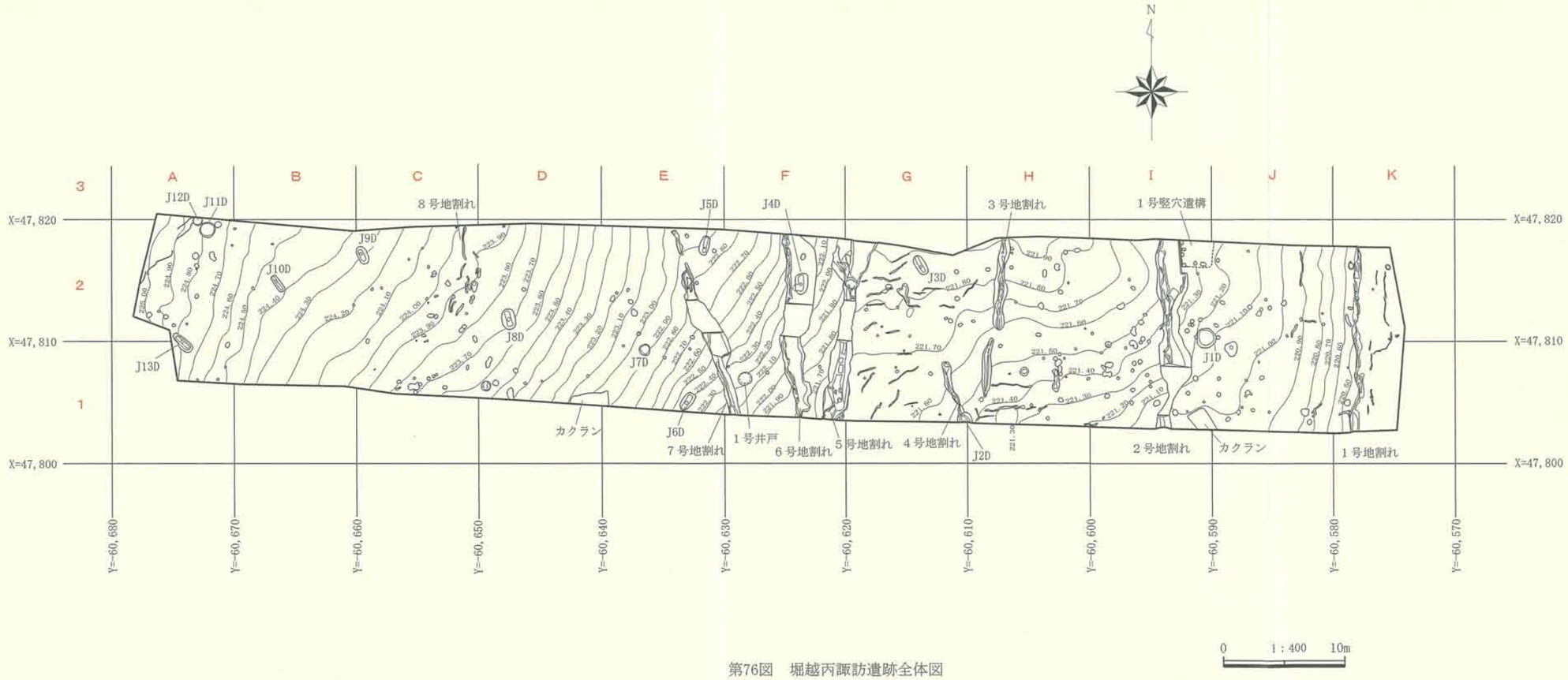
番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・繊維 ④口縁部破片	貝殻圧痕文 円形文・刻目	口縁部外反。端部に円形貼付文・刻目。
2	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・繊維 ④胴部破片	撚糸圧痕文 円形文・列点文	横位蕨手文、中央に円形文を配置、列点文を充填。
3	縄文土器 深鉢	①普通 ②暗褐色・鈍い黄褐色 ③白色粒・繊維 ④胴部破片	縄文 LR	縄文 LR を横位に施文。
4	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・褐色粒・繊維 ④胴部破片	縄文	単軸絡条体回転文。
5	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色・赤褐色 ③白色粒・角閃石 ④胴部破片	縄文 LR	縄文 LR を施文、赤色塗彩。
6	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙～鈍い赤褐色 ③白色粒・褐色粒・雲母・石英 ④口縁部～胴部下位 3/5 口径 20.2		平縁口縁。口縁部内側に稜を持つ。外面は無文。
7	縄文土器 深鉢	①普通 ②灰赤色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部破片	隆線・凹線 縄文	口縁部隆線による区画文、区画内縄文施文。頸部に無文帯。内外面研磨。
8	縄文土器 深鉢	①普通 ②暗褐色 ③白色粒・角閃石・雲母 ④胴部破片	沈線	半截竹管状工具による沈線文・曲線文。
9	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙～鈍い褐色 ③白色粒黒色粒 ④口縁部破片	隆線・凹線・沈線	S 字状に捻る装飾突起。縦位沈線を施文後、凹線による区画。
10	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄色 ③白色粒・角閃石・石英 ④口縁部破片	沈線・縄文 LR 刺突文	口縁部外端部に円形刺突文。胴部は縄文 LR を施文後、沈線による連弧文・蕨手文を配置。
11	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙～鈍い黄褐色 ③白色粒・角閃石 ④胴部破片	沈線・縄文 LR	縄文 LR を縦位に施文後、沈線による曲線文・三叉文。
12	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い褐色 ③白色粒・黒色粒 ④胴部破片	沈線・縄文 LR	縄文 LR を縦位に施文後、沈線により区画、三角えぐり文。
13	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片	隆線・凹線 縄文 LR	波状口縁。波頂部内側に三角形状装飾あり。縄文 LR を縦位に施文後、隆線・凹線による区画。
14	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色・灰黄褐色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部～胴部中位 1/6 口径 (26.4)	沈線・縄文 RL	平縁口縁。縄文 RL を縦位に施文後、口縁部下に 4 本の沈線、2 本単位の蛇行文を垂下。
15	縄文土器 深鉢	①普通 ②黄褐色 ③白色粒・角閃石 ④胴部破片	隆線・凹線 縄文 LR	縄文 LR を横位に施文後、2 本単位の隆線・凹線による唐草文。
16	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・黒色粒・褐色粒 ④口縁部～胴部中位 1/6 口径 (40.0)	隆線・凹線・沈線 縄文 RL	平縁口縁。口縁部は隆線・凹線による区画後、縄文 RL を横位・縦位に充填。胴部は縄文 RL を縦位に施文後、沈線により区画。
17	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・褐色粒 ④胴部破片	凹線・条線	縦位条線施文後、横位の凹線。
18	縄文土器 深鉢	①普通 ②明黄褐色 ③白色粒・角閃石 ④胴部破片	隆線・縄文 RL	断面三角形の隆線による垂線・曲線文、縄文 RL を縦位に施文。
19	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片	隆線・縄文 LR 刻目	平縁口縁。口縁端部は内屈。縄文 LR を横位に施文後、隆線を垂下し、線上に刻目。
20	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片	沈線・縄文 LR	平縁口縁。縄文 LR を横位に施文後、沈線による入組文・三叉文。
21	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い橙色 ③黒色粒 ④口縁部破片	沈線・刻目	小波状口縁。口縁端部に刻目、沈線を施文。
22	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄褐色 ③白色粒・角閃石 ④胴部破片	沈線・縄文 LR	沈線を施文後、縄文 LR を充填。
23	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄褐色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片	隆線・沈線 縄文 LR・刻目	台形突起、上部に刻目。口縁部内側に沈線。外面口縁部から短隆線を垂下、胴部は沈線による区画後、縄文 LR を縦位・横位に充填。
24	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙色 ③白色粒・角閃石 ④胴部破片	隆線・沈線 縄文 LR	隆線、線上に刻目、沈線により上下を区画、区画内に三角形の組合せ文。沈線間に縄文 LR を充填、三角形内は斜位の沈線を充填。
25	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い橙～鈍い褐色 ③角閃石・石英 ④口縁部破片	沈線・縄文 LR	平縁口縁。口縁部内側に沈線。外面縄文 LR を横位に施文。
26	縄文土器 深鉢	①普通 ②暗赤褐色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片	隆線・沈線・刻目	平縁口縁。口縁端部の平坦面に渦巻文と 2 本沈線を施文。口縁部に刻目のある隆帯を配置、鎖状の隆線を垂下。
27	縄文土器 深鉢	①普通 ②黄灰色 ③白色粒・雲母 ④胴部破片	沈線	沈線による横線、波状文を重ねて鎖状にする。
28	縄文土器 深鉢	①普通 ②暗灰黄色 ③白色粒・角閃石 ④胴部中位～底部残存 底径 5.8		外面研磨、内面粗い研磨。胴部中位から下位は無文。
29	縄文土器 深鉢	①普通 ②黒褐色 ③白色粒・石英 ④口縁部破片	凹線・沈線 円形文	波状口縁。波頂部内側に凹線、円形文。頸部沈線間に 2 列の列点文。内外面黒色研磨。
30	縄文土器 浅鉢	①普通 ②鈍い黄橙～褐灰色 ③白色粒・黒色粒 ④口縁部破片	隆線・凹線 円形文・列点文	波状口縁。4 単位の橋状把手を持つ。口縁部区画内に列点文。把手脇に円形文配置。

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
31	縄文土器 深鉢	①普通 ②黒褐色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片	隆線・沈線 円形文	装飾把手。頂部は円孔を持つ。隆線・沈線を曲線的に垂下し、円形文を充填。
32	縄文土器 浅鉢	①普通 ②黄褐色・暗褐色 ③白色粒・石英 ④口縁部破片		内外面研磨、赤色塗彩。
33	縄文土器 浅鉢	①普通 ②灰黄褐色・褐色 ③白色色粒・角閃石 ④胴部破片		内外面赤色塗彩。
34	縄文土器 鍔付土器	①普通 ②明褐色 ③白色粒・角閃石・石英 ④胴部破片		断面三角形の鍔を持ち、胴部に穿孔あり。
35	縄文土器 注口土器	①普通 ②鈍い黄橙～灰黄褐色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片	沈線・円形文	粘土貼付による施文、沈線文・円形文。外面研磨、把手付き。
36	縄文土器 鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒 ④口縁部破片	隆線	断面三角形の隆線による曲線文、口縁部下の隆線に穿孔あり。穿孔部は把手脇に当たる。
37	縄文土器 鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・石英 ④胴部破片	隆線・縄文 RL	断面三角形の隆線による曲線文、区画内に縄文 RL を縦位に充填。
38	縄文土器 注口土器	①普通 ②鈍い黄橙～褐灰色 ③白色粒・黒色粒・石英 ④口縁部～胴部上位 1/8 口径 (10.2)	沈線・刻目	口縁端部に沈線・刻目、口縁部内側に沈線。
39	縄文土器 注口土器	①普通 ②鈍い黄橙～鈍い黄褐色 白色粒・角閃石 ④口縁部破片	沈線・刻目	口縁端部に刻目、把手の剥離痕あり。沈線区画、外面は強い研磨。
40	縄文土器 注口土器	①普通 ②黒褐色 ③白色粒・角閃石 ④胴部破片	沈線・縄文 LR	沈線を施文後、縄文 LR を充填。
41	縄文土器 注口土器	①普通 ②灰黄褐色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片	沈線・縄文 LR	沈線による区画後、縄文 LR を横位に充填。
42	縄文土器 注口土器	①普通 ②鈍い黄褐色 ③白色粒・角閃石 ④胴部破片	沈線・縄文 L	沈線による渦巻文、区画内を縄文 L で充填。
43	縄文土器 注口土器	①普通 ②鈍い黄褐色 ③白色粒・角閃石 ④胴部破片	沈線・縄文 LR	沈線による横線・渦巻文、沈線間に縄文 LR を充填。
44	縄文土器 注口土器	①普通 ②灰黄褐色 ③白色粒・角閃石 ④胴部破片	縄文 LR	粘土紐貼付による曲線文、紐上に縄文 LR を横位・斜位に充填。
45	縄文土器 注口土器	①普通 ②鈍い黄褐色 ③白色粒・角閃石 ④胴部破片	渦巻文	粘土貼付による半浮彫り状の渦巻文。内外面研磨。
46	縄文土器 注口土器	①普通 ②黒褐色・鈍い橙色 ③白色粒・雲母 ④胴部破片	沈線・条線	条線文を充填後、沈線による区画文。
47	縄文土器 注口土器	①普通 ②鈍い黄橙～鈍い黄褐色 ③白色粒・黒色粒 ④胴部破片	沈線	沈線文・曲線文・三叉文。
48	縄文土器 注口土器	①普通 ②橙～鈍い褐色 ③白色粒・角閃石 ④把手破片	沈線・円形文	角状の把手端部、沈線・円形文施文。
49	縄文土器 注口土器	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・角閃石 ④注口部残存		注口部は無文、外面研磨。
50	縄文土器 注口土器	①普通 ②橙色 ③白色粒・角閃石 ④注口部残存	沈線	胴部との接合部に沈線文あり、外面研磨。
51	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄褐色 ③白色粒・石英 ④胴部下位～底部 3/4 底径 10.0		胴部下位は無文。底部にざる目状の圧痕。(1 本越し、1 本くぐり)
52	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄褐色 ③白色粒・角閃石 ④胴部下位～底部 3/4 底径 12.8		底部網代痕。(1 本越し、1 本くぐり)
53	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い赤褐色 ③白色粒・角閃石 ④胴部下位～底部 3/4 底径 11.0		底部網代痕。(2 本越し、2 本くぐり、1 本送り)
54	縄文土器 深鉢	①普通 ②橙色 ③白色粒・角閃石 ④胴部下位～底部 2/5 底径 (8.0)		胴部下位は無文。底部網代痕。(3 本越し、3 本くぐり、1 本送り)
55	縄文土器 ﾐﾆﾁｭｱ土器	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・角閃石・礫 ④胴部上位～底部残存 底径 4.0		無文の深鉢。
56	縄文土器 ﾐﾆﾁｭｱ土器	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・角閃石 ④胴下位～底部 1/2 底径 3.7		無文の深鉢。
57	縄文土器 ﾐﾆﾁｭｱ土器	①普通 ②暗灰黄色 ③白色粒・角閃石 ④ 2/3 口径 (5.4) 底径 3.6 器高 3.9		無文の鉢。
58	土製品 耳飾	①普通 ②橙色 ③白色粒・黒色粒 ④直径 2.6 残存の厚さ 1.25	沈線・円形刺突文	断面臼状の沈線によるX字状文に、円形刺突文を充填。
59	土製品 円盤	①普通 ②橙色 ③白色粒・黒色粒 ④完形		平行沈線あり。深鉢胴部の破片の転用。

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
60	土製品 円盤	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・黒色粒・褐色粒・石英 ④完形		沈線あり。深鉢胴部の破片の転用。
61	土製品 円盤	①普通 ②鈍い赤褐色 ③白色粒・角閃石 ④完形		内外面研磨の鉢の破片を転用。
62	土製品 円盤	①普通 ②鈍い黄色 ③白色粒 ④完形		無文の深鉢の胴部破片を転用。
63	土製品 円盤	①普通 ②鈍い黄色 ③白色粒・角閃石 ④完形		沈線・縄文 RL の深鉢胴部破片を転用。
64	土製品 蓋か	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・角閃石 ④破片		無文、２つの円孔あり。

番号	種　類	法量 (cm)・石材
65	凹基鏃	長さ 1.73　幅 1.53　厚さ 0.4　重さ 1.4 g　チャート
66	凹基鏃	長さ 2.56　幅 1.89　厚さ 0.43　重さ 1.3 g　黒色安山岩
67	凹基鏃	長さ 2.3　幅 1.77　厚さ 0.35　重さ 1.3 g　チャート
68	凹基鏃	長さ 2.82　幅 2.09　厚さ 0.35　重さ 1.6 g　黒色安山岩
69	凹基鏃	長さ 3.8　幅 1.8　厚さ 0.43　重さ 1.8 g　黒色安山岩
70	凹基鏃	残存長 3.04　幅 1.99　厚さ 0.49　重さ 2.1 g　黒色安山岩
71	凹基鏃	長さ 3.57　幅 2.0　厚さ 0.57　重さ 3.1 g　黒色安山岩
72	凹基鏃	長さ 2.74　幅 1.63　厚さ 0.51　重さ 1.5 g　黒色安山岩
73	凹基鏃	残存長 2.39　幅 1.88　厚さ 0.59　重さ 1.7 g　黒色安山岩
74	平基鏃	残存長 2.49　幅 2.15　厚さ 0.48　重さ 2.5 g　黒色安山岩
75	平基鏃	長さ 2.29　幅 1.59　厚さ 0.59　重さ 1.9 g　赤色珪質岩
76	石錐	長さ 4.3　幅 3.45　厚さ 0.68　重さ 6.8 g　黒色頁岩
77	石槍	長さ 11.03　幅 2.76　厚さ 1.23　重さ 31.4 g　黒色安山岩
78	磨製石斧	残存長 5.1　幅 3.8　厚さ 1.9　重さ 61.2 g　輝緑岩
79	磨製石斧	残存長 7.5　幅 5.5　厚さ 3.2　重さ 252.5 g　輝緑岩
80	打製石斧	長さ 8.99　幅 3.93　厚さ 1.81　重さ 70.2 g　黒色頁岩
81	打製石斧	長さ 13.31　幅 4.6　厚さ 1.81　重さ 125.1 g　砂岩
82	打製石斧	残存長 10.23　幅 6.07　厚さ 3.01　重さ 236.4 g　黒色頁岩
83	打製石斧	長さ 8.9　幅 5.7　厚さ 1.47　重さ 90.7 g　黒色頁岩
84	打製石斧	残存長 6.79　幅 4.97　厚さ 2.08　重さ 104.0 g　細粒安山岩
85	打製石斧	長さ 11.87　幅 5.41　厚さ 1.54　重さ 125.9 g　黒色頁岩
86	打製石斧	長さ 11.01　幅 5.79　厚さ 1.08　重さ 67.3 g　粘板岩
87	打製石斧	残存長 9.97　幅 6.29　厚さ 2.91　重さ 188.0 g　黒色頁岩
88	打製石斧	長さ 19.7　幅 9.7　厚さ 2.67　重さ 502.8 g　細粒安山岩
89	石皿	残存長 12.1　幅 15.9　厚さ 3.6　重さ 870 g　粗粒輝石安山岩
90	石皿	残存長 29.0　幅 16.1　厚さ 9.9　重さ 3210 g　粗粒輝石安山岩
91	敲石・磨石	長さ 13.2　幅 6.8　厚さ 4.0　重さ 559.3 g　石英閃緑岩
92	敲石・磨石	長さ 10.0　幅 8.4　厚さ 3.2　重さ 397.7 g　粗粒輝石安山岩
93	敲石・磨石	残存長 7.6　幅 9.6　厚さ 4.8　重さ 439.9 g　粗粒輝石安山岩
94	敲石	長さ 11.8　幅 7.6　厚さ 5.0　重さ 673.0 g　粗粒輝石安山岩
95	敲石	長さ 11.1　幅 6.5　厚さ 5.7　重さ 538.0 g　粗粒輝石安山岩
96	敲石	残存長 6.1　幅 6.1　厚さ 2.8　重さ 164.6 g　粗粒輝石安山岩
97	敲石	長さ 12.4　幅 8.2　厚さ 3.5　重さ 472.7 g　粗粒輝石安山岩

堀越丙諏訪遺跡



第76図　堀越丙諏訪遺跡全体図

第４章　堀越丙諏訪遺跡の遺構・遺物

第１節　土　坑

J1 号土坑

Ｉ -1･2 グリッドに位置する。平面形態は円形を呈し、規模は径 160 × 158㎝、残存壁高は 40㎝を測る。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、底面は平坦である。遺物は出土していない。

J2 号土坑

Ｇ・Ｈ -1 グリッドに位置する。南側が調査区域外のため不明だが、平面形態は楕円形を呈す陥し穴と思われる。規模は東西軸の径 112㎝、残存壁高は 140㎝を測る。壁は垂直気味に立ち上がる。遺物は出土していない。

J3 号土坑

Ｇ -2 グリッドに位置する。南東への傾斜面にあり、等高線に直交して掘られている。平面形態は楕円形を呈す陥し穴である。規模は径 170 × 84㎝、残存壁高は 155㎝を測る。主軸は N-30° -W を示す。壁は垂直気味に立ち上がり、底面は平坦であり、中央やや東寄りに小ピットが穿たれる。規模は径 23 × 19㎝、深さ 20㎝を測る。遺物は出土していない。

J4 号土坑

Ｆ -2 グリッドに位置する。東南への傾斜面にあり、等高線に平行して掘られている。平面形態は楕円形を呈す陥し穴である。規模は径 170 × 102㎝、残存壁高は 155㎝を測る。主軸は N-6° -W を示す。壁は垂直気味に立ち上がり、底面は平坦であり、中央やや南寄りに小ピットが穿たれる。規模は径 23 × 20㎝、深さ 23㎝を測る。遺物は出土していない。

J5 号土坑

Ｅ -2 グリッドに位置する。東南への傾斜面にあり、等高線に対してはやや斜めに掘られている。平面形態は楕円形を呈す陥し穴である。規模は径 156 × 76㎝､残存壁高は 140㎝を測る。主軸は N-31° -E を示す。壁は垂直気味に立ち上がり、底面は平坦であり、中央やや南寄りに小ピットが穿たれる。規模は直径 9㎝、深さ 15㎝を測る。遺物は出土していない。

J6 号土坑

Ｅ -1 グリッドに位置する。東南への傾斜面にあり、等高線に平行して掘られている。平面形態は楕円形を呈す陥し穴である。規模は径 157 × 85㎝、残存壁高は 120㎝を測る。主軸は N-34° -E を示す。壁は垂直気味に立ち上がり、底面は平坦であり、中央やや南寄りに小ピットが穿たれる。規模は直径 26㎝、深さ 20㎝を測る。遺物は覆土中から、少量の縄文時代前期深鉢片が出土した。№ 1 は山形状突起を持つ波状口縁の深鉢である。細沈線文と円形文による施文で前期諸磯ｃ式期に属する。

J7 号土坑

Ｅ -1 グリッドに位置する。東南への傾斜面にある。平面形態はやや不整形な円形を呈す。規模は径 95

× 85cm、残存壁高は 35cmを測る。壁は垂直気味に立ち上がり、底面は平坦である。遺物は出土していない。

J8 号土坑

D -2 グリッドに位置する。東南への傾斜面にあり、等高線に対してはやや斜めに掘られている。平面形態は楕円形を呈す陥し穴である。規模は径 168 × 110cm、残存壁高は 153cmを測る。主軸は N-8° -W を示す。壁は垂直に近く立ち上がり、上がやや開く。底面は平坦であり、中央に小ピットが穿たれる。規模は径 32 × 25cm、深さ 28cmを測る。遺物は出土していない。

J9 号土坑

C -2 グリッドに位置する。東南への傾斜面にあり、等高線に対してはやや斜めに掘られている。平面形態は楕円形を呈す陥し穴である。規模は径 152 × 82cm、残存壁高は 150cmを測る。主軸は N-26° -W を示す。壁は垂直気味に立ち上がり、上がやや開く。底面は平坦であり、中央北寄りに小ピットが穿たれる。規模は径 25 × 20cm、深さ 32cmを測る。遺物は出土していない。

J10 号土坑

B -2 グリッドに位置する。東南への傾斜面にあり、等高線に対して直交して掘られている。平面形態は楕円形を呈す陥し穴である。規模は径 154 × 55cm、残存壁高は 142cmを測る。主軸は N-38° -W を示す。壁は垂直気味に立ち上がり、底面は平坦であり、中央北寄りに小ピットが穿たれる。規模は径 28 × 17cm、深さ 25cmを測る。遺物は覆土中から、チャート製の石鏃 1 点が出土した。先端を欠損する凹基鏃である。

J11 号土坑

A -2 グリッドに位置する。平面形態はほぼ円形を呈し、規模は径 125 × 120cm、残存壁高は 25cmを測る。壁はやや傾斜を持って立ち上がり、底面は凹凸が顕著である。遺物は出土していない。

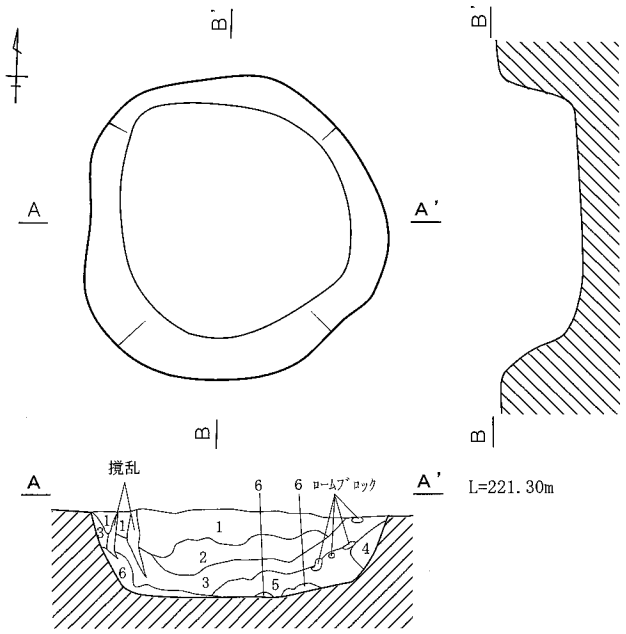
J12 号土坑

A -2 グリッドに位置する。北側が調査区域外となり不明だが、平面形態は円形を呈すと思われる。規模は東西の径 77cm、残存壁高は 38cmを測る。壁は垂直気味に立ち上がる。遺物は覆土中から縄文時代中期深鉢片が出土した。№ 1 は口縁部に渦巻状の小突起を持つ。№ 2・№ 3 は同一固体と考えられる。№ 4 は大型で胴下半が無文となる深鉢である。勝坂式期に属するであろう。

J13 号土坑

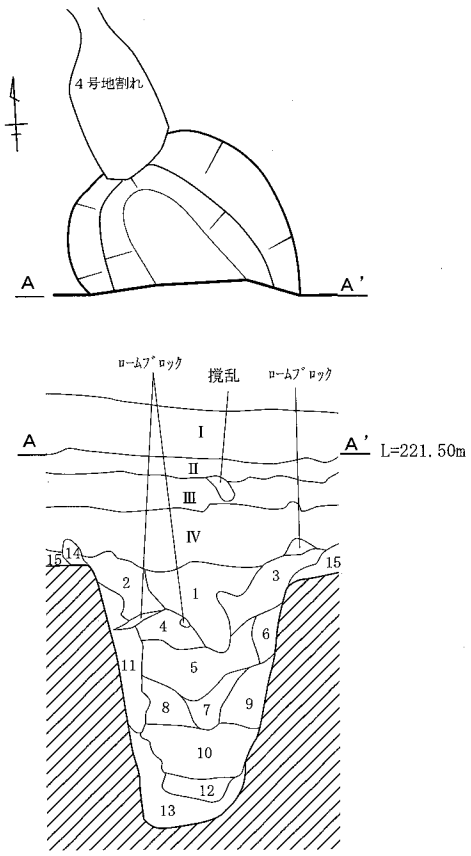
A 1・2 グリッドに位置する。東への傾斜面にあり、等高線に対してはやや斜めに掘られている。平面形態は楕円形を呈す陥し穴である。規模は径 197 × 87cm、残存壁高は 135cmを測る。主軸は N-48° -W を示す。壁は垂直気味に立ち上がり、上がやや開く。底面は平坦であり、中央北寄りに小ピットが穿たれる。規模は直径 22cm、深さ 22cmを測る。遺物は出土していない。

J1 号土坑



1　暗褐色土：粘性なし、しまり強い。灰白色軽石粒少量を均質に混入。焼土粒・炭化粒微量に点在。
2　暗褐色土：粘性なし、しまり強い。1層に類似するが、やや暗い。
3　暗褐色土：粘性なし、しまり強い。灰白色軽石粒微量に点在。
4　鈍い黄褐色土：粘性ややあり、しまり強い。ローム粒多量をやや不均質に混入。
5　暗褐色土：粘性弱く、しまり強い。炭化粒微量が不均質に点在。
6　鈍い黄褐色土：粘性ややあり、しまり強い。ローム粒多量を不均質に混入。

J2 号土坑

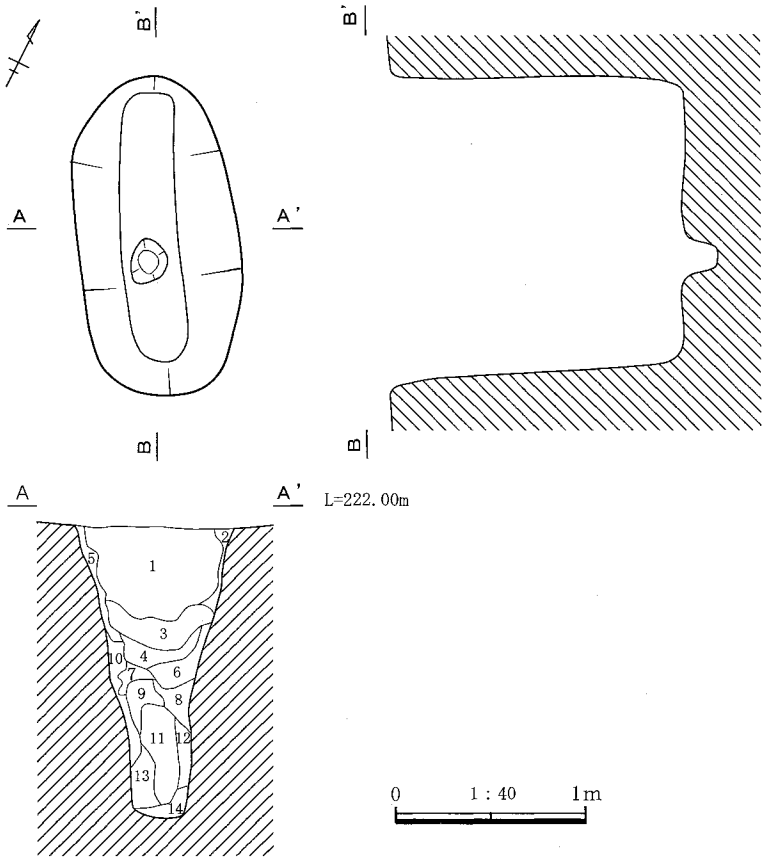


Ⅰ　耕作土。
Ⅱ　黒褐色土：粘性あり、しまりあり。黄白色軽石 (As-C) 中量を不均質に混入。
Ⅲ　暗褐色土：粘性弱く、しまりあり。黄白色軽石 (As-C) 微量をやや不均質に混入。
Ⅳ　暗褐色土：粘性弱く、しまりあり。ロームブロック少量を不均質に混入。
1　暗褐色土：粘性なし、しまりあり。灰白色軽石微細粒子少量をやや不均質に混入、焼土粒微量が不均質に点在。
2　暗褐色土：粘性弱く、しまりあり。ロームブロック少量をやや不均質に混入。
3　暗褐色土:粘性弱く、しまり強い。焼土粒・炭化粒微量が不均質に点在。
4　暗褐色土：粘性あり、しまりあり。灰白色軽石粒少量を均質に混入、焼土粒微量が点在。
5　暗褐色土：粘性あり、しまり強い。ローム粒少量を均質に混入、炭化粒微量が不均質に点在。
6　暗褐色土：粘性あり、しまり強い。5層に類似するがローム粒の量が多い。
7　暗褐色土：粘性あり、しまり強い。ローム粒中量やや不均質に混入。
8　暗褐色土：粘性あり、しまり強い。ローム粒中量やや不均質に混入、ロームブロック少量を不均質に混入。
9　暗褐色土：粘性あり、しまり強い。8層に類似するが、炭化粒微量が不均質に点在。
10　暗褐色土:粘性あり、しまり強い。ローム粒中量を均質に混入、ロームブロック・炭化粒微量が不均質に点在。
11　暗褐色土：粘性あり、しまり強い。ローム粒中量を均質に混入。
12　暗褐色土：粘性あり、しまりあり。ローム粒少量やや不均質に混入。
13　鈍い黄褐色土：粘性強く、しまりあり。ローム粒多量やや不均質に混入。
14　暗褐色土：粘性強く、しまりあり。ローム粒少量を均質に混入、炭化粒微量が不均質に点在。
15　暗褐色土：粘性あり、しまり強い。ローム粒中量を不均質に混入、やや乱れたハードなローム質土。

0　1：40　1m

第77図　J1・2号土坑平・断面図

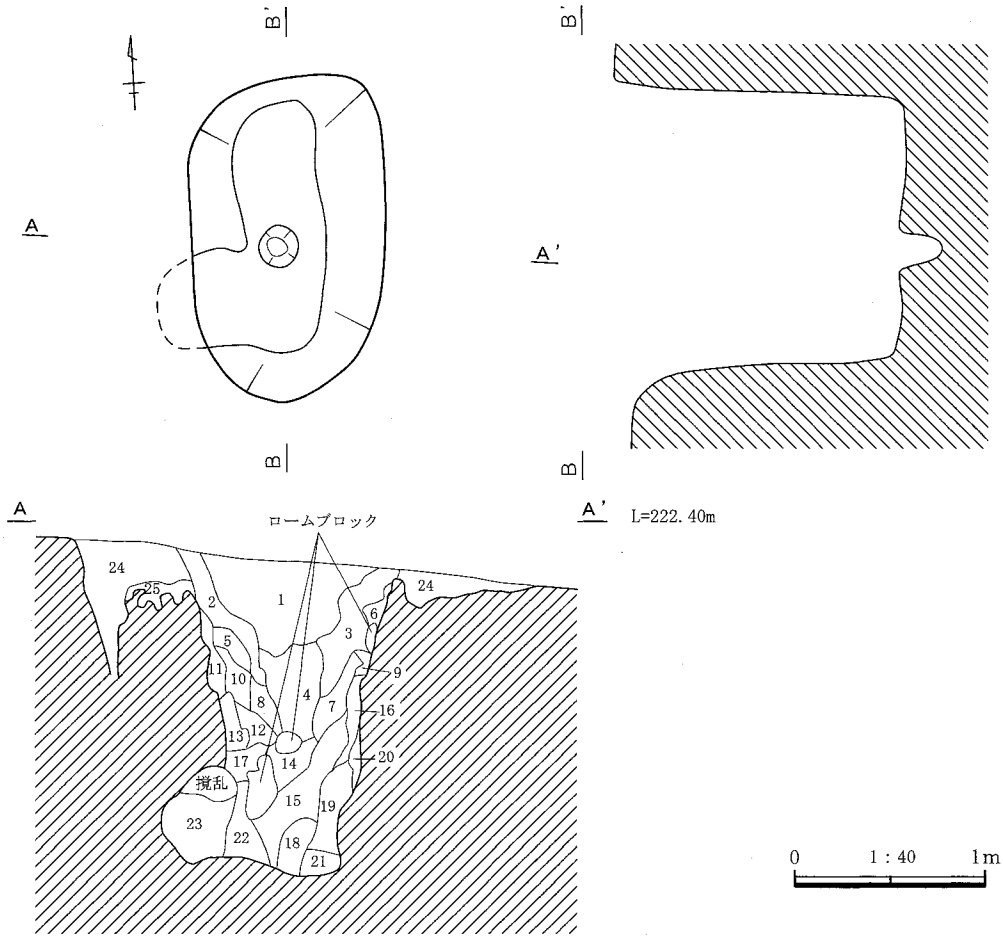
J3 号土坑



1　暗褐色土：粘性なし、しまり強い。灰白色軽石粒少量を均質に混入、炭化粒微量が均質に点在。
2　暗褐色土：粘性なし、しまり強い。ローム粒中量、ロームブロック少量を不均質に混入。
3　暗褐色土：粘性なし、しまり強い。1 層に類似するが、混入物の粒度が大きい。
4　暗褐色土：粘性ややあり、しまりあり。ローム粒中量を均質に混入。
5　暗褐色土：粘性なし、しまり強い。ローム粒中量、ロームブロック少量やや不均質に混入。
6　暗褐色土：粘性ややあり、しまりあり。4 層に類似するが、ローム粒がやや多い。
7　暗褐色土：粘性ややあり、しまりあり。ローム粒中量やや不均質に混入。
8　鈍い黄褐色土：粘性あり、しまりあり。ローム粒多量やや不均質に混入。
9　暗褐色土：粘性あり、しまりあり。ローム粒中量が不均質に混入。
10　鈍い黄褐色土：粘性あり、しまりあり。ローム粒中量を均質に混入。
11　暗褐色土：粘性あり、しまりややあり。ローム粒少量を均質に混入、炭化粒微量やや不均質に点在。
12　暗褐色土：粘性あり、しまりややあり。11 層に類似するが、やや明るく炭化粒の混入が少ない。
13　鈍い黄褐色土：粘性あり、しまり弱い。ローム粒多量を均質に混入。
14　暗褐色土：粘性あり、しまり弱い。ローム粒中量やや不均質に混入。

第 78 図　J3 号土坑平・断面図

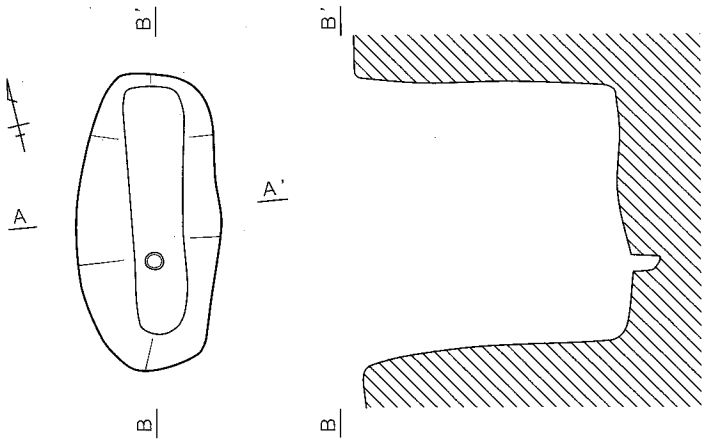
J4 号土坑

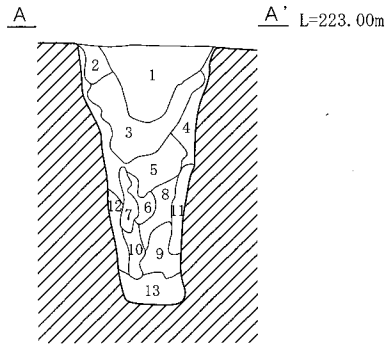


1　黒褐色土：粘性あり、しまり強い。ローム粒少量やや不均質に混入、焼土粒・炭化粒微量が不均質に点在、覆土中最も暗い灰白色軽石粒微量が不均質に点在。
2　暗褐色土：粘性あり、しまり強い。ローム粒・焼土粒・炭化粒少量を均質に混入、灰白色軽石粒微量が均質に点在。
3　暗褐色土：粘性あり、しまり強い。灰白色軽石粒・ローム粒微量が不均質に点在。
4　茶褐色土：粘性あり、しまりあり。灰白色軽石粒少量やや不均質に混入。
5　暗褐色土：粘性あり、しまりあり。灰白色軽石粒・ローム粒少量を均質に混入、炭化粒微量が不均質に点在。
6　鈍い黄褐色土：粘性弱く、しまり強い。ローム粒・ロームブロック中量を不均質に混入、灰白色軽石粒微量が不均質に点在。
7　暗褐色土：粘性あり、しまり強い。ローム粒中量を不均質に混入、焼土粒・炭化粒微量が不均質に点在。
8　茶褐色土：粘性強く、しまりあり。微細ローム粒少量を均質に混入、4 層に類似。
9　鈍い黄褐色土：粘性弱く、しまり強い。6 層に類似するが、やや明るい。
10　暗褐色土：粘性あり、しまり強い。ローム粒少量を均質に混入、ロームブロック微量が不均質に点在。
11　暗褐色土：粘性あり、しまり強い。ローム粒中量を不均質に混入、炭化粒微量が不均質に点在。
12　暗褐色土：粘性あり、しまりあり。ローム粒中量を均質に混入、ロームブロック微量が不均質に点在。
13　鈍い黄褐色土：粘性強く、しまりあり。ローム粒多量やや不均質に混入、ロームブロック少量を不均質に混入。
14　暗褐色土：粘性あり、しまりあり。ローム粒中量を不均質に混入、ロームブロック少量を不均質に混入。
15　暗褐色土：粘性あり、しまりあり。ローム粒少量を不均質に混入、ロームブロック少量を不均質に混入。
16　暗褐色土：粘性あり、しまりあり。ローム粒中量やや不均質に混入。
17　暗褐色土：粘性あり、しまりあり。ローム粒少量やや不均質に混入。
18　暗褐色土：粘性強く、しまりあり。ローム粒中量を不均質に混入、炭化粒微量が不均質に点在。
19　鈍い黄褐色土：粘性強く、しまりあり。ローム粒多量やや不均質に混入。
20　鈍い黄褐色土：粘性あり、しまり強い。ローム粒多量を均質に混入。
21　暗褐色土：粘性強く、しまり強い。ローム粒中量やや不均質に混入。
22　鈍い黄褐色土：粘性強く、しまりあり。ローム粒多量を均質に混入。
23　鈍い黄褐色土：粘性強く、しまり弱い。ローム粒・ロームブロック多量を不均質に混入。
24　暗褐色土：粘性なし、しまり強い。灰白色軽石粒少量やや不均質に混入、炭化粒微量が不均質に点在。
25　鈍い黄褐色土：粘性弱く、しまり強い。24 層に類似するが、やや明るく、混入物の粒度やや大きい。

第 79 図　J4 号土坑平・断面図

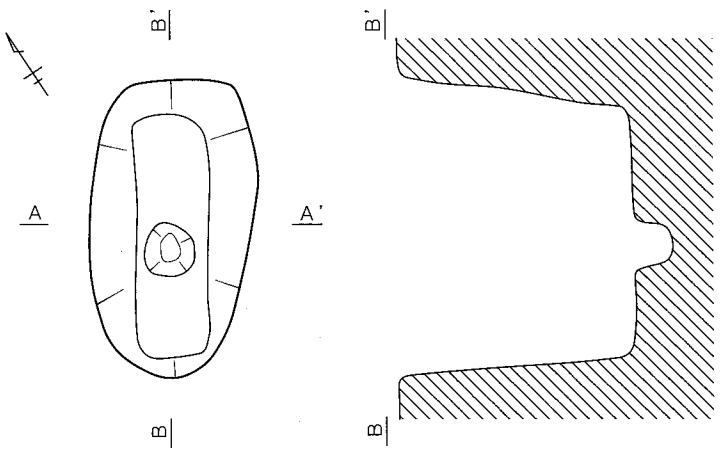
J5 号土坑

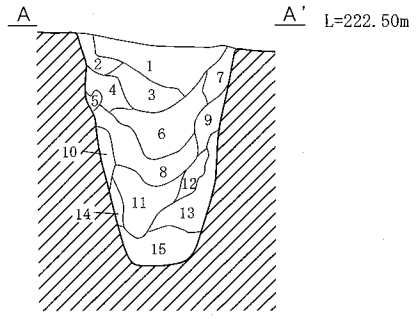




1　暗褐色土：粘性弱く、しまり強い。灰白色軽石粒少量を均質に混入、炭化粒微量が均質に点在。
2　暗褐色土：粘性なし、しまり強い。ローム粒少量やや不均質に混入。
3　暗褐色土:粘性あり、しまり強い。ローム粒・灰白色軽石粒少量やや不均質に混入。
4　暗褐色土：粘性あり、しまり強い。灰白色軽石粒少量を均質に混入、炭化粒微量が点在。
5　暗褐色土：粘性あり、しまりあり。ローム粒・ロームブロック少量やや不均質に混入、炭化粒微量が不均質に点在。
6　暗褐色土：粘性あり、しまりあり。ローム粒中量を不均質に混入。
7　鈍い黄褐色土:粘性あり、しまり強い。ローム粒多量を均質に混入。
8　暗褐色土：粘性あり、しまりあり。ローム粒・ロームブロック中量を不均質に混入、炭化粒微量が不均質に点在。
9　暗褐色土：粘性あり、しまりあり。ローム粒少量やや不均質に混入、炭化粒微量やや不均質に混入。
10　暗褐色土：粘性あり、しまりあり。ローム粒少量を不均質に混入。
11　鈍い黄褐色土:粘性あり、しまりあり。ローム粒中量やや不均質に混入。
12　鈍い黄褐色土:粘性あり、しまりあり。ローム粒多量やや不均質に混入。
13　鈍い黄褐色土：粘性強く、しまりあり。ローム粒多量を均質に混入。

J6 号土坑



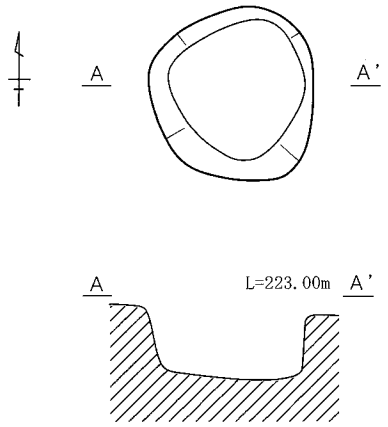


1　暗褐色土：粘性なし、しまり強い。灰白色軽石粒少量を均質に混入、ローム粒・炭化粒微量が均質に点在。
2　鈍い黄褐色土:粘性なし、しまり強い。ローム粒多量やや不均質に混入。
3　暗褐色土：粘性弱く、しまり強い。1 層に類似するが、やや暗い。
4　暗褐色土：粘性弱く、しまり強い。ローム粒中量を不均質に混入、灰白色軽石粒・炭化粒微量やや不均質に点在。
5　鈍い黄褐色土:粘性弱く、しまりあり。ローム粒多量やや不均質に混入。
6　暗褐色土：粘性あり、しまり強い。灰白色軽石粒少量やや不均質に混入、ローム粒・ロームブロック少量を均質に混入、炭化粒微量が不均質に点在。
7　暗褐色土：粘性弱く、しまり強い。ローム粒・灰白色軽石粒少量やや不均質に混入。
8　暗褐色土：粘性あり、しまり強い。ローム粒中量を不均質に混入、灰白色軽石粒少量やや不均質に混入。
9　暗褐色土：粘性あり、しまりあり。ローム粒中量やや不均質に混入。
10　鈍い黄褐色土：粘性あり、しまりあり。ローム粒多量やや不均質に混入。
11　暗褐色土：粘性あり、しまりあり。ローム粒中量やや不均質に混入。
12　暗褐色土：粘性あり、しまりあり。ローム粒中量を均質に混入。
13　鈍い黄褐色土：粘性あり、しまりあり。ローム粒多量やや不均質に混入。
14　鈍い黄褐色土：粘性あり、しまりあり。ローム粒多量を不均質に混入。
15　暗褐色土：粘性強く、しまりあり。ローム粒少量やや不均質に混入、灰白色軽石粒微量が不均質に点在。

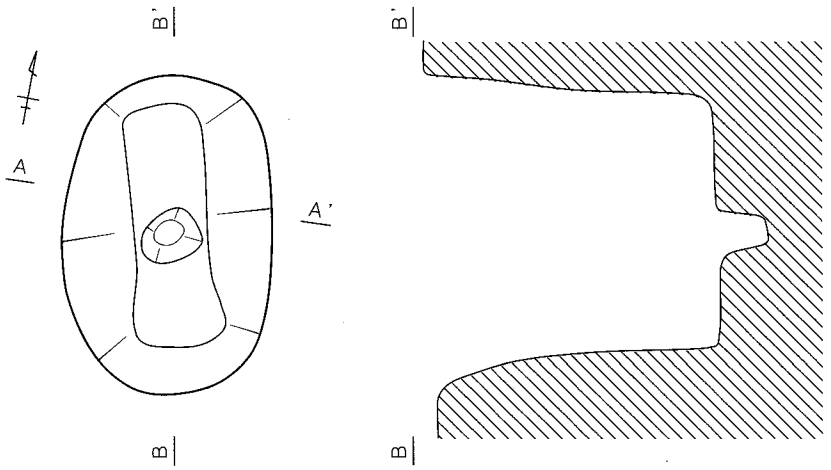
0　1：40　1m

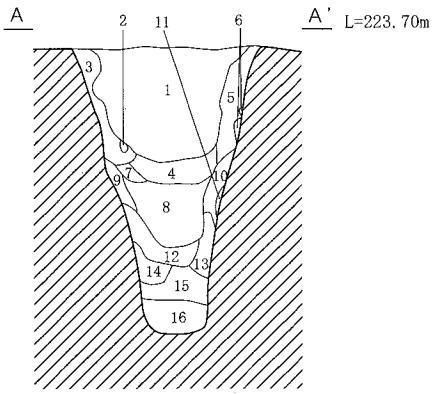
第 80 図　J5・6 号土坑平・断面図

J7 号土坑



J8 号土坑



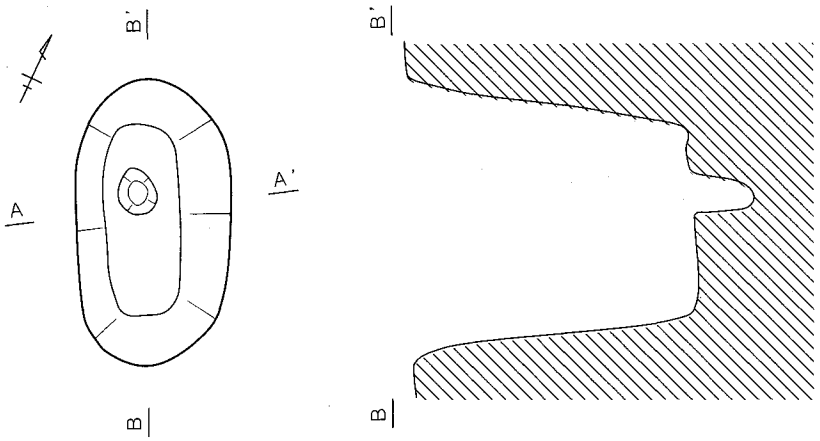


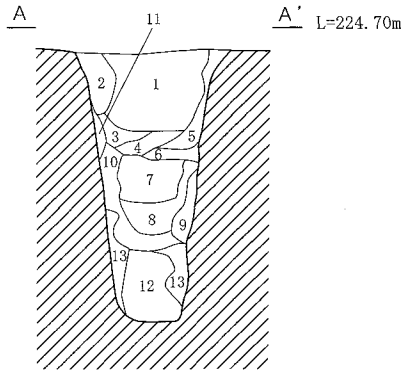
1　暗褐色土:粘性なし、しまり強い。灰白色軽石粒少量を均質に混入、ローム粒・炭化粒微量が不均質に点在。
2　暗褐色土：粘性なし、しまりあり。ローム粒少量やや不均質に混入。
3　暗褐色土：粘性弱く、しまり強い。ローム粒中量やや不均質に混入。
4　暗褐色土:粘性弱く、しまり強い。ローム粒少量を均質に混入、ロームブロック少量を不均質に混入。
5　暗褐色土：粘性なし、しまり強い。ローム粒中量を均質に混入。
6　鈍い黄褐色土：ロームブロック。
7　暗褐色土：粘性弱く、しまりあり。ローム粒少量を不均質に混入、ロームブロック微量が不均質に点在。
8　暗褐色土：粘性弱く、しまり強い。4 層に類似するが、やや明るい。
9　鈍い黄褐色土：粘性弱く、しまり強い。ローム粒多量を不均質に混入。
10　鈍い黄褐色土：粘性あり、しまり強い。ローム粒中量を不均質に混入。
11　鈍い黄褐色土：ロームブロック。
12　鈍い黄褐色土：粘性あり、しまりあり。ローム粒中量やや不均質に混入。
13　鈍い黄褐色土：粘性あり、しまりあり。ローム粒多量を均質に混入。
14　鈍い黄褐色土：粘性あり、しまりあり。ローム粒多量を均質に混入。
15　鈍い黄褐色土：粘性あり、しまりあり。ローム粒中量やや不均質に混入、炭化粒微量が不均質に点在。
16　暗褐色土：粘性強く、しまりあり。ローム粒少量やや不均質に混入。

0　1：40　1m

第 81 図　J7・8 号土坑平・断面図

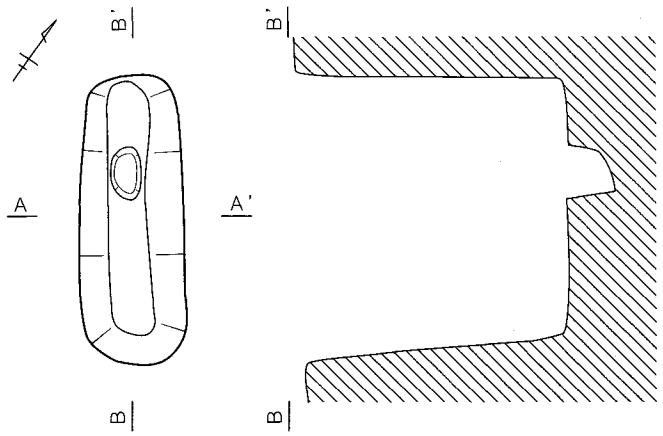
J9 号土坑

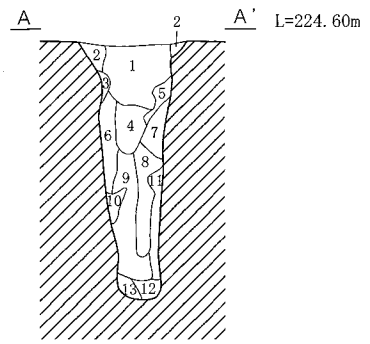




1　暗褐色土：粘性なし、しまり強い。灰白色軽石粒少量やや不均質に混入。
2　暗褐色土:粘性なし、しまりあり。ローム粒・ロームブロック少量を不均質に混入。
3　暗褐色土：粘性なし、しまり強い。ローム粒中量やや不均質に混入。
4　暗褐色土:粘性弱く、しまり強い。ローム粒・灰白色軽石粒少量やや不均質に混入。
5　暗褐色土：粘性ややあり、しまり強い。ローム粒少量やや不均質に混入。
6　鈍い黄褐色土：粘性ややあり、しまりあり。ローム粒多量やや不均質に混入。
7　暗褐色土：粘性あり、しまりあり。ローム粒少量やや不均質に混入。
8　暗褐色土：粘性あり、しまりあり。7層に類似するが、混入物の粒度が大きい。
9　暗褐色土：粘性あり、しまりあり。ローム粒中量やや不均質に混入。
10　暗褐色土：粘性あり、しまりあり。ローム粒中量を不均質に混入。
11　鈍い黄褐色土:粘性あり、しまりあり。ロームブロック多量を不均質に混入、ローム粒中量を不均質に混入。。
12　暗褐色土：粘性強く、しまりあり。ローム粒中量を不均質に混入。
13　鈍い黄褐色土：粘性強く、しまりあり。極めて多量のローム粒を均質に混入。

J10 号土坑



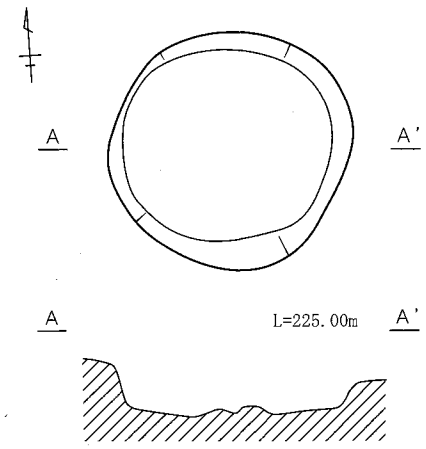


1　暗褐色土：粘性弱く、しまり強い。ローム粒少量やや不均質に混入、灰白色軽石粒微量が不均質に点在。。
2　暗褐色土：粘性弱く、しまり強い。ロームブロック多量を不均質に混入。
3　暗褐色土：粘性ややあり、しまり強い。ローム粒中量を不均質に混入。
4　暗褐色土：粘性ややあり、しまり強い。ローム粒少量やや不均質に混入、ロームブロック・炭化粒微量が不均質に点在。
5　暗褐色土：粘性あり、しまりあり。ローム粒中量を不均質に混入、ロームブロック少量を不均質に混入。
6　暗褐色土：粘性あり、しまりあり。ローム粒中量を不均質に混入。
7　鈍い黄褐色土:粘性あり、しまりあり。ロームブロック多量不均質に混入、ローム粒少量不均質に混入。
8　暗褐色土：粘性あり、しまり強い。ローム粒少量やや不均質に混入。
9　暗褐色土:粘性あり、しまり強い。8層に類似するが、やや明るい。
10　灰褐色土：粘性あり、しまりあり。ローム粒中量を不均質に混入。
11　暗褐色土：粘性あり、しまりあり。ローム粒中量を不均質に混入。
12　暗褐色土：粘性強く、しまりあり。ローム粒少量を均質に混入。
13　鈍い黄褐色土：粘性あり、しまりあり。ローム粒多量やや不均質に混入。

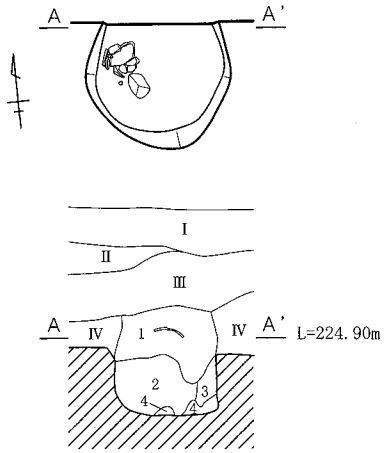
0　1：40　1m

第 82 図　J9・10 土坑平・断面図

J11 号土坑

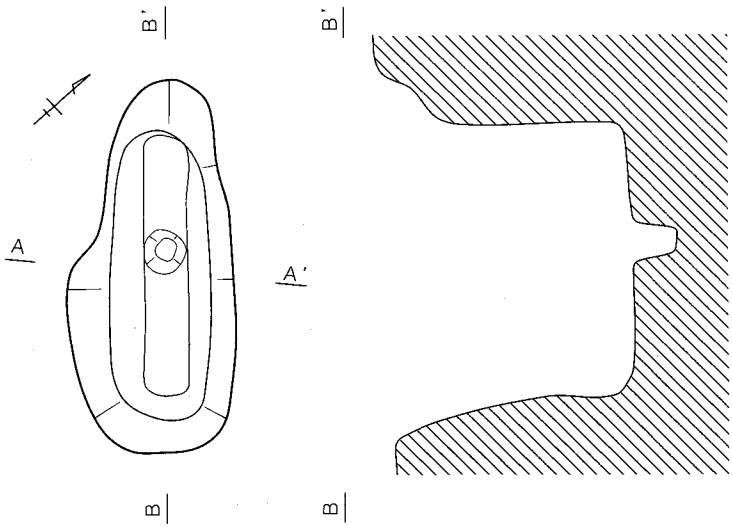


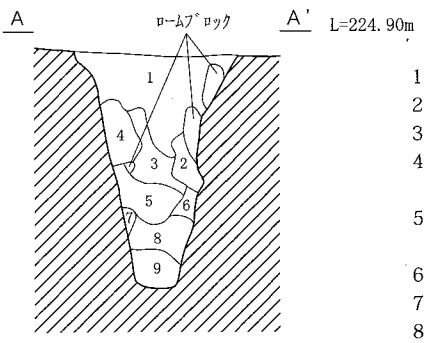
J12 号土坑



Ⅰ　耕作土。
Ⅱ　黒褐色土：粘性あり、しまりあり。黄白色軽石 (As-C) 中量を不均質に混入。
Ⅲ　暗褐色土：粘性弱く、しまりあり。黄白色軽石 (As-C) 微量をやや不均質に混入。
Ⅳ　暗褐色土：粘性弱く、しまりあり。ロームブロック少量を不均質に混入。
1　暗褐色土：粘性なし、しまり強い。ローム粒中量を均質に混入。
2　暗褐色土：粘性あり、しまり強い。ローム粒少量やや不均質に混入、ロームブロック・炭化粒微量を不均質に混入、1 層より暗い。
3　暗褐色土：粘性あり、しまり強い。ローム粒少量やや不均質に混入、1 層よりさらに暗い。
4　暗褐色土：粘性弱く、しまり強い。ローム粒中量を不均質に混入。

J13 号土坑

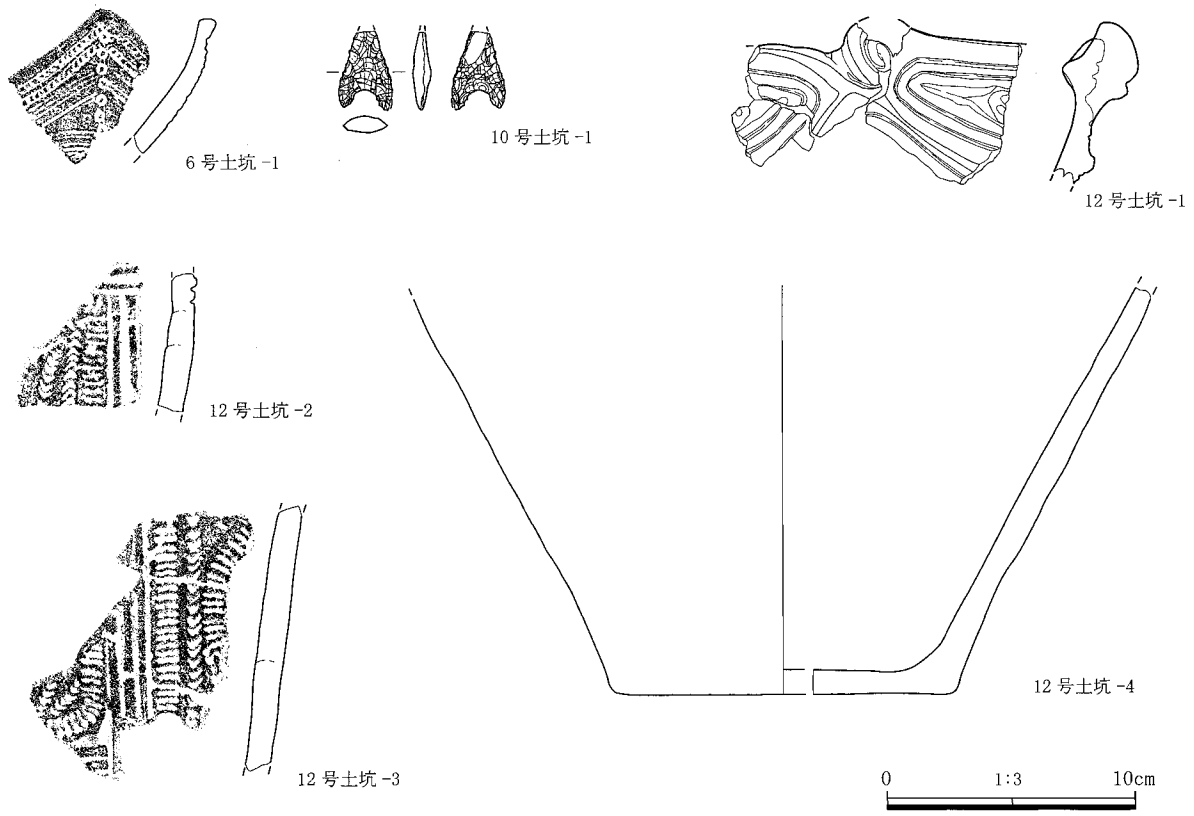




1　暗褐色土：粘性なし、しまり強い。灰白色軽石粒・炭化粒微量やや不均質に混入。
2　暗褐色土：粘性あり、しまりあり。ローム粒中量を不均質に混入。
3　暗褐色土：粘性あり、しまりあり。ローム粒少量を均質に混入。
4　暗褐色土：粘性あり、しまり強い。ローム粒中量を不均質に混入、ロームブロック中量を不均質に混入。
5　暗褐色土：粘性強く、しまり強い。ローム粒少量を均質に混入、炭化粒微量が不均質に点在。
6　暗褐色土：粘性強く、しまり強い。ロームブロック中量を不均質に混入。
7　鈍い黄褐色土:粘性あり、しまり強い。ロームブロックに暗褐色土少量を不均質に混入。
8　鈍い黄褐色土：粘性強く、しまりあり。ローム粒多量を均質に混入、炭化粒微量が不均質に点在。
9　鈍い黄褐色土：粘性強く、しまりあり。ローム粒多量やや不均質に混入。

0　1：40　1m

第 83 図　J11・12・13 号土坑平・断面図



第 84 図　土坑出土遺物

6 号土坑

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②暗褐色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片	沈線・爪形文 円形文	山形波頂部を持つ波状口縁。波状に沿って押引きによる細爪文と半截竹管状工具による集合沈線文。波頂部より円形文施文。

10 号土坑

番号	種 類	法量 (cm)・石材
1	凹基鏃	残存長 2.1　幅 1.4　厚さ 0.45　重さ 1.0 g　チャート

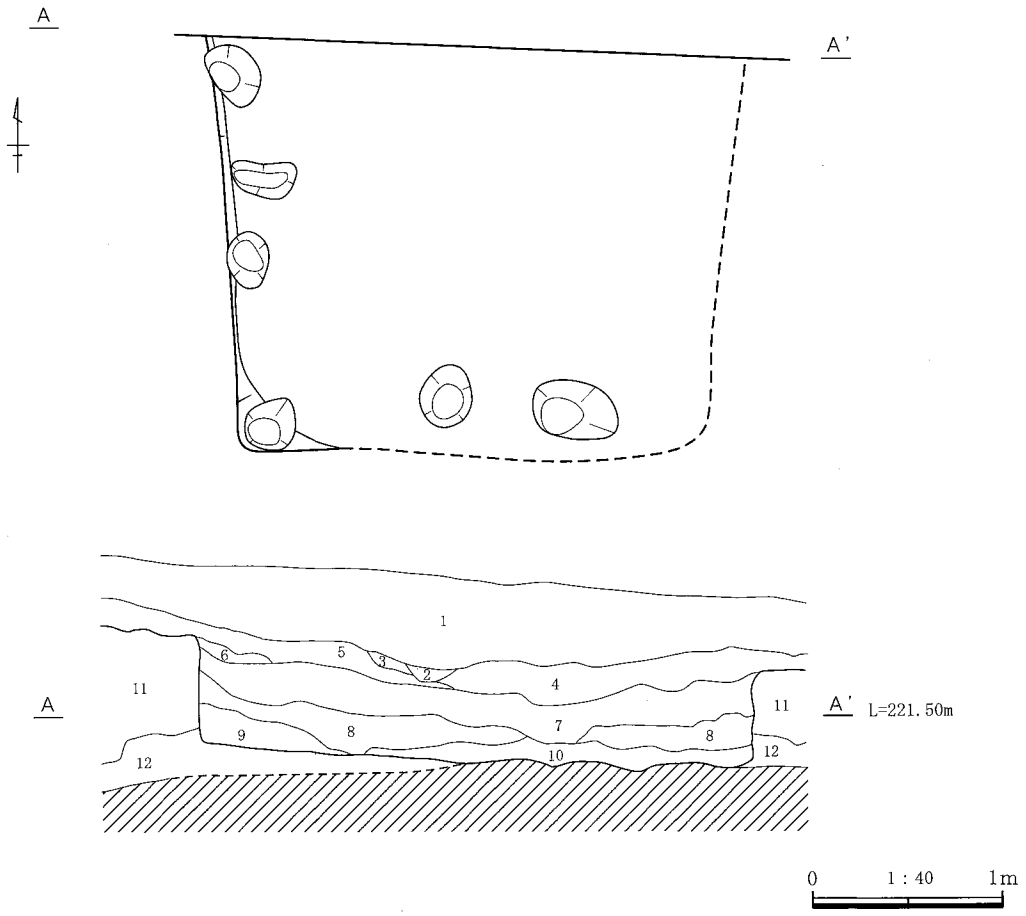
12 号土坑

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②褐色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片	隆線・沈線 三叉文	口縁部小突起に渦巻状の装飾。口縁部内側に稜を持つ。隆線による区画文、区画内に半截竹管状工具による平行沈線文と深い三叉文。
2	縄文土器 深鉢	①普通 ②褐色 ③白色粒・角閃石 ④胴部破片	沈線・ｷｬﾀﾋﾟﾗ文 ペン先文・三叉文	半截竹管状工具による沈線、横位・縦位に区画、区画内にキャタピラ文・ペン先文・三叉文を配置。
3	縄文土器 深鉢	①普通 ②灰黄褐色・褐色 ③白色粒・角閃石 ④胴部破片	沈線・ｷｬﾀﾋﾟﾗ文 ペン先文・三角文	半截竹管状工具による沈線、横位・縦位に区画、区画内にキャタピラ文・ペン先文・三角文を配置。
4	縄文土器 深鉢	①普通 ②明赤褐色 ③白色粒・角閃石 ④胴部中位～下位 1/4 底径 13.4		胴部無文、被熱痕あり。

第２節　竪穴状遺構

１号竪穴遺構

Ⅰ-3 グリッドに位置する。北側が調査区域外となるため不明だが、平面形態は長方形を呈すと思われる。規模は東西軸 2.85m、南北軸は不明、残存壁高は 53㎝を測る。N-2°-E を示す。壁は垂直に近く掘り込まれる。主柱穴・竈等は検出していない。時期は出土遺物が全くないため特定できないが、As-C を含む暗褐色土層から掘り込まれ、覆土に Hr-FP を混入することから古墳時代以降のものと考えられる。



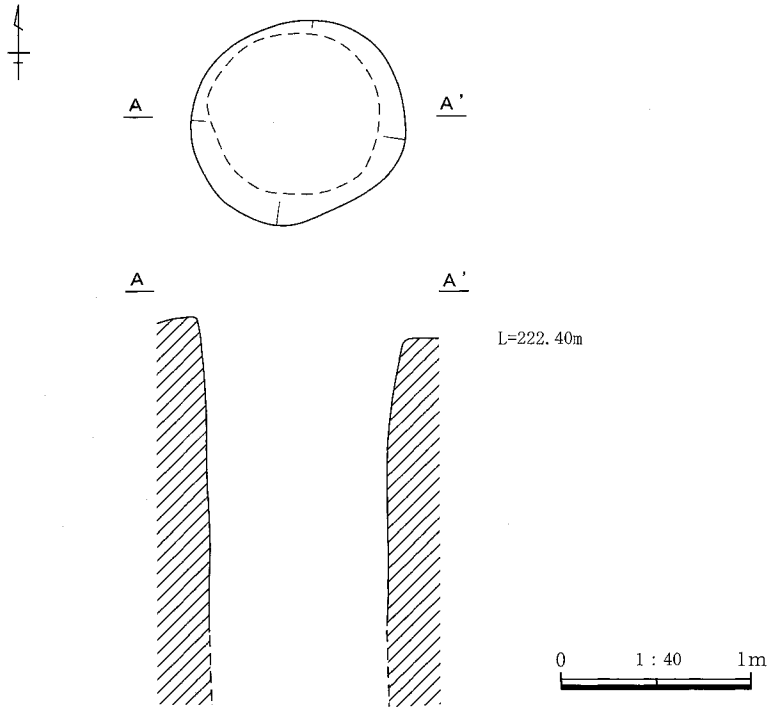
1　黒褐色土：粘性なし、しまりあり。灰白色軽石粒 (Hr-FP) 中量やや不均質に混入。砂質。
2　暗褐色土：粘性なし、しまりあり。焼土粒中量を不均質に混入、炭化粒微量が不均質に点在。
3　黒褐色土：粘性なし、しまりあり。1 層に類似し 1 層より不均質。
4　黒褐色土：粘性なし、しまりあり。灰白色軽石粒 (Hr-FP) 中量を均質に混入。砂質。
5　黒褐色土：粘性なし、しまりあり。灰白色軽石粒 (Hr-FP) 少量やや不均質に混入、暗褐色土ブロック中量を不均質に混入。
6　暗褐色土：粘性なし、しまりあり。灰白色軽石粒 (Hr-FP) 少量を不均質に混入、ローム粒少量を不均質に混入。
7　暗褐色土:粘性なし、しまりあり。灰白色軽石粒 (Hr-FP) 中量を均質に混入、ローム粒少量やや不均質に混入、ロームブロック少量を不均質に混入。
8　黒褐色土：粘性なし、しまりあり。灰白色軽石粒 (Hr-FP)・ローム粒少量やや不均質に混入、炭化粒微量が不均質に点在。
9　黒褐色土：粘性弱く、しまりあり。灰白色軽石粒 (Hr-FP) ローム粒微量がやや不均質に点在。
10　暗褐色土：粘性弱く、しまりあり。ローム粒少量を不均質に混入、ロームブロック中量を不均質に混入。
11　暗褐色土：粘性弱く、しまりあり。黄白色軽石粒 (As-C) 中量を不均質に混入。
12　暗褐色土：粘性弱く、しまりあり。ローム粒中量を不均質に混入、ロームブロック少量を不均質に混入。

第 85 図　竪穴状遺構平・断面図

第３節　井戸跡

１号井戸跡

Ｆ -1 グリッドに位置する。平面形態はほぼ円形を呈し、規模は径 112 × 100㎝、残存壁高は 166㎝を測る。断面形状は円筒状である。遺物は覆土中から、須恵器の甕、黒色土器の椀、瀬戸・美濃の摺鉢などの小破片が僅かに出土している。本井戸は旧地権者が近年まで使用していたことを確認しており、近代以降の所産であると考えられる。

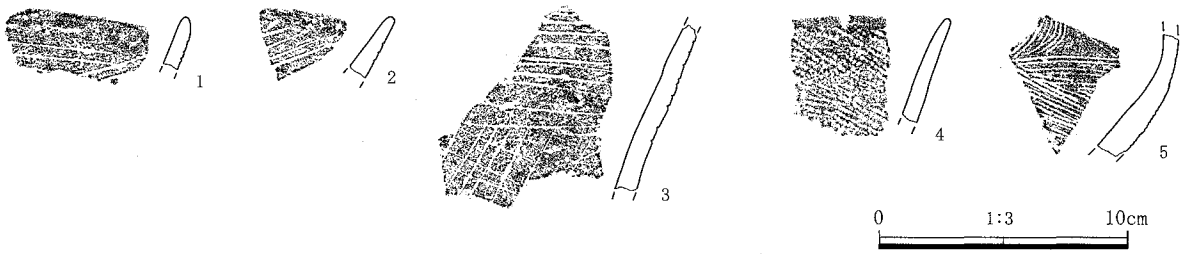


第 86 図　井戸跡土坑平・断面図

第4節　遺構外出土遺物

本遺跡からは遺構出土の遺物もごく少量であり、遺構外出土の遺物もわずかである。土器は縄文時代早期から前期の深鉢片が認められ、石器は頁岩の剥片数点のみであった。

No.1・2・3は深鉢片であり、同一固体であろう。波状口縁を呈すると思われ、横・斜め方向に鋭い沈線で施文する。胴下位では斜格子とする。早期中葉沈線文系土器(田戸下層式期)と考えられる。No.5は細沈線による施文である。縄文時代前期の諸磯b式期に属する。



第87図　遺構外出土遺物

番号	器　種	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	文様要素	文様構成・文様施文・器形の特徴
1	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片	沈線	斜位の沈線文。
2	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片	沈線	横位・斜位の沈線を配置。
3	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・角閃石 ④胴部破片	沈線	胴部上位に斜位の沈線文、中位に格子状沈線文を配置。
4	縄文土器 深鉢	①普通 ②褐色 ③白色粒・角閃石 ④口縁部破片	縄文RL	縄文RLを横位に施文。
5	縄文土器 深鉢	①普通 ②鈍い黄橙色 ③白色粒・角閃石 ④胴部破片	沈線	細い半截竹管状工具による集合沈線文。

第5章　まとめ

並木D地点遺跡の調査によって、縄文時代前期から後期に至るまでの遺構・遺物が検出できた。これにより、本地域が縄文時代の人々によって、長期間にわたり生活域として活用されていたことが改めて確認できたと言えるだろう。報告した遺構は住居跡8軒、炉跡14基、埋甕3基、集石5基、土坑84基、ピット16基である。その他、多くの土坑状、ピット状の痕跡が認められたが遺構としての認定には至らなかった。

前期に属する遺構は、台地中央部寄りに土坑2基が認められた。2・21号土坑ともに胎土中に繊維を含む土器が出土している。花積下層式と思われる貝殻圧痕文の深鉢が注目される。また、遺構に属さないが、土坑と同時期の前期の土器片が認められている。中でも、東北地方の影響を示すかと思われる遺構外出土No.4の存在も当地域の人的交流を考える上で注目できるだろう。

中期中葉阿玉台式・勝坂式期に属する遺構は台地中央から西側の台地縁辺にまで散在する。土坑4基(5・8・20・27号土坑)、ピット2基(10・12号ピット)である。当期は遺構覆土や遺構外の遺物としても一定量が認められており、集落などの中心域が台地北側あるいは南側に存在していると考えられよう。遺物は12号ピット出土の焼町土器が注目できるだろう。

中期後葉にあたる加曾利E式期に属する遺構は、住居跡8軒、炉跡14基、埋甕1基、土坑17基(3・4・6・8・10・20・22・26・29・30・31・33・37・58・60・68・72号土坑)、ピット4基(1・2・4・5号ピット)であった。本遺跡の主体を占める時期である。住居跡は2号住居跡の加曾利E2式期を古手としてE3式期のものが中心的に認められている。住居跡は台地中央寄りに集中している。地形的にもさらに大きく東に展開することは難しく、むしろ南西方向へ伸びる台地の東側に弧状に展開する可能性が考えられるだろう。炉跡はすべて加曾利E3式期でも中段階から一部新段階に属し、住居跡の廃絶後に設置していることがその重複関係からも窺われる。土坑・ピット類は、住居跡の占地と共通して、台地中央よりから検出されている。埋甕は1基(1号埋甕)のみであった。また、集石とした遺構は遺物の混在が激しく所属時期を明確にし難いが、重複関係からは住居跡よりは新しく、また土器の様相を考慮に入れれば加曾利E4式期以降にあると考えられよう。

後期前半の称名寺式期から堀之内式期に属する遺構は土坑10基(28・36・39・66・69・70・74・77・80・82号土坑)、ピット5基(6・8・9・14・15号ピット)、埋甕2基(2・3号埋甕)である。共に台地中央より西側で確認されている。西側にある並木C地点遺跡の遺構に連なる遺構群と考えられよう。並木C地点遺跡では、北側の底地に向かう傾斜面に敷石や柄鏡形と思われる住居跡が並んでおり、さらには低地を挟んで北側に展開する堀越西一丁田遺跡と集落として相関性を持つと思われる。本遺跡の埋甕、土坑、ピット群はこの集落の外縁を形成すると考えられよう。

また2号・3号埋甕は共に称名寺式から堀之内式期に属する大型の深鉢が出土している。2号埋甕No.1は胴下位～底部を欠くが、推定器高36～37cm、口径24cmである。また3号埋甕No.5はさらに大きく、推定器高40cm、口径はおよそ28cmである。3号埋甕No.5には被熱痕が認められている。日常的な煮炊き使用痕としては、浅い痕跡である。埋甕といわれる施設の性格を検討する為には、使用された土器類の各方面からの検討も必要と思われる。今後の課題としたい。

本遺跡出土の石器類は剥片等も含めて2636点、総重量はおよそ270.6kgに上る。石鏃、石錐、石匙・スクレーパー、石槍、打製石斧、磨製石斧、磨石、凹石、敲石、石皿、多孔石など多様な石器類が確認できた。中期は一般的に石鏃が少なく、打製石斧が多いといわれているが、本遺跡も同様の傾向が認められる。

前期に属する石器では、石槍1点(31.4ｇ)が出土している。

石鏃は45点、(90.3ｇ)である。ほとんどが凹基鏃である。有茎は確認できなかった。石材では、黒色頁岩、

黒曜石、細粒安山岩、チャートが使われており、黒曜石は少ない。石錐は5点、(31.6 g)、石匙・スクレーパーは6点、(190 g)である。

打製石斧は378点、(28.8kg)で破損品が多く、その使用頻度の高さが窺われる。打製石斧では短冊形、撥形、分銅形とそれぞれが出土しているが分銅形は少数であった。分銅形のうち遺構外№88にみられるような大型品はこの1点のみである。後期後葉に限定されるとのことだが、本遺跡では後期後葉と考えられる土器は遺構外№47があるいはと思われる程度でごく少ない。また、西側のC地点からも認められていないようである。後期後葉から晩期へかけての遺跡動向とも合わせて注目できる石器であろう。磨製石斧はわずか7点、(916.6 g)と少ない。11号ピットから出土している磨製石斧はほぼ完存品であり、その出土状況からも注目したい遺物である。この他、凹石、敲石、磨石類は44点、(約21kg)、石皿17点、(約39kg)、多孔石類27点、(約113kg)が出土しているが、ほとんどが兼用や転用を行っている様子がその使用痕跡から観察できる。また、調整痕のある剥片が多量に認められており、定型的な石器以外にも多様な石器使用の実際が推測できる。石材は頁岩、砂岩、細粒安山岩、粗粒安山岩と赤城山を取り巻く近隣の石材供給地からの調達と考えられる。この内、比較的産出地が遠いチャート類は111点、(1040 g)、片岩9点、(362.9 g)である。遠距離からの交易石材である。黒曜石は99点、(204.6 g)であった。黒曜石の産出地(注)は、分析点数97点に対して以下のような結果を得ている。

産地別の個数と重量

産　地	点　数	重　量	産　地	点　数	重　量
和田鷹山群	9点	23.5 g	和田ブドウ沢群	1点	5.1 g
諏訪星ケ台群	71点	140.6 g	神津島恩馳島群	3点	2.8 g
和田土屋橋北群	4点	13.9 g	和田土屋橋南群	1点	0.4 g
和田小深沢群	2点	3.9 g	和田高松沢群	1点	1.3 g
和田土屋橋西群	3点	3.3 g	推定不可	2点	2.9 g

多くは長野県産の黒曜石に集中している様子が窺える。しかし、わずか3点ではあるが、伊豆神津島産の黒曜石が検出されていることは注意しなければならないだろう。今後の資料の蓄積を待って検討したい。

その他の遺物として、翡翠製の垂飾未製品が1点出土している。小さく不定形ではあるが貴重品であったことが推測できる。この他、土製品として耳飾1点、円盤状土製品126点、ミニチュア土器4点が出土している。いづれも当地域の縄文時代文化を偲ばせる品々である。

(注)本遺跡の黒曜石産地推定については、株式会社アルカ、沼津工業高等専門学校望月研究室のご厚意によって結果を得た。分析の経過、及び方法等のデータは今回詳しく掲載できなかったが、今後の調査・報告のなかで成果を公開して行きたい。両機関には記してお詫びと御礼を申し上げる次第である。

堀越並木Ｄ地点遺跡
写　真　図　版

遺跡遠景（西から）

遺跡全景

Ｊ１号住居跡全景（北から）

Ｊ１号住居跡遺物出土状態（北から）

Ｊ２号住居跡遺物出土状態（南東から）

Ｊ２号住居跡全景（南から）

Ｊ３号住居跡全景（南から）

Ｊ４号住居跡遺物出土状態（西から）

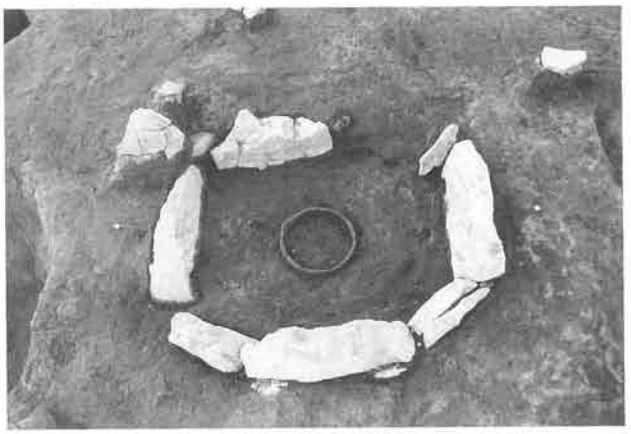
Ｊ４号住居跡全景（北東から）

Ｊ５号住居跡遺物出土状態（南から）

Ｊ５号住居跡炉（西から）

Ｊ５号住居跡遺物出土状態No.１（東から）

Ｊ６号住居跡全景（南から）



Ｊ６号住居跡炉（南東から）

Ｊ６号住居跡遺物出土状態（西から）

Ｊ６号住居跡遺物出土状態No.４（北東から）

Ｊ７号住居跡全景（南から）

Ｊ７号住居跡炉（西から）

Ｊ８号住居跡全景（西から）

1 号炉跡（北東から）

2 号炉跡（北から）

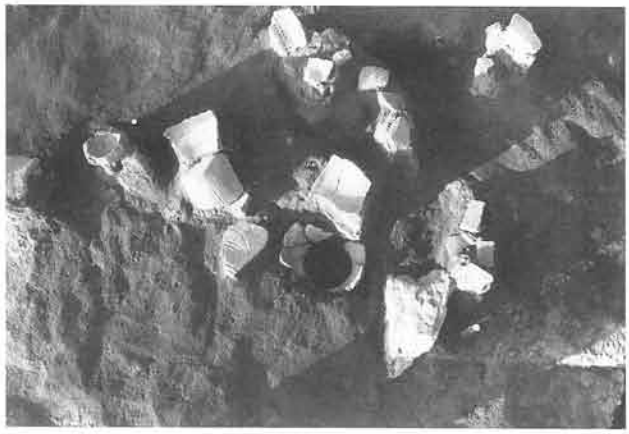
3 号炉跡（北から）

4 号炉跡（南から）

5 号炉跡（南から）

5 号炉跡下部（南から）

5 号炉跡最下部（東から）



7 号炉跡（南から）

8 号炉跡（南から）

9 号炉跡（南西から）

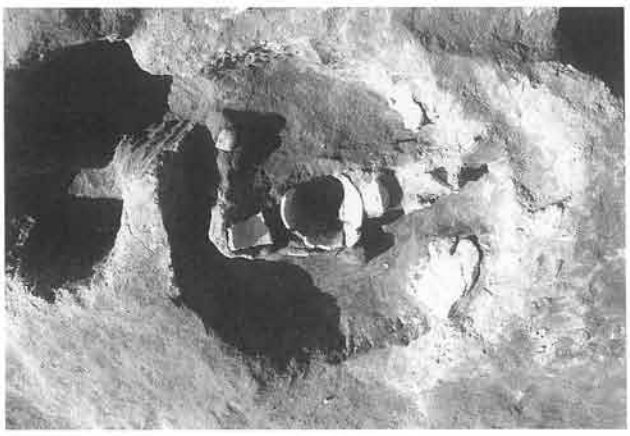
10号炉跡（西から）

11号炉跡（南から）

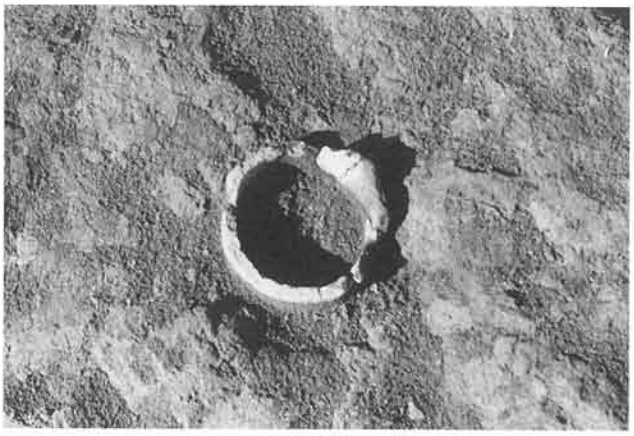
12号炉跡（北東から）

13号炉跡（南西から）

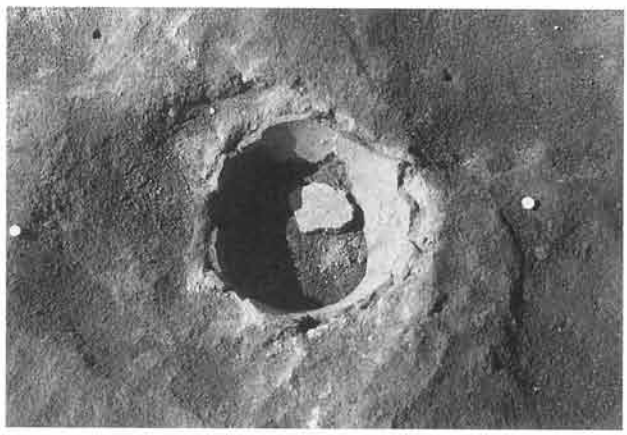
14号炉跡（南西から）



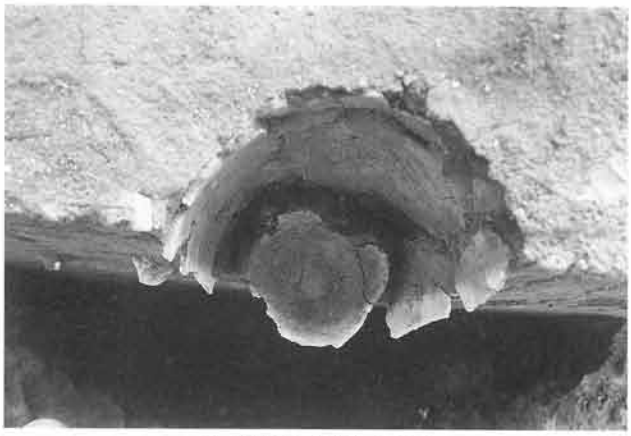
15号炉跡（東から）



1号埋甕（南から）



2号埋甕（東から）



3号埋甕（真上から）

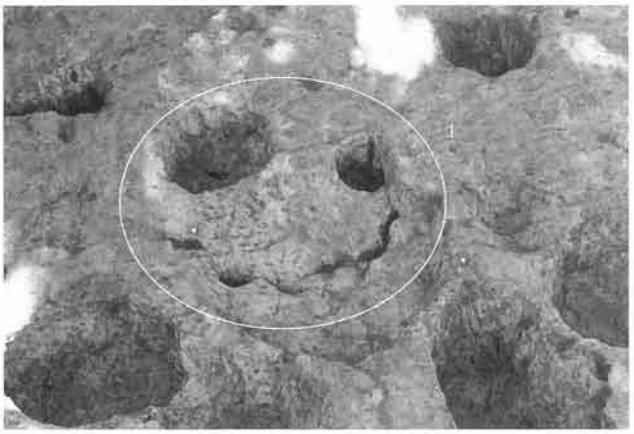
3号埋甕土層断面（北から）

1号集石（東から）

2号集石（東から）

3号集石（東から）

4号集石（南から）



Ｊ１号土坑全景（北から）

Ｊ２号土坑全景（東から）

Ｊ４号土坑全景（西から）

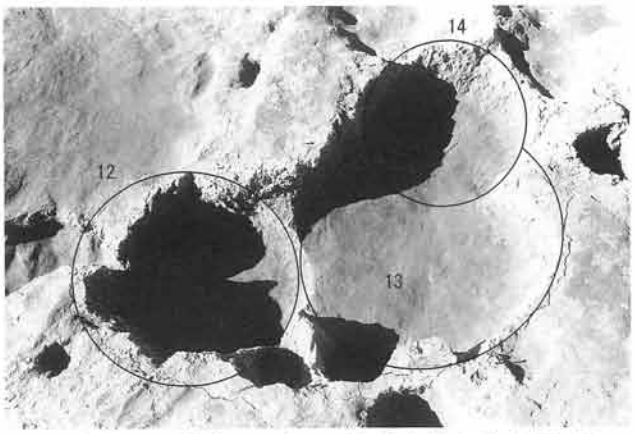
Ｊ５号土坑全景（南から）

Ｊ６号土坑全景（南から）

Ｊ７号土坑全景（南から）

Ｊ８号土坑全景（東から）

Ｊ11号土坑全景（南から）

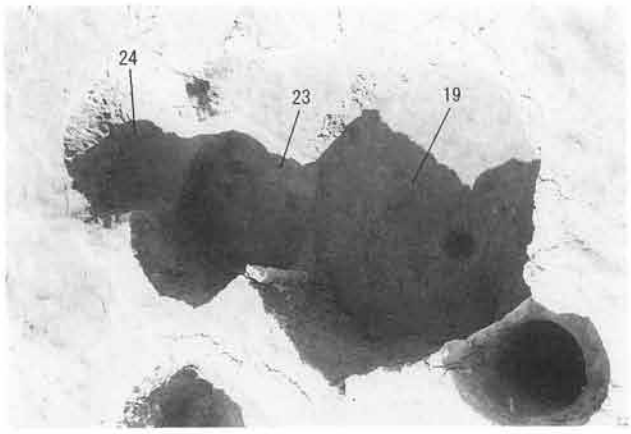


J 12(左)・13(右)・14(13の上)号土坑全景（東から）

J 16号土坑全景（南から）

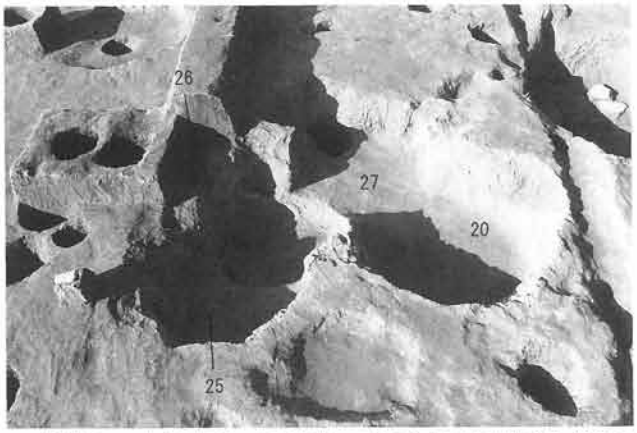
J 17(奥)・83(手前)号土坑全景（南東から）

J 18号土坑全景（北東から）



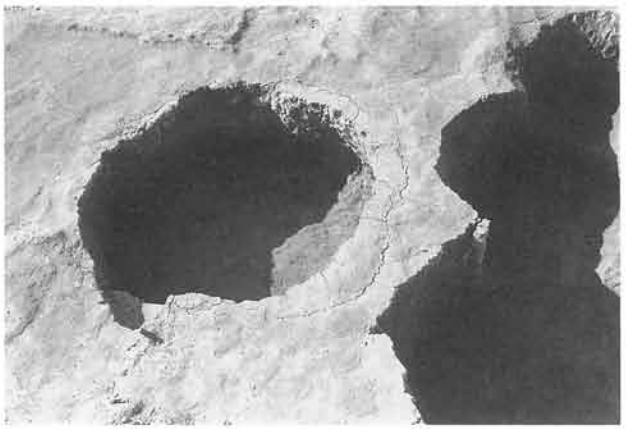
J 19(右)・23(中央)・24(左)号土坑全景（南東から）

J 19号土坑土層断面（東から）



J 20(手前右)・27(手前右奥)・25(手前左)・26(手前左奥)号土坑全景（東から）

J 21号土坑全景（北から）

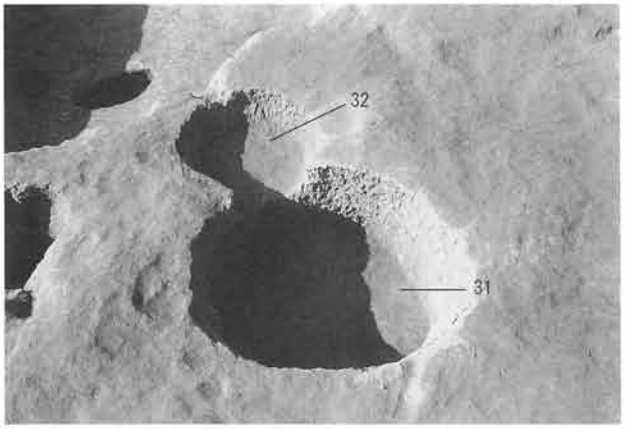


J 22号土坑全景(東から)

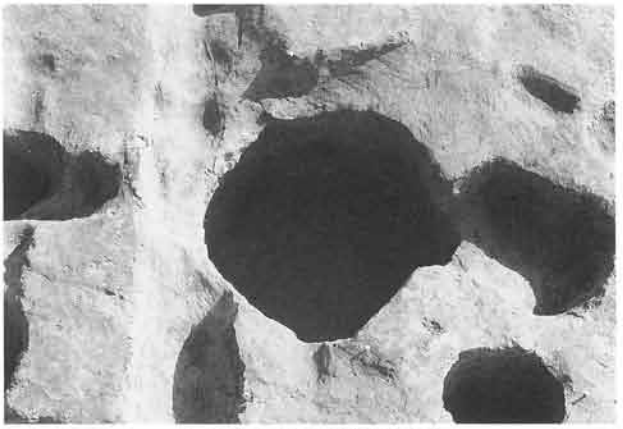
J 28号土坑全景(北から)

J 29号土坑全景(北東から)

J 30号土坑全景(西から)



J 31(手前)・32(奥)号土坑全景(東から)



J 33号土坑全景(西から)

J 34(手前)号土坑全景(東から)

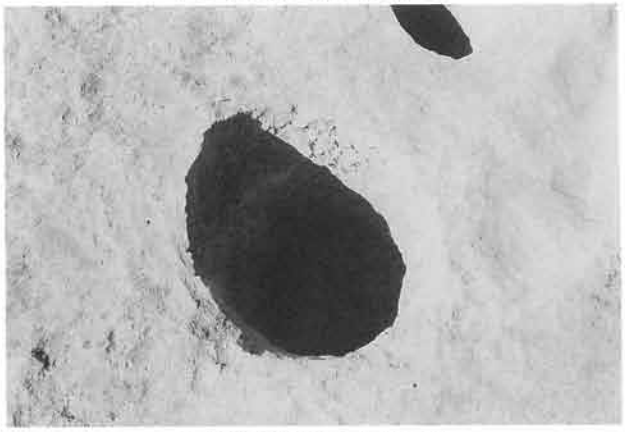
J 35号土坑全景(東から)

J 36号土坑全景（東から）

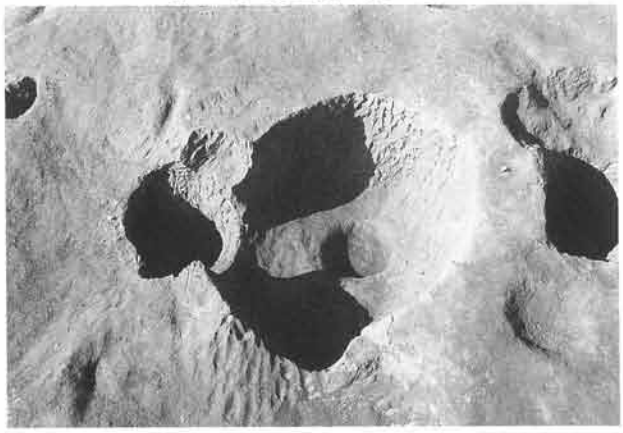
J 37号土坑全景（北西から）

J 38号土坑全景（東から）

J 39号土坑全景（南から）



J 40号土坑全景（東から）



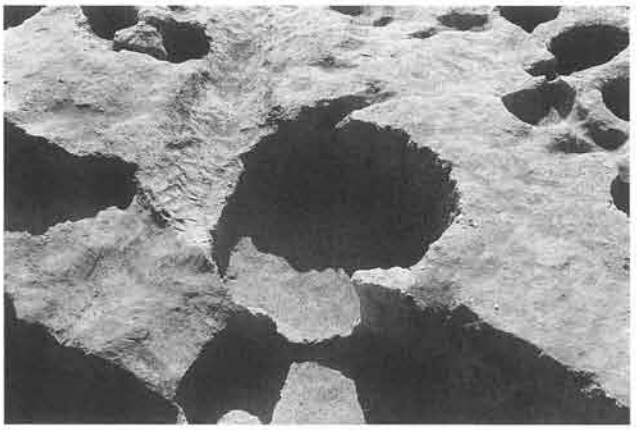
J 41号土坑全景（東から）

J 42号土坑全景（南から）

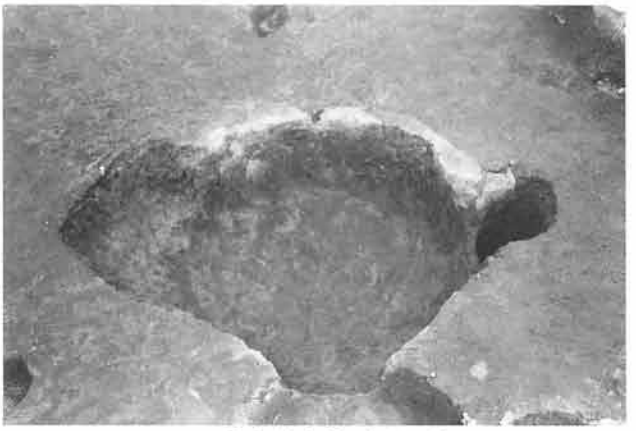
J 43号土坑全景（西から）

J 45(左)・46(右)号土坑全景（北東から）

J 47号土坑全景（南東から）



J 48号土坑全景（北から）



J 49号土坑全景（西から）

J 57号土坑全景（北東から）

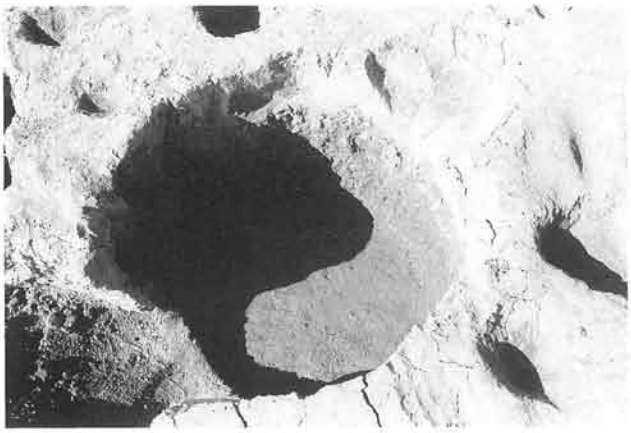
J 58号土坑全景（北東から）

J 60号土坑全景（北東から）

J 61号土坑全景（西から）

J 62号土坑全景（東から）

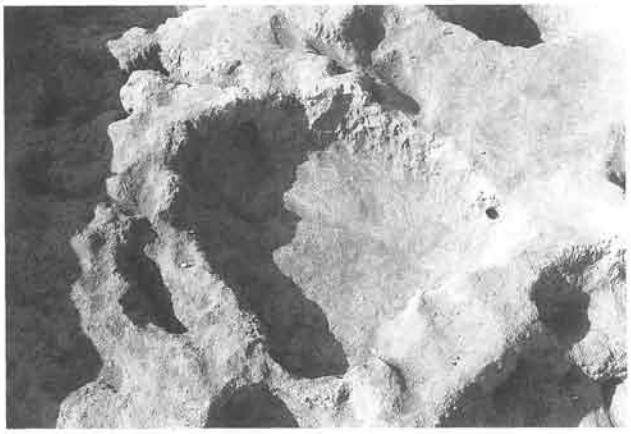
J 68(左)・69(右)号土坑全景（東から）



J 69号土坑全景（南東から）

J 70号土坑遺物出土状態（東から）

J 70号土坑全景（南東から）



J 71号土坑全景（東から）

J 74号土坑全景（西から）

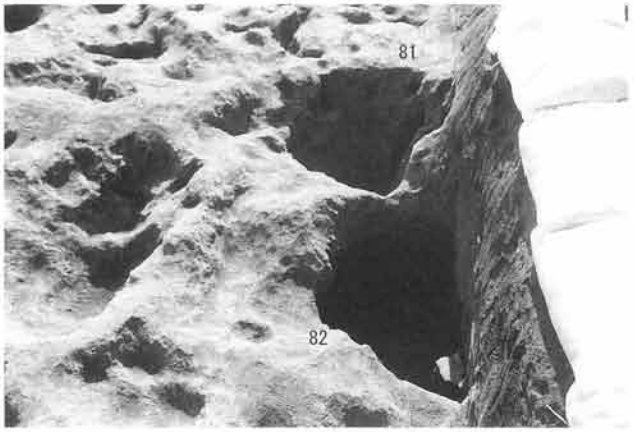
J 75号土坑全景（東から）

J 76号土坑全景（北から）

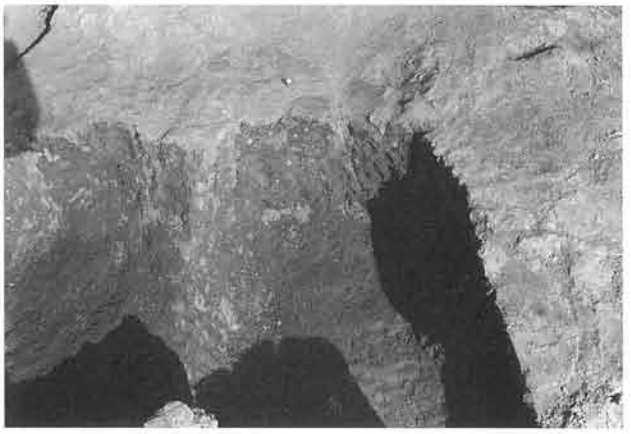
J 77号土坑全景（東から）

J 78号土坑全景（北東から）

J 80号土坑全景（東から）



J 81(奥)・82(手前)号土坑全景（北東から）



J 84号土坑全景（西から）

J 85号土坑全景（南東から）

J 85号土坑土層断面（北から）

J 1住-1

J 1住-2

J 1住-3

J 1住-4

J 1住-5

J 1住-6

J 1住-7

J 1住-8

J 1住-10

J 1住-9

J 1住-11

J 1住-12

J 1住-13

J 1住-14

J 2住-1

J 2住-2

J 2住-3

J 2住-4

J 2住-5

J 2住-6

J 2住-7

J 2住-8

J 2住-9

J 2住-10

J 2住-11

J 2住-12

J 3住-1

J 3住-2

J 3住-3

J 3住-4

J 3住-5

J 3住-6

J 3住-7

J 3住-8

J 3住-9

J 3住-10

J 3住-11

J 4住-1

J 4住-2

J 4住-3

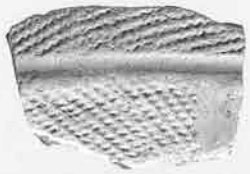
J 4住-4

J 4住-5

J 4住-6

J 4住-7

J 4住-8

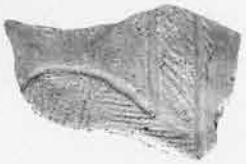

J 4住-9

J 4住-10

J 4住-11

J 4住-12

J 4住-13


J 4住-14

J 4住-15

J 4住-16

J 4住-17

J 4住-18

J 4住-19

J 4住-20

J 4住-21

J 4住-22

J 4住-23

J 4住-24

J 4住-25

J 4住-26

J 4住-27

J 4住-28

J 4住-29

J 4住-30

J 4住-31

J 5住-1

J 5住-2

J 5住-3

J 5住-4

J 5住-5

J 5住-6

J 5住-7

J 5住-8

J 5住-9

J 5住-10

J 5住-11

J 5住-12

J 5住-13

J 5住-14

J 5住-15

J 5住-16

J 5住-17

J 5住-20

J 5住-18

J 5住-19

J 5住-21

J 5住-22

J 5住-23

J 5住-24

J 5住-25

J 5住-26

J 5住-27

J 5住-28

J 5住-29

J 5住-30

J 5住-31

J 5住-32

J 5住-33

J 5住-34

J 5住-35

J 5住-36

J 5住-38

J 5住-37

J 5住-39

J 5住-40

J 5住-42

J 5住-41

J 5住-43

J 5住-44

J 5住-45

J 5住-46

J 5住-47

J 5住-48

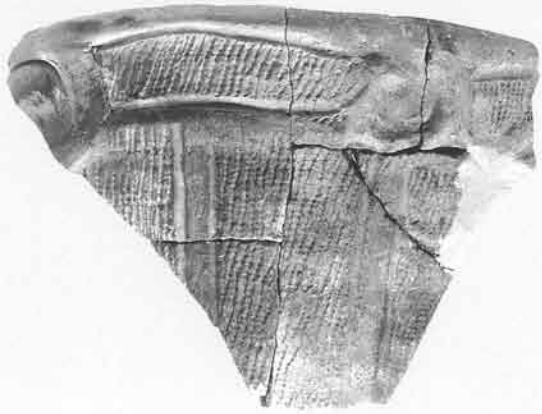
J 6住-1

J 6住-3

J 6住-5

J 6住-2

J 6住-4



J 6住-6

J 6住-7

J 6住-8

J 6住-9

J 6住-10

J 6住-11

J 6住-12

J 6住-13

J 6住-14

J 6住-15

J 6住-16

J 6住-17

J 6住-18

J 6住-19

J 6住-21

J 6住-20

J 6住-23

J 6住-24

J 6住-25

J 6住-22

J 6住-26

J 6住-27

J 6住-28

J 6住-29

J 6住-30

J 6住-31

J 6住-32

J 6住-33

J 6住-34

J 6住-35

J 6住-36

J 7住-2

J 7住-3

J 7住-4

J 7住-5

J 7住-6

J 7住-7

J 7住-8

J 7住-1

J 7住-9

J 7住-10

J 7住-11

J 7住-12

J 7住-13

J 7住-14

J 7住-15

J 7住-16

1炉-1

3炉-1

2炉-1

1炉-2

4炉-1

4炉-2

4炉-3

4炉-4

4炉-5

4炉-6

5炉-1

5炉-2

5炉-3

5炉-4

7炉-1

7炉-2

7炉-3

7炉-4

7炉-5

7炉-6

7炉-7

8炉-1

8炉-2

9炉-1

11炉-1

10炉-1

12炉-1

12炉-2

14炉-1

13炉-1

15炉-1

2埋甕-2

1埋甕-1

3埋甕-1

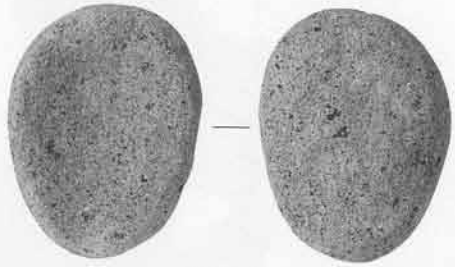
3埋甕-2

3埋甕-5

3埋甕-3

3埋甕-4

1集石-2



1集石-6

1集石-1

1集石-3

1集石-4

1集石-5

1集石-7

1集石-8

2集石-1

2集石-2

2集石-3

2集石-4

2集石-5

2集石-6

2集石-7

3集石-1

3集石-2

3集石-4

3集石-5

3集石-3

3集石-6

3集石-8

3集石-9

3集石-7

3集石-10

3集石-11

3集石-12

4集石-1

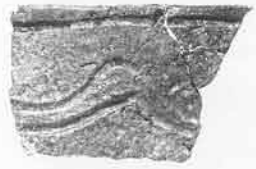
2土坑-1

2土坑-2

2土坑-3

2土坑-4

3土坑-1



3土坑-2

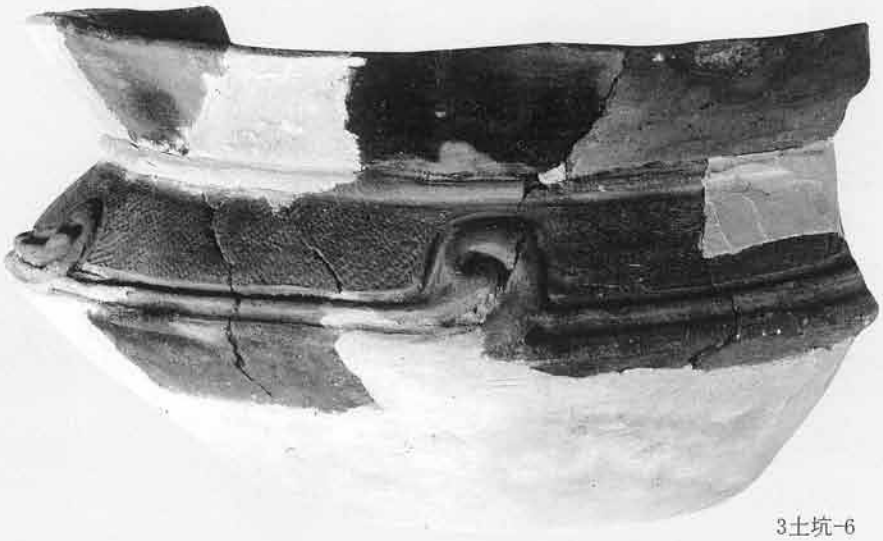
2土坑-5

3土坑-3

3土坑-4

3土坑-5

3土坑-7


3土坑-6

4土坑-1

5土坑-1

5土坑-2

5土坑-3

5土坑-4

6土坑-1

6土坑-2

6土坑-3

6土坑-4

6土坑-5

8土坑-1

9土坑-1

10土坑-1

10土坑-2

10土坑-3

10土坑-4

19土坑-1

20土坑-1

20土坑-2

21土坑-1

22土坑-1

23土坑-1

23土坑-2

26土坑-1

26土坑-2

27土坑-1

28土坑-1

28土坑-2

29土坑-1

28土坑-3

29土坑-2

30土坑-1

30土坑-2

30土坑-3

30土坑-4

30土坑-5

30土坑-6

30土坑-7

31土坑-1

33土坑-1

33土坑-2

33土坑-3

33土坑-4

35土坑-1

36土坑-1

36土坑-2

36土坑-3

36土坑-4

36土坑-5

36土坑-8

36土坑-6

36土坑-7

37土坑-1

37土坑-2

37土坑-3

39土坑-1

39土坑-2

39土坑-3

58土坑-1

58土坑-2

58土坑-3

58土坑-4

60土坑-1

61土坑-1

66土坑-1

66土坑-2

66土坑-3

66土坑-4

66土坑-7

67土坑-1

68土坑-1

68土坑-2

68土坑-3

68土坑-4

68土坑-5

68土坑-6

69土坑-1

69土坑-2

69土坑-3

69土坑-4

69土坑-5

69土坑-6

69土坑-7

70土坑-1

70土坑-2

70土坑-3

70土坑-4

70土坑-5

70土坑-6

70土坑-7

70土坑-8

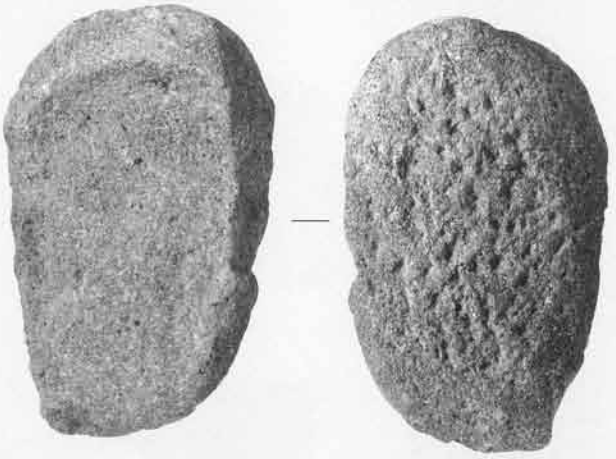
70土坑-9

70土坑-10

70土坑-11

70土坑-12

70土坑-13



70土坑-14

70土坑-15

70土坑-16

70土坑-17

70土坑-18

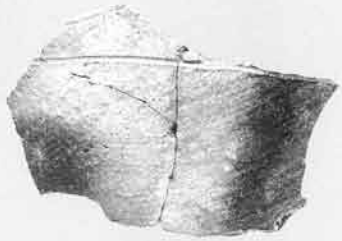
70土坑-19

71土坑-1

72土坑-2

72土坑-1

74土坑-1



74土坑-2

76土坑-1

76土坑-2

77土坑-1

77土坑-2

77土坑-3

77土坑-4

80土坑-1

82土坑-1

82土坑-2

82土坑-3

82土坑-4

82土坑-6

82土坑-7

82土坑-5

1ピット-1

2ピット-1

3ピット-1

6ピット-1

4ピット-1

5ピット-1

6ピット-2

6ピット-4

7ピット-1

7ピット-2

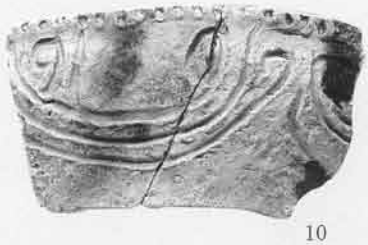
6ピット-3

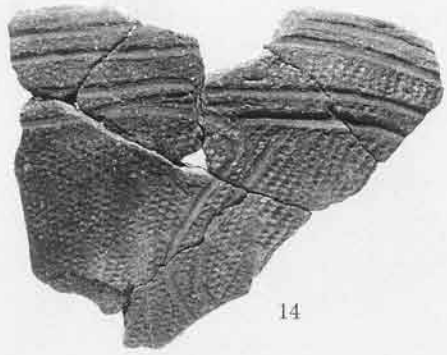
8ピット-1

8ピット-2

9ピット-1

10ピット-1
11ピット-1
13ピット-1
12ピット-1
14ピット-1
15ピット-1
16ピット-1
遺構外出土遺物
1
2
3
4
5
6
7
8
9
11
12


10


14

13

15

16

20

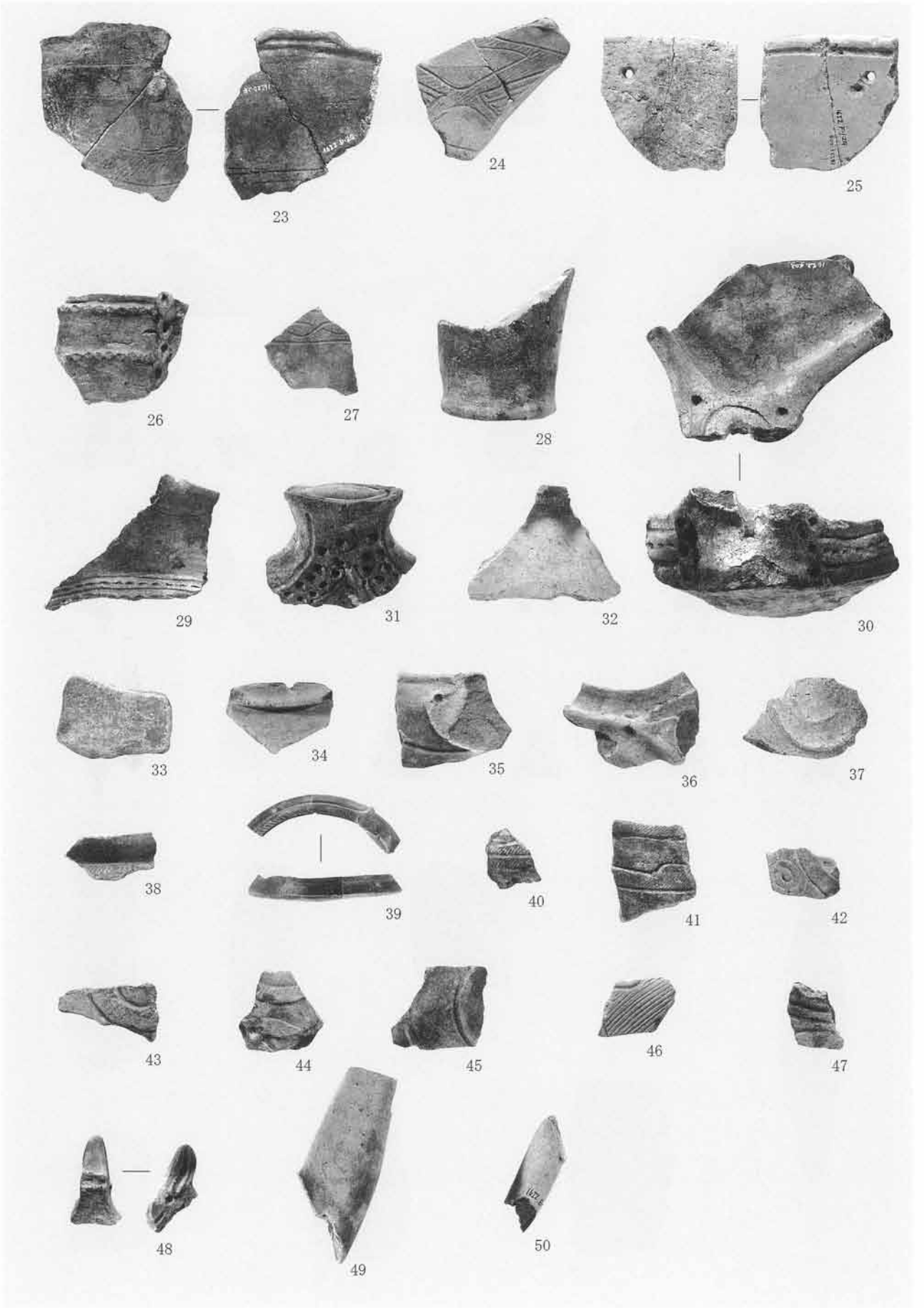
17

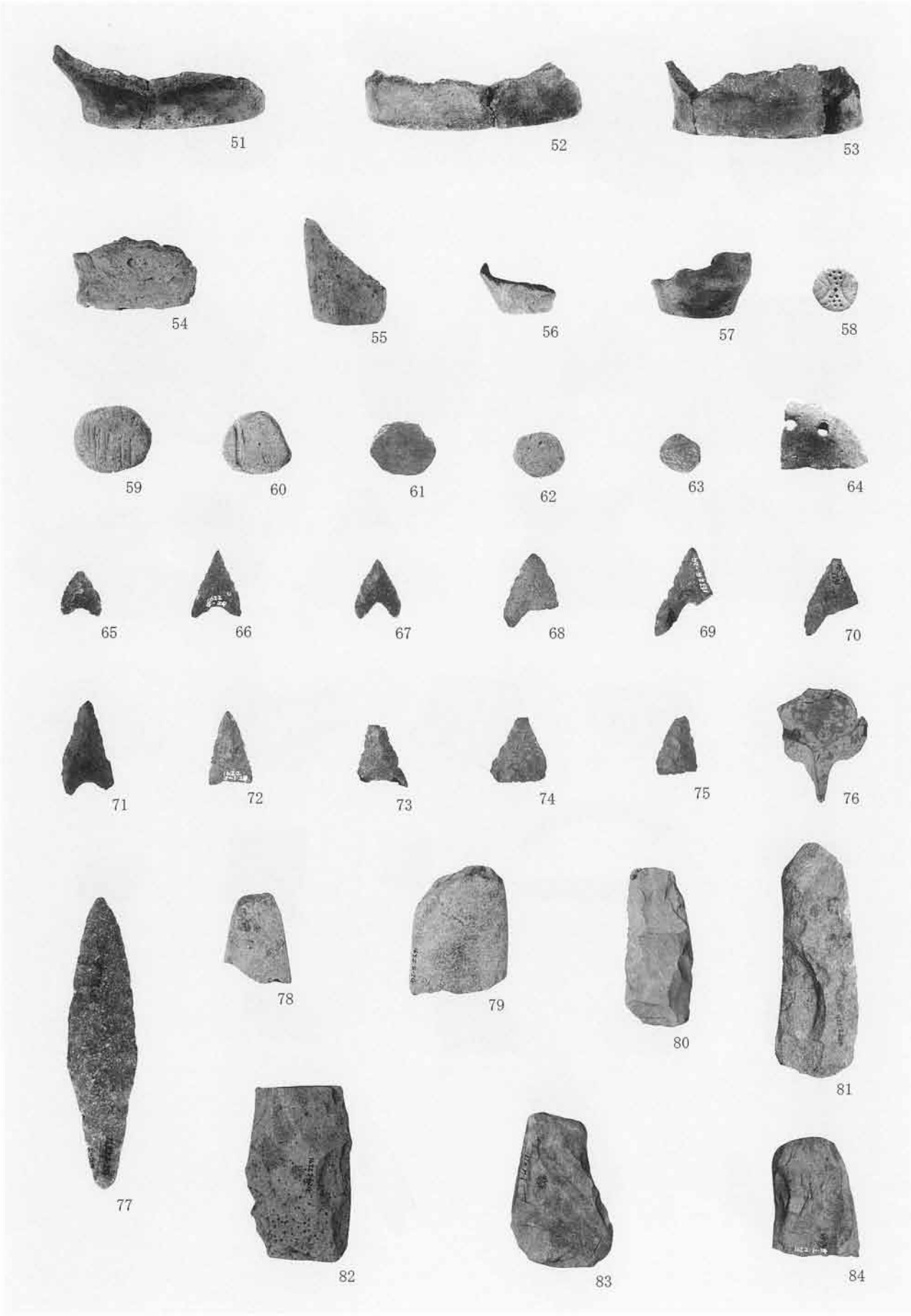
18

19

21

22


23
24
25
26
27
28
29
31
32
30
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50


51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84

85

86

87

88

89

90

91

92

93

94

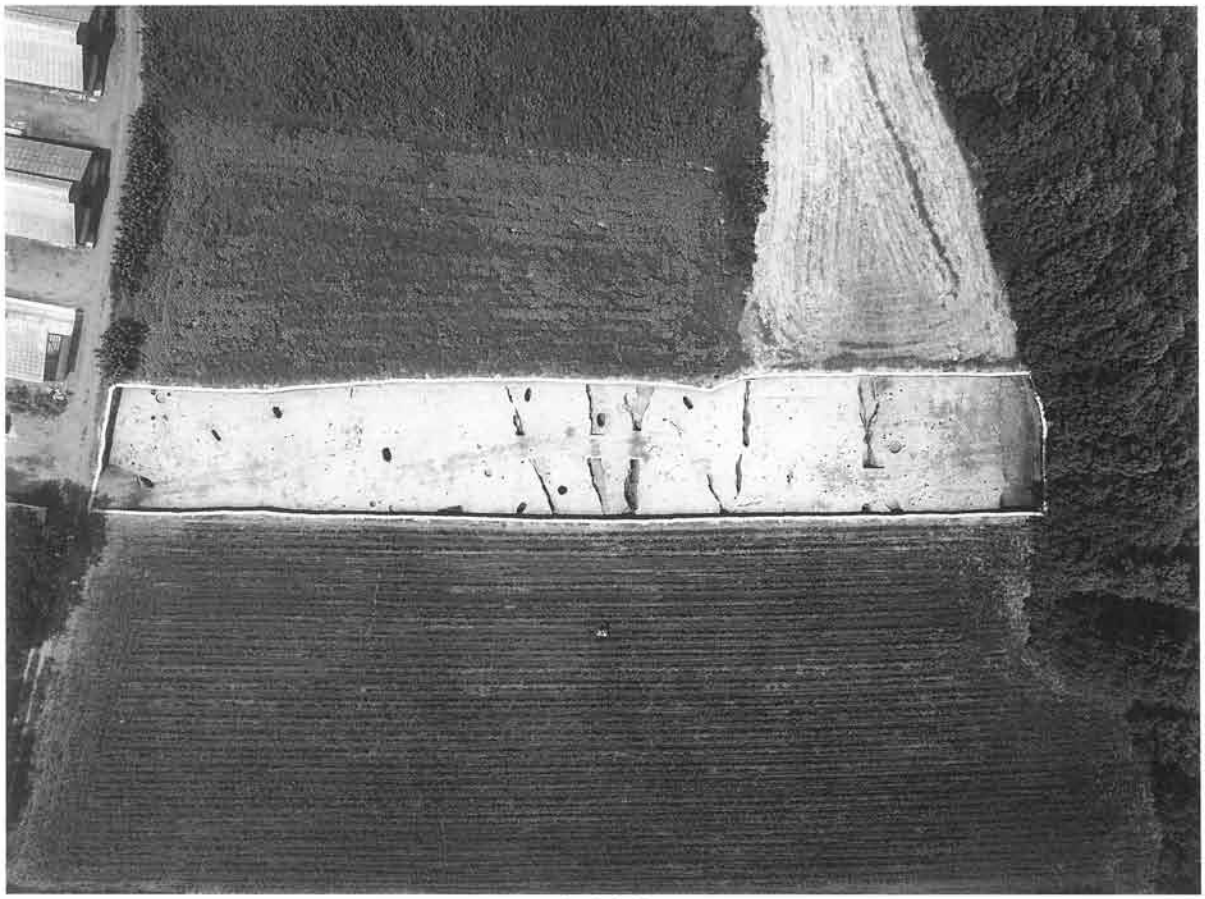
95

96

97

堀越丙諏訪遺跡
写　真　図　版

遺跡遠景（東から）



遺跡全景

Ｊ１号土坑全景（南から）

Ｊ１号土坑土層断面（南から）

Ｊ２号土坑全景・土層断面（北から）

Ｊ３号土坑全景（南東から）

Ｊ３号土坑土層断面（南東から）

Ｊ４号土坑土層断面（南から）

Ｊ４号土坑全景（南から）

Ｊ５号土坑全景（南から）

Ｊ５号土坑土層断面（南から）

Ｊ６号土坑全景（北東から）

Ｊ６号土坑土層断面（北東から）

Ｊ７号土坑全景（南から）

Ｊ８号土坑全景（南東から）

Ｊ９号土坑全景（南東から）

Ｊ10号土坑全景（南東から）

Ｊ８号土坑土層断面（南東から）

Ｊ９号土坑土層断面（南東から）

Ｊ10号土坑土層断面（南東から）

J 11号土坑全景（南から）

J 12号土坑全景（南から）

J 13号土坑全景（南東から）

J 12号土坑土層断面（南から）

J 13号土坑土層断面（南東から）

1 号竪穴遺構全景・土層断面（南から）

1 号井戸全景（南から）

J 6・10・12号土坑出土遺物

J 6土坑-1

J 10土坑-1

J 12土坑-1

J 12土坑-2

J 12土坑-3

J 12土坑-4

遺構外出土遺物

1

2

3

4

5

報告書抄録

フリガナ	ホリコシナミキディーチテンイセキ・ホリコシヘイスワイセキ
書名	堀越並木D地点遺跡・堀越丙諏訪遺跡
副書名	「県営農免・ふるさと農道整備事業勢多中央地区」に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第4集
編著者名	藤坂和延、鈴木雅浩、須藤健夫、外山政子、三浦京子
編集機関	前橋埋蔵文化財発掘調査団
発行機関	前橋埋蔵文化財発掘調査団
発行年月日	平成18年3月24日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
堀越並木D 地点遺跡	前橋市堀越町 2100－4番地		36°25′45″	139°09′16″	2004.6.28 ～2004.12.4	998.38㎡	農道建設
堀越丙諏訪 遺跡	前橋市堀越町 2271－13番 地ほか		36°25′45″	139°09′26″		1479.80㎡	農道建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
堀越並木D 地点遺跡	集落	縄文時代	竪穴住居跡	8軒	縄文土器・石器	
			炉跡	14基	縄文土器・石器	
			埋甕	3基	縄文土器・石器	
			集石	5基	縄文土器・石器	
			土坑	84基	縄文土器・石器	
堀越丙諏訪 遺跡	集落	縄文時代	土坑	13基	縄文土器・石器	
			竪穴状遺構	1基		

堀越並木D地点遺跡
堀越丙諏訪遺跡

「県営農免・ふるさと農道整備事業勢多中央地区」
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　　第4集

平成18年3月15日　印　刷
平成18年3月24日　発　行
編集発行　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
〒371-0018　前橋市三俣町二丁目10番地2
TEL 027-231-9531
印　刷　朝日印刷工業株式会社